

在地産の須恵器が食器の主体を占める5期の土器群である。1は黒色土器A杯A II。2は土師器杯Cで底部回転糸切りの後、底部外周から体部下半にかけて手持ちへら削りする。内面には鋸歯状の暗文が見える。底径8.6cmを測る。3～5の須恵器杯Aは回転糸切りである。

SB90 図版97、第129図、第11表

土師器杯AはII(1～6)とIII(7・8)がある。灰釉陶器11は小椀、12が深椀的な椀とともに丸石2号窯式、13～15は虎溪山1号窯式の皿と段皿で、15は高台が貼付されていない。13期の土器様相である。

SB91 図版96

1は土師器杯A III。2～4の灰釉陶器は虎溪山1号窯式である。5は羽釜で、羽釜にはこのほかに体部をタタキ調整したものがある。11～12期の様相である。

SB92 図版96・97、第130図、第12表

土師器杯AはII(1～8)とIII(9)があるが、9は底部のみで器高・口径は判然としない。杯A IIは口径10.2～11.6cm、器高2.9～3.6cmの法量の範囲のなかに入る。11・12は土師器椀である。灰釉陶器の食器類は椀(13～21)、皿(22・23)、段皿(24～27)、稜皿(28)があるがいずれも虎溪山1号窯式である。29は羽釜A、30は灰釉陶器の短頸壺である。この他、煮炊具では羽釜が7個体、このなかにはタタキ調整するものがある。また貯蔵具では灰釉陶器の広口瓶が1個体ある。11～12期の土器様相である。

SB93 図版97

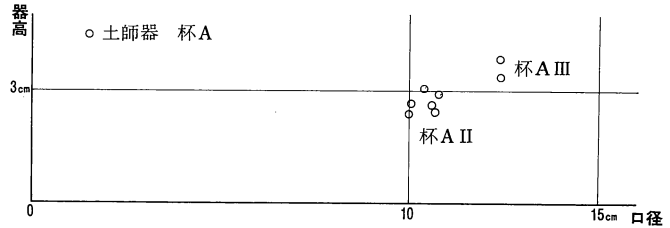
1・2は土師器杯A IIで器高2～2.2cmと低い。3は土師器皿A、底部が小さく口縁端部を折り曲げる。4は盤B II。5は灰釉陶器椀で大原10号窯段階である。14期の土器様相である。

SB94 図版97

1は土師器杯D、器高3.3cm、口径9cmと小型で内面と外面上半をへら磨きし黒色処理する。3は須恵器長頸壺Bで美濃須衛窯産である。2期の土器様相である。

SB95 図版97

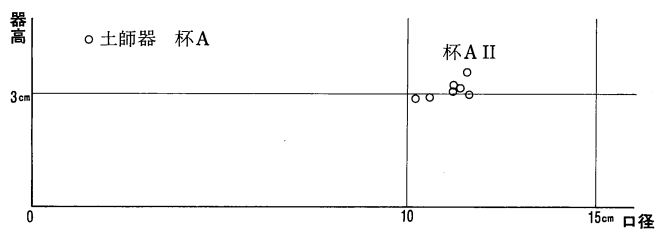
図示できる遺物は1の灰釉陶器皿と、土師器羽釜B(2)である。1は底部までへら削りを施す。虎溪山1号窯式であろう。11～13期の土器である。



第129図 SB90出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	12	1080	27 56%	1～6
	杯A III	6			7・8
	椀	4	200		9
	盤B II	4	200		
	高杯	1	15		
	不明		690		48
黒色土器A	椀	6	470	6 13%	10
須恵器	杯A	2	10	2 4%	
灰釉陶器	椀	5	210	13 27%	12
	小椀	1	115		11
	皿	2	180		13・15
	段皿	5	280		14
煮炊具					
土師器	甕	1	52	6 10%	
	小型甕D	1	7		
	羽釜A	3	365		
	甗	1	265		16
貯蔵具					
須恵器	甕	3	530	3 75%	4 7%
灰釉陶器	広口瓶	1	45	1 25%	

第11表 SB90出土土器の構成



第130図 SB92出土土器法量分布図

SB97 図版97

1～5は土師器杯A II、6～8は土師器椀、9は黒色土器A椀、11は灰釉陶器段皿、10は椀である。煮炊具は12が小型甕D、14は羽釜Aでタキ調整を施す。13は口縁部を肥厚させ「く」の字に折る大形の甕である。13期の土器様相である。

SB98 図版98

食器は須恵器主体の構成である。1・2の杯Aは底部回転へら切りである。3は口縁部を内側に屈曲させている。煮炊具は甕A(5・6)が主体で、15は小型甕Aである。16は体部をへら磨き調整する球胴の土師器甕Fである。17は須恵器甕Eである。2期の土器様相である。

SB99 図版98

2点図示した。1は土師器鉢A。底部に糸切り痕が残る。2は白磁皿で、高台は削り出し高台で体部外面の調整はへら削り、内面は見込みに1条の沈線が入りその内側にへら描きと思われる花文が施される。体部内面にも施文があるが文様は不明である。釉は高台内面から底部の露胎部を除いて全面に施釉される。釉調は乳白色で貫入が入る。胎土は白色でやや粗い。森田勉氏から潮州窯系との指摘を受けた。11～13期に属する。

SB100 図版98

1・2は土師器杯Cで緻密な胎土で明褐色を呈する。2は静止糸切りの後底部外周と体部下半を手持ちへら削りし、内面には見込に沈線を挽き、放射状の暗文を施している。3～7は須恵器杯A、5～7は回転糸切り、4は回転へら切り、3は切り離し後縦方向のへら削りを施す。8～12は杯蓋Bで口縁部形態が断面三角形のもの、くちばし状に折り曲げるものなどがある。16は長頸壺A、小形である。17は土師器甕Bで体部外面上半に横方向のハケ目をまわし内面にも同様にハケ目を施している。4期の土器様相である。

SB101 図版99

1は土師器杯A IIで口径9.3cm、器高2.3cmである。小椀は土師器(2)と黒色土器A(3)がある。灰釉陶器(4～6)は丸石2号窯式で、4には底部に糸切り痕が見える。14期の土器様相である。

SB102 図版99

食器は土師器と灰釉陶器で構成されるが、灰釉陶器が土師器の量を上回っている。1の土師器杯A IIは口径10.5cm、器高3.3cmと深めである。杯A IIIはない。灰釉陶器(2～5)は5が虎溪山1号窯式のほかは丸石2号窯式である。12期の様相である。

SB103 図版99

食器は須恵器のみである。図示してないが杯A 6個体はすべて糸切りである。煮炊具は土師器甕B(4・5)、小型甕B(2)、小型甕C(3)、小型甕Dの構成である。ハケ目調整を行なう甕B・小型甕Bはいずれも内面にもハケ目調整を入れている。5期の土器様相である。

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	21	965	28 47%	1～8
	杯A III	1			9・10
	椀	5	345		11・12
	盤B II	1	20		
	不明		340		
黒色土器A	椀	1	40	1/2%	
須恵器	杯A	7	80	10 17%	59 86%
	杯B	2	30		
	杯蓋B	1	8		
	不明		15		
灰釉陶器	椀	11	1090	20 34%	13～21
	小椀	1	18		
	皿	3	260		22・23
	段皿	4	170		24～27
	稜皿	1	80		28
	不明		130		
煮炊具					
土師器	小型甕D	1	20	9 10%	29
	羽釜A	8	1335		
	不明		340		
貯蔵具					
須恵器	甕	1	135	1 33%	3
	不明		20		
灰釉陶器	広口瓶	1	55	2 67%	4 %
	短頸壺	1	85		

第12表 SB92出土土器の構成

SB104 図版99

遺物は少ないが5期の様相である。須恵器杯A(1・2)は糸切りで、底径の大きな体部の傾きの小さな形態である。3は内面にも斜め方向のハケ目を施す甕Bである。

SB109 図版99

食器は黒色土器Aと須恵器で構成される。個体数では黒色土器A杯A 2個体、須恵器杯A 2個体、須恵器杯B 3個体となるが、重量比で見ると須恵器杯Bが圧倒的に多い構成である。1の黒色土器A杯A Iは底部をへら削り調整している。須恵器杯A(2・3)は底部回転糸切り未調整。須恵器杯BはⅢ(7)・Ⅳ(8)・Ⅴ(9)がある。8・9には底部にへら記号が見える。煮炊具のうち12は甕Bであるが体部上半に内外面とも横方向のハケ目を幅広く施している。13の小型甕Cは頸部で一旦立ち、そこから外反する口頸部形態である。10は小型甕Dで底部静止糸切りである。5期の土器様相である。

SB110 図版100

土師器杯Aは、Ⅱ(1)とⅢ(2・3)がある。灰釉陶器は1点(6)のみ。12~13期の土器様相である。

SB111

土師器甕B 1点、甕C 1点、小型甕D 1点のみの出土で、時期は決め難い。5~7期ころの土器か。

SB113 図版100

食器には黒色土器Aと須恵器があるが、黒色土器Aは1点のみである。須恵器杯A(1・2)は底部回転糸切り。小型甕D(10~12)はロクロ調整するが、底部は指ナデされており(10・12)切り離し技法は不明である。12は底部外周を手持ちへら削りしている。5期の土器様相である。

SB114 図版100・101

須恵器を主体とした食器構成で、土師器杯A 1点・黒色土器A杯A 1点があるが、これらは混入の可能性もあると思われる。須恵器杯Aは底径6cm前後で、体部の外傾の弱い形態ですべて糸切りである。煮炊具は土師器甕B(9)・甕C・小型甕D(8)による構成で、5期の典型的な煮炊具のあり方を示している。貯蔵具では須恵器甕A(7)と甕D(10)が図示できた。7は大形の甕Aで、内面には同心円文が残るが、灰色のやや粗い胎土で10同様在地産と思われる。10は肩に断面三角形の凸帯をまわし、指でつまんだ四耳を凸帯の上に貼付した甕Dである。耳には上から下へ貫通する小孔を穿っている。底部外周を手持ちへら削りしている。5期の土器様相である。

SB115 図版100

古い時期の遺構との重複で小片の混入が多い。土師器杯A 2点を図示した。杯AⅡ(1)とⅢ(2)である。これらの形態は14期の様相である。

SB116 図版101、PL64・65、第13表

黒色土器Aと須恵器で食器が構成され、個体数では両者の数は拮抗している。黒色土器A杯AにはⅠ(4)とⅡ(1~3)の2法量がある。須恵器杯A(5・6)は6のように外傾が強く薄手でロクロ目の強く

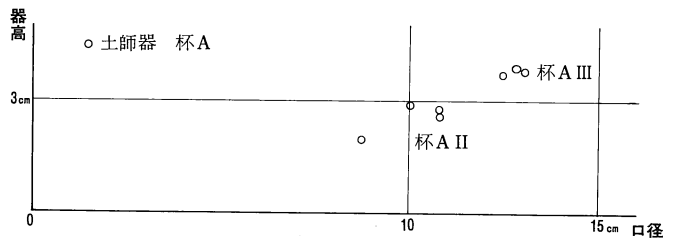
食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯AⅡ	1	5	3 14%	
	杯AⅢ	1	28		
	高杯	1	65		
黒色土器A	杯AⅠ	1	0	8 36%	4
	杯AⅡ	6	445		1~3
	椀	1	5		22
須恵器	杯A	6	275	9 40%	5・6
	杯BⅡ	1	40		
	杯BⅤ	1	8		
	不明	1	5		
軟質須恵器	杯A	1	5	1/5%	
灰釉陶器	椀	1	15	1/5%	
煮炊具					
土師器	甕B	3	440	5 18%	7
	甕C	1	150		
	小型甕D	1	80		
	不明		110		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	1	40	6 18%	8
	壺蓋A	1	65		9
	甕E	1	2000		
	甕	3	905		

第13表 SB116出土土器の構成

残るものが多い。貯蔵具は須恵器短頸壺A蓋(8)と、甕E(9)を図示した。9は口径46cm、器高37cmの大形で肩の部分に1対の把手が付く。把手は指ナデで円柱状にしたものを貼付したもので横方向に付けている。体部内面は指ナデ調整しさらに板状の工具でナデツケている。6～7期の土器様相である。

SB117 図版102、第131図、第14表

土師器杯AはII(1～4)とIII(5～7)の2法量がある。杯A IIは口径10～10.8cm、器高2.6～2.8cmの幅のなかにあり、IIIは口径12.5～13cm、器高3.8cmの法量で、底部から体部下半にかけて厚手である。9・10は黒色土器A椀で8は黒色土器B小椀、10は底部の破片を再調整して円盤状に仕上げ、中央に円孔を穿っている。灰釉陶器は11～13が椀、14～16が段皿で13・15・16には底部に糸切り痕が見える。丸石2号窯式である。煮炊具は18の羽釜Bがある。鏝の部分へらで面取りしている。鏝の数は残存が少なく不明である。17は越州窯系の青磁椀である。釉は飴色で外面体部下半は施釉されず露胎となっている。釉の発色は余り良くなくややムラがある。胎土中には黒色の粒子が含まれている。高台は低く削り出され、口縁端部は「く」の字に外反する。内面には重ね焼きの目跡がある。森田勉氏の分類による越州窯系青磁椀II類にあたる。13期の土器様相である。



第131図 SB117出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	12	393	21 46%	1～4
	杯A III	4	540		5～7
	椀	4	65		
	皿A I	1	50		
	不明		130		
黒色土器A	杯A II	4	45	12 26%	9・10
	椀	8	515		
	不明		22		
黒色土器B	椀	1	7	4 9%	8
	小椀	3	6		
軟質須恵器	杯A	1	2	1/2%	
青磁	越磁椀	1	36	1/2% 15%	17
	椀	3	440		11～13
	小椀	1	6		
灰釉陶器	段皿	3	220		14～16
煮炊具					
	小型甕E	1	580	6 11%	18
	羽釜B	5	12		
	不明		40		
貯蔵具					
須恵器	甕	1	600	1/50% 1/50%	2 4%
	灰釉陶器	広口瓶	1		

第14表 SB117出土土器の構成

SB119 図版102

1は土師器杯A IIで器高は3.1cmである。灰釉陶器(2・3)は丸石2号窯式に属する。11～13期の土器と考えられる。

SB120 図版102

土師器杯AはII(1)とIII(2・3)がある。6の灰釉陶器手付小瓶は混入品であろう。14期の土器と考えられる。

SB121 図版102

須恵器杯Aでは糸切り(1)とへら切り(2)が共伴している。3は小型甕Dで、底部は指ナデする。4は体部をタタキ調整する須恵器甕Eで、焼成は甘い。4期の土器である。

SB122 図版102

1は土師器杯A II。2・3の灰釉陶器は丸石2号窯式である。13期の土器である。

SB123 図版102

1・2は土師器杯A IIで器高2cmを切る低いものである。14～15期にあたる。

SB124 図版102

土師器杯AはII(1・2)とIII(3)の両者がある。4は灰釉陶器椀で丸石2号窯式。5は土師器小型甕Dで底部に糸切り痕が残る。13期の土器様相である。

SB125 図版102

土師器杯AはII(1・2)とIII(3)の両者がある。IIは器高2.9cmを測る。IIIは底部の分厚い形態である。4は灰釉陶器椀で丸石2号窯式である。13期の土器様相である。

SB126 図版103

土師器は杯A III(1~3)とIIがあるが、IIは小片で図示できなかった。5は灰釉陶器小椀で口縁部を指でつまんだ輪花が4ヶ所に付される。6の段皿と同様に虎溪山1号窯式である。7は土師器盤Aである。口径32.9cmを測り脚台が付く。内面に煤が付着し黒色を呈するがへら磨きは行なわれておらず黒色土器Aではない。12~13期の土器様相である。

SB127 図版103

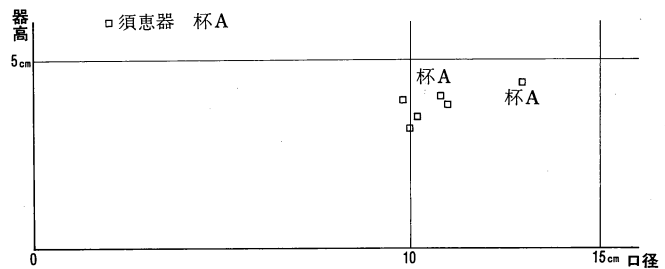
食器は土師器と灰釉陶器で構成される。土師器杯AはIIとIII(1)があり、個体数ではIIの方が多いが、IIは小片のため図示できない。2は黒色土器A椀で、貼り付け面の広い三角高台が付く。5は灰釉陶器椀で、黒色土器Aの椀同様三角高台が外反して付けられる大原10号窯段階である。4の段皿も口縁部を折るような形態で口径9.4cm、器高2.2cmと小形で大原10号窯段階にあたる。3の段皿は古い形態のものか。14期の土器様相である。

SB128 図版103

土師器杯Aと灰釉陶器椀が図示できた。灰釉陶器(2)は丸石2号窯式で、土師器杯A(1)の形態は14期のものである。

SB129 図版103・104、PL65・66、
第132図、第15表

1期の土器様相を示す良好な資料である。食器は非ロクロ成形の土師器と須恵器によって構成されている。1~8は土師器の杯で、13は口縁部に稜をなす杯Fである。いずれも体部外面の稜より下はへら削り、内面は横方向のへら磨き調整を基本とする。2はやや器高が高い。6・7は半球状の杯Dで外面下半をへら削り、内面はへら磨きの後黒色処理を施す。8は口径17cmを測る口径の大きな浅い形態の杯Eである。調



第132図 SB129出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯D	2	300	23 39%	6・7
	杯E	4	70		8
	杯F	5	115		1~3
	杯	4	40		4・5
	盤B I	1	20		
	高杯	7	250		9~11
黒色土器A	椀	1	15	1/2%	59
須恵器	杯A	16	700	31 52%	16~24
	杯B	1	5		25
	杯蓋A	5	180		12~14
	杯蓋B	1	15		15
	鉢A	5	2370		49~51
	高杯	3	385		26~28
灰釉陶器	椀	4	40	4/7%	
煮炊具					
土師器	甕 A	20	12425	44 38%	29・30
	甕 B	7	8750		38~40
	甕 F	8	2200		44・45
	甕 G	3	1400		41~43
	小型甕A	5	350		31~36
	小型甕B	1	130		37
貯蔵具					
	短頸壺A	2	50	13 11%	48
	短頸壺B	2	70		47
	甕 D	1	15		
	甕	5	930		52
	水瓶	1	120		46
	椀瓶	1	150		
	他	1	50		

第15表 SB129出土土器の構成

整は杯Dと変わらないが黒色処理はなされない。須恵器杯Aは16~24で平坦な底部から直立に近く立ち上がる形態のものが多い。22が底部へラ切り未調整、23がへラ切り後手持ちへラ削りであるほかはすべてへラ切りの後回転へラ削りを施している。法量は17~22が口径10~11cm、23・24が口径13cmで大小が認められる。16の内面には漆が付着していた。12~14は杯蓋Aで内面に短い返りが付く。15は杯蓋Bであろう。25は杯Bで高台が低く底部中央が高台と同じ位の高さになる。高台の径12cmは杯B IIの法量である。煮炊具は土器全体のなかで占める割合が非常に高い。土師器甕A (29・30)、甕B (38~40)、甕F (44・45)、甕G (41~43)、小型甕A (31~36)、小型甕B (37)、があるそれぞれの器種のなかでの形態上の個体差が大きい。須恵器の貯蔵具は、煮炊具同様各器種とも形態が安定しないが、水瓶 (46)、短頸壺A (48)、短頸壺B (47)、鉢A (49~51)、甕 (52) がある。須恵器のうち13・46は搬入品で13は美濃須衛窯産、46は美濃須衛窯産あるいは尾張産と考えられる。

SB130 図版105、第16表

食器は土師器、黒色土器A・B、灰釉陶器がある。土師器杯A IIは(1~3)、4は黒色土器A碗、5は黒色土器Bの耳皿B、6は黒色土器Bの小壺でロクロ調整の後全面を磨き黒色処理を施している。灰釉陶器は8・10が虎溪山1号窯式、7・9・11は丸石2号窯式である。12~13期の土器様相である。

SB131 図版105、PL66、第133図、第17表

須恵器を主体に黒色土器Aは少量で食器が構成される。黒色土器A杯A (1・2)は底面から底部外周にかけて手持ちへラ削りを施す。須恵器杯A (3~7)はすべて回転糸切り。杯BはV・IV・III・IIの4法量がある。煮炊具は土師器甕B (24・26)が主体で甕C (27)、小型甕D (28・29)がある。30の鉢A、31の長頸壺Aは在地産の須恵器だが、甕には美濃須衛窯産が1点ある。23は混入品。5期の土器様相である。

SB132 図版105

遺物は少なく灰釉陶器碗のみ2点図示できた。いずれも丸石2号窯式である。13期を前後する段階の土器と考えられる。

SB133 図版105

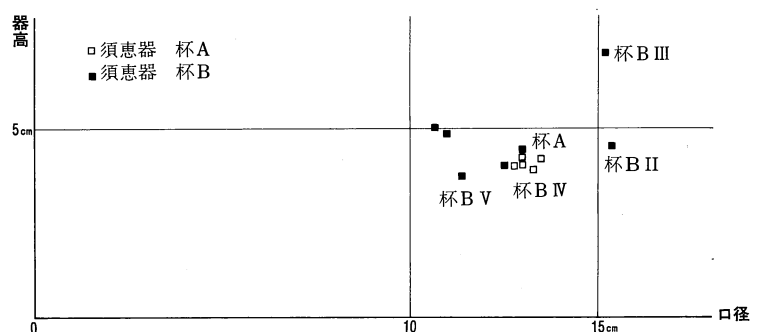
1は土師器小型甕Aで底部に木葉痕がある。他に遺物は少ないが、2期以前の遺物と考えられる。

SB134 図版106

食器は黒色土器Aを主体に須恵器・軟質須恵器で構成され、いずれも杯Aがほとんどである。4~6は須恵器、7は軟質須恵器である。須恵器は器高が低く体部の外傾が強い形態で器壁は薄い。11は須恵器の長頸壺A。9・10は土師器甕Bで、いずれも口縁部が短く強く外反する古い形態だが、頸部に強いナデを入れ口縁部をやや肥厚させる点で10は新

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	12	515	16 38%	1~3
	碗	3	115		
	盤B II	1	10		
	不明		260		
黒色土器A	碗	5	220	5 12%	4
黒色土器B	耳皿	1	90	2 5%	42 69%
	小壺	1	20		
須恵器	杯A	6	200	10 24%	
	杯B III	1	15		
	杯蓋B	3	47		
	不明		10		
灰釉陶器	碗	6	675	9 21%	7~9 10・11
	段皿	3	180		
煮炊具					
土師器	甕B	6	90	11 18%	
	甕C	2	10		
	羽釜	3	725		
	不明		70		
貯蔵具					
須恵器	壺	3	85	7 88%	8 13%
	甕	4	355		
	不明		10		
灰釉陶器	瓶	1	15	1 12%	

第16表 SB130出土土器の構成



第133図 SB131出土土器法量分布図

しい様相を含んでいる。7期の様相である。

SB135 図版106

須恵器杯Aは回転へら切り(1)と回転糸切り(2)が共伴する。4期の土器である。

SB136 図版106、PL67、第134図
第18表

土師器杯A IIは器高1.1~1.8cmと非常に薄く「皿」と呼ぶほうが良いほどの形態となっている。杯A III(7~9)は底径が大きい。10・11の土師器小椀・椀も器高が下がり、浅めの印象を受ける。12は黒色土器B椀と考えられる。内外両面をへら磨きするが黒色処理は内面のみである。灰釉陶器は13の段皿と16の椀が丸石2号窯式、14は小椀と皿の中間的形態をとる大原10号窯段階、15は口縁部を白磁椀に似せた形態とした椀で西坂1号窯段階にあたる。18は鐙の短い羽釜A、19はロクロを利用しない土師器の鉢、20はロクロ調整の土師器盤Aである。緑釉陶器(17)は椀の底部破片である。白色で軟質の胎土で、底面にまで全面に濃緑色の光沢のある釉が掛かるが、磨きはない。15期の土器様相である。

SB137 図版106

土器は煮炊具の土師器甕がほとんどで、食器の出土はない。甕A 1個体、甕B 1個体、甕G 1個体(2)、小型甕B 1個体(1)の出土である。甕A・小型甕Bには底部に木葉痕がある。2~3期の土器様相であろう。

SB138 図版107

1は土師器杯A III、3は黒色土器A椀、5・6の灰釉陶器は丸石2号窯式である。2の土師器皿A IIの形態より14期の土器と考えられる。

SB141 図版 107

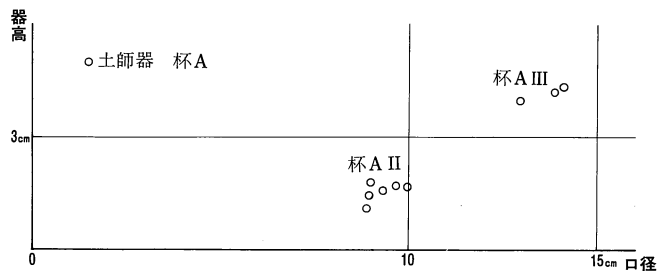
1は土師器杯A IIで器高2.6cmである。2・3は灰釉陶器椀で、やや開き気味の高台となり、2は底部に糸切り痕が残る。丸石2号窯式である。13期の土器様相である。

SB142 図版107・108、PL67・68、第19表

土器全体の量のなかで煮炊具の占める割合が高い。食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器で構成される。1は土師器椀である。2~11は黒色土器Aであるが、内面の磨きは粗くへら磨きの間にロクロ目が観察できる。12~14は須恵器杯A、15は軟質須恵器杯Aである。17の灰釉陶器椀は漬掛けで施釉している。土師器甕Bは23~25の6点を図示した。いずれも胴の張りの割に器高の低いずんぐりした形態で、口縁部を肥厚させながら直線的に開き、体部上半にはヨコナデあるいは横方向のハケ目、体部下半にはへら削りまたはヨコナデを施している。8期の様相である。

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯A I	2	40	2.5%	1・2
	杯A	15	1215		3~7
須恵器	杯B II	1	240	39 90%	21
	杯B III	2	210		22
	杯B IV	6	580		19・20
	杯B V	3	170		16~18
	杯蓋B	11	1005		8~15
	鉢A	1	35		30
	不明		40		
灰釉陶器	皿	1	10	2 5%	
	段皿	1	38		23
煮炊具					
土師器	甕 A	1	25	15 25%	
	甕 B	6	1880		24~26
	甕 C	2	370		27
	小型甕B	1	100		
	小型甕D	5	545		28・29
	不明		530		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	7	2080	9 13%	31
	壺	1	5		
	甕	1	115		

第17表 SB131出土土器の構成



第134図 SB136出土土器法量分布図

SB143 図版108、第135図

土師器杯AはII(1~5)とIII(6~8)の2法量がある。灰釉陶器(11~14)は丸石2号窯式。15は越州窯系の青磁椀である。SB117の椀同様森田勉氏の分類の「椀II類」にあたる。高台は低く削り出され、口縁部は「く」の字に外反して開く。施釉は外面体部下半にはなされず、釉は不透明な灰白色で発色はあまりよくない。内外面に9か所の重ね焼きの目跡を残すが、焼成は良くなく底部付近の器厚の厚い部分ではセピア色を呈する。胎土には黒色の粒子を含みあまり精良とはいえない。17は小形の羽釜Bで鏝は3か所に付く。18は灰釉陶器の広口瓶である。16は土師器杯Eで4期以前の土器の混入である。13~14期の土器様相である。

SB144 図版109

土師器杯AはII(1~3)と、III(4~6)の2法量がある。杯A IIの器高は3cm前後である。7・8は盤B I、9は黒色土器A椀、10・11は黒色土器B椀で10は小椀である。灰釉陶器は12・15が虎溪山1号窯式、他は丸石2号窯式である。17は土師器の把手。18は土師器羽釜Bで外面と内面上半にハケ目を施している。このほか須恵器の混入品も多く19の須恵器甕Dも混入品であろう。12期の土器様相である。

SB145 図版109

13期の土器様相を示す。土師器杯AはIIとIIIの2法量がある。5は盤B I。6は土師器盤Aの脚台で径は小さく透かしに円孔を穿つ。7~12は黒色土器A・Bの椀と小椀。13~17の灰釉陶器は丸石2号窯式である。18は羽釜Aで口縁部でやや内湾する形態で体部には縦方向のヘラ削りを施している。19は羽釜型の甑Dと考えられる。

SB146 図版109

土師器杯Aは2法量がある。4はやや大きい。1~3は杯A IIで器高1.5~2cm、口径9.4~10cmの小形である。5は土師器杯A III。6・7の灰釉陶器は丸石2号窯式である。15期の土器様相と考えたい。

食器					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	9	280	26 63%	1~6
	杯A III	3	265		7~9
	椀	3	150		11
	小椀	1	115		10
	皿A I	3	110		
	盤B I	2	95		
	盤B II	2	65		
	盤A	2	180		20
	鉢A	1	145		19
	不明		240	42	
黒色土器A	椀	3	105	3 7%	86%
黒色土器B	椀	2	45		
	小椀	1	3	7%	12
須恵器	杯A	2	13	3 7%	
	杯B IV	1	18		
	不明		11		
緑釉陶器	椀	1	5	1 2%	17
灰釉陶器	椀	2	150	6 14%	15・16
	小椀	1	125		14
	段皿	3	118		13

煮炊具					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
土師器	羽釜A	3	2505	4 6%	18
	他	1	55		
	不明		155		

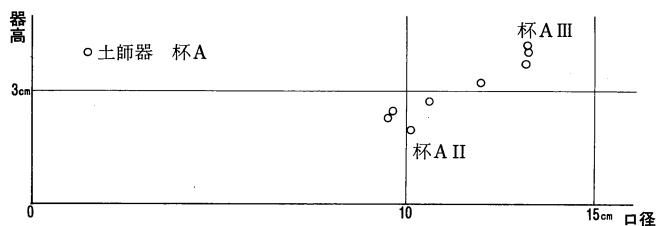
貯蔵具					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
須恵器	壺	1	25	2 50%	4
	甕	1	1425		
灰釉陶器	広口瓶	2	20	2 50%	8

第18表 SB136出土土器の構成

食器						
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.	
土師器	杯A II	2	35	4 13%	1	
	椀	1	35			
	盤A	1	30			
黒色土器A	杯A II	10	680	17 58%	30 75%	
	椀	7	810			
須恵器	杯A	4	100	4 13%	12~14	
軟質須恵器	杯A	4	190	4 13%	15・16	
灰釉陶器	椀	1	50	1 3%	17	

煮炊具					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
土師器	甕B	8	7120	10 25%	20~22
	小型甕D	2	360		18・19

第19表 SB142出土土器の構成



第135図 SB143出土土器法量分布図

SB147 図版110

1は土師器杯Dで全面をへら磨きした後、内面を黒色処理する。2・3は須恵器杯Aで底部回転へら切りである。4の須恵器杯蓋Bは端部を丸くおさめる。5・6は土師器甕B、7は小型甕Bで外面のハケ目はほとんど剥落している。8は甕Gの底部を抜いて再調整し、甑に転用したものである。2期の土器様相である。

SB148 図版110

土師器杯Aの形態は明らかでない。灰釉陶器は2が丸石2号窯式、3は貼り付け部分の広い三角高台の大原10号窯段階に属する。4はロクロ調整の土師器盤A。5の羽釜Aは鏝が長い。土師器杯Aの様相が明らかでないが、14期前後の土器様相と考えられる。

SB149 図版110

土師器杯AはII(1・2)とIII(3・4)の2法量がある。7は体部外面にてタテ方向のハケ目、内面にヨコ方向のハケ目を施すもので羽釜の可能性はある。14期の土器様相である。

SB150 図版110

土師器杯Aは、II(1)・III(2・3)の2法量があり、1の杯A IIは深い形態をとる。4は土師器の耳皿Aである。灰釉陶器(8~11)は虎溪山1号窯式である。12は体部にカキ目を施す小型甕Dである。13・14は須恵器杯蓋で2期以前の遺物の混入である。11~12期の土器群である。

SB151 図版111

1・2は土師器杯A II、4は黒色土器A碗で高台の付かないものか。6・7の灰釉陶器は丸石2号窯式である。11~13期の土器様相である。

SB153 図版111

土師器杯AはII(1~3)とIII(4)の2法量がある。IIは器高1.8~2.3cmと浅い。5・6は盤B IとIIである。7は灰釉陶器碗で丸石2号窯式である。羽釜はA(9)とB(8)の2形態があり、いずれも指ナデで調整する。14期の土器群である。

SB155 図版111・112、PL68・69、第20表

食器は土師器と須恵器がある。土師器は杯D(1~4・7)、杯E(5・6)、高杯(8・9)がある。杯D・Eは外面上半はヨコナデ、下半をへら削りし、内面はヨコへら磨きの後黒色処理することを基本としている。須恵器は杯D(10)、杯A(11~16)、杯蓋A(17~20)、杯蓋B(21)、鉢B(22~23)がある。10は立ち上がりが短く、口径10.4cmで、底部へら切り未調整である。杯Aは11がへら切り後底部に回転へら削りを施すほかは回転へら切り未調整である。杯蓋Aは返りの短い形態で、いずれも天井部中程までへら削りを行なう。21は口径20cmを測る大形の蓋で口縁端部は断面三角形に折り曲げている。煮炊具は土師器甕A(25・26)、甕B(27・28)、甕F(29)、小型甕A(24)、甑Aがある。1期の土器群である。1期の土器

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯 D	5	255	20 47%	1~4・7
	杯 E	6	460		5・6
	高杯	5	570		8・9
	他	4	65		
	不明		15		
須恵器	杯 D	1	25	43 53% 22 51%	10
	杯 A	7	315		11~16
	杯蓋A	4	255		17~20
	杯蓋B	1	55		21
	鉢 A	6	845		
	鉢 B	2	200		22・23
	不明	1	5		
灰釉陶器	小碗	1	10	1/2%	
煮炊具					
土師器	甕 A	13	9220	32 40%	25・26
	甕 B	11	5400		27・28
	甕 F	3	800		29
	小型甕A	4	520		24
	甑 A	1	55		
	不明		830		
貯蔵具					
須恵器	短頸壺D	2	145	6 7%	30
	壺	1	370		
	甕 A	1	3890		31・32
	甕	1	95		
	横瓶	1	50		

第20表 SB155出土土器の構成

様相である。

SB156 図版112、PL69、第21表

1・2は口縁部下に稜をもつ杯で、口縁部は直立気味に立ち上がる。底面を手持ちへら削りするほかは全面横方向のへら磨きを施すもので、土師器杯Fに含めた。3は土師器杯Eで口径14cmを測る。5は須恵器高杯か。1期の土器様相である。

SB157 図版113

1は内面黒色処理する土師器杯Dである。2は須恵器杯Aで底面をへら削りする。3は杯B IIで高台の径18.4cmを測る大形品である。産地は明らかでないが搬入品であろう。4は須恵器水瓶で、3同様搬入品と思われる。1期の土器群である。

SB158

土師器杯E、須恵器杯A、須恵器鉢A、土師器甕A、甕Bがあるが小片で図示できない。1期の土器様相である。

SB159 図版113

1は土師器杯D、4は須恵器杯Aである。2・3は須恵器杯蓋Aで、2は口径14.8cmと大口径で杯Bの蓋となる可能性もある。煮炊具は器面をナデ調整する甕Aが量的に最も多い。7には木葉痕が残る。1期の土器様相である。

SB160 図版113

1は土師器杯D、2・3は須恵器杯で底部をへら削りする。煮炊具は、8～10が甕A、6・7が甕B、11が甕Fである。1期の土器様相である。

SB161 図版113

1は須恵器杯Aで底部回転へら切り未調整である。貯蔵具には須恵器横瓶がある。1～2期の土器様相である。

SB162 図版113

食器は黒色土器A(1)と須恵器(2～5)で構成される。須恵器貯蔵具には甕Dが含まれる。6～7期の土器様相である。

SB163 図版114

1・2は体部に稜をもつ土師器杯Fで、口縁部が外反して開く形態である。4～8は須恵器杯Aで、7・8は体部に稜をもつ形態で直線的に口縁部がのびる。須恵器の蓋杯(杯D)の蓋を意識したような作りである。9・10の杯蓋Aは背の高いの稜のはっきりしたつまみが付く。4は美濃須衛窯産の可能性がある。12は土師器の鉢、13は須恵器鉢C、18は鉢Aで

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯 F	2	170	4 80%	5 38%
	椀 E	1	125		
	高杯	1	50		
須恵器	高杯	1	3	1 20%	5
煮炊具					
土師器	甕 A	3	1090	8 62%	7・8
	甕 B	3	360		
	甕 F	1	60		
	小型甕A	1	30		
					6

第21表 SB156出土土器の構成

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯D	1	50	3 10%	
	杯F	1	10		
	杯C	1	5		
黒色土器A	杯A I	1	105	17 57%	30 54%
	杯A II	10	640		
	皿B	4	145		
	鉢A	2	610		
	不明		180		
黒色土器B	皿B	1	5	1 3%	8
須恵器	杯A	7	330	9 30%	9・10
	杯蓋B	1	5		
	高杯	1	10		
煮炊具					
土師器	甕 A	7	2800	23 41%	16
	甕 B	5	1150		
	甕 C	1	310		
	小型甕A	3	500		
	小型甕D	7	470		
貯蔵具					
須恵器	甕 D	1	230	3 5%	
	甕	2	430		

第22表 SB164出土土器の構成

体部下半をへら削りする。煮炊具は土師器甕A (14)、甕B (15)、甕F (17)、小型甕A (16)がある。1期の土器である。

SB164 図版114・115、PL69・70、第22表

食器は黒色土器A・Bと須恵器で構成されている。黒色土器A杯AはII (1~5)とI (6)の2法量がある。皿Bは、黒色土器A (7)と黒色土器B (8)の両者がある。9・10は須恵器杯Aで外傾の強い形態である。11・12は鉢Aで杯Aの相似形をなす。煮炊具のうち土師器甕AはSB163からの混入と考えられる。小型甕D (13~15)は法量に大小の差がある。16の甕Bは口縁部が「コ」字状になる。須恵器貯蔵具には甕Dが含まれる。7期の土器様相である。

SB165 図版115

黒色土器が食器のほとんどを占め、わずかに須恵器杯Aが1片はいるのみである。4は土師器小型甕Cで、体部をへら削りする。6・7の甕Bは口縁部が長めに開く形態で、6では胴部上半にヨコナデが入る。7期の土器様相である。

SB166 図版115

1・2は須恵器杯Aでともに底部回転へら切りである。2は体部に稜をもつ形態でSB163に類例がある。3の杯B蓋は口縁端部が断面三角形となる。2期の土器様相である。

SB167 図版115

遺物は少ない。2は土師器甕Bで口縁部が「く」の字に強く外反する。6期の土器様相である。

SB168 図版115、第23表

土師器杯AはII (1~7)とIII (8)の2法量がある。杯A IIの器高は2~3cmの幅があるが中心は2cm前後である。椀は土師器(10)・黒色土器A (11~13)・黒色土器B (14)・灰釉陶器 (15~17)がある。灰釉陶器 (15~19)は丸石2号窯式である。13~14期の土器様相である。

SB169 図版116、第24表

食器は土師器・黒色土器B・灰釉陶器で構成されている。土師器は杯A II (1~5)、皿A II (6~10)、皿A I (12・13)、盤B II (11)、と椀・小椀がある。杯A IIは器高2cm、器高10cm前後のものが多い。皿A IIは底部が小さく平坦な底面を挽き出し、口縁部は折り曲げるように面取りしている。12は皿A Iで口径16.4cmを測る。灰釉陶器 (14~18)は丸石2号窯式である。14期の土器群である。

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	13	550	22 59%	1~7
	杯A III	2	180		8
	椀	1	110		10
	皿A I	1	20		
	皿A II	1	30		
	盤B I	1	25		
	盤B II	2	140		9
	盤A	1	25		
黒色土器A	杯A II	1	35	5 14%	11~13
	椀	4	620		
黒色土器B	椀	1	105	1/3%	14
須恵器	杯A	2	30	2/5%	
	椀	5	830		15~17
灰釉陶器	椀	5	830	7 19%	15~17
	段皿	2	110		18・19

煮炊具					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	甕 B	1	20	3 7%	
	小型甕D	1	20		
	羽釜	1	180		
	不明		140		

貯蔵具							
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.		
須恵器	甕	1	320	1 33%	3		
灰釉陶器	小瓶	1	35			2 67%	7
	広口瓶	1	65				

第23表 SB168出土土器の構成

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	11	375	29 72%	1~5
	杯A III	6	180		
	椀	1	25		
	小椀	1	30		
	皿A I	2	225		12・13
	皿A II	7	220		6~10
	盤B II	1	60		11
黒色土器A	椀	3	95	3/8%	
	椀	6	560		15~18
灰釉陶器	椀	6	560	8 20%	15~18
	段皿	2	20		14

煮炊具					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	羽釜	2	140	2/8%	

貯蔵具					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
須恵器	甕	6	260	7 20%	
	他		10		

第24表 SB169出土土器の構成

SB170 図版116

1は土師器杯A IIで器高1.7cm、口径9.1cmの小形である。2は皿A Iである。3は灰釉陶器段皿、4は緑釉陶器小椀で胎土は軟質で白色を呈し、底部糸切り後高台を貼付する。釉は光沢のある緑色であるが濃淡があり剥落が激しい。底面も含め全面に施釉している。5は土師器鉢で調整にロクロを用いていない。15期の土器様相である。

SB171 図版116

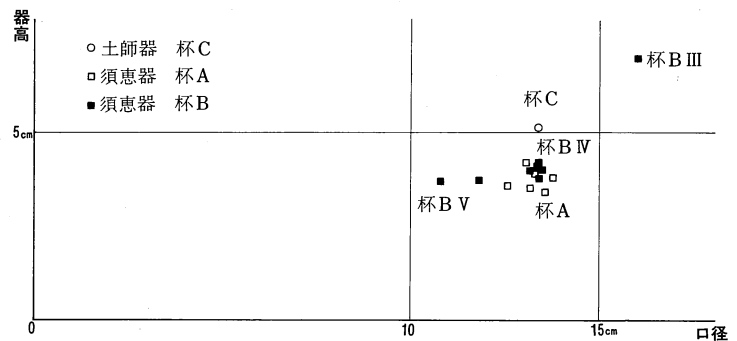
土師器杯AはIIとIII(1~3)に分化している。6は盤B II、7は皿A II、8は黒色土器A椀で、灰釉陶器(9~11)は大原10号窯段階である。12の小壺は手捏ねである。13は小形の羽釜Bで鏝を指でつまんでいる。14期の土器様相である。

SB172 図版116

土師器は杯A II (1)とIII (2・3)の2法量がある。4・5は盤B I。灰釉陶器(6~10)は丸石2号窯式、11・12は虎溪山1号窯式である。11の皿には内面に沈線が輪状にめぐる。13期の土器様相である。

SB173 図版117

土師器杯AはII(1~6)とIII(7)の2法量があるが、IIは器高3cm前後、口径10cm前後である。8・9は黒色土器A椀。10は金属鏡形の土師器無台椀で、調整にロクロを利用しているかどうか判断が難しい。11~13の灰釉陶器は虎溪山1号窯式。14は土師器小型甕Dで底部に糸切り痕が残る。15は羽釜Bである。12期の土器様相である。



第136図 SB175出土土器法量分布図

SB174 図版117

1・2・5は土師器杯A IIで、1・2は器高1.8~2cm、口径9cmと浅く、5は器高3cmである。3は土師器小椀であるが器高2.3cmと非常に低い。6・7の灰釉陶器は丸石2号窯式である。8の灰釉陶器小瓶は光ヶ丘1号窯式で混入の可能性もある。5は灯火器として利用されている。15期の様相である。

SB175 図版117・118、PL70・71、

第136図、第25表

1は土師器杯で非ロクロの調整と考えられる。底面は手持ちへら削り、体部は内外面ともに横方向のへら磨きを施し、黒色処理を行なう。2は大形の土師器杯Cで、糸切り後底面から体部下半にかけて手持ちへら削りを行ない、上半は横方向にへら磨きする。内面は見込の部分に沈線を引き、放射状に暗文を施す。明褐色の緻密な胎土である。須恵器杯Aは回転へら切り(3)4点、糸切り(4~8)7点ある。杯BはII、III、IV、Vの各法量が認められる。14は美濃須衛窯産である。25は須恵器長頸壺A、26は土

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯	2	85	3 6%	1
	杯C	1	190		2
須恵器	杯A	11	915	45 63% 94%	3~8
	杯B II	2	110		14
	杯B III	1	70		15
	杯B IV	14	1250		16~22
	杯B V	2	90		23
	杯蓋B	15	1130		9~13
	不明		38		

煮炊具

土師器	甕 A	2	115	21 28%	
	甕 B	5	4510		33
	甕 C	2	235		34
	小型甕A	1	140		26
	小型甕B	5	1280		27・28
	小型甕D	6	990		29~32
	不明		940		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	2	280	7 9%	25
	短頸壺B	1	12		24
	壺	1	215		
	甕	2	3400		
	横瓶	1	20		

第25表 SB175出土土器の構成

師器の把手付きの小型甕Aである。煮炊具は29～32が小型甕D、27・28は小型甕Bで縦方向のハケ目の後カキ目を施す。33が甕B、34は甕Cである。4期の土器様相である。

SB176 図版118・119、PL71・72、
第26表、第137図

1は土師器杯D、内面を黒色処理する。3～5は須恵器杯蓋A。6は須恵器杯蓋Bで口径18.3cmを測る。7～12は須恵器杯Aで、12は不明だが残りすべて底部にへら削りを施す。7～9は平らな底部から体部が箱形に立ち上がる形態である。13は須恵器高杯の杯部である。煮炊具は、土師器甕A(14・15)、甕B(16)、17は甕Aの小形のもので底部に14孔を穿つ。19は土師器鉢で全面をへら磨き調整している。須恵器の貯蔵具では甕E(20)がある。このほか甕Aと思われるものが4個体ある。1期の土器様相である。

SB177 図版119

1は土師器杯A II、2は小椀と盤B IIの中間な形態である。いずれも器高が低い。4は土師器鉢で非ロクロの調整である。15期の土器様相である。

SB178 図版119

1～7は皿状に小型化した土師器杯A IIで、15期の土器様相である。

SB179 図版119

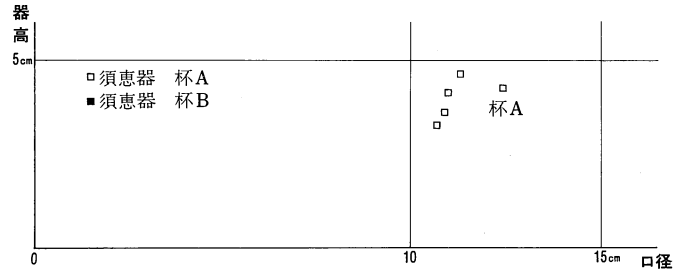
SB178同様土師器杯A II(1・2)は皿状に小型化している。4は杯A IIIで器壁は厚い。3は土師器小椀、6は白磁椀II類である。15期の土器様相である。

SB180 図版119

食器は土師器高杯(1)と須恵器杯Aが1点あるのみである。2は土師器甕B、3～5は甕Aである。土師器の甕類で底部の観察できるもの5点のうち2点に木葉痕が認められた。1期の土器群と思われる。

SB181 図版119

図示できないが土師器杯AはIIとIIIの2法量があり、IIはかなり小形である。灰釉陶器椀(1)、段皿(2)はともに丸石2号窯式。14期前後



第137図 SB176出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯 D	5	80	12 39%	1
	鉢	5	678		18・19
	高杯	2	83		2
須恵器	杯 A	13	623	19 61%	7～12
	杯蓋A	3	40		3～5
	杯蓋B	1	15		6
	高杯	2	135		13

煮炊具					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	甕 A	6	7910	17 31%	14・15
	甕 B	8	3700		16
	小型甕A	2	80		
	甕 A	1	255		17
	不明		1100		

貯蔵具					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
須恵器	甕 A	3	140	7 13%	
	甕 E	3	2150		20
	甕	1	12		

第26表 SB176出土土器の構成

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	6	185	11 40%	1
	杯A III	3	220		2
	椀	1	65		3
	鉢	1	65		
	不明		35		
黒色土器A	椀	1	160	2 7%	5
	小椀	1	80		4
須恵器	杯A	1	10	6 21%	
	杯B IV	2	20		
	杯蓋B	2	25		
	蓋	1	5		12
	不明		15		
灰釉陶器	椀	5	500	9 32%	7・8
	小椀	1	130		6
	皿	1	75		10
	段皿	2	120		9

煮炊具					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	甕 B	2	475	7 19%	11
	羽釜A	3	2960		13
	羽釜B	2	185		
	不明		295		

貯蔵具					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
須恵器	甕	1	60	1/50%	2
灰釉陶器	短頸壺	1	1900	1/50%	5

第27表 SB183出土土器の構成

の土器様相と考えられる。

SB183 図版119・120、第27表

土師器杯AはII(1)とIII(2)がある。3は土師器碗。4・5は黑色土器Aの小碗と碗である。6～10の灰釉陶器はすべて丸石2号窯式である。11は体部以下を縦方向のハケ目、胴部上半をカキ目状にハケ目調整する土師器甕である。13は羽釜A。12は須恵器蓋のつまみと思われる。13～14期の土器群である。

SB184 図版120、PL72・73、
第138図、第28表

須恵器杯Aに回転糸切りと回転ヘラ切りが共伴する4期の土器様相である。1は土師器杯Eで体部外面を手持ちヘラ削りし、内面は横方向に丁寧なヘラ磨きを施し黒色処理している。2・3は小破片であるがロクロ調整によるものと思われ、外面にはロクロ目が目立つ。内面は横方向のヘラ磨きのあと黒色処理する。須恵器杯Aは回転ヘラ切り(4・5・9)3点、静止糸切り(10)1点、回転糸切り(6～8・11～14)11点である。須恵器杯BはIVのみである。煮炊具は土師器甕A、甕B(24～26)、甕C(29)、小型甕B(23)、小型甕D(27・28)がある。28の小型甕Dは底部静止糸切りである。30は須恵器甕Eである。

SB185 図版121

土師器杯AはII(1～5)とIII(6・7)の2法量がある。杯A IIは口径10～11.5cm、器高3.3～2.8cmである。8・9は黑色土器A小碗、10・11は碗、12は黑色土器B碗である。13～15の灰釉陶器は虎溪山1号窯式にあたる。16はロクロ調整の小型甕Dである。12期の土器様相である。

SB186 図版121

土師器杯AはII(1・2)とIII(3)がある。4は黑色土器B小碗、灰釉陶器(5・6)は丸石2号窯式である。14期の土器様相である。

SB187 図版121

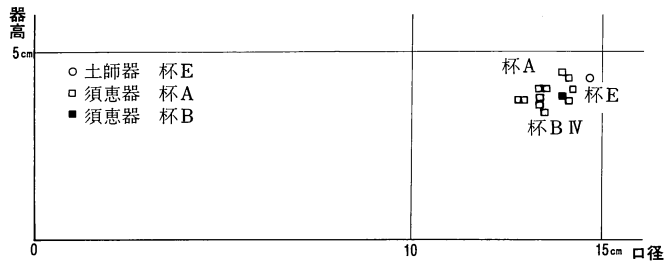
1～3は須恵器杯Aで、1は糸切りである。4・5は杯蓋Bで端部は屈曲させずに折り曲げる。杯B(6～8)はいずれもIVの法量である。9は小型甕D、10は甕Bであるが体部の張りは弱く口縁部を「く」の字に折り曲げている。11は須恵器甕Eである。土師器甕の形態等を勘案すれば4～5期の土器群と思われる。

SB188 図版121

土師器杯AはII(1)とIII(2)がある。灰釉陶器(4～6)は丸石2号窯式である。14期の土器群である。

SB189 図版121

1は土師器碗、4～6は灰釉陶器の碗と小碗で、小碗は器高が低い。碗の高台は貼り付け面の広い三角高台で大原10号窯段階から西坂1号窯段階にかけてのものと思われる。7は柱状の土製品である。14～15



第138図 SB184出土土器法量分布図

食器						
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.	
土師器	杯E	1	235	1/3%	1	
黑色土器A	杯A I	1	8		1	3
	杯A II	1	7		3%	2
須恵器	杯A	15	1680	30/88%	4～14	
	杯B IV	6	175		60%	20～22
	杯蓋B	9	785		15～19	
灰釉陶器	碗	1	65	1/3%		
煮炊具						
土師器	甕 A	1	130	18/32%		
	甕 B	7	3000		24～26	
	甕 C	2	630		29	
	甕 F	1	150			
	小型甕B	1	150		23	
	小型甕D	6	500		27・28	
貯蔵具						
須恵器	短頸壺	1	18	5/8%		
	甕E	1	565		30	
	甕	3	525			

第28表 SB184出土土器の構成

期の様相である。6は糸切りの須恵器杯Aで4・5期の遺物の混入であろう。

SB191 図版121

1は灰釉陶器椀で虎溪山1号窯式にあたる。12期を前後する段階の土器様相である。

SB192 図版122、PL73・74、
第139図、第29表

食器は土師器と灰釉陶器で構成され、量は多い。土師器杯AはII(1~25)とIII(26~30)の2法量がある。杯A IIの法量は平均で口径10.5cm、器高3cmである。杯A IIIは口径12~13.5cm、器高3.5~4.5cmである。椀は土師器(31~34・37~41)が多く、黒色土器A(42)・灰釉陶器(47)は少ない。31~34は小椀である。41は口径19.5cmを測る大形品である。48は糸切り痕を残す土師器小壺、49は鍋の把手であろうか。灰釉陶器(43~47)は虎溪山1号窯式である。12期の土器様相である。

SB193 図版122

土師器杯AはII(1)、III(2・3)に法量分化している。5・6は灰釉陶器で丸石2号窯式。13~14期の土器様相である。

SB194 図版122

1は土師器杯Aで器高1.8cmと皿に近い。2はやや大振りである。3・4は口径16cmを測る。灰釉陶器6は口縁端部を玉縁に仕上げるもので西坂1号窯段階、5・7は丸石2号窯式である。8の羽釜Aは体部下半を斜め方向にへう削りしている。15期の土器様相である。

SB195 図版123

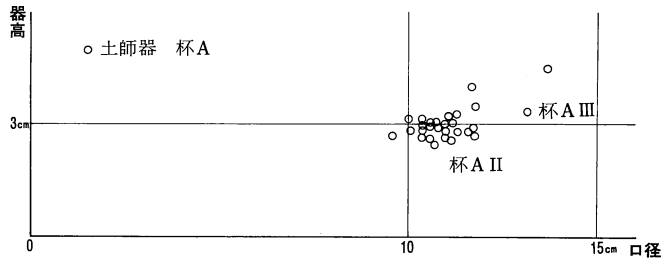
土師器杯AはII(1~4)とIII(5)がある。IIは器高で2cm、口径は10cmを切る法量である。6は土師器小椀だが体部が非常に浅い。灯火器として使用されている、黒色土器A小椀(7)も器高が低い。8の灰釉陶器椀は丸石2号窯式である。15期の土器様相である。

SB196 図版123

土師器杯AはII(1・2)とIII(3)の2法量がある。5~7の灰釉陶器は丸石2号窯式。8の羽釜Aは罎の部分の指オサエが顕著である。14期の土器様相である。

SB197 図版123

1~4の土師器杯A IIは口径9.8~11cm、器高2.5~3cmの法量の幅のなかに入る。5は黒色土器A椀であるが磨きは放射状で粗い。灰釉陶器は6・10が虎溪山1号窯式、他は丸石2号窯式である。11は糸切り痕を底部に残す土師器小型甕D。12は体部をタタキ調整する羽釜Aである。13期の土器様相である。



第139図 SB192出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯D	1	10	61 82%	
	杯A II	33	2745		1~25
	杯A III	4	460		26~30
	椀	14	1350		37~41
	小椀	6	320		31~34
	盤B II	2	145		35~36
	小壺	1	55		48
黒色土器A	椀	1	85	1%	42
須恵器	杯	3	75	6 8%	75 92%
	杯B	2	55		
	杯蓋B	1	198		
	不明		20		
灰釉陶器	椀	3	250	7 9%	47
	皿	2	10		43・44
	段皿	1	140		45
	稜皿	1	8		46
	不明		8		
煮炊具					
土師器	甕 A	1	175	5 6%	
	小型甕E	1	25		
	小型甕D	1	85		
	羽釜	1	125		
	鍋	1	72		
	不明		130		
貯蔵具					
灰釉陶器	広口瓶	2	60	2/2%	49

第29表 SB192出土土器の構成

SB198 図版123

土師器杯AはII(1)とIII(2)がある。3・4は椀と小椀で、皿AもII(5・6)とI(7)にそれぞれ法量分化している。8は盤B I。灰釉陶器(9~11)は丸石2号窯式である。14期の土器様相である。

SB199 図版123・124、PL75、
第140図、第30表

土師器杯AはII(1~6)、III(7)の二法量がある。IIは器高3cm前後口径10cm前後とまだ大きめである。杯A IIIは、7の1点のみである。8~10は土師器盤B II。11~13は土師器椀、14~18は黒色土器A椀である。灰釉陶器は22が丸石2号窯式のほかは虎溪山1号窯式である。煮炊具はロクロ調整を行ない、胴部をへら削りする甕(23)、羽釜Aは24・25がある。24は内部をハケ状工具で整えた後タタキ調整を施している。11~12期の土器様相である。

SB200 図版124

須恵器杯Aは回転へら切り2個体、回転糸切り1個体がある。2は須恵器杯B III、1はそれに対応する法量の杯蓋Bである。土師器甕C(3・4)は口縁部が強く外反する形態である。4期の土器様相と考えられる。

SB201 図版125

土師器杯AはII(1・2)とIII(3・4)に法量分化している。灰釉陶器は11が虎溪山1号窯式、他は丸石2号窯式である。12は小型甕Dである。13の羽釜Aは体部をタタキ調整する。13期の土器様相である。

SB202 図版124

1は須恵器杯蓋Aで1期の遺物の混入か。2は杯Aで底部回転へら切りである。4・5は杯B IIであろう。3期の土器様相である。

SB204

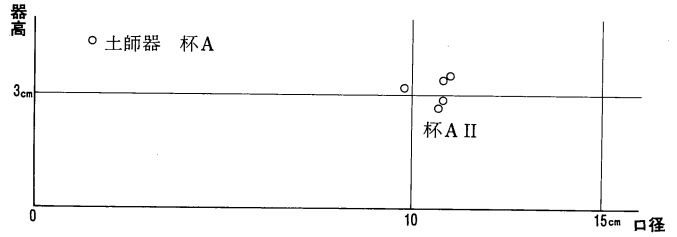
遺物は少なく小片で図示できないが、美濃須衛窯産の須恵器杯B、土師器小型甕A・小型甕Bなどの存在を考えれば2~3期頃の土器と考えられる。

SB205 図版124

非ロクロ成形の土師器鉢が1点図示できた。磨きの方向は不明だが内面全体をへら磨きする。1期の土器である。

SB206 図版125

土師器杯A IIは口径8cm、器高1.3cmと小形である。2は盤B II、4は皿A Iで口径17.8cmを測る。5・6は須恵器杯Aで、5は回転へら切り、6は回転糸切りである。7は土師器甕Fで5・6・7は3期以前の遺物の混入であろう。その他の土器は14~15期の土器様相を示すと思われる。



第140図 SB199出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	11	580	21 40%	1~6
	杯A III	1	70		7
	椀	5	600		11・12
	盤B I	1	180		13
	盤B II	3	225		8~10
	不明		765		
黒色土器A	椀	16	1670	16 31%	14~18
須恵器	杯A	5	50	10 19%	
	杯B IV	2	18		
	杯蓋B	3	40		
灰釉陶器	椀	3	397	5 10%	21・22
	皿	2	80		19・20
	不明		10		
煮炊具					
土師器	甕 B	2	25	10 14%	
	小型甕D	2	340		23
	羽釜 A	6	2860		24・25
	不明		400		
貯蔵具					
須恵器	甕	7	380	7	
	不明		115	10%	

第30表 SB199出土土器の構成

SB207 図版125

1は土師器高杯。須恵器杯Aは回転へら切り(2)と回転糸切り(3)の両者があるが、個体数では回転へら切り1点、回転糸切り4点で回転糸切りのほうが多い。煮炊具は7が底部に糸切り痕の残る小型甕D、8は指ナデ調整の小型甕A、11は甕Aである。9は非ロクロ調整の鉢で体部外面を縦方向のへら削りで調整している。4期の土器様相と考えられる。

SB208 図版125・126

1・2は土師器杯Dで1は内外面を黒色処理している。3は内面黒色処理を施すの手捏ね土器である。8・9は須恵器杯Aで底部を回転へら切りする。6は杯蓋Aで軟質の焼成である。7は高杯の脚部であろう。煮炊具は、土師器甕A(10・11)、小型甕A(12)は底部に木葉痕残る。14は甕G、13は土師器鉢で口縁部内面に横方向のへら磨きを施す。1期の土器様相である。

SB209 図版126、PL76、
第141図、第31表

土師器杯AはII(1~4)とIII(5・6)の2法量がある。IIの法量は器高3.2~2.8cm、口径10cm前後である。8は黒色土器Bの小椀、9・10は黒色土器Aの小椀で、9は内面のへら磨きが暗文状になされている。11~18の灰釉陶器はすべて虎溪山1号窯式である。煮炊具のうち、19はロクロ調整の小型甕D。20は丸底の羽釜Aで完形である。12期の土器様相である。

SB210 図版126

食器は須恵器杯蓋B(1)1点のみ。煮炊具は土師器甕B、貯蔵具は甕A(2)がある。5期の土器様相である。

SB211 図版126

1・2は灰釉陶器の椀と皿である。12期以降の土器様相と考えられる。

SB213 図版127

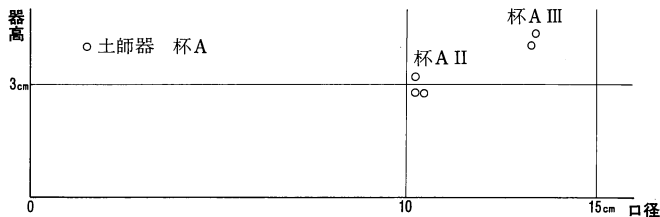
土師器杯AはII(1~5)とIII(6)の2法量がある。皿AもI(8・9)とII(7)の2法量をなし、両者とも口縁端部を面取りしている。14・15の灰釉陶器は丸石2号窯式である。14期の土器様相である。

SB214 図版127

1は土師器杯Dで体部外面下半を手持ちへら削り、内面は横へら磨きを施す。2・3は須恵器杯蓋Bで小形である。4・5は土師器小型甕A、6は甕Fである。1~2期の土器様相である。

SB215 図版127、第32表

土師器杯AはII(1)とIII(6)に法量分化している。2~5は土師器皿AIIで口縁端部を面取りする。9



第141図 SB209出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	10	300	23 52%	1~4
	杯A III	4	265		5・6
	椀	8	305		7
	盤A	1	30		
	不明		190		
黒色土器A	椀	3	45	6 13%	9・10
	小椀	3	195		
黒色土器B	小椀	2	50	2 4%	45 8
須恵器	杯A	3	15	6 13%	76%
	杯B IV	1	10		
	杯蓋B	2	20		
灰釉陶器	椀	3	280	8 18%	15~17
	小椀	1	25		18
	皿	2	240		11・12
	段皿	2	360		13・14
	不明		15		
煮炊具					
土師器	小型甕D	1	30	8 14%	19
	羽釜A	7	3880		20
	不明		580		
貯蔵具					
須恵器	甕	6	160	6 10%	

第31表 SB209出土土器の構成

～11の灰釉陶器は丸石2号窯式である。14期の土器様相である。

SB216 図版127

1は美濃須衛窯産杯蓋Bでやや小さめで高いつまみが付く。2は底径で16.5cmを測る大形の杯Bである。産地は不明だが搬入品と考えられ、灰白色で堅緻な胎土である。煮炊具は3の小型甕Bを図示した。底部外周を手持ちへら削りする。4は美濃須衛窯産の横瓶である。2～3期の土器様相であろう。

SB218 図版127

土師器杯A IIが2点図示できたのみである。器高1.6cm・口径7.8～8cmと小形である。15期の土器と考えられる。

SB219 図版127

土師器杯A II (1)と黒色土器A小椀(2)を図示した。2は灯火器として利用されている。杯A IIは12～13期の形態である。

SB220 図版128、PL77

1～3は土師器杯A II、6・7は杯A III、4・5は盤B II、8は皿A I、9は鉢Aである。10～14の灰釉陶器は丸石2号窯式である。煮炊具には15の鍋がある。一對の短い耳を有するもので、広い底部から体部は直角に近く立ち上がる。体部外面には浅いハケ目を施し、内面には粘土紐の積み上げ痕が残る。底部は内外面ともに指ナデで平坦に仕上げられている。口径28.4cm・器高8.8cm・底径22.4cmを測る。

SB221 図版128

土師器杯AはII (1)とIII (2)がある。3は皿A I、4は小椀、5・6は盤B IIである。8～10の灰釉陶器は丸石2号窯式である。14期の土器様相である。

SB222 図版128

1～3は土師器杯A IIで器高は2.8cm前後である。灰釉陶器は6が虎溪山1号窯式のほかは丸石2号窯式である。12～13期の土器様相である。

SB223 図版128

土師器杯AはII (1～4)とIII (5)の2法量がある。IIは口径10.5cm、器高3cm～3.3cmを測る。6は盤B II。7は灰釉陶器椀である。12期の土器様相である。

SB224 図版128・129

食器は非クロク調整の土師器杯と須恵器で構成される。1は土師器杯Eで口径17cm、外面は底部手持ちへら削り後全面を横へら磨きし、内面も丁寧な横へら磨きを施している。2は杯Dで底部外面は手持ちへら削り、内面はへら磨き後黒色処理する。3は須恵器杯蓋Aで扁平なつまみを付し、天井部のへら削りは広い範囲に及んでいる。4は杯Aで器高5.7cmと深い。5は土師器鉢である。煮炊具は、土師器甕B(6・8・9)、甕A(7)、甑A(10)がある。1期の土器様相である。

SB501 図版129

黒色土器Aが食器の主体を占めている。黒色土器A杯AにはIとII(2)がある。4の灰釉陶器はハケ塗

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	5	165	22 67%	1
	杯A III	3	230		6
	椀	2	50		
	小椀	1	15		
	皿A I	1	15		
	皿A A II	6	330		2～5
	盤B II	3	95		8
	盤A	1	240		
	不明		205		
黒色土器A	小椀	2	140	2 6%	7
	不明		45		
須恵器	杯A	1	3	1/3%	
灰釉陶器	椀	5	250	8 24%	11
	段皿	3	45		9・10
煮炊具					
土師器	甕 B	1	30	5 12%	
	羽釜	4	350		
	不明		200		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	2	95	3 75%	4 10%
	甕	1	20		
	不明		1025		
灰釉陶器	広口瓶	1	50	25%	

第32表 SB215出土土器の構成

りて光ヶ丘1号窯式である。8期の土器様相である。

SB502

黒色土器A杯A II、土師器甕A、須恵器甕の小破片のみで時期は不明である。

SB503 図版129

1は土師器杯A III、2は土師器皿A I又は盤B I、3～6は灰釉陶器である。7はロクロ調整の土師器小型甕D、8の羽釜Aは体部ハケ目調整後鏝を貼付する。13～14期の土器様相である。

SB504 図版130

土師器杯AはII(1・2)とIII(3)がある。4は口径18cmを測る。6は底部に木葉痕の残る土師器小型甕Aで、2期以前の土器の混入と考えられる。土師器杯Aの形態は14期の様相である。

SB505 図版130

食器の主体は黒色土器Aである。黒色土器A杯AはI(3)とII(2)の2法量がある。5は須恵器杯A、6は灰釉陶器皿で光ヶ丘1号窯式である。土師器甕B(7・8)は、口縁部が直線的に外反し、7では体部上半にヨコナデが施される。8期の土器様相である。

SB506 図版130

1・2は土師器杯A II、3は黒色土器Bの小椀。4は土師器盤B Iであろう。5～7の灰釉陶器は虎溪山1号窯式である。13期の土器様相である。

SB507 図版130

食器では黒色土器Aが主体を占め土師器と軟質須恵器、灰釉陶器が少量ずつこれを補う。黒色土器Aには杯A I・II(2～9)、椀(10)、皿B(11)、鉢A(12)がある。13・14は軟質須恵器杯Aである。灰釉陶器のうち15は光ヶ丘1号窯式であるが、16・17は丸石2号窯式で1の土師器皿A II同様、13～14期の遺物の混入である。8期の土器様相である。

SB508 図版130

土師器小椀(1・2)が図示できた。13～14期の土器と考えられる。

SB509 図版131

食器は黒色土器Aが主体で土師器、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器は少量に過ぎない。黒色土器Aは杯A II(1～12)が中心で、杯A I(13・14)もある。14は底部外周を手持ちへら削りする。黒色土器A皿B(18～20)のうち18は高台が付かない。19は内面のへら磨きが暗文風に六角形の方角でなされている。21・22は須恵器、23は軟質須恵器である。24・25は灰釉陶器で光ヶ丘1号窯式、24は灯火器として使用されている。26は黒色土器A鉢Aで口縁端部に内傾する面をもつ。29は土師器埴形土器で古墳時代中期の土器の混入である。8期の土器様相である。

SB521 図版131

1・2は須恵器杯Aで回転へら切りと思われる。3・4は杯蓋Aであるが4は口径が大きく14.6cmを測る。天井部のへら削りは比較的狭い。5は杯蓋Bで口縁部は断面三角形で美濃須衛窯産の可能性もある。6は三角形の高台をもつ杯Bで、焼成は甘く内面は赤褐色を呈する。7は土師器甕F、8は甕Aで底部に木葉痕残る。10は須恵器長頸壺、11は短頸壺、9・13・14は鉢Aで14は美濃須衛窯産である。12はフラスコ形瓶である。1期の土器様相である。

SB522 図版132

1・2は土師器杯Dで内面と外面上半を横へら磨きし、2は内面を黒色処理する。3は土師器杯Eで口径14.5cmである。4・5は土師器杯Fで4は口縁部が内湾気味、5は口縁部が外反する。6は須恵器杯A、7は高杯である。8は甕、9は短頸壺である。1期の土器様相である。

SB523 図版132、PL77、第33表

食器は土師器と須恵器がある。土師器は高杯（3～7）が多い。1・2は土師器杯Eで2は灯火器として用いられたのか口縁部周辺に炭化物が付着している。8・9は須恵器杯Aで底部回転へら切り、8は口径14.3cmである。10・11は須恵器杯蓋Bである。煮炊具は土師器甕A（14・15）、甕B（16）、甕F（18～21）、小型甕A（17）がある。貯蔵具は12が甕、13が長頸壺である。このほかに須恵器短頸壺、鉢A、甕Aがあり甕には美濃須衛窯産製品が1点含まれている。2期の土器様相である。

SB524 図版133

1は土師器杯Fで体部外面に稜を持ち口縁部はやや内湾気味である。内面と体部上半をヨコへら磨きする。2は小形の壺で指オサエで仕上げる。3は甕である。4・5は土師器甕Bであるが形態は異なる。4は内面に粘土紐の輪積痕を明瞭に残し、横方向のハケ目をかける。5は口縁部が「く」の字に外反する形態である。1期の土器様相である。

SB525

遺物は小片で図示できないが、非ロクロ調整の土師器鉢、土師器甕A、美濃須衛窯産の甕があることから、2期に属するものと思われる。

SB526 図版133

食器は須恵器を主体に構成されている。7は甕Bで口縁部の外反が強い。8・9は小型甕Dで底部に回転糸切り痕が残る。10は須恵器甕Aで体部内面に同心円文が残る。5期の様相である。

SB527 図版133

土師器杯は図示できないが、杯Dと杯Fがある。須恵器杯Aは回転へら切りで口径10cm前後のものと思われる。1は体部外面をへら削りし後指ナデを加える小型甕Aである。1期の土器様相である。

SB528 上層 図版133

SB528は上層と下層で土器の様相が大きく異なる。住居址2軒の重複と考えられるがここでは上層・下層として記述する。SB528上層は黒色土器Aを食器の主体として軟質須恵器と土師器で構成されている。1・2は土師器杯A II、黒色土器A杯AはII（3～8）とI（9・10）の2法量がある。11は椀である。12～16は軟質須恵器杯Aである。17は緑釉陶器椀で底部破片であるが、高台の部分で打欠き円盤状に整えているかの如くである。全面をへら磨きし光沢のある淡緑色の緑釉が掛かる。胎土は灰白色を呈する硬質の焼成で内外面に3点のトチンの目跡が残る。黒笹90号窯式の緑釉陶器である。18は小型甕D、底部に糸切り痕がある。8期の土器様相である。

SB528 下層 図版133

食器は非ロクロ調整の土師器杯と須恵器で構成されている。1は底面を手持ちへら削り、体部をヨコナデで仕上げる杯で底部内面は指オサエを行ないやや雑な作りである。2も1と同様な調整であるが底面はへら削りせず、指ナデ調整である。3は須恵器杯蓋Aで軟質の甘い焼き上りである。図示してないが須恵器杯Aがあり底部回転へら切り後回転へら削りする。5は甕Aで内外面をハケ目後へら磨きする。6は体

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No
土師器	杯E	2	260	47 87%	54 39%
	杯F	32	650		
	杯C	1	5		
	高杯	12	1305		
須恵器	杯A	5	540	7 13%	8・9
	杯蓋B	2	60		10・11
煮炊具					
土師器	甕 A	33	19880	66 49%	14・15
	甕 B	22	6200		16
	甕 F	3	500		18～21
	小型甕A	7			17
	小型甕B	1	30		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	1	35	17 12%	13
	壺	1	100		
	甕 E	2	70		
	甕	12	3800		
	甕	1	60		12

第33表 SB523出土土器の構成

部をへら削り後へら磨き調整する土師器甕である。7は土師器甕A。1期の土器様相である。

SB529 図版134、PL77・78、
第142図、第34表

食器は土師器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器で構成される。土師器杯A II(1~8)は1法量のみである。12は軟質須恵器杯A。灰釉陶器碗(13~15)は13が口径16cm・器高4.9cm、15で口径12.4cm・器高4.1cmと法量の差が大きい。17は土師器盤Aで脚台の端部を内側に折る形態で楕円形の透かしを3方向に穿つ。18は土師器小型甕D。19・20は甕Bである。8期の土器様相である。

SB530 図版135、PL83

1は土師器杯Eで、内面には縦方向の暗文を施し内外面ともに赤彩を施す。2は須恵器杯Dで立ち上がりは低く内傾し、口径9.2cmである。5~8は須恵器杯Aで、5~7は回転へら切り未調整、8は回転へら切り後底面の狭い部分を回転へら削りする。9は須恵器杯B、10は須恵器高杯の脚部である。11・12は土師器小型甕A、13は小型甕B、15は甕Aで、14は土師器鉢である。1期の土器様相である。

SB534 図版135

食器は土師器、黒色土器A、軟質須恵器、灰釉陶器で構成されているが、土師器の量が最も多い。1・2は土師器杯A II、3・4は黒色土器A杯A IとIIである。5・6は碗で、内面のへら磨きは放射状で暗文風になされ磨かれない部分が多い。7~9の灰釉陶器は漬掛けで施釉している。8・9は口縁部を指でつまむ小さな輪花を4か所に施す。8期の土器様相である。

SB535

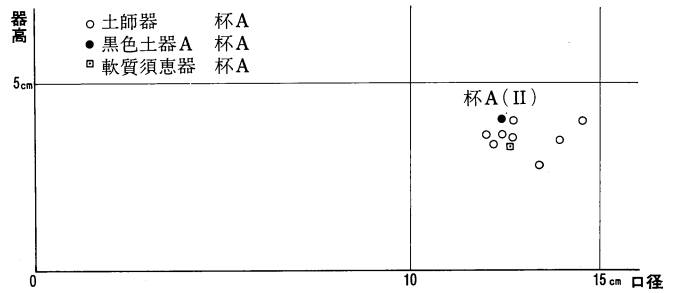
遺物は小片で図示できない。食器は土師器・黒色土器A・須恵器・灰釉陶器があるが、須恵器は混入した遺物であろう。灰釉陶器の広口瓶と思われる破片がある。8~9期の様相と思われる。

SB536 図版135

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器で構成されているが、図示できるものは黒色土器A碗(1)と灰釉陶器碗(2)である。2は漬掛け施釉である。8期の土器様相である。

SB537 図版135・136、PL78・79、第143図、第35表

土師器杯A II(1~9)は器高3cm前後、口径10~11cmの法量である。杯A IIIと確認できるものはない。10は盤B I。黒色土器Aは碗のみで11・12は小碗、13~16は碗で概して内面の磨きは粗く、16では17のように「十」字状にへら磨きが施されるのみである。17は高台は付かないが、杯Aではなく碗を意識して製作



第142図 SB529出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No
土師器	杯A II	19	790	24 36%	1~8
	碗	3	200		9
	盤A	1	510		17
	不明	1	330		
黒色土器A	杯A II	8	195	16 25%	10
	碗	7	320		11
	鉢A	1	40		
	不明		475		
須恵器	杯A	3	25	3 5%	
	不明		10		
軟質須恵器	杯A	16	980	16 25%	12
灰釉陶器	碗	6	410	6 9%	13~15
煮炊具					
土師器	甕 B	6	3330	16 18%	19・20
	小型甕D	10	740		18
貯蔵具					
須恵器	壺	1	25	7 78%	9
	甕 A	1	160		
	甕	5	370		
	不明		15		
灰釉陶器	長頸壺	2	400	2 22%	16

第34表 SB529出土土器の構成

したものの可能性が強い。灰釉陶器(18~23)は漬掛けで施釉され、虎溪山1号窯式である。24は緑釉陶器椀で口径12.2cmを測る。釉は濃緑色で発色は良くなく、胎土は灰色で硬質である。25は小型甕Dである。11期の土器様相である。

SB539

土師器杯A IIは口径10.2cm、器高2.8cm、黒色土器Aの小椀はへら磨きが暗文状に省略されている。

SB540 図版136、PL79、第36表

1・2は土師器杯Fで底面をへら削りする。口縁部は稜から強く外反する形態である。3は土師器杯Eで口径15.5cmを測る。4は赤褐色を呈する緻密な胎土で、外面は横方向のへら磨き、内面は縦方向の暗文風へら磨きを施す。6~10は須恵器杯Aで底部回転へら切りである。6・7は口径12cm前後、8~10は口径13.5~15.5cmで、大小の開きがある。7は美濃須衛窯産である。11・12は須恵器杯Bで、11は美濃須衛窯産、12は細く短い高台の付くものである。13は須恵器椀Aで口縁端部を内傾させる。底部には回転糸切り痕が残る。煮炊具は土師器甕A・甕B(20)・甕C(21)・甕G(22)・小型甕B(14~19)があり、小型甕Bは底部外周に横方向のハケ目を施し底部には木葉痕が残る(15~18)。33は長頸壺

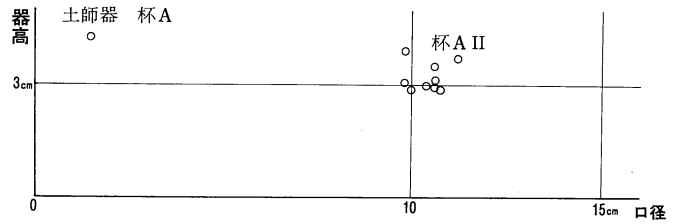
A、24は体部をタタキ調整する須恵器甕Eで、焼成は甘く軟質である。2~3期の土器様相である。

SB541 図版137

食器は、非ロクロの土師器杯類と須恵器で構成されているが、図示できたのは1の須恵器杯蓋Aである。焼成甘く軟質である。4は口縁部を波状にする土師器鉢である。底面には木葉痕を残し、底部周辺を手持ちへら削り、体部外面はへら磨き、内面は指ナデで仕上げる。2は手捏ねの小壺、3は小型甕Aで内外両面をへら磨きする。5・6も体部へら削り後指ナデする小型甕A。7は小型甕Bである。1期の土器様相である。

SB542 図版137

土器全体のなかで煮炊具、特に土師器甕Aの量が多い。食器は土師器と須恵器で構成されている。1~5は非ロクロ調整の土師器杯で、1・4は内面に黒色処理を施している。5は精選された赤褐色の胎土で、内面にヨコナデ後放射状方向の暗文風へら磨きを施す。須恵器杯A(6~8)は、6が回転へら切り、8は回転へら切り後底部を手持ちへら削りする。11・12は体部に沈線を引く杯Bで金属器模倣のものか。美濃須衛窯産の可能性のある胎土色調である。15は肩の部分に沈線をもって稜をなす甕で体部に櫛状工具による刺突が施される。15は長頸壺Bの高台であろう。土師器の煮炊具は甕A25・26、甕B、甕F17・18、小型甕A19・20、小型甕B21~24がある。17・20・22の底部には木葉痕が残る。2期の土器様相である。



第143図 SB537出土土器量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	31	1010	41 53%	1~9
	椀	9	300		10
	盤B I	1	30		
	不明		850		
黒色土器A	杯A II	3	170	19 24%	17
	椀	13	875		13~16
	小椀	3	225		11・12
須恵器	杯A	8	190	9 12%	78 91%
	杯蓋B	1	10		
緑釉陶器	椀	1	10	1%	24
灰釉陶器	椀	4	615	8 10%	20・21
	小椀	1	90		18・19
	皿	2	120		22
	段皿	1	200		23
煮炊具					
土師器	小型甕D	3	175	3 3%	25
	不明		755		
貯蔵具					
須恵器	壺	3	65	4 80%	5
	甕	1	20		
灰釉陶器	瓶	1	10	1 20%	6%

第35表 SB537出土土器の構成

SB543

土師器杯Dと土師器甕Fが1個体ずつあるだけであるが、小片のため図示できない。2期以前の様相か。

SB544 図版138

煮炊具の土師器甕類が量的に非常に目立つ構成である。1～3は須恵器杯Aで2は回転ヘラ切りである。4は平瓶の口頸部であろう。6は土師器小型甕A、7・8は甕A、9・10は甕B、11は甕G、12は底部に糸切り痕を残す小型甕Dである。2期の土器様相と思われるが、12は新しい要素である。

SB545 図版138

土師器杯は杯A II (1・2)の1法量のみで杯A IIIは認められない。3は土師器椀、4～6は黒色土器A椀で、磨きは4では放射状に省略されている。7は底部に糸切り痕を残す土師器小型甕D。8は羽釜Aである。11期の土器様相である。

SB546 図版139

全体に土師器が多く、杯・鉢・甕類に磨き技法が多用される。1～3は土師器杯D、2・3は内面を黒色処理する。3は口縁端部を内傾させている。8～10は須恵器杯蓋Aで9・10は内面の返りが特に短い。11・12は甕で高台が付き、11は体部に文様帯をもつ。13は口縁部に櫛描波状文を施す須恵器甕Aである。11～13は美濃須衛窯産の可能性はある。14は底部に木葉痕を持ち、体部が球形に張る土師器甕F。15～17は土師器鉢、18は甕Bである。1期の土器様相である。

SB547 図版139・140

土器の量は多い。土師器杯は杯D (1・2)と杯E (3～5)で、2のみ黒色処理されている。高杯 (6・7)は両者とも黒色処理である。8は口径38cmを測る内面を丁寧に横方向にヘラ磨きするが土師器鉢であろう。12は須恵器杯B IIで、高台は小さな三角形状で体部の外反は非常に強い。14は甕の口頸部と考えられるが、内面のロクロ目は強い。19は灰白色軟質の須恵器で甕Eであろう。15～17は小型甕A、18・20は甕B、21は甕G、22・23は甕Fで、23は外面を縦方向のハケ目後内外面に横方向のヘラ磨きを施す。1期の土器様相である。

SB548 図版140

1は土師器杯Eで外面は口縁部近くまでヘラ削り、内面は横ヘラ磨きを全面に施す。3は小型甕B、4

食器					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
土師器	杯E	1	25	7 37%	3
	杯F	2	15		1・2
	杯	2	55		4
	杯C	1	3		
	高杯	1	55		5
須恵器	杯A	6	590	12 63%	6～10
	杯B II	2	260		11・12
	杯蓋B	3	15		
	椀A	1	115		13

煮炊具					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
土師器	甕 A	5	1650	27 48%	
	甕 B	6	3000		20
	甕 C	1	345		21
	甕 F	2	250		
	甕 G	1	320		22
	小型甕B	12	1920		14～19
	不明		920		

貯蔵具					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
須恵器	長頸壺A	2	75	12 20%	23
	甕 E	3	160		24
	甕	6	775		
	横瓶	1	95		

第36表 SB540出土土器の構成

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	椀 C	5	1125	8 50%	1～3・11
	鉢	1	900		5
	高杯	2	135		4
須恵器	杯 A	3	235	8 50%	7～10
	杯蓋A	1	90		6
	杯蓋B	1	130		12
	鉢 A	1	900		
	高杯	2	650		13・14

煮炊具					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
土師器	甕 A	4	980	23 58%	20
	甕 B	10	500		15～17
	甕 F	2	710		21
	甕 G	5	1680		19
	小型甕B	1	650		18
	小型甕C	1	140		
	不明		1000		

貯蔵具					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
須恵器	甕	1	550	1/2%	22

第37表 SB550出土土器の構成

は球形胴で外面にハケ目を施す土師器甕Gである。1～2期の土器様相である。

SB549 図版140

1は土師器杯Eで、底部外面を手持ちへら削りし、内面はへら磨き後黒色処理する。2の須恵器杯Aは底部回転へら切り。3は美濃須衛窯産の杯B II。5は土師器甕Bで口縁部は「く」の字に強く外反し、内面にハケ目を施している。2期の土器様相である。

SB550 図版140・141、PL80・81、第37表

食器は非ロクロの土師器と須恵器で構成されている。1～3・11は土師器碗Cで、1は口縁部外面に強いヨコナデによって段を付ける。底部外面は手持ちへら削り、体部は横へら磨きを施す。内面はナデ調整である。2は体部下半を手持ちへら削り、内面は横へら磨き後黒色処理する。11は軟質に焼き上っており黒色～灰白色を呈する。薄手に仕上げられ、体部上方の外面に沈線が巡る。体部下半は手持ちへら削りを施している。5は全面をへら磨きする土師器鉢である。6は須恵器杯蓋Aで天井部の回転へら削りは口縁端部近くにまで及ぶ。7～10は杯Aで、7・8は口径10.5cm～11cmの小形で底面を回転へら削りする、箱形の形状である。9・10は底部回転へら切り未調整で体部が外傾しながら立ち上がる形態で、口径は9で13cmある。12は口縁端部を折り曲げる。15～17は土師器甕B、18は小型甕B、20は甕A、21は甕F、19は甕Gである。22は須恵器の甕であるが胎土黒灰色の軟質の焼き上りである。1期の土器様相である。

SB551 図版142、第38表

1は明褐色・緻密な胎土の土師器杯Cで、底部回転糸切り後手持ちへら削り、体部もロクロナデ後へら磨きを施しているが、器面が荒れ内面の暗文は観察できない。2は須恵器杯A、3は杯BIVで美濃須衛窯産である。4～7は杯蓋Bであるが、4は口縁部を丸くおさめる独特の形態で美濃須衛窯産である。5～7は在地産で胎土・焼成・つまみや口縁部の形態が非常によく似ておりおそらく同一時に製作されたものであろう。9の須恵器甕Aも美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕の多くの器種がある。15は甕Aで口径23.5cm・器高43.2cm・底径10.2cmを測り、底面には木葉痕が残る。13は甕B、14は甕Cで底面にも手持ちへら削りを行う。10・11は小型甕B、12は小型甕Dである。2～3期の様相である。

SB553 図版142

土師器杯A II (1～3)は口径9.5～10.5cm、器高2.3～2.7cmと小形である。5～7は土師器碗、灰釉陶器は漬掛け底部回転へら削りで、9・10が丸石2号窯式、他は虎溪山1号窯式である。緑釉陶器は6片が出土している。濃淡のある濃緑色の釉調で、胎土硬質のもの(15・16)を含めて4片、濃緑色の釉で胎土が軟質のもの2片がある。いずれも器面のへら磨きはない。13期の土器様相である。4の黒色土器A杯A IIは5～8期の遺物の混入であろう。

SB554 図版144

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されているが、量的には黒色土器Aが須恵器を上回っている。黒色土器A杯AはII(1・2・4・5)とI(3)の2法量がある。いずれも内面のへら磨きは丁寧である。6は黒色土器A皿B。7の土師器甕Bは底部まで丁寧なハケ目を施している。8は須恵器甕Dで、肩の部分

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯DorE	5	50	8 21%	1
	杯	1	50		
	高杯	2	100		
須恵器	杯A	14	245	31 79%	39 46% 4～7
	杯BIV	1	8		
	杯蓋B	14	815		
	鉢B	1	5		
	高杯	1	5		
煮炊具					
土師器	甕A	9	4030	24 29%	15 13 14 10・11 12
	甕B	7	2550		
	甕C	1	300		
	小型甕A	2	390		
	小型甕B	2	720		
小型甕D	3	190			
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	1	20	21 25%	8 9
	甕A	19	1180		
	甕	1	2		

第38表 SB551出土土器の構成

に凸帯を貼付しさらに四耳を付けるが、耳は紐をちぎって付けたような簡単なものである。7期の土器様相である。

SB555 図版143、PL81~83、第39表

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器で構成されている8期の好資料である。1は土師器杯Cで6期以前の混入であろう。2は土師器耳皿A。3~17は黒色土器A杯で17が杯AⅢの法量で他は杯AⅡである。18・19は黒色土器AⅢBで器高は高めである。20~25は黒色土器A椀である。26~28は須恵器杯A。29~38は軟質須恵器で、29は灯火器として使用されている。39~43の灰釉陶器はハケ塗りで光ヶ丘1号窯式。土師器盤A(44・45)は脚台が強く張る形状で、45では透かしが「十」字形に開けるられている。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dが主体で、甕Cと甕Fは小片である。50は須恵器短頸壺Cである。

SB556 図版144、PL83

土師器杯AはⅡ(1・2)とⅢ(3・4)の2法量に分化している。Ⅱは器高2.5cm前後である。5は盤BⅡ、6は盤BⅠである。黒色土器A椀は9・10の椀と、11の小椀の2法量がある。灰釉陶器は虎溪山1号窯式にあたり、12と15には底部に糸切り痕が残る。22の短頸壺はほぼ完形に近い残存率である。13期の土器様相である。

SB557 図版145、第40表

食器は土師器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器で構成されている。須恵器は混入であろう。杯Aの構成の割合を見ると土師器(1~3)12個体、黒色土器A(4~10)11個体、軟質須恵器(13~18)7個体で重量で比べても三者の量はほぼ同量となっている。19は灰釉陶器皿である。20は小型甕D、21は甕Bで口縁部は直線的に外反し端部を面取りしている。8期の土器様相である。

SB558 図版145・146、第41表

SB557同様、食器は土師器・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器で構成されている。杯Aで比べると土師器が少なく軟質須恵器が最も多い構成となっている。12は灰釉陶器皿である。13~16は土師器甕Bで口縁部を肥厚させる。13・15・16では胴部上半を、14では底部周辺を横方向にナデている。8期の土器様相である。

SB559 図版146、PL83、第42表

食器が土師器(1)・黒色土器A(2~12)・軟質須恵器(13)・灰釉陶器(14)・緑釉陶器で構成される8期の土器様相である。杯Aの個体数比では黒色土器Aが圧倒的に多い。緑釉陶器は3片あるが同一個体と見られ、椀の体部である。黄味を帯びた白色・軟質の胎土で、外面の釉は剥落しているが内面には淡緑色の光沢のある釉が掛けられている。釉のなかには緑色の濃い部分が斑点状にとんでいる。煮炊具は土師器甕B

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯C	1	35	19 9%	1
	杯AⅡ	11	390		3~6
	椀	2	65		
	耳皿A	1	65		2
	盤A	4	950		44・45
	不明		70		
黒色土器A	杯AⅠ	7	455	113 52% 218 84%	16
	杯AⅡ	77	1655		7~15
	椀	25	1610		20~25
	皿B	2	235		17~19
	針A	2	95		
	不明		2015		
須恵器	杯A	14	525	31 14%	26~28
	杯BⅣ	4	67		
	杯蓋A	4	35		
	杯蓋B	9	175		
軟質須恵器	杯A	48	2260	48 22%	29~38
灰釉陶器	椀	4	350	7 3%	41・42
	皿	2	45		39・40
	段皿	1	10		43
煮炊具					
土師器	甕B	9	3020	24 9%	49
	甕C	1	10		
	甕F	2	45		
	小型甕D	11	1350		46~48
	他	1	90		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	1	65	16 84% 19 7%	50
	短頸壺C	3	165		
	壺	3	55		
	甕D	1	35		
	甕	7	3380		
	罎	1	5		
灰釉陶器	長頸壺	3	225	3 16%	

第39表 SB555出土土器の構成

(18・19)、小型甕D (15~17) の構成である。20は黒色土器Bの短頸壺である。内外両面を丁寧に横へう磨きし黒色処理する。21は須恵器甕Aである。8期の土器様相である。

SB560 図版147

1・2は土師器杯Fで、1は厚手の胎土で内外全面をへう磨き調整する。2は口縁部が強く外反する形態で、調整は1と同様である。3は土師器甕Aである。1期の土器様相である。

SB561 図版147

図示できたのは1の土師器甕Bのみである。器高33cm、口縁部が短く外反する形態で胴部は薄く仕上げられ、外面底部周辺は横方向のハケ目を施している。食器は須恵器が主体で杯Aは回転糸切りのみである。5期の土器様相である。

SB562 図版147

食器は土師器杯Dと須恵器で構成されている。土師器杯Dは内面黒色処理されている。須恵器杯A(1)は底部切り離し不明、杯蓋B(2)は高いつまみが付く。4~3期の様相か。

SB563 図版147

図示できたのは1の土師器高杯のみである。土師器杯Dは図示してないが、内外両面をへう磨きする。1~2期の土器である。

SB564 図版147・148

食器は黒色土器A(1~9)と須恵器(10)で構成されるが、量的には黒色土器Aが圧倒的に多い。土師器杯も1片あるが小片である。11は大形の土師器小型甕D、12~14は甕Bで口縁部を肥厚させ(12)、あるいは直線的に外反させる(13・14)。12は器高31cmでずんぐりした形状である。7期の土器様相である。

SB565 図版148

重複のため混入遺物が多い。土師器甕A、甕Fなどは混入である。1~3は黒色土器A。4は灰釉陶器碗でハケ塗りである。5は土師器甕Bで直線的な口縁部で外傾は弱い。8期の土器様相である。

SB567 図版148

食器は土師器(1)・黒色土器A(2)・軟質須恵器・須恵器・灰釉陶器がある。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dで構成される。土器はいずれも小片であるが、8期の土器様相である。

SB568 図版148

土師器杯Aは1~3の1法量が確認できるのみである。口径は11cm前後、器高2.8cm前後で底部には回転糸切り後の板状圧痕が顕著に残る。黒色土器A・須恵器は小片である。4は灰釉陶器碗で施釉は漬掛けに

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯E	1	5	14 30%	1~3
	杯A II	12	585		
	盤B I	1	240		
黒色土器A	杯A II	11	780	17 36%	4~10
	碗	6	450		
須恵器	不明		195	5 10%	11・12
	杯A	4	120		
	杯B IV	1	15		
軟質須恵器	不明		15	7 15%	13~18
	杯A	7	540		
灰釉陶器	皿	4	43	4 9%	19
煮炊具					
土師器	甕 B	3	650	4 7%	21
	小型甕D	1	320		
貯蔵具					
須恵器	壺	1	15	8 89%	9
	甕	7	735		
灰釉陶器	長頸壺	1	50	1 11%	15

第40表 SB557出土土器の構成

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	2	200	2 7%	1・2
黒色土器A	杯A II	7	200		
	碗	6	525	16 55%	7~9
	皿B	3	135		
	不明		125		
須恵器	杯A	1	15		
須恵器	杯B IV	1	25	2 7%	10・11
	杯A	8	515		
軟質須恵器	杯A	8	515	8 28%	12
灰釉陶器	皿	1	105	1 3%	
煮炊具					
土師器	甕 B	13	7870	17 35%	13~16
	小型甕D	4	120		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	1	30	2 67%	3
	甕	1	460		
灰釉陶器	長頸壺	1	85	1 33%	6

第41表 SB558出土土器の構成

よる。10期の土器様相である。

SB569 図版148

食器には土師器・黒色土器A・須恵器があるが、土師器杯A(1)は混入であろう。2・3は黒色土器A杯A I、5は須恵器杯Aである。7期の土器様相である。

SB570

住居址の重複のため、確実に本址に帰属する遺物は認定できず、土器様相も明らかにし得ない。

SB571 図版148

土師器杯類に1～2期の遺物の混入がある。食器は黒色土器A(1)と須恵器(2・3)からなり、量的には須恵器がややうまわる。須恵器杯Aは体部の器壁が薄くロクロ目が強く残るもので外傾もかなり強い。4・5は土師器甕Bで頸部に強いヨコナデを入れ口縁部がやや肥厚するように調整している。6期の土器様相である。

SB572 図版149

1の須恵器杯BⅢを図示したが、本址に帰属する時期のものかどうかは明らかでない。土師器甕類には甕A・甕Fなど1～2期に属する遺物が多く含まれている。

SB573 図版149

食器には土師器(1・2)・黒色土器A(3～5)・須恵器(6～10)・軟質須恵器(11～13)・灰釉陶器がある。なかで最も多いのは須恵器、次いで黒色土器A・軟質須恵器で、土師器・灰釉陶器は少ない。須恵器は杯Aが多く杯Bや杯蓋は小片である。杯Aは底部が小さく外傾の強い形態で、器壁は薄くロクロ目が目立つ。軟質須恵器杯Aは底面からコテを当てたように滑らかにナデあげ、須恵器杯Aにあるように見込の部分に強い押えの跡を残さない。14は土師器盤Aでロクロ調整、口径33cmを測る。灰釉陶器は図示してないが碗の口縁部破片で光ヶ丘1号窯式と思われる。15～17は土師器甕Bで端面を面取りする直線的な口縁部で、底部周辺を手持ちへら削りする。18は須恵器甕Dで胴部最大径52cmを測る。内面上半には同心円文が残るが下半では粘土紐の輪積み痕が明瞭に残っている。7～8期の土器様相である。

SB574 図版150

食器は土師器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器で構成されており、須恵器は混入であろう。1は土師器杯A。2は碗である。3・4は黒色土器A碗で体部が内湾する深めの碗である。6は灰釉陶器広口瓶の口縁部である。7の小型甕は指ナデの調整でロクロ調整を施さない。8期の土器群である。

SB575 図版149

食器は須恵器が主体で少数の黒色土器Aを加えて構成される。1は黒色土器A杯Aで7.5cmと底径の大きな深めの形態である。2～7の須恵器杯Aは回転糸切り底で、底径が大きく外傾の弱い形態である。8・9は杯蓋Bと杯BⅣ。10は土師器甕Cで口頸部の形態は「く」の字から「こ」の字状への過渡的な形態を

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯AⅡ	8	215	13 14%	1
	耳皿B	5	620		
	不明		580		
黒色土器A	杯AⅠ	2	95	56 58%	8・9 2～7 10～12
	杯AⅡ	33	1375		
	碗	13	575		
	皿B	3	65		
	鉢A	5	480		
	不明		1700		
須恵器	杯A	6	110	14 15%	96 70%
	杯BⅣ	3	37		
	杯BⅤ	1	1		
	杯蓋B	3	70		
	鉢A	1	30		
	不明		45		
軟質須恵器	杯A	10	350	10 10%	13
緑釉陶器	碗	1	18	1 1%	
灰釉陶器	碗	1	15	2	
	段皿	1	23	2 2%	14
煮炊具					
土師器	甕A	1	25	18 13%	18・19 15～17
	甕B	8	3415		
	小型甕D	8	1325		
	不明	1	10		
貯蔵具					
黒色土器B	短頸壺	1	240	1 4%	23 17%
須恵器	長頸壺A	5	380	19 83%	
	甕A	14	2310	3 13%	
灰釉陶器	長頸壺	3	105	3 13%	21

第42表 SB559出土土器の構成

示している。11は口縁部が短く強く外反する甕Bである。5期の土器様相である。

SB576 図版150

食器は土師器(1~4)・黒色土器A(5~8)・軟質須恵器(9~12)・灰釉陶器(13)で構成されている。量比では土師器・黒色土器A・軟質須恵器の三者がほぼ同量である。6~8の黒色土器A碗は体部が直線的に開く形態である。13の灰釉陶器碗はハケ塗りである。14・15は小型甕D、16は甕Bで外反の緩い口縁部で胴部上半をヨコナデしている。8期の土器様相である。

SB577 図版150

1~4は土師器杯A IIで、器高は2.7~3.6cmとばらつきはあるが口径は11.8cm前後である。6~8の灰釉陶器はすべて漬掛けの施釉、虎溪山1号窯式で6には底部に糸切り痕が残る。

SB578 図版150

食器は土師器が主体で、黒色土器Aと灰釉陶器・緑釉陶器がわずかに加わる構成である。1・2の土師器杯Aは、口径12.5cmと11.2cmをそれぞれ測る。4は緑釉陶器の小碗で、灰色の硬質な胎土に濃緑色の釉が掛かる。5は底部に糸切り痕を残す土師器小型甕Dである。10期の様相である。

SB579 図版150

食器は土師器と灰釉陶器の二者を構成の主体としている。須恵器は混入であろう。土師器は杯A II(1~4)と碗(5)がある。杯A IIは口径11~12cm、器高3cm前後の1法量である。6は須恵器杯A。7~10の灰釉陶器は漬掛けで施釉されている。11は底部に糸切り痕を残す。10期の土器様相である。

SB580 図版151

須恵器を主体に土師器・黒色土器Aで食器が構成される。土師器は杯Cと盤Aである。4は須恵器短頸壺Cで底部に糸切り痕が残る。5期の土器様相である。

SB581 図版151

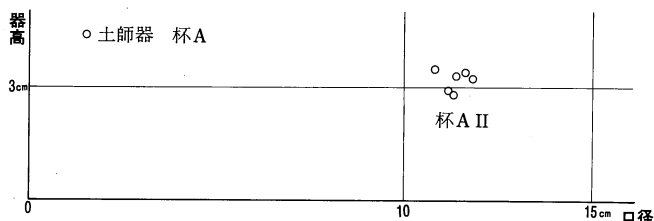
1は土師器杯D、2は土師器杯Eである。5はロクロ調整の土師器小型甕D、6は内面にもハケを施す甕Bである。7は小型甕C、8は甑Aの把手か。3期を前後する段階の土器様相であろう。

SB582 図版151

土師器杯A II(1~3)は口径12~13.5cm・器高3~3.5cmを測る。5は黒色土器A碗で内面に暗文状のヘラ磨きを施す。6~8の灰釉陶器碗は底部ヘラ削り。9は黒色土器A鉢。10・11は土師器小型甕D。12は灰釉陶器広口瓶の底部である。13は須恵器甕Dで、肩に断面三角形の凸帯を貼り付け四耳を貼付する。底部周辺を手持ちヘラ削りしている。9期の土器様相である。

SB583 図版152、第144図

土師器杯A II(1~8)は口径10.8~11.8cm・器高3~3.5cmの1法量である。8は底部に焼成後穿孔を行なう。9~11は土師器碗、12・13は黒色土器A碗である。灰釉陶器(14~21)はハケ塗りが主で14・18が漬掛けの可能性はある。22は邢州窯系の白磁碗底部である。白色の精良な胎土で輪状に高台を削り出す。畳み付けの部分を除いて高台内面も施釉している。釉調は濁りのない透明な釉である。24は甑Bで底部周辺をヘラ削りする。10期の土器様相である。



第144図 SB583出土土器法量分布図

州窯系の白磁碗底部である。白色の精良な胎土で輪状に高台を削り出す。畳み付けの部分を除いて高台内面も施釉している。釉調は濁りのない透明な釉である。24は甑Bで底部周辺をヘラ削りする。10期の土器様相である。

SB585

灰釉陶器碗1片と土師器甕の破片が1片あるに過ぎない。12期以降と考えられる。

SB586 図版152

黒色土器Aと須恵器・軟質須恵器で食器が構成されるが須恵器の量は少ない。1・2は黒色土器A杯A II、3は杯A Iである。4～6は軟質須恵器で内面は滑らかにロクロナデで仕上げられ、黒斑が残る。煮炊具は土師器甕B(8)と小型甕D(7)の組み合わせで構成され、甕Bは直立気味の口縁部、胴部上半と底部周辺のヨコナデなど新しい様相である。7期の土器様相である。

SB587 図版152

遺物は小片で図示できたのは、1の黒色土器A杯A II 1点のみである。8期の土器様相である。

SB588 図版153

1は土師器杯Aに、3は軟質須恵器杯A、4はハケ塗りの灰釉陶器皿である。5は土師器盤Aで口径29cm・器高14.2cmで、脚台は低く楕円形の透かしを4方向に穿つ。口縁、脚台の端部はくぼみを付けるような面取を施している。6・7は土師器甕Bで体部のハケは浅く不明瞭で、底部周辺を手持ちへう削りしている。灰釉陶器の壺類は長頸壺・短頸壺蓋がある。8期の土器様相である。

SB589 図版153・154

食器は土師器(1～4)・黒色土器A・灰釉陶器(5～8)・緑釉陶器(9)がある。灰釉陶器(5～8)は光ヶ丘1号窯式、9は緑釉陶器皿で内外両面をへう磨きし、淡緑色の釉を高台の内側まで全面に施している。胎土は須恵器質で硬質である。10は灰釉陶器長頸壺。11は須恵器甕Aである。12は須恵器甕Dで、灰白色の緻密な胎土で器表には淡緑色の自然釉をかぶり、おそらく東海地方からの搬入品と思われる。肩の部分に凸帯を巡らし耳を付ける。耳は長方形に仕上げ上方から孔を穿つが、貫通はしない。体部はタタキ調整し、凸帯から上の肩の部分にへう描きで文様を施す。文様は動物の胴部とも見えるが不明である。8～9期の土器様相である。

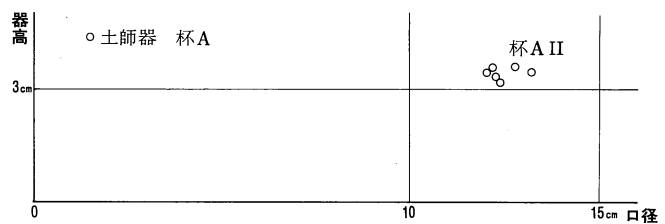
SB590 図版154

須恵器を主体とする食器構成の5期の様相である。4の土師器甕Bは口縁部が強く短く外反する形態である。

SB591 図版154、PL84、
第145図、第43表

食器は土師器を主体に黒色土器Aと灰釉陶器で構成されている。1～5の土師器杯Aは口径13cm・器高3.5cm前後を測る。6～8の碗は土師器・黒色土器Aいずれも体部が直線的に開く形態である。灰釉陶器(10・11)は漬掛けである。12は小型甕D、13の甕Bは口頸部を「コ」字状に外反させている。9期の様相である。

SB592 図版154



第145図 SB591出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯DorE	2	40	29 51%	1～5
	杯A II	19	740		
	碗	7	455		6・7
	盤A	1	10		
	不明		355		
黒色土器A	杯A I	1	45	10 18%	9
	杯A II	4	50		
	碗	5	150		8
	不明		115		
須恵器	杯D	1	5	12 20%	
	杯A	6	95		
	杯B IV	2	10		
	杯蓋B	2	40		
	鉢A	1	65		
灰釉陶器	碗	4	55	6 11%	10
	皿	1	100		11
	段皿	1	10		

煮炊具					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	甕 A	1	18	15 19%	13
	甕 B	7	1380		
	甕 C	1	18		12
	小型甕C	1	75		
	小型甕D	5	200		
	不明		170		

貯蔵具					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
須恵器	甕 A	2	800	8 10%	
	甕 D	1	415		
	甕	5	359		

第43表 SB591出土土器の構成

1は須恵器杯蓋Aで口径14.4cmと大形である。2・3は杯Aで、2は口径8cm、3は口径16cmと法量に大きな開きがある。土師器甕は6が甕A、7・8は甕B、5は甕F、4は小型甕Aである。4を除く大形の甕類はいずれも厚手で、粘土紐の積み上げ痕が内面に観察できるものが多い。1期の土器様相である。

SB593

土師器杯D、土師器甕A、甕B、須恵器甕の破片の出土があるのみで図示できる遺物はない。1～2期の土器と思われる。

SB594

遺物はきわめて少ないが、黒色土器A杯、灰釉陶器碗のあり方から8期を前後する時期の土器と考えられる。土師器甕A・甕FはSB593よりの混入であろう。

SB595 図版155、第44表

食器は土師器が主体で黒色土器A、灰釉陶器、軟質須恵器が混じる程度である。土師器杯A II(1～9)のうち1・3は灯火器として使用されている。12・13は灰釉陶器碗で漬掛け。16・17は黒色土器A鉢Aで、16は体部に断面三角形の凸帯を貼り付け、17は片口を付ける。14・15は小型甕Dである。9期の土器様相である。

SB596 図版155

遺物少なくハケ塗りの灰釉陶器碗(1)を図示できたのみである。8期を前後する時期の土器群であろう。

SB597 図版155

土師器が主体の食器構成をとる。4は無台の土師器耳皿。6の灰釉陶器碗は施釉方法は不明である。7は須恵器長頸壺Aで還元焰焼成が不完全で褐色を呈する。9期の土器様相である。

SB598 図版155・156、PL84・85、第146図、第45表

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されているが、量的には須恵器が黒色土器Aをうまわっている。黒色土器Aは杯A I(8・9)、杯A II(1～7)、碗(10)、皿B(11)があり、大形のものでは図示はしていないが鉢Aもある。須恵器は杯A II(12～16)が主体で杯Bは少ない。18は口径が小さく体部の深い形態である。19は環状のつまみを持つ杯蓋Bである。22・23は土師器盤で口径34cmをはかる。体部はタタキ調整の後クロナデを施し、直線的に開く形態で端部は面取りする。脚台は高く3方に長方形の透かしを開けている。22・23ともに硬質の焼きで、23は還元炎焼成を受けている。26～29は土師器小型甕Dでいずれも底面に糸切り痕を残す。法量は最も大きい26が口径20cm・器高20.2cm、最も小さい29が口径9.5cm・器高7.5cmと法量にかなりの開きがある。貯蔵具では20の壺蓋Aは灰白色の胎土で、天井部に濃緑色の釉が掛かり美濃須衛窯産の可能性が高い。7期の土器様相である。

SB599 図版156

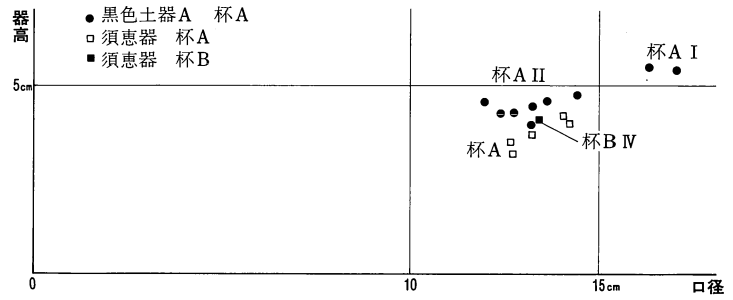
図示できたのは土師器甕C(1)と小型甕D(2・3)のみである。甕C・小型甕Dともに口縁部が「く」字に折れる形態で5期の様相である。

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No
土師師	杯E	1	10	24 51%	1～9
	杯A II	16	1080		
	碗	1	95		
	皿A	1	80		
	鉢A	4	115		
	高杯	1	10		
	不明		70		
黒色土器A	杯A II	3	30	9 20%	46 59%
	碗	4	280		
	鉢A	2	265		
須恵器	杯A	4	70	5 11%	
	杯蓋B	1	5		
	不明		25		
軟質須恵器	杯A	3	75	7%	
灰釉陶器	碗	3	250	5 11%	12・13
	皿	2	35		
煮炊具					
土師師	甕 A	4	110	18 23%	14・15
	甕 B	8	185		
	小型甕D	6	590		
	不明		80		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	2	40	13 93%	14
	甕	11	1195		
灰釉陶器	長頸壺	1	60	7%	18

第44表 SB595出土土器の構成

SB600 図版156

須恵器を主体(3~9)に、土師器杯C(1)、黑色土器A杯A II(2)で食器が構成される5期の土器様相である。甕は甕B、小型甕D(11・12)が主体で小型甕C(10)がある。



第146図 SB598出土土器法量分布図

SB601 図版157

土師器・黑色土器A・黑色土器B・軟質須恵器・灰釉陶器で食器が構成される。4は黑色土器Bの耳皿で底部中央に円孔を穿つ。8期の土器様相である。

SB602 図版157

食器は須恵器と黑色土器Aで構成されているが、須恵器が主体である。土師器杯AはSB579からの混入と考えられる。1は黑色土器A杯A I、2・3は底部回転糸切りの須恵器杯Aで底径の大きな形態である。5は須恵器鉢Aである。5期の土器様相である。

SB604

図示できる遺物はないが、土師器の非ロクロ調整の鉢・甕A、須恵器の焼きの甘い軟質の甕のあり方は、1~2期までの土器様相を示している。

SB605 図版157

6・7は直線的に開く浅めの体部の椀である。9は軟質須恵器杯Aである。10・11は灰釉陶器椀・皿で、このほかに段皿がある。12は緑釉陶器椀で外反する口縁部破片である。内外面をへら磨き、淡緑色の釉が掛かる。灰白色で軟質の焼成である。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組み合わせで、8期の土器様相である。

SB606 図版157、PL85、第46表

土師器、黑色土器A、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器で食器は構成されているが量的には黑色土器Aが最も多い。杯Aは土師器はII(1)が1法量のみ、黑色土器AはI(5)とII(2~4)の2法量、軟質須恵器は杯A(11)の1法量のみである。8~10は体部が直線的に伸びる皿Bである。12~15の灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式である。須恵器はいずれも小片であった。煮炊具は土師器甕B(16・17)、小型甕D(18・19)の構成に甕C少量がある。20は灰釉陶器長頸壺で光ヶ丘1号窯式に属する。21は底径11.5cmの円筒形土器で外面には縦方向のハケ目を施す。8期の土器様相である。

SB607 図版158

土師器杯Dが5点図示できた。調整は5が内外両面を全面へら磨きするのに対し、1~4は内面はへら磨きを施すが外面は指ナデあるいは指オサエで仕上げている。法量で見ると4が口径10cm前後であるのに

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯C	1	5	9	22・23
	杯A II	5	80		
	盤A	2	2125		
	高杯	1	40		
黑色土器A	杯A I	4	470	25	85
	杯A II	16	1260		
	椀	1	80		
	皿B	3	100		
	鉢A	1	20		
	不明		300		
須恵器	杯A	32	1320	51	12~16
	杯B IV	9	380		
	杯B VI	2	85		
	杯蓋B	8	132		
煮炊具					
土師器	甕 B	5	2380	15	24・25
	甕 C	2	160		
	小型甕D	8	1410		
	不明		2310		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	4	490	18	21
	壺蓋A	1	40		
	甕 D	1	50		
	甕	12	1310		

第45表 SB598出土土器の構成

対し、2・3・5は口径12~13cmである。煮炊具は土師器甕Bと甕Fが1点ずつ。貯蔵具は美濃須衛窯産の壺が1点あるに過ぎない。1~2期の土器様相である。

SB608

図示できる遺物はない。小片ながら黒色土器A杯A、須恵器杯A、土師器甕などの状況から、5~7期の土器様相と考えられる。

SB609 図版158

1は非クロ調整で内外面をへら磨き調整する。2・3は土師器甕Bで内面にもハケ調整が施されてる。4は甕Aである。2~3期の様相である。

SB610 図版158

食器は土師器(1~4)・黒色土器A(5・6・11)・須恵器(7・8)・軟質須恵器(9)・灰釉陶器(10)で構成されている。10は皿で指で口縁部を小さくつまむ輪花を4個付ける。煮炊具は土師器甕Bと小型甕D(12)の組み合わせに甕C(13)が加わる。貯蔵具は須恵器のみで甕Aと甕D(14)がある。14はタタキ調整後肩の部分に凸帯を2段に付しているが、耳の有無は不明である。8期の土器様相である。

SB611 図版158

食器は土師器(1)と灰釉陶器(2~5)のみで構成されている。灰釉陶器はハケ塗りで施釉される。2の椀は、腰の部分折るようにして立ち上がらせるいわゆる稜椀の形態である。9期の土器様相である。

SB612 図版158

食器は黒色土器A(3~5)を主体に土師器(1・2)と軟質須恵器(6)がある。須恵器は小片である。7は土師器甕Bで口縁部は肥厚して短く外傾が弱く立ち上がり、胴部上半にはハケ調整の後ヨコナデが施される。8期の土器様相である。

SB614 図版159

土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器があるが、主体は土師器(1~3)・黒色土器A・灰釉陶器(4・5)の構成である。灰釉陶器は4が漬掛け、5がハケ塗りである。6は小型甕D。8期の土器様相である。

SB615 図版158

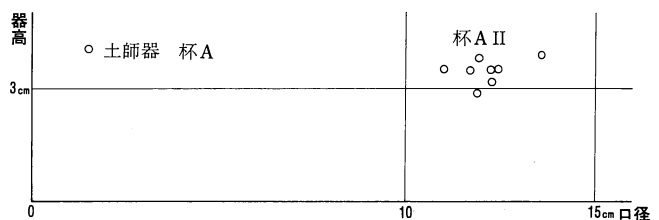
遺物は少なく小片が多い。食器の構成、土師器甕の構成は8期の様相である。

SB616 図版159、第147図

食器は土師器と灰釉陶器で構成されている。土師器の主体である杯A II(1~8)は口径12cm

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯C	1	10	5 6%	1
	杯A II	2	30		
	椀	2	15		
	不明		60		
黒色土器A	杯A I	1	60	28 35%	5 2~4 6~7 8~10
	杯A II	14	780		
	椀	9	400		
	皿B	3	190		
	鉢A	1	65		
須恵器	杯A	20	492	29 36%	81 82%
	杯B IV	2	40		
	杯蓋B	5	100		
	鉢A	2	370		
	不明		20		
軟質須恵器	杯A	14	440	14 17%	11
灰釉陶器	椀	4	337	5 6%	12~14 15
	皿	1	150		
煮炊具					
土師器	甕B	4	1935	11 11%	16~17 18~19 21
	甕C	1	85		
	小型甕D	5	1005		
	円筒形土器	1	265		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	2	205	6 86%	7 7%
	短頸壺	1	35		
	壺蓋	1	5		
	甕	2	1855		
灰釉陶器	長頸壺	1	365	1 14%	20

第46表 SB606出土土器の構成



第147図 SB616出土土器法量分布図

前後・器高3.5cmを測る。土師器椀(9・10)は直線的に開く形態である。灰釉陶器(11~14)はハケ塗りによる施釉である。15は底部に糸切り痕を残す小型甕Dである。9期の土器様相である。

SB617 図版159、PL87

1~3は土師器杯Dで、1は外面底部をへら削り後全面をへら磨き調整し内面を黒色処理する。2は底面をへら削り後内面は放射状に暗文風のへら磨きを施す。3はやや深めで内面はへら磨き、外面はへら削り後指ナデを施す。4~6は口縁部に強いナデを入れ口縁部を外反させてつまみ出す形態は類似しているが、4は口径が小さく内外面共へらによるナデ、5は指ナデするのに対し、6は口径13.4cmと大きく、内外面を横方向のへら磨き調整している。6はSB550に類例がある。9・10は須恵器杯蓋Aと杯Aのセットで杯Aは底部回転へら切り未調整である。甕は土師器甕A(11)、甕B(12・13)、小型甕Bがある。1期の土器様相である。

SB618 図版160

須恵器を主体に食器が構成される。1は黒色土器Aで口径15.5cmと杯A Iの法量である。黒色土器Aの食器類が内面のへら磨きを放射状にするのを一般とするのに対し、1は内面底部までへら磨きは横方向で、古い段階の非ロクロの土師器杯のへら磨きの方法と共通している。2~7は須恵器杯Aで、2は底部切り離し後底面を手持ちへら削り、他は回転糸切り未調整である。8・9は杯蓋Bで口縁部をくちばし状に折り曲げている。10は杯B VI、11は杯B IVである。煮炊具は12が口縁部が直立気味の小型甕C、13・14は小型甕Dである。須恵器甕には美濃須衛窯産が1点含まれている。4期の土器様相である。

SB619 図版160

土師器(1・2)、黒色土器A(3~6)、須恵器(7)、軟質須恵器(8)、灰釉陶器(9)がある。煮炊具は土師器甕B(10)と小型甕D(11・12)による組み合わせで、甕Aは混入と思われる。13は灰釉陶器小瓶で底部回転糸切り、ハケ塗り施釉で口縁部を欠く他は完形である。8期の土器様相である。

SB620 図版160

図示できる遺物は少ない。食器には土師器杯Dと須恵器がある。1は美濃須衛窯産杯蓋B、2は高杯脚部。3は美濃須衛窯産の甕、4は短頸壺Dである。須恵器のなかで美濃須衛窯産の占める割合は、須恵器総個体数25個体中6個体である。2期の土器様相である。

SB621 図版160

須恵器(2・3)と黒色土器A(1)で食器は構成される。須恵器杯Aは回転糸切り未調整で底径の広い形態である。6期の土器様相である。

SB623 図版161

1は土師器の非ロクロ調整の杯で、不整形の形態で底部はへら削り、他はへら磨き調整する。2は小片であるが回転糸切り未調整の須恵器杯Aである。4は須恵器横瓶の口縁部、5は小型甕D、6は甕Aである。3期を前後する段階の土器である。

SB624 図版161

食器は非ロクロ調整の土師器杯(1・2)と、須恵器(3~12)で構成されている。1は口縁端部が内傾して面を作り、体部内面には放射状の暗文を施す。外面は横方向のへら磨きである。2は不整形な杯で指ナデ調整、底部には木葉痕が残る。須恵器杯Aは3が底部回転へら切り未調整、4・5が手持ちへら削り、6は回転へら削り、7は回転糸切りと多様な調整が用いられている。10の杯蓋Bは美濃須衛窯産、11・12は杯B VIで12は体部上半に沈線が引かれる。煮炊具は13が小型甕A、14は甕G、15は甕Fである。16・17は須恵器短頸壺Aである。3期を前後する段階の様相である。

SB625 図版161・162

図示した遺物の内、1～10はカマドの遺物、11～19はカマド以外の遺物である。1は土師器杯Eで外面は手持ちへら削り調整を施す。2は美濃須衛窯産の杯蓋B、5は杯BⅢで底部に「木」字状のへら描きがある。7・8は甕Bで口縁部の外傾が強い、9は小型甕Bで内面にもハケを施す。10は甕Cである。6は須恵器短頸壺Cで底部は静止糸切りである。11～13は須恵器杯Aで12は回転糸切り。14は鉢Bである。須恵器杯蓋B(15～19)のうち18・19は美濃須衛窯産である。3期を前後する段階の土器であろう。

SB626 図版162・163、PL86、第47表

1は土師器杯Dで、外面底部を手持ちへら削り後へら磨きする。内面は指ナデ。2は土師器碗Cで底部外面は手持ちへら削り、内面には横方向のハケが施される。4～9は須恵器杯Aですべて回転へら切り、4は美濃須衛窯産である。10～20は杯蓋Bで10～17は美濃須衛窯産である。11は天井部内面に「美濃国」刻印が押されている。上に「美」、右下に「濃」、左下に「国」を置く配置で『老洞古窯址群発掘調査報告書』ではA-II-5類に分類されているものである。21～26は杯Bで、21・24・25は杯BⅣ、22・23・26は杯BⅡである。27・28は須恵器鉢Bで美濃須衛窯産、29・30は須恵器碗Aで、29は底部に回転へら削りを施す。土師器甕類は32が小型甕A、31・33は小型甕B、34・35は甕A、36・37は甕Bで、38は甕Gである。40・41は須恵器甕Eで41は把手の付く美濃須衛窯産製品である。2期の土器様相である。

SB627 図版163・164

1は土師器碗Cで内外面をへら磨きする。須恵器杯A(2・3)のうち2は底部回転へら切り未調整、口径13cm・器高4cmで底面が広く体部の開きの弱い形態である。4・5は土師器甕A、6は小型甕B、7は甕B、8・9は甕Gで赤褐色の胎土は堅く焼き締まっている。10は美濃須衛窯産の甕Aで口縁部に2段の櫛描波状文を施す。2期の土器様相である。

SB628 図版164

1～3は須恵器杯Aで、1・2は底部切り離し後回転へら削りを施す。2は酸化炎焼成である。5の長頸壺は美濃須衛窯産の可能性が有る。2期の土器様相である。

SB629 図版164

1は須恵器杯BⅢ、3は胴部にハケ状工具の刺突による文様帯を持つ甕。4は短頸壺C、2は甕Eで体部にはタタキ調整が施される。2期の土器様相である。

SB633 図版165

煮炊具はナデ調整の甕A(3)、小型甕A(2)が主体である。食器は須恵器のみで杯B(1)を図示したが、小片である。1～2期の様相である。

SB634 図版165

食器					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
土師器	杯D or E	3	150	10%	1
	碗C	1	425		2
	杯C	1	3		
	高杯	2	95		3
須恵器	杯A	28	705	64	4～9
	杯BⅡ	3	73		22・23・26
	杯BⅣ	4	100		21・24・25
	杯BⅤ	1	10		
	杯蓋B	24	920		10～20
	碗A	2	85		29・30
	鉢B	2	20		27・28
	高杯	1	30		

煮炊具					
土師器	甕A	19	11965	45	34・35
	甕B	4	4000		36・37
	甕C	2	102		
	甕D	1	20		
	甕F	3	225		
	甕G	1	500		38
	小型甕A	1	120		32
	小型甕B	13	335		31・33
	甕A	1	5		
	不明		1000		

貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	2	16	19	39
	甕E	3	1610		40・41
	甕	12	1330		
	横瓶	2	730		

第47表 SB626出土土器の構成

1は土師器の手捏ねの小壺、2は須恵器杯A、3は外反の強い杯B IIである。4は土師器甕Fである。2期の土器様相である。

SB635 図版165

灰釉陶器碗(1)と、土師器甕Bがあるのみである。8期前後の土器であろう。

SB636 図版165

1は大形の杯Aで美濃須衛窯産である。2・3は須恵器杯Aで、3は底部回転糸切りである。5・6は土師器小型甕B、7は小型甕Aである。8はフラスコ形瓶であろう。2～3期の土器様相と思われる。

SB637 図版165・166、PL87、第48表

1は土師器杯Fで体部下半を手持ちへら削りし、口縁を強く外反させている。内面はへら磨きを行わずナデ調整のみである。2は底部回転へら切りの須恵器杯A。3・4は杯B IIで高台が底部の外側ぎりぎりに付けられている。3は体部・高台の外傾が著しい。5は土師器小型甕Bである。6は甕A、7は軟質の還元焰焼成の須恵器甌であろう、体部に2条の沈線を巡らしている。2期の土器様相である。

SB640 図版166、第148図

土師器杯Aは杯A II (1~12) と杯A III (13~16) の2法量に分化している。杯A IIの法量は口径10cm前後、器高2~2.5cmである。皿Aも17~20の皿A I と、21~23の皿A IIの大小が認められる。黒色土器A碗(25・26)は杯部が浅い形態である。

灰釉陶器は27の輪花碗は西坂1号窯段階、28は丸石2号窯式、29は大原10号窯段階である。30は白磁碗である。体部外面にへら削りとへら描きで蓮弁を削り出している。器壁は薄く胎土焼成はやや軟質、内面見込に沈線を巡らしている。北宋前期の中国製白磁である。14期の土器様相である。

イ 掘立柱建物址出土土器

掘立柱建物址は柱痕跡が検出できたものが非常に少なく、さらに柱痕跡より出土を確認できた土器はない。したがって土器は柱穴一括で資料提示を行なう。

ST 3 図版166

1は北列中央の柱穴より出土した。底部回転へら切りの須恵器杯Aで酸化焰焼成、褐色を呈する。ST3の柱穴からは他に、土師器甕A・甕B、須恵器底部回転糸切りの杯A・甕・壺が出土した。

ST11 図版166

1はP11より出土した、底部回転へら切りの須恵器杯Aである。他に土師器甕A・甕Bがある。

ST12 図版166

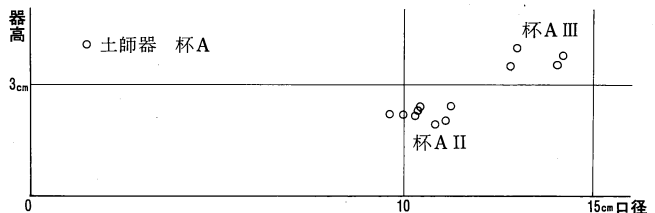
南端の柱穴より出土した、須恵器杯B V (12) を図示した。他に土師器甕A・甕B・甕Fがある。

ST16 図版166

1はP6より出土した、美濃須衛窯産の須恵器杯蓋Bである。口縁端部をくちばし状に屈曲させている。他に土師器甕B、須恵器鉢A・壺・美濃須衛窯産の甕がある。

食器					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
土師器	杯F	1	120	1 25%	4 1
	不明		2		
須恵器	杯A	1	90	3 29%	2 3・4
	杯B II	2	370		
	不明		5		
煮炊具					
土師器	甕 A	2	970	8 89%	9 64%
	甕 B	3	1752		
	甕 F	2	445		
	小型甕B	1	150		
	不明		35		
須恵器	甌	1	970	1 11%	7
貯蔵具					
須恵器	甕	1	20	1 7%	

第48表 SB637出土土器の構成



第148図 SB640出土土器法量分布図

ST25 図版167

1は土師器手捏ね土器、2は須恵器高杯である。他に土師器の甕小片がある。1・2ともにP1から出土した。

ST27 図版167

北列中央から出土した、須恵器回転へら切り杯A(1)を図示した。他に土師器甕Aがある。

ST34 図版166

1は北東隅の柱穴から出土した、須恵器杯B IIである。他に須恵器甕、土師器甕Aがある。

ST50 図版166

1は南列東より2番目の柱穴より出土した、須恵器杯蓋Aである。内面の返りは短く、蓋外周より出ない痕跡程度のものである。天井部の回転へら削りの範囲は比較的広い。他に土師器甕A・小型甕A、美濃須衛窯産甕・壺がある。

ST538 図版167

土器の出土は多く、すべての柱穴から土器の出土を見ている。図示した1はP3より出土した、口径21.2cmを測る土師器の皿である。非ロクロの調整で、内面の口縁部付近は横へら磨き、内面底部は縦方向のへら磨きである。他に土師器杯D・杯E・甕A・甕B、須恵器杯A・杯蓋B・長頸壺・甕がある。

ST539 図版167

1は内外面をへら磨きする土師器杯で、南列西端の柱穴から出土した。2は須恵器杯蓋Bで焼成は軟質。口縁端部は断面三角形に仕上げる。2は出土位置を失ったが、ST539の柱穴出土である。他に土師器甕B・甕F・須恵器杯がある。須恵器杯は高台の有無は不明である。

ST543 図版167

1は北西隅の柱穴より出土した、美濃須衛窯産の長頸壺Bと思われる。肩部に稜のあるもので、体部上半には自然釉が掛かる。他に土師器甕Aがある。

ST547 図版167

1は土師器杯、2・3は土師器杯Dで内面を黒色処理する。4・5は須恵器杯Aで、4は回転へら切り未調整、5は回転へら切り後底面を回転へら削りする。6は体部外面にカキ目を施すのもで須恵器椀Aか。7は美濃須衛窯産と思われる杯蓋Bである。他に土師器甕A・甕B・甕F・小型甕A、須恵器杯A・杯B・鉢A・壺・甕がある。1はP1・2はP3・3・4はP2・5・6はP5の出土である。

ST548 図版167

6点を図示した。1は土師器杯Dで、体部外面下半を手持ちへら削り、内面は横へら磨き後黒色処理する。2は口径11.5cmと小型の杯蓋B、3は口径15cmを測る杯蓋A、4は土師器高杯の体部、5は小型甕A、6は甕Aの底部で底面には木葉痕が残る。1・6はP3、2はP2、3はP1、4はP4・P11出土である。

ST549 図版167

南東隅の柱穴より、1の土師器高杯と2の小型甕Aが出土した。他に遺物はない。

ST550 図版167

1は須恵器甕C、2は須恵器長頸壺Aである。2は緻密な胎土で外面には自然釉が掛かり東海地方よりの搬入品であろう。2は南列中央の柱穴より出土した。他に土師器甕A・甕B、須恵器甕がある。重複するSB549と接合する遺物が多い。

ST551 図版167

1の土師器甕Fと2の甕Gを図示した。1は南西隅の柱穴から、2は南東隅の柱穴から出土した。他に須恵器杯A・美濃須衛窯産の甕、土師器甕A・甕Bがある。

ST552 図版167

須恵器杯A(1)、土師器小型甕B(2)を図示した。1・2ともに西列南から2番目の柱穴から出土した。他に土師器杯D・甕A・甕B・甕F・小型甕A・鉢、須恵器甕がある。

ST553 図版167

須恵器杯A(1)を図示した。底部回転ヘラ切りである。東列北より2番目の柱穴から出土した。他に須恵器甕、土師器甕Aがある。

ST566 図版167

1は底面にヘラ記号がある須恵器杯Aである。底面は回転ヘラ切り後回転ヘラ削りを施す。他に土師器甕A・甕B・甕F、須恵器甕がある。

ST572 図版167

1は土師器杯で内外面をヘラ磨きする。他に土師器甕小片がある。

ST576 図版167

1はP3出土の土師器皿である。非ロクロ調整で、内外面を指ナデする。他に土師器甕B・甕F・鉢、美濃須衛窯産長頸壺がある。

ウ 溝址出土土器

SD18 図版168

中世1期の溝址出土の古代遺物である。灰釉陶器を2点図示した。椀と皿で、虎溪山1号窯式にあたる。

SD27 図版168

食器・煮炊具・貯蔵具の三者がある。食器は土師器と須恵器があり、土師器は高杯(1~4)のみ、須恵器は、杯蓋D(5)・杯蓋A(6)、杯A(7・8)は回転ヘラ切りのみ、杯蓋B(9)は美濃須衛窯産、杯BIV(10・11)、高杯(12)がある。煮炊具は土師器甕A・甕B・甕F(13)・小型甕Aがある。量的には土師器甕Aが最も多い。1~2期の土器様相である。

SD521 図版168

遺物は小片のみである。食器は土師器杯D、高杯、底部回転ヘラ切りの須恵器杯A(1)がある。煮炊具は土師器甕A・甕B。貯蔵具では須恵器長頸壺A(2)、甕体部破片がある。

エ 土坑出土土器

SK176 図版168、第49表

墓址出土の一括土器群である。2を除いて完形である。1は体部が直線的に開く土師器椀、2は黒色土器A小椀である。灰釉陶器は小椀(3)・椀(4)・段皿(5~8)があるが、いずれも底面に糸切り痕を残し、丸石2号窯式である。9は黒色土器Bの長頸壺で、底部回転ヘラ削り後幅広の高台を貼付する。体部には粘土紐積み上げの跡が残る。外面は縦方向のヘラ磨き、内面口縁内面は横方向のヘラ磨きを施している。硬質で瓦質に近く焼きあげている。13期の土器様相である。

食器							
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.		
土師器	椀	1	275	} 2	1		
黒色土器A	小椀	1	25			} 18%	2
須恵器	杯B	1	3	} 3	11		
	鉢A	1	7			} 27%	79%
	不明	1	7				
灰釉陶器	椀	1	200	} 6	4		
	小椀	1	120			} 55%	5~8
	段皿	4	365				
煮炊具							
土師器	甕B	1	50	} 1			
	不明		8			} 7%	
貯蔵具							
黒色土器B	長頸壺	1	1300	} 1/50%	2		
須恵器	甕	1	70			} 1/50%	14%

第49表 SK176出土土器の構成

SK193 図版168

墓址出土の土器群で、すべて完形で出土した。1は土師器杯A III、口径13.8cm・器高4.3cmを測る。2～4は灰釉陶器段皿で、底面に糸切り痕を残す。丸石2号窯式である。

SK514 図版168

墓址出土の土器である。出土した土師器4点すべてを図示した。1・2は土師器杯A IIで口径9.7～10cm・器高2～2.2cmを測る。3は体部の張る椀で、4は盤B Iである。14期の土器群である。

SK1069 図版169、第50表

墓址出土の一括土器群である。黒色土器B小椀(1)、黒色土器B椀(2～5)、灰釉陶器椀(7～9)、段皿(10～13)があり、すべて図示できた。黒色土器B椀内面の縦へう磨きは省略され放射状の暗文風である。

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No
黒色土器A	椀	5	720	} 46%	} 13
	小椀	1	60		
灰釉陶器	椀	3	775	} 54%	} 10%
	段皿	4	470		

第50表 SK1069出土土器の構成

灰釉陶器は丸石2号窯式、10は灯火器として使用されている。13期の土器群である。

SK339 図版169

1の横瓶が出土したのみで、他の遺物はない。体部外面には平行タタキ目後カキ目、内面には当て具痕が残る。検出の過程で胴部半分を欠いたが、完形で残存していたものと思われる。

SK349 図版169

土師器杯A II (1)と灰釉陶器椀(2)を図示した。1は口径 cm・器高 cmを測る。2は腰が強く張り口縁部が直立気味に立つ椀で、施釉は漬掛け、底面は切り離し痕がナデ消されている。羽釜の破片がある。須恵器もあるが混入品であろう。

SK11 図版169

黒色土器A小椀(1・2)、土師器盤B II (3・4)、土師器杯A III (5・6)を図示した。14期前後の土器様相である。

SK114 図版169

土師器杯A II (1)・鉢(3)、灰釉陶器椀(2)を図示した。1は口径9.5cm・器高2.3cmを測る。2は丸石2号窯式。14期の土器様相である。

SK348 図版169

須恵器の食器と貯蔵具、土師器甕Cがあり5期の竪穴住居址の土器構成に類似している。1～3は回転糸切りの須恵器杯A、杯BはIV(4～6)とIII(7)がある。須恵器貯蔵具には長頸壺、甕D、甕、平瓶がある。

SK350 図版170

土師器杯A III (1)・盤B I (2)、黒色土器A小椀(3)、灰釉陶器椀(4)、羽釜A (5)を図示した。他に土師器甕B・須恵器甕の破片があるが混入であろう。13期前後の期の土器様相である。

SK548 図版170

1期～6期の遺物が混在している。1は土師器杯Cで器表は荒れ調整は観察できない。2は黒色土器A杯A I、3～6は須恵器杯Aで底部回転糸切り未調整。3～5は体部の外傾が弱く、6は底径が小さく体部の開きが強い形態である。7・8は回転へう切りの杯Aで7は復元口径で10cm前後の小形である。9は須恵器杯蓋Bでつまみは大形で扁平である。10は須恵器甕Cである。

SK522 図版170

1は非クロク調整の土師器で内面には指頭痕が残る。2は須恵器杯蓋Aで天井の回転へう削りの範囲は広いが、内面の返りは短い。3は高台付の甗で、肩部は稜をなし、最大径部に注口が貼付され突出する。

このほかに、土師器杯E・土師器甕Aがあり1～2期の土器様相である。

SK1071 図版170

1の灰釉陶器折縁皿と2の広口瓶がある。1は底面を回転へら削りし、漬掛けで施釉する。2は体部外面の回転へら削りが体部上半まで及び、釉をハケ塗りしている。虎溪山1号窯式である。11期を前後する段階の遺物である。

オ 自然流路出土土器

NR4 図版170、PL87

単一の時期の土器でなく何時期かにわたる遺物が検出された。食器は土師器杯D・杯A II・耳皿、黒色土器A杯A I (3)・杯A II (1・2)、須恵器杯A (4・5) (底部回転へら切り2個体・回転糸切り9個体)・杯B III・杯B IV・脚台付杯B V (6)・杯蓋B・鉢A・高杯、煮炊具は土師器甕A・甕B・小型甕A・小型甕B、貯蔵具は須恵器長頸壺・甕・甕Dがある。総じて2～6期までの遺物であり、5～6期の土器が多いと考えられる。

(3) その他の土器

中世溝

SD524 図版171

中世2期に開削された溝、SD524から出土した古代各期の土器である。1は土師器杯A II、2・3は黒色土器A杯A IIと椀、4は須恵器杯A、5は杯蓋B、6は須恵器皿B、7は須恵器甕、8は羽釜Aである。重複する古代の竪穴住居址からの混入遺物である。

南部A・B区遺構外出土土器 図版171・172

1～14は土師器、15は黒色土器A、16～26は須恵器、27・28は緑釉陶器、29～37は灰釉陶器、38は古墳時代の土師器壺である。27は灰白色軟質の胎土に濃緑色の釉を掛ける段皿である。28は濃淡のある緑色の釉を全面に掛ける椀で、底面と内面にトチンの目跡が残る。胎土は灰白色で堅い。

南部C区遺構外出土土器 図版172

1・2は灰釉陶器、3は土師器小型甕Dである。

北部D区遺構外出土土器 図版172

1～3は土師器、4～11は須恵器、12～14は灰釉陶器である。5は美濃須衛窯産の杯蓋Bで、内面中央のつまみの直下に「美濃国」が凸印で刻印されている。文字の配列は、SB626の杯蓋B同様「美」を頂点に置いた三角形の位置に時計回りに美濃国と配列するのでも、老洞古窯址群の報告書ではA-II類-5に形式分類されている。14は灰釉陶器の鉢で、口径28cmを測る。口縁端部をへらで押え面を作る。灰白色の緻密な胎土で、内面に自然降灰の釉が掛かる。外面は無釉である。

北部E区遺構外出土土器 図版172

1・2は土師器、3～6は灰釉陶器、7は白磁碗V類である。8は須恵器質の円盤で、須恵器壺の底部状のものを最加工し中央に穿孔している。下面には擦痕が観察できる。

2 文字関係資料

本遺跡出土の文字関係資料には墨書土器、刻書土器、円面硯、転用硯がある。

(1) 墨書土器 第149図、図版173～177、PL90

総数53
点を数える。遺構別の出土数内訳は
竪穴住居
址47点、
溝址3点、
遺構外3
点である。

	体部正位	体部逆位	体部右側	体部左側	体部不明	底 部	内・外	計	種類別合計
土 師 器 杯	1		2	1		1		5	5
黒色土器A 杯	2	5	2	3	9	2		23	36
〃 椀	1				2	5		8	
〃 杯か椀			2		3			5	
須 恵 器 杯	1		1		1	6		9	10
〃 蓋							1	1	
軟質須恵器 杯					1			1	1
灰 釉 陶 器 椀						1		1	1
計	5	5	7	4	16	15	1	53	53

第51表 墨書土器種類別構成一覧表

各個体については付表5に示したので、ここでは総括的記述にとどめる。まず、種類別内訳をみる(第51表)。黒色土器Aが36点、須恵器10点、土師器5点、灰釉陶器・軟質須恵器各1点で、黒色土器Aの出土個体数は総数の68%を占め、飛び抜けて多い。器種をみると、杯に墨書される例が34点と圧倒的に多く、椀の9点がこれに次ぐ。種類別の傾向を掲げると、黒色土器Aの場合、杯か椀かその判断が難しいものがあるが、全体的に杯Aに多い。また、軟質須恵器、須恵器、土師器は、須恵器の蓋の1点を除き、いずれも杯に墨書される。墨書された食器の種類や器種は時期別の器種構成比を反映し、特定の器種を選択して墨書するような特徴は明確に見出せない。だが、軟質須恵器の量が少ないことは注目できよう。

次に、第51表を参考にどの部位に墨書されるのかをみってみる。部位は、文字がだれの目にも止まるように記される体部と、正位に置かれた場合見ることができない底部の二種類があり、本遺跡では体部36点、須恵器蓋の内側に墨書された1例を含めて、底部に記された土器が17点ある。出土個体数の多い黒色土器Aの杯の場合は体部に、椀の場合は底部に墨書土器される傾向が認められるほか、須恵器杯の内、杯Bはいずれも底面に墨書されていた。

字句についてみてみよう。『浄濱』(6~9)は4点が出土した。器種は杯BIV 3点、土師器杯E 1点に分かれ、いずれも底部に墨書される。底部を選択して墨書するのは手擦れによる消滅を防ぐためであろう。書かれる位置は不揃いで、筆跡も同じものがみられないことからそれぞれ別な書き手によって記されたと判断できる。8の字句は6や7をみながら模写したようにも受け取れ、漢字を理解し、文字に精通した書き手でないと想定される。なお『浄濱』は人名と考えてよいと思われるが、「浄」という字句は仏教に関する事物に冠して使用されることから仏教信仰との関連性も考えられよう。

『𠄎』と読み取れた字句はSB501(11)・507(12・13)・509(16・24)から出土した6点がある。このほかSB509から出土した22も『月』とも読み取れるが、『𠄎』になる可能性も十分考えられる。『𠄎』はどのような漢字を意図して記されたかは不明であるが、書き順や文字の大きさが異なるため、複数の書き手の存在を予想させる。12・13は黒色土器A杯体部に墨書され、両者とも逆位に記し、字体が一致することから同一人物による墨書であろう。11・16・53は12・13と比して形状が崩れ、全く別な字句のようにも見受けられるが、これは文字に書き慣れていない書き手が模写したためだろう。『𠄎』が墨書される食器は黒色土器Aが大半を占め、体部逆位や底部に書く例が多いなかで、24のみ土器を正位に置いた時、器の左側に文字の上がる左横位で墨書されている。

本遺跡で最も多く出土した字句は『𠄎』である。『𠄎』と読み取れた個体数は、鏡像に写したような『𠄎』を含めて計10点があり、SB555からは7点が出土した。器種の内訳は土師器杯3点、黒色土器A杯または椀が7点で黒色土器Aが目立つ。部位は大半が体部に書かれるが、正位に墨書された28を除いた墨書は右・左横位で、墨書する際の規制を認めてよいだろう。『𠄎』と同様、文字の大きさや、2画目以下の「𠄎」の



第149図 墨書土器字句集成図(1:2)

書き方に個性がみられ、筆先の揃わない29などの例があることから何人かの書き手の存在が想定される。

以上の3つの字句を除くと、ほかの墨書土器は1,2点で散発的である。このなかで2点の出土をみた『水』(42・43)はSB564から出土したもので、須恵器杯体部と黒色土器Aの体部に右横位で記される。「方」を意図して書かれたものか。25は『義』または『美』であろう。SB598出土の『真菌』(47)は黒色土器A杯A Iの体部に大きく墨書された資料で、人名と解釈したい。SB583の45は『万』と推定される。『万』という墨書土器は45が出土した地点から西へ約200mに寄った地点の住宅地内の採集資料に類例がある(註1)。NR4から出土した48は『嬰』であろう。類例が隣接する北栗遺跡でも確認されており、かなり距離を置いて出土した状況は注目できる。

註1……吉江幸子氏より資料の提供を得た

(2) 刻書土器 図版・PL90

ここで言う刻書土器とは土器焼成後に先端の尖った工具を使用して文字などを線刻したものを指し、土器焼成前に篋書きされた、いわゆる「へら記号」とは区別する。

本遺跡出土の刻書土器はSB576から出土した1点だけである。黒色土器Aの杯または椀の体部逆位で刻

まれる。線刻は比較的鮮明で、幅2～3mm、溝はV字形の断面形になり、先端の鋭い釘状の工具を使用したと考えられる。『拳』を意識して線刻したようにも見られるが明らかでない。

(3) 陶硯 図版175

陶硯は円面硯の5点がある。竪穴住居址からはSB80(55)・86(56)・100の3点があるほか、遺構外の南部NR1付近から2点(58・59)が出土した。

55は硯面部の小片で、内堤をもたず、海部は5mm弱ほど凹む。陸は磨滅が鮮明で光沢があり、細い直線状の擦痕が観察される。厚みは約10mm程である。56は脚台部に当たる部分でやはり小片である。厚みは8mmで、外・内面ともロクロナデ痕跡が残る。線刻は断面形がV字形になり、先端の尖った工具を使用している。図化できなかった57は脚台部の窓と窓の間に相当する小片である。透しをもつ円面硯はこの57だけである。内面に降灰を被り、ロクロナデ整形が認められる。窓になる面は丁寧にくり抜かれ、磨滅しているかのようである。なお、厚みは12mm程である。58は脚台部の底面にかけてが遺存した破片である。厚みは10mm程で、内面にはロクロナデ痕跡が認められる。外面と内面の底面に近い箇所に降灰の痕跡がある。硯面は130～150mm程の大きな硯に復元されようか。線刻は脚台部中央付近で約10mmの一定の幅で刻まれ、2mm程のV字形の断面形である。59は脚台部の底面付近の細片である。内・外面ともロクロナデが観察され、底面から内側にかけて降灰を被る。厚みは接地面が13mmを測る。線刻は58よりもわずかに狭く、均一でない。復元された大きさは58とほぼ変わらないだろう。

(4) 転用硯 図版175～177

ここで言う転用硯とは土器や陶器がもつ本来の属性を失い、硯として転用されたものを指す。分類や定義については「総論」で述べるが、筆揃えや墨溜めとして使用したものは厳密に硯と区別できないため広義の転用硯として扱うこととした。また、朱を付着するものについても朱墨硯との区別が困難であるためこれに加えた。(図の網部は墨や朱を付着を、一点鎖線は磨滅範囲を示す。)

本遺跡出土の転用硯は総数21点を数える。

器の種類は須恵器が4点あるほかは、いずれも灰釉陶器を転用している。須恵器を転用した63・71・72・80のうち、63・80は甕の胴部を打ち欠いて整形し、内面を硯として使用しているが、わずかに墨痕跡が残る。72は蓋内面を転用するが、その中心はかなり磨滅し、周囲には墨が散る。71は蓋内面に朱が付着するが、朱墨硯としてよいかは微妙である。

灰釉陶器を転用する17点の器種の内訳は椀10点、皿B 7点である。このうち、朱が付着し、朱墨硯あるいはその可能性がある資料は60・65・66・70・79があり、SB145の65は朱が内面に、墨痕が内・外面に観察された数少ない資料である。これらを除くと、墨痕が観察されるもの、あるいは磨滅痕跡が鮮明であるといった根拠から転用硯としたものである。転用する部位は内面と外面の二種類があるが、それぞれ7点、6点で相半ばする。65は部分的に墨痕が残る。SB183出土の68は内・外面の灰釉ののらない範囲に墨が明瞭に観察される。72は内面を硯面とするが底部中央を中心に磨滅痕跡があり、光沢がある。75・76はともに底部外面を転用し、墨痕が鮮明である。

灰釉陶器の椀を転用する資料のなかには69・74～77のように硯面が内・外面に係わらず、体部を打ち欠き、座りよく整形した痕跡が認められるものがある。整形が行われた背景として硯に転用する器は破損などのために食器としての本来の機能を失っていたことが予想される。なぜなら、口縁部が残存していれば、座りよく整形する必要はないが、74～76のような例が確実に認められることは一部分が破損し、安定して使用できないために整形したためと考えられるからである。整形は椀だけに行われるのも重要である。椀

の内面を転用する場合も体部が遺存していると墨を擦るのに不都合であり、どうしても体部を打ち欠く必要があったと推定されよう。

3 金属製品

(1) 鉄製品・鉄滓 図版178～181、PL91・92

古代の遺構から出土した鉄製品は総数300点を数え、鉄滓は14.092kgにのぼる。鉄製品は機能・用途が明らかなものと、器種分類にまで至らず棒状・板状・環状など形状によって分類したもの、分類不能のものなどがある。前者では、鋤・鋤先3点、鎌23点、刀子88点、斧2点、鑿1点、鉋2点、釘10点、鋏1点、金具11点、苧引鉄2点、紡錘車17点、容器1点、鉄鏃20点がある。また、形状で分類したものでは棒状のもの79点、板状のもの21点、環状のもの3点、管状のもの2点、塊状のもの5点、鉄片4点、そのほかに分類不能な鉄製品6点がある。鉄製品の出土状況と分布、時期によるそれらの変化については、第4章第2節で触れるので、ここでは器種ごとに形態等について図示したものを中心に述べる。

鋤・鋤先 1～3を図示した。1は1期のSB547、3は15期のSB170の出土である。2は包含層I C層出土の破片である。1は完形で現重量545gを計る。刃部から耳部は開くことなくほぼ平行にのびるU字形の形態で、刃先の形状も使用による磨り減りが少ないためか幅広くU字形を呈する。袋部はあまり深くなく、刃部から耳部までほぼ一様に1.5cmの深さの木柄の受部が付けられ断面はY字形となる。2は耳部から刃部にかけての破片で刃部の幅にくらべて袋部の幅の広い断面形態である。3も耳部から刃部にかけての破片で刃部の幅は狭い。

鎌 4～17を図示した。4～6は先端部を欠く基部に近い身部の破片である。いずれも着柄角(柄と身背部縁とがなす角)はほぼ直角と考えられ、着柄部の折り返しが左側で立ち上がる形態が共通している。5では身部の幅が基部に近い部分でやや広くなっているが、4・6ではほぼ同じ幅となる。7～17は柄に対して身部が斜めに着柄されるもので、着柄角は45°未満である。7は基部が幅広く刃部にむかって次第に幅が狭くなるもので、刃部先端で屈曲気味に折れ曲がっている。8は身部の破片で幅3.7cmを測る。9～17は11を除いて基部が狭く刃部で幅広となりやや屈曲気味に刃を付けて、先端を尖らせる形態である。なかでも9・10・11・15・16は残存状態がよく、折り返し部も残存しているため形態の全容を知ることができる。着柄角は9が41°、10が33°、11が23°、15が20°、16が14°となる。刃の範囲についてはどの部分まで刃が付けられていたのか錆化のため不明であるが、9・10・12・13では刃部先端が尖り気味で内側に柄とほぼ直角になるように刃部を付けていたものと考えられる。15もそれに近い形態である16・17は刃部の屈曲がほとんど見られない。

次に図示した鎌の所属時期を見ると、4・5が1期、7が2期、7が7期、8が8期、9は12期、10が13期、11～16が14期、17が15期の竪穴住居址から出土している。時期ごとに形態を比較すれば、1～2期のものは基部と刃部の幅がほぼ同じで、着柄角は90°前後、柄にほぼ直角に付けられている。7期以降の鎌は柄に対して身部が斜めに装着されるようになり、9・10・15・16・17に見られるように着柄される身の角度は時期を追う毎に次第に小さくなっていくことが分かる。また、14期に属する11～16で見ると、同一の時期のなかに12・13などの大型のもの、14・15の中型のもの、16の小型のものなど、大きさによっていくつかに分けられそうである。鎌の大きさの違いは、鎌を使用する対象物の違いとも考えられ、それぞれの機能を考えるうえで興味深い。

刀子 刀子は、88点と出土した鉄製品のなかで最も多く、1期から15期までほぼすべての時期を通して出土している。そのうち18～53の36点を図示した。

18は1期の遺構から出土した図示できるものとしてはた唯一のもので、錆化が著しく原形は明瞭でない

が、X線によって低い棟関が観察できた。19～22は2期の竪穴住居址から出土した。20が棟関のみの片関のほかは両関である。19・20・22は刃部が基部から内湾する。23は細身の両関で3期の竪穴住居址から出土した。24・25は5期の竪穴住居址から出土した。25は基部が先まで残っており5.8cmを測る。24の刃関は明瞭でない。26は7期の竪穴住居址から出土した。基部の大部分を欠くが棟関から切先まで身部は8.7cmを測る。27は8期の竪穴住居址から出土したが、銹のため身部・基部とも形状は明らかでない。28・29はともに9期の竪穴住居址出土で両関を有し、刃部が内湾する形態である。29の基部はわずかに反りを持ち7cmを測る。30は10期の竪穴住居址から出土したもので茎の長さ10.5cm、両関で刃部は内湾している。31～33・53は11期の竪穴住居址から出土し、32と33は同一の遺構である。33は基部を欠くが身部の長さ11.3cmを測る。32は銹のため形状は明らかでない。53は全長31.9cmを測るもので、平造り・両関・角棟、基部は長さ8.5cmで関部から4.4cmの位置に直径6mmの目釘孔がX線で観察された。本遺跡出土品中最も大型である。34・35は12期の竪穴住居址から出土した。いずれも両関で、35は刃部の幅・基部の長さに対して身部の短い形態である。36～38は13期の竪穴住居址から出土した。36は6cmと基部の長いもので、棟関のみの片関となり、刃部は内湾している。SB168で同一遺構出土の37・38では、38が細身なのに比べ37はやや幅広で大形である。14期の竪穴住居址出土の資料は39～48・51と11点が図示できた。このうち39・40がSB1、41～43・50がSB2で同一遺構の出土である。この時期のものは、全長が15cm前後かあるいは15cmを越えると思われるものがほとんどで、SB2では全長30cm前後になると思われる50、それよりやや小形の43、さらに小さい41・42などのいくつかの大きさに分けられそうである。形態は平造り・両関・角棟のものがほとんどで、39・40・43・45は刃部が内湾している。49は長方形の板状の鉄板であるが、X線により片方の端に目釘孔状の部分が観察されたので、大型品の基部と考えた。49・52は15期の同一の竪穴住居址から出土した。49は平造り・両関・角棟で、関から4.5cmの位置に直径2.5mmの目釘孔が観察できた。52は茎先が尖る53と類似する形態であるが、目釘孔はX線でも観察できなかった。

紡錘車 紡錘車17点の出土は本遺跡では、刀子、鎌に次いで多い量を占める。時期的には1期(54)・2期(55)・7期(56)・8期(57)・9期・12期に各1点、13期3点、14期6点(58～62)、15期2点(63・64)である。他に棒状製品として扱ったなかに紡錘車の軸も含まれている可能性もあるが、糸繰り部のカギ状の曲がりの確認できず、紡錘車の軸と確認できた棒状製品はなかった。54～64の11点を図示した。

54は紡輪の直径は5cmで、厚さは中心部で1.2cmを測る。55は紡輪の直径5.7cm、54と同様紡輪が厚めで8mmある。56は紡輪の直径4.9cmで5mmと薄い。57は軸の残りが最もよいもので、全長21.7cmを測る。紡輪は直径5.4cm、厚さは1.2cmである。58・59は軸を全く欠き、紡輪のみとなっている。紡輪の直径は58で4.5cm、59で4.4cm、厚さはいずれも4mmと薄い。これらは二つともSB44から出土した。60～62も軸を欠き紡輪のみであるが、紡輪の直径が大きく60で5.6cm、61は6.4cm、62は6.7cmである。厚さは5～6mmの間である。63・64は15期の同一遺構SB136の出土で、63は紡輪の直径4.8cm・厚さ2.5mm、64は5.3cm厚さ3mmである。紡輪の一部を欠くもの、軸が付くものなど条件に違いがあるため紡輪のみの重量は提示しなかった。また、形態も銹化の進行によって原形を保っているとは言い難いが、紡輪の形態から次の指摘ができそうである。1～8期のものは直径5～5.5cm前後で厚め、14期以降では全体に薄く、直径は4.5cm前後、5.5cm前後、6.5cm前後に分けられそうで、いずれも薄く仕上げられている。これらの傾向が何を示しているのか。撚る繊維の種類による違いなのか、繊維の太さの違いなのか、また撚りの段階によって使い分けがされていたのか、ここでは傾向を示すにとどめたい。

斧 斧は2点ある。65が4期に、66は8期に属する竪穴住居址から出土した。両者ともに袋部を有するものである。65が袋部から刃部まで幅を変えることなく、長方形の平面形を示すのにくらべ、66は袋部幅が2.4cm、刃部幅が3.5cmと刃部で開く形態となっている。いずれも小形で重量は65が80g、66は36gであ

る。

苧引鉄 苧引鉄は2点出土した。SB2（14期）とSB598（7期）出土の2点であるが、図示できたのは67の1点のみである。67は着柄用の三角形の足を持つもので、刃部断面は蒲鉾状に膨らみをもち、片刃をつけている。

鉄 68は13期の竪穴住居址から出土した。元支点となる和鉄である。刃長5.7cmを測る。

鑿 鑿は69 1点のみの出土である。袋状の着柄部をもつもので、全長16.2cmを測る。錆のため刃部形態の詳細は知れないが、先端近くで反りを持っている。

鉋状製品 70は幅の狭い板状製品で、両端を欠くため器種は不明であるが、中央から弓状に強い反りを待っている。

鎌 71～86の16点を図示した。71は細根片刃式の長茎鎌である。刃部は小さく腸袂は観察されない。1期の竪穴住居址から出土した。72・73は平面形が五角形に近い平根式の鎌で、断面は凸レンズ状の両丸造り、72には腸袂が二段に入る。72は篋被が長く、73は太く短い。74・75は長茎式の鎌の篋被から茎部の破片であるが、身部の形態は明らかではない。76～86は形態的に類似する鎌である。心身部は細長い三角形状で3分の1程のところ強くえぐれ込み、撥状の関に至る。身部は両丸造りかあるいは鑄造りで、76・80・81・84・86は先端から鑄が観察できる。80は完形で残存しており、先端から関までの身部長8.8cm・茎長6.8cmである。85・86は身部の幅に対して、鎌長の短い形状である。いずれも撥形の基部は断面長方形、茎部の断面は正方形を呈している。

時期的には、71・72が1期、74は2期、73が4期、75が5期、76・77が8期の同一遺構、78は10期、79は11期、80は13期、81～84は14期、85・86は15期で長茎式の細根鎌、平根族は1～5期までで見られなくなり、変わって8期以降長三角形の鎌が古代末まで主体となっている。

釘 釘は5本を図示した。いずれも断面方形の角釘で、頭部を叩き延ばし折り曲げた鋳頭形である。現長で87が8.3cm、88は8.5cm、89は途中で折れ5.2cm、90は弧を描いて曲がるが7.8cm、91は頭部が延びているが5.4cmを測る。88が2期、89が9期のほかは、14期の竪穴住居址から出土した。

刀装具 92・93は、13期の同一竪穴住居址から出土した刀装の足金具である。同一の太刀に使用されたものであろう、92が高さ5.2cm・幅1.8cm、93は高さ5.8cm・幅1.8cmである。94も刀装の責金具である。断面楕円形の鉄棒を環状に曲げ端部は撚るように捻り合せている。12期の遺構から出土した。95も形状が94の責金具に類似している。1期の遺構から出土した。

環状鉄製品 96～98は環状鉄製品として一括したものである。96は製品の直径の割合に比し断面の大きなものである。97は断面方形で、全体の形状も隅丸の長方形に近い。合せ目はX線投影でも観察できなかった。98は一部を欠くが断面方形の環状製品で外径5.8cmを測る。

棒状鉄製品 99～106は棒状製品として一括したものである。99～101は角釘の可能性が高い。102はピンセット型の製品で、和鉄の元（支点）の部分か。103は厚さ4mm・幅1cm板状の鉄棒を「L」字に曲げたものである。104は9期の竪穴住居址で検出したもので、断面方形の鉄棒3本が錆付いた状態で出土した。「コ」字状のもの2点、「L」字状のもの1点である。先端部が欠けている可能性があり、これが製品なのか、あるいは未製品の状態なのか不明である。105は断面方形のまっすぐな鉄棒である。紡錘車の軸の可能性もある。106はやや太めの鉄棒で、錆化が進んでおり細かい部分の構造は不明であるが、本体の断面は円形ないしは楕円形を呈する。中央に鉄棒と直角の方向に断面正方形の本体とは別の部分が伸びていたことがその破損した部分から観察でき、この部分は本体の中央にほぞ状にはめ込んで接合されているらしい。用途不明の鉄製品である。

板状鉄製品 107～109は不定形の板状鉄製品で用途不明。109には板を貫くように鉄片が付いている。

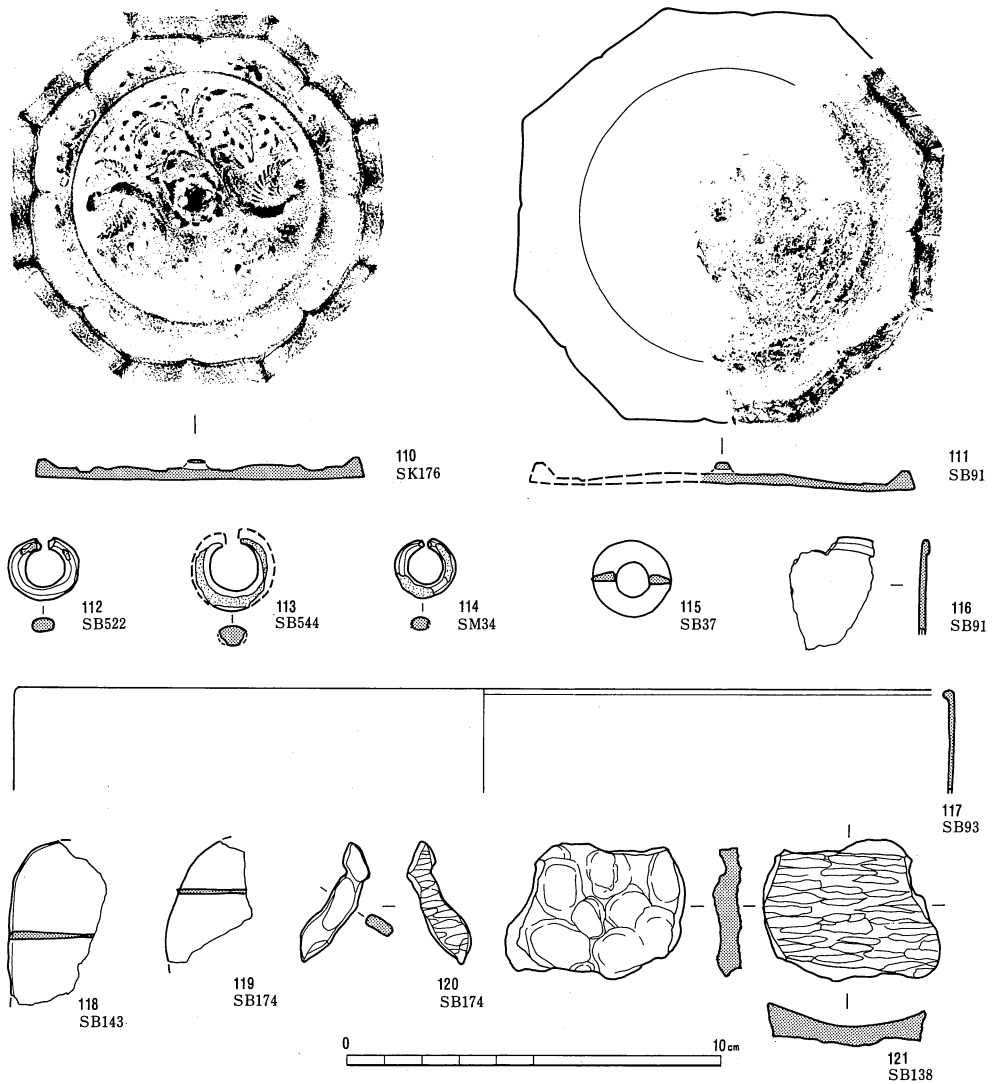
鉄滓 古代の遺構から出土した鉄滓は143個、14.092kgを計る。大きさはほぼ小豆大から鶏卵大、拳大、小児頭大に分けられる。また、比重のかなり高い鉄分の多いものから、炭化物や粘土・砂利などをとり込んで比重の軽いもの、部分的にガラス質の溶着があるものなど多様である。鉄滓の出土遺構は付表に一覧したが、重量で400g以上の出土があった遺構は次のとおりである。SB68・1点(2期)、SB86・5点(5期)、SB96・1点(13期)、SB151・2点(11期)、SB175・5点(4期)、SB184・1点(4期)、SB213・3点(14期)、SB221・2点(14期)、SB501・(8期)、BS509・6点(8期)、SB537・5点(11期)。またSB15・68・96・175・184・501・537からは大型の小児頭大の鉄滓が出土している。この小児頭大のものは、上面が平らで下部が椀状を呈し、比重の比較的重いものが多い。このなかでSB175・537などでは他に拳大・鶏卵大などの中・小形の鉄滓も伴っており鍛冶遺構との関連を予想させる。

(2) 銅製品・銅滓 第150図、PL93

古代の遺構から出土した銅製品は10点、銅滓は3点の合計13点がある。銅製品は青銅鏡2面、金環3点、銅椀2点、環状銅製品1点、板状銅製品2点である。銅滓のうち炭化物等を多量に含む資料1点を除いてすべてを図示した。以下に器種別に記述する。

青銅鏡 2面ともに八稜鏡である。110は瑞花双鳳八稜鏡で、13期の墓であるSK176から出土した。土坑墓の中央付近から両面に木片が付着した状態で出土したことから、木箱に納めたうえで遺体のうえに置かれていたものと思われる。残存状態は非常に良好である。直径9.6cm、界圏径6.5cm、縁高は平均で4.9mm、鈕高3mm、表面の凸反は5mmで、重量は114gを測る。縁は断面台形を呈する蒲鉾式膨側高縁、界圏は外区から内区へ1段低くし鏡体の厚さを変え段によって2区に分かつもので、段の端部はやや突起気味となる。裏面の文様は上下に瑞花、左右に双鳳を配し、外区には飛雲と草花を飾るらしいが、

110は瑞花双鳳八稜鏡で、13期の墓であるSK176から出土した。土坑墓の中央付近から両面に木片が付着した状態で出土したことから、木箱に納めたうえで遺体のうえに置かれていたものと思われる。残存状態は非常に良好である。直径9.6cm、界圏径6.5cm、縁高は平均で4.9mm、鈕高3mm、表面の凸反は5mmで、重量は114gを測る。縁は断面台形を呈する蒲鉾式膨側高縁、界圏は外区から内区へ1段低くし鏡体の厚さを変え段によって2区に分かつもので、段の端部はやや突起気味となる。裏面の文様は上下に瑞花、左右に双鳳を配し、外区には飛雲と草花を飾るらしいが、



第150図 古代銅製品実測図

文様は全体に不鮮明で特に下半ではそれが顕著で、花文はその状態をほとんど見出すことができない。また外区文様も不明である。鈕は花形座鈕に分銅型の鈕が載る。

111は11期の堅穴住居址SB91の西壁際中央付近で置かれたような状態で出土した。直径11.2cmの八稜鏡であるが、被熱のため変形が著しく、鈕を残し6割を欠く。縁は蒲鉾式膨側高縁で縁高4.9mm、外区と内区を段で区別するいわゆる段圏で110と同様である。文様は内区・外区ともに表面が荒れており観察できない。鈕座文様も不明であるが饅頭形の素鈕が付く。

金環 112・113・114はそれぞれ1期のSB522、2期のSB544、1ないし2期のSM34から出土した。いずれも断面楕円形の内容の充実した青銅環に金鍍金を施したものである。113は破損が著しいが、112は直径1.8cm、114は直径1.6cmである。

銅鏡 2点ある。116は11期のSB91から出土した。小片のため口径は復元できないが、体部の厚さ1.5mm、口縁は玉縁状に小さく納めている。117は14期のSB93から出土した。口径25cmに復元できるが器体に歪みが大きく、これより尚小口径である可能性が高い。体部は直立し、厚さ1mm、口縁端部は上部に面をもって内側に付き出すように作り出されている。

不明銅製品 環状銅製品：115は3期のSB37から出土した座金状の銅製品である。片面は平らで、縁辺が薄く中央が厚い断面型を呈している。平らな面には接合した痕跡もありこれのみで独立した製品ではなく、銅製品の一部と考えられる。板状青銅片：118と119がある。118は13期のSB143出土で厚さ1mm～2mmの青銅片である。面取りされた端面と思われる部分が観察でき、直線的な面からカーブして丸く納める部分の破片である。119は15期のSB174から出土した、厚さ1mmの平板な青銅片である。

銅滓 SB138(121)・174(120)・178から出土している。120・121は片面があばた状の凹凸となりもう片面には竹籠状の痕跡が残っている。鑄銅滓と思われる。178出土のものは、遺構の項で触れたように、地床の坩堝状の掘り込みのなかで検出したのもで、多量の炭化物・土砂に混じって酸化した銅粒を検出した。

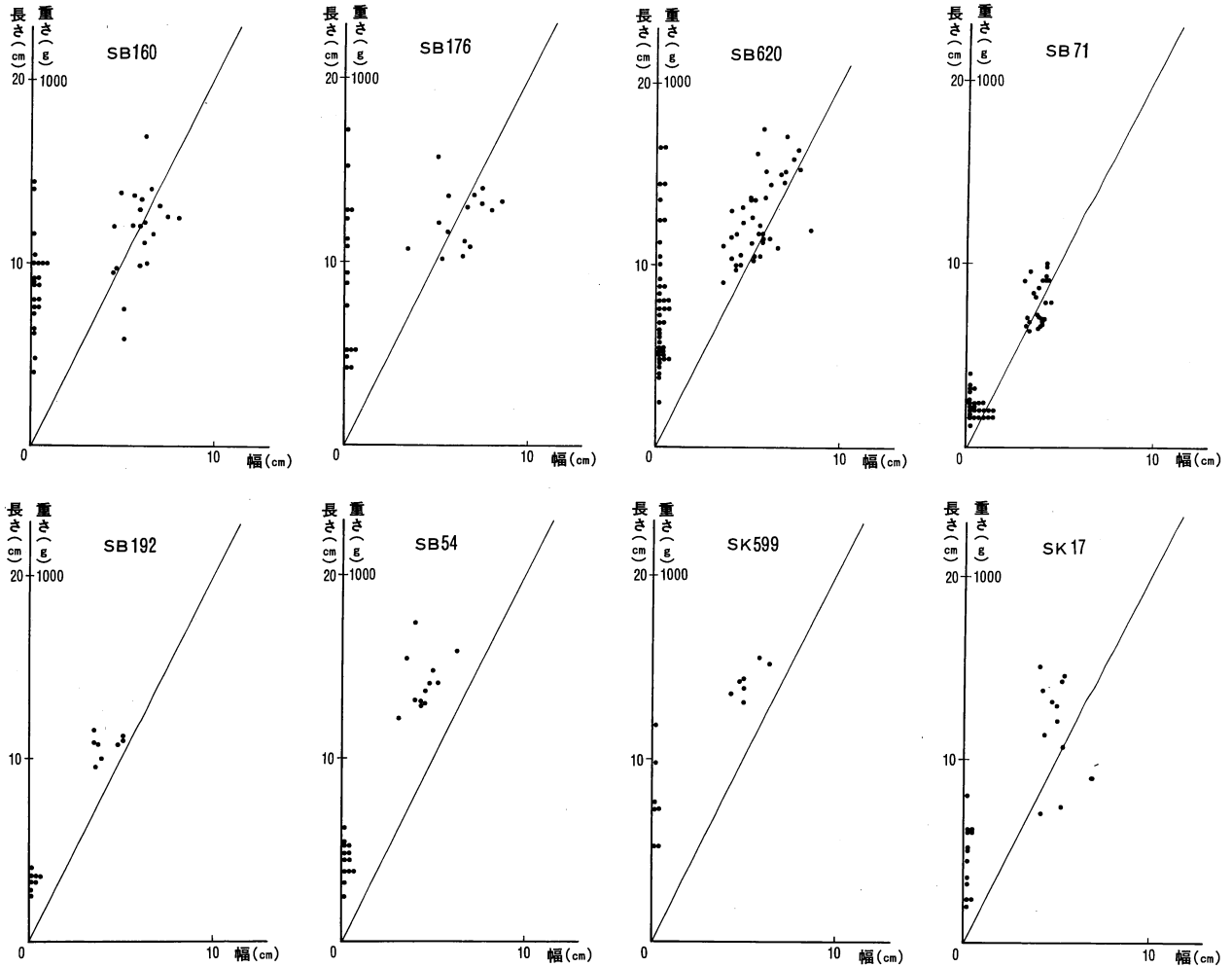
4 石製品 図版182～184 PL93・94、第151図

古代の遺構から出土した石製品は、石錘・砥石の二者が主体で他に管玉・丸石・磨石・石棒などがある。

管玉 SB30から出土した1点(28)のみである。深緑色の碧玉製で、長さ2.7cm・直径1.2cm。穿孔は片側のみから行われ、孔の内径は径は大きな側で4mm、小さい側では2mmである。

石錘 形状が類似した棒状で、自然礫あるいは自然礫を若干加工したものが、遺構内から一括して出土したものを石錘と想定した。1期のSB160・176、2期のSB620、4期のSB80、5期のSB71、12期のSB192、15期の27・54、SK72から出土している。それぞれのデータについては一覧表と長幅比・重量グラフとして掲載した。長幅比・重量グラフでは破損して使用時の形態を保っていないと判断されたものはプロットしていない。これによれば、1期では長幅・重量にばらつきが大きくSB160の資料では、最大・最小に重量で520g、長径で12.4cmの開きがある。2期も同様に長幅・重量のばらつきは大きい。それに比べ、5期(SB71)以降の資料では長幅・重量ともにまとまりを見せ、12期のSB192では重量で80g、長径で2cmの個体差の幅のなかに分布している。

砥石 古代の遺構から出土した砥石は48点ある。個別の特徴については、一覧表で石材・研磨面の粗密(I類：砂岩製のもので、目の粗いもの、II類：凝灰岩製を主とした目の密なもの)・形状等について記載した。時期的には1期と6～8・10・12期に属する遺構からは出土していないが、鉄製農具が1期以降ほぼコンスタントに増加していることを考えれば、このあり様はやや不自然である。形態の上からは大形で設置型の置砥と、可搬用のものに分けられるが、2期から15期まで両者が併存しており、使い分けがなされていたことが分かる。また、I類とII類の荒砥と中砥的な二者が古代を通して使い分けられている。さらに細かい仕上げ



第151図 古代・中世遺構出土石錘長幅比グラフ

用の仕上げ砥は無い。

石棒 古代11期のSB503から出土した。砂岩製で最大高20.7cm・最大径14cmを測り、縄文時代に所属する遺物と思われるが、遺構の項で述べたように古代に転用されたものと思われる。

その他の石製品 その他、古代の遺構から出土した石製品としては丸石2点・磨石1点・凹石1点 (27) がある。

5 土製品 図版185、PL95

古代の遺構から出土した土(陶)製品には、紡錘車、土錘、羽口、瓦、円面硯がある。円面硯については別項で記述するので、ここではそれ以外について器種別に記述する。

紡錘車 紡錘車は12点出土した。出土遺構の時期は1期が5軒、2期が4軒、4期が1軒、15期が1軒である。このうち15期のSB206は、調査時の所見で2期の遺物を大量に含んでいたとされており、それらとともに紡錘車も2期に帰属するものと思われる。従って南栗遺跡における土製紡錘車の出土時期は1期から4期までとすることができる。紡錘車は、法量で直径6.2~7.4cm・器高3.7~4.7cm・重量175~257gの大形、直径5.6~5.9cm・器高3~3.2cm・重量120g前後の中形、直径4.2cm・器高2.9~3.1cm・重量64gの小形の三者に分けられる。また、この三者は断面形態で台形と長方形の二者を含んでいる。すなわち二断面形態三法量で次の6分類が可能となる。大形・台形(1~3)、大形・長方形(4~6)、中形・台形(7・8)、中形・長方形(9)、小形・台形(11)、小形・長方形(10)である。これらは直径7~8mmの丸い棒に粘土塊を

巻き付け、丁寧に指ナデして仕上げるとというのが一般的な製作技法で、なかには側面・底面に竹管による刺突を加えて装飾するもの(1)、器表をへら磨きするもの(9)もある。胎土はいずれも1・2期の土師器甕類に類似している。法量・形態による分化が糸拵の作業段階による使い分けなのか、撚る糸の素材による相違なのか解明できるだけの資料はない。時期的には1期に6分類のうち5種類があるが、2・4期では量も少なく分化の実態は明らかではない。2期以降の土製紡錘車の減少は鉄製紡錘車の普及によるものと考えられる。南栗遺跡では1・2期には土製と鉄製の紡錘車が併用されるが土製が主、3・4期ではほぼ両者が拮抗し、5期以降は鉄製のみになるという変化をたどるらしい。

鞆羽口 古代の遺構から検出された鞆羽口は12点である。その他自然流路と近世の水田址から、古代からの混入と思われるものが3点出土した。古代の遺構ではすべてが竪穴住居址からの出土であり、1期2点、3期2点、12期1点、13期3点、14期3点、15期1点である。完形品は無くいずれも小片で、炉側先端部あるいはその付近の破片である。石英粒・長石粒・堆積岩粒を多量に含む極粗い胎土で、なかには植物繊維を混入するものもある。12・13を図示したが、12は外径約5.7cm、通風孔径約2.2cmに復元でき、先端部には溶滓が付着している。13は12に比べやや大形である。先端部の溶滓の付着、被熱が顕著である。

土錘 10点の土錘が出土し、8点が図示できた。それぞれの出土遺構の時期、重量は一覧表に示した。1期から11期に至る時期の土錘が出土しており、重量・法量ともかなりの開きはあるが、細長い棒状の形状であること、太さ5mm前後の丸い棒に粘土を巻き付けて掌でにぎり形を整えるという簡単な造りをするという点など基本的に大きな違いはないものと思われる。3期のSB202ではほぼ似通った大きさのもの(18~20)が3点出土している。また、9期のSB595のもの(21)は軟質ではあるが須恵質の焼成である。

6 漆製品 PL97

2点確認され、いずれも古代に属す10期のSB579と13期のSK1069から出土した。2点とも腐蝕がすすみ、遺存状態は悪い。前者は皿と思われ、底径がおよそ8.7cm前後となる。後者は椀か皿で、7×5cmの範囲に漆皮膜が残る。黒漆を塗ったあと、内面に朱塗りをしたようである。外面の状況は不明である。

7 自然遺体 PL97

本遺跡出土の自然遺体はSK332出土の「ホドイモ」がある。

ホドイモは土坑の底面から炭化した状態で出土した。塊状の紡錘形をしたイモは長さ3~4cm程で先端はつる状に伸びている。『新日本植物図鑑』によれば、ホドイモは「山野にはえる多年生のつる性草本。」で「豆果は長さ5cmぐらい。地中にある塊根は、焼いて食べられる。[日本名] 塊、あるいは塊芋の意味で、塊(ホド)状の根をもつからである。」とある。県内での出土例はなく、土坑の時期が11期以降と考えられることから当該期の食生を知る上で重要である。

第3節 中世の遺物

1 土器・陶磁器 図版186・187—1～35、付表7、P L96

(1) 概観

土器では土師器皿・内耳鍋・土師質片口鉢、古瀬戸系陶器では折縁深皿、大窯製品では皿・播鉢、東海系無釉陶器では山茶碗・捏鉢・三筋壺・常滑系甕・壺、また輸入陶磁器としては青磁碗・皿、白磁皿が出土した。総破片数で354点あり、このうち内耳鍋が291点出土している。時期的には中世1期のものが56点、2期が298点あり、後者は内耳鍋が大半を占めることが知れ、内耳鍋以外には土師器皿と大窯製品の出土に限定される。付表7に示したように、出土総数の8割近くが中世の遺構に伴い、竪穴住居址・掘立柱建物址・溝址・墓址・土坑から出土している。特にSB631からは1期に属す遺物が一定量出土し、また墓址からは完形に近い内耳鍋が出土する傾向がある。分布は全域に広がるが、1期の遺物は北部D区に多く、2期は南部B区北半から南部C区に集中する。

以下では、SB631出土の遺物について触れ、次に主な遺物について種類・器種ごとに記述していくことにする。

(2) S B 631 図版186—1～10

土師器皿が5個体出土している。いずれも手捏ね成形によるもので、1に示したものを除き、法量は不明である。1はA1類に分類され、黄褐色を呈し、口唇部直下に強いナデを入れて整形している。古瀬戸系陶器では折縁深皿の底部小片が出土している(2)。底外面と体部外面には回転ヘラ削り痕が明瞭に残っている。捏鉢は2個体あり、うち3を図示した。胎土は粗く、色調は暗い灰白色となる。高台高は1.4mmあり、細くやや長めである。4は常滑系甕で、体部片もあるが接合しない。III類に分類される。青磁の出土は多く、碗8個体、皿1個体があり、碗はD類(5・6)、F類(8～10)、I類と分類外の碗(7)がある。10は龍泉窯系の古い段階のもので、12世紀前葉から中葉の所産である。

(3) その他の遺物

ア 土器

(ア) 在地系土器 図版186・187—11～27

皿：3点あり、25～27に図示した。25は手捏ね成形でI B 2類、26・27はロクロ成形でII B類・II A類に分類される。25は、胎土は緻密で黄褐色を呈し、底外面には指頭痕が明瞭に残る。26は、見込み部分を強くナデて凹状にするもので、色調は黄橙色となっている。27はロクロナデが明瞭に残るもので、にぶい褐色を呈す。

内耳鍋：口縁部内面にヨコナデを明瞭に残すII B類とII C類を見出すことができる。II B類では、口縁部が内湾するもの(13～16・18・21～24)、直線的なもの(11・12・17・20)があるが、それぞれも微妙に相違する。21はII C類に分類される可能性もある。II C類は量的には少なく、図示したものは19のみである。口縁部断面はほぼ直線的に立ち上がっている。また、ST53から出土した11と12、SK308の13と14、SK347の15と16、SK636の19・20と21、SK653の22と23・24のように一遺構から複数個体出土した場合、それぞれ大形と小形のものの2法量があることが知れる。

(イ) 産地不明の土器 図版187—28

片口鉢の口縁部片が出土している。色調は、外面が橙色、内面が黒褐色となるもので、砂を少し含み、質は内耳鍋と酷似する。丁寧なヨコナデが残るが、ロクロを使用しているか否かは不明である。器壁の厚

さは均一で、口唇部を面取りする。時期は不詳であるが、中世1期にある土師質の鉢と同様のものであろうか。出土は古代5期のSB113に混入していた。

イ 陶器

(ア) 大塚期の製品

丸皿：4点の小破片が出土している。いずれも灰釉を薄く掛けたもので、底部が残存している1片は削り出しによって高台が作り出されている。

播鉢：体部小片が出土しており、口縁部縁帯の有無は不明である。錆釉が薄く塗られ、播目は3条1組みられる。内面はよく磨滅し、外面はロクロナデが残っている。

(イ) 東海系無釉陶器 図版187-29・30・31

山茶碗：SD18からと古代のSB44からの2個体がある。SD18出土の30は第VII期第3型式に比定されうる碗で、体部は直線的に広がるものと思われる。残存率10%の小破片のため法量には信頼性が薄い。

捏鉢：前記したSB631以外では、遺構から出土したものはない。29はIV類に分けられるもので、体部の上方を強くなでて薄く挽き出しているものである。胎土は精胎で暗い灰白色を呈す。ほかの底部片では、高台高が1.0cmを測るものがあり、粗胎の暗い灰白色となる。

三筋壺：体部中ほどの破片が1点出土している。粗胎となる暗い灰白色を呈し、1条の沈線がめぐる。

甕・壺：SK1532出土の肩部片は、粗い胎土の灰赤色のもので、また、SB196に混入した底部片は、灰白色を呈すもので、底外面には板状圧痕がみえる。

ウ 磁器

(ア) 白磁

皿：SB639からIX類に分類される口禿皿が出土している。素地の色調は灰色となる。

(イ) 青磁 図版187-31~34

碗：31・32はF類に分類される鎬蓮弁文を有するものである。本類はほかに2点出土しており、それ以外にはD類とI類が確認される。また、33は鎬蓮弁文の上に重ねて横の条線を施文するもので、E~F類に分類されよう。

皿：34は体部下方で屈曲するもので、そのあたりまで釉を掛け、それ以下を露胎としている。釉調は透明感のある緑色を呈し、底内面に櫛描き文がありそうである。

2 金属製品・銭貨 図版188、PL97

中世の遺構から出土した金属製品は鉄製品が10点ある。内訳は刀子3点、釘1点、鉄族1点、鋏2点、鑿1点、燧鉄1点、棒状鉄製品2点と銭貨6枚である。そのほかに鉄滓5点470gがある。以下図示したものを中心に器種別に述べる。

刀子 127の1点を図示した。目釘孔の部分で折れている。目釘穴から茎尻まで8.1cmである。中世1期のSB639から出土した。

鉄族 124は中世1期のSB631から出土した。先端部を欠くが、雁股鋏の基部ないし扇形の平根鋏である。篋被は幅広で先端にむかって強く開き、茎は細く短い。

鋏 2点図示したが、いずれも中世1期の遺構から出土した和鋏である。122は全長11cm・刃長5.1cmで噛み合わせ部より先端側の磨り減りが顕著である。123は片側の刃部のみで、先端を欠いている。

鑿 128はSB631から出土した。全長12.5cmで牛角状の形態である。着柄部は袋状で円形を呈し、袋内に木質が炭化して残存している。先端部近くでは断面方形を呈するが、錆化が激しく原形は保っていないものと思われる。

燧鉄 126はSD8から出土した。山形の頂部下に直径4mmの円孔をもつ。125は包含層出土で所属時期は不明であるが幅4.4cmと小形の燧鉄である。

銭貨 中世の遺構からは、中世1期のSB631から「皇宋通寶」(134)が1枚、中世2期のSK174から「皇宋通寶」(135)が1枚、同じく中世2期のSK175からの「永樂通寶」(138)と不明銭貨各1枚が出土した。また、遺構外から「元祐通寶」(137)・「皇宋通寶」(136)各1枚が出土している。

3 石製品 図版188、第151図、PL97・98

中世の遺構から出土した石製品は石臼3点、茶臼2点、石錘24点、凹石1点である。

石臼 SK371から下臼2点(34・35)が、SK372から上臼(36)が出土した。石材はすべて安山岩、36は完形で外径33.5cmを測る。

茶臼 中世2期のSK390から砂岩製の上臼(33)が、同じく中世2期のSK392から安山岩製の下臼が出土した。33は素材のきめも細かく小形で精緻な造り、SK392のものは大形で安山岩のきめは粗くつくりも雑である。

石錘 SK17より17点、SK599より7点が出土した。長幅比・重量はグラフに示した通りである。このなかで注目されるのは、SK17・SK599両遺構から出土した石錘中に使用時の巻紐の痕跡が観察される(30~32)ことである。これは何らかの理由で、紐を巻いたままの状態の石錘の表面に煤が付着し、巻紐の部分が煤の付着を免れたもので、棒状の自然礫の中央に太さ3~5mmの紐を二重に巻き付けた様子が観察できる。痕跡が明瞭に観察できるものは両遺構合せて7点ある

第4節 近世の遺物

1 土器・陶磁器

(1) 概観

総数148片が出土している(附表8)。そのうち約半数の73点が18世紀後半から19世紀中葉に属するもので、それ以前のもものが20片、ほかは時期がつかめない。いずれも小片で図示できなかった。遺構からの出土はSL1の溶脱層中より、鉄釉の丸碗3片、いわゆる御深井釉の丸碗7片、捏鉢かと思われるもの3片、磁器の碗が3片、ほか不明のもものが12片出土している。いずれも瀬戸・美濃系の所産と考えられ、近世でも新しい時期のものかと思われる。このほか、中世以降から存在していたと捉えられるSD524から器種のわからない陶器小片が出土している。

附表8に示したように、器種構成については瀬戸・美濃系陶器を中心として、碗が最も多く、時期を考慮してもその占める割合は、碗が常に主体となる。18世紀以降になると出土量の増加とともに、鉢・鍋・壺・瓶などが確認されるようになる。これらの分布は、南部A区と北部E区の調査区域南北両端に、17世紀から18世紀代の遺物が多い傾向があり、18世紀後半以降は全域に点在する。

以下、主な遺物を取り上げて記述をすすめていく。

(2) 土器

ほうろくかと思われる破片が出土している。但し、口径が17.6cmと小さめである。

(3) 陶器

碗：瀬戸・美濃系一丸碗は御深井釉を含めた灰釉系の製品が多く、これらは18世紀後半以降の所産と考

えられる。釉は透明感のある淡黄緑色や淡黄色を呈するもの、黄白色の灰釉のものがみられる。

碗：肥前系一釉が淡黄白色を呈する底部破片が1点抽出できる。緻密な胎土で、軟質感がある。17世紀後半から18世紀にかけての頃のものであろう。

皿：瀬戸・美濃系一長石釉の掛かったいわゆる志野織部の丸皿が2片、また、16世紀に遡る志野の菊皿が1片出土している。後者は大窯期の製品で、本来中世2期の後半のものとして扱うべきであるが、今回はここで報告しておきたい。17世紀に属すと考えられる丸皿は、白色を呈するが、菊皿はややねずみ色がかった色が発色している。このほか18世紀後半以降に属す黄白色の灰釉の皿や、さらに新しい時期と思われる錆釉の漬掛けされた燈明受皿などが出土している。

鉢：瀬戸・美濃系一掃鉢の出土が多い。錆釉を掛けたもので、光沢のあるものとなないものがある。口縁部の成形が知れるものでは、折り返して肥厚させるものはなく、方形に作り出している形態がある。近世でも後半になるものがほとんどであろう。

鉢：産地不明一灰釉と思われる釉の掛かった鉢の底部が出土している。底部径27.8cmで、素地の色調は赤味がかり、精胎の焼きの良い製品である。器壁はおよそ1cmを測る。在地産とも考えたが、瀬戸・美濃系の可能性もある。

鍋：産地不明一在地産のものであろうか。底部片がみられ、底外面は回転ヘラ削りされ、内面は鉄釉を厚く掛けている。

甕：瀬戸・美濃系一鉄釉か灰釉か区別のつかない大型の甕の頸部片が出土している。釉調は光沢・透明感のある緑がかかった茶色を呈し、胎土は灰白色である。頸部径は、約50cmほどある。ほかの破片は小片で全容はわからない。

(4) 磁器

碗：瀬戸・美濃系の碗は、素地がやや灰色味をもち、軟質感がある。陶器との区別がつかないものがあり、また、青磁模倣の碗がある。肥前系の小碗では、菊花文を外面に配すものや、底内面に五弁花文のあるものなどが出土している。肥前系のもものは18世紀代のものである。

皿：肥前系の小片が確認されており、内面の見込みを蛇の目状に輪はぎをしている。時期は碗と同様であろう。

その他：瀬戸・美濃系の香炉が出土している。19世紀中葉以降と思われ、外面にタコ唐草文を模倣して文様が描かれている。

2 金属製品・銭貨 凶版188 PL98

本遺跡の近世にかかわる金属製品はSL1のから出土した刀子1点、釘7点、棒状鉄製品2点、板状鉄製品1点、鉄片2点の13点で、他に銭貨2枚がある。いずれの遺物も腐蝕折損が激しく、釘では脚の痩せているものが多い。凶示したのは、釘(129-132)・棒状製品(133)である。釘は折頭釘(129-130)で、脚部の断面が正方形から長方形を呈する。

銭貨は2枚とも「寛永通寶」で、古代のSB565に混入したもの(139)と北部D区の包含層から出土したものの(140)である。

第4章 成果と課題

第1節 遺構の分析

1 竪穴住居址の分析

本遺跡で確認した竪穴住居址は322軒ある。時期によって住居址軒数の多寡はあるが、1期から15期にいたる住居址があり、長期間居住域として利用されたことが知れる。各地区の時期別軒数の変遷については第52表に示したが、その詳細は集落の変遷の項で述べる。本項では個々の竪穴住居址の特徴を整理するために規模(床面積)・主軸・諸施設・カマド・床面の硬度計測定値などの視点に沿って分析することを目的とする。

(1) 規模(床面積)について

住居址322軒のうち、重複関係などによって資料化できなかった一部を除いた住居址を分析の対象とした。各時期別の法量を図化したのが第152図である。グラフの縦軸(y)はカマドを通して計測した主軸の長さで、それと直交する軸を横軸(x)にとった。さらに、柱穴を有する住居址と有しない住居址とを分けて表現した。なお、主軸または直交軸の一方が計測できた住居址については、できるだけ資料化する意図から方形の住居址と仮定して $x=y$ 軸線上にドットを落とした。以下、時期別に概略する。

1期はSB129が最大規模の住居址で、床面積は50.82㎡を測る。最小の住居址はSB592の10.4㎡である。床面積が40㎡を越える住居址が4軒認められるが、うち3軒は北部D区に位置する。さらに、規模によって30~20㎡、20~10㎡前後の三群に大別され、直交軸が長くなる($x>y$)住居址が全体的に多い。

2期は1期と同じ分布状況である。SB551は床面積が57.69㎡と本遺跡最大の住居址である。この住居址を除いて40㎡前後、30~20㎡、20~10㎡の3つにドットに固まる。住居址は $x=y$ 軸線上付近のものが多く、1期と同様に $x>y$ になる住居址が目立つ。

3期は図示できた資料が前段階に比較して少ないため、その構成は的確に捉えられない。だが、2期から4期あるいは5期への流れのなかでみると、当該期も1期以後と変化していないと考えられる。南部A区に位置するSB37は3期のなかで最大規模を有し、床面積は53.33㎡である。3期の特徴として注目できるのは、2期に見られる10~20㎡以下と20~30㎡の住居址軒数の比率が等しいことにある。また、20㎡以下の住居址は $x>y$ になる例が多く、逆に20㎡を越える住居址は $x<y$ の資料が多くみられる傾向も特徴として

	南部A区	南部B区	南部C区	北部D区	北部E区	計
1期	2	5	10	8	10	35
2期	7	5	2	14	2	30
3期	6	1	1	3	1	12
4期	9	9	2	0	2	22
5期	11	3	2	1	7	24
6期	0	0	1	0	2	3
7期	0	0	5	0	6	11
8期	0	0	1	1	29	31
9期	0	0	0	0	8	8
10期	0	0	0	0	4	4
11期	2	3	3	2	0	10
12期	4	9	3	0	0	16
13期	12	8	10	0	5	35
14期	12	9	14	1	1	37
15期	2	7	4	0	0	13
不明	25			6		31
計	209			113		322

第52表 竪穴住居址地区別一覧表

よい。

4期の在り方はそれ以前と基本的に変わらない。しかし、この時期50㎡を越す超大型住居址はみられない。床面積が40㎡を越す住居址が全体の18%に当たる4軒、20～30㎡前後に50%に相当する11軒が占める。また10㎡以下は7軒ある。住居址は $x=y$ 、または主軸の短い $x>y$ の住居址が多い。南部B区のSB175が当該期最大規模の住居址で、床面積は46.8㎡である。

5期の構成は3期のそれと近似し、大～小の構成も1期以降の傾向をそのまま引き継いでいる。

6・7期は資料が少ないため、その特徴を述べるのは難しい。7期の住居址は南部に2軒があるほぼ北部に位置している。住居址は $x=y$ 軸線上付近のものが多い傾向が認められるが、大きさの構成は不明である。8期になると住居は $x=y$ 軸線上に集中し、ばらつきはみられなくなる。床面積は30㎡付近にSB555と556の2軒がほかの住居址とは卓越した規模を有して分布する。他は20㎡以下で、特に10㎡に満たない住居址が4軒と多いのも当該期の特徴であり、このうちSB588は7.29㎡しかなく本遺跡最少の住居址である。

9期には5軒の住居址があり、いずれも北部E区に分布する。30㎡を越す住居址がみられず、10～20㎡のなかにかたまる。ドットは $x=y$ 軸線付近にはみられず、 $x>y$ または $x<y$ になる住居址が多い。

10期の資料も少ない。図示した4軒は前段階と同じ地区に位置している。

11期は11軒の住居址がある。床面積によって20～25㎡と10～15㎡の二群に大別され、住居址は主軸方向が長い、 $x<y$ に多く分布する。

12期も同様に、10㎡前後と17～30㎡の二群に分かれる。

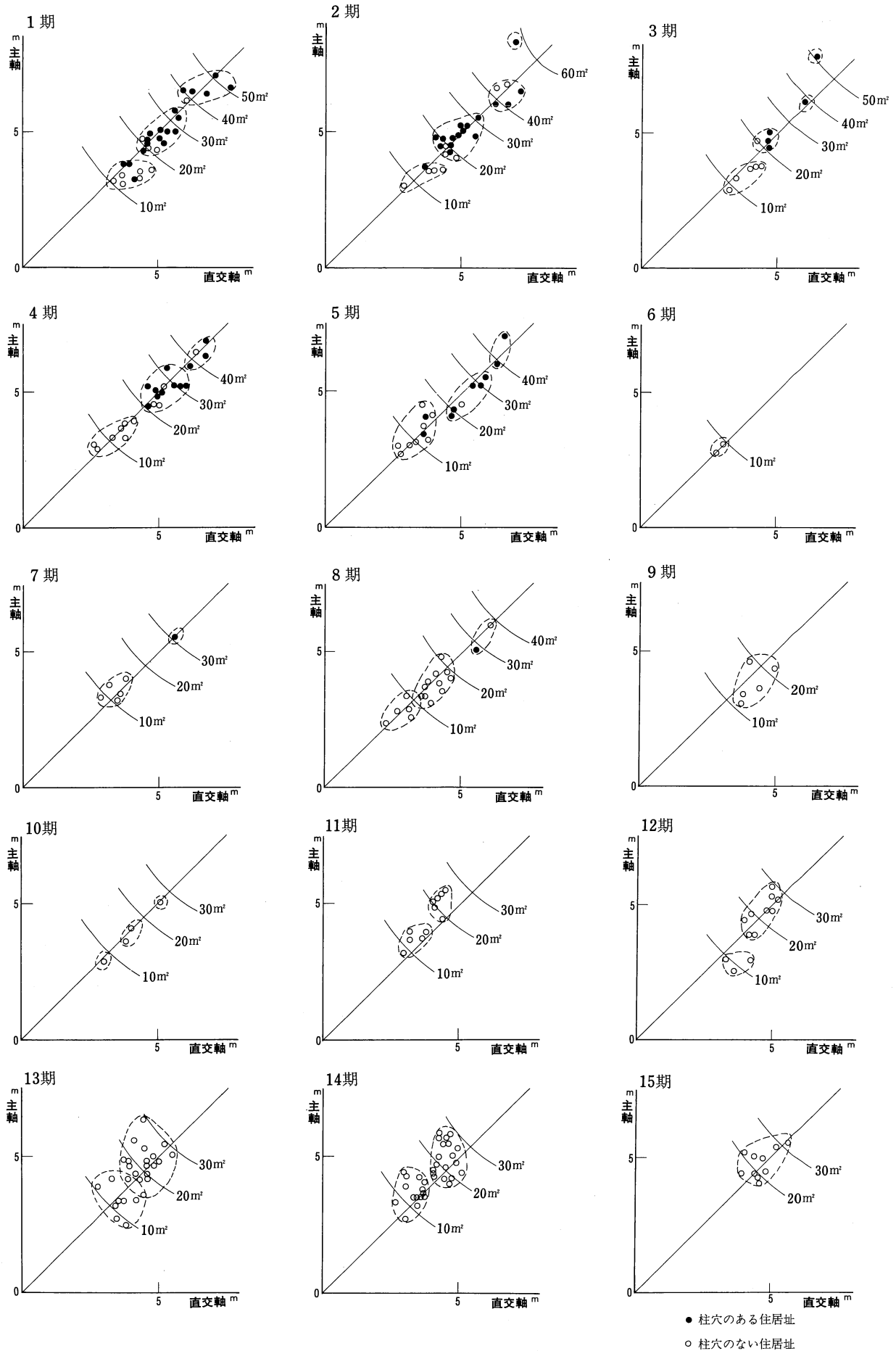
13・14期の状況は近似する。床面積は30㎡を越える例はなく、18㎡付近を境に二群に分かれ、その分布はかなりばらつく。

15期はSB174が最小の住居址であるが、床面積は16.75㎡を測り、14期にみられた10㎡以下の住居址はまったくみられない。規模が平均化する段階と言えるかもしれない。

以上、各時期別の様相をみてきたが、1～5期の在り方と資料の少ない6期を除いた7期以降の在り方が全く異なることに気が付く。すなわち、1～5期の構成が3ないし4つのグループに大別されるのに対し、7期以降は40㎡以上の住居址がみられなくなり、1～2つにグルーピングされる。1～5期には2期のSB551のように床面積が60㎡程の大型住居址が存在するなど突出した規模の住居址もみられるが、概ね35㎡以上、18～35㎡、18㎡以下の三群に分かれ、その構成の比率をみると35㎡以上の住居址が12～20%、18～35㎡が35～50%、18㎡以下が21～45%で時期によって多少の増減はあるが、ほぼ規則的な構成である。7期から15期には床面積が30㎡を越す例がわずかになり、6期以降、住居規模が縮小化する傾向が明らかになるが、同時に各住居址の規模が平均化するのも特徴のひとつと言える。また、8期でみたSB555や556のように、そのなかでも突出した規模の住居址が存在する段階も確実にあり、6期以降の在り方も一様ではない。しかし、8期が大きな画期となるか否かは微妙である。

続いて、床面積と柱穴の有無との関係について整理しておく。

柱穴を有する住居址は5期までに多くみられ、7期以降ではSB598(7期)、555(8期)、10(11期)の3軒に限られる。床面積と柱穴の有無の関係は4期の在り方に端的に示される。すなわち、20㎡を越す住居址に柱穴を有する例が多いことである。20㎡以下で四本柱の住居址は1期に2軒、2期に4軒、5期に3軒と各時期10%以下と少なく、3・4期には皆無である。7期以降の3軒のうち、SB10を除き、床面積は30㎡程になる。このような結果から推察すると、本遺跡の場合1～5期までの床面積が20㎡以上の住居址に限って柱穴を有すると判断できる。但し、11期以降に多くみられる20㎡以上の住居址については柱穴はみられないが、これは住居構造の差を示すものと考えられ、1～5期の在り方とは基本的に異なる。このように6期に大きな画期がある状況は住居規模でみた結果と一致し、住居建築技術との関連を考える上で重要



第152図 竪穴式住居址規模時期別分布図

であろう。ところで、住居址の床面積と柱穴の有無については、宮本長二郎氏が「住居」のなかで歴史時代の住まいに触れた際、四主柱と無主柱は床面積が20㎡になるのを境に使い分け、20㎡以下の住居址の場合主柱を必要としない合掌と垂木を使用して竪穴を覆うと述べている(宮本1986)。この指摘は本遺跡の分析結果と一致するものであり、住居址の構造を考える上で重要かつ示唆に富んだものと言える。

(2) 形状について

243軒を分析の対象とした。このうち、資料の少ない6期(1軒)、10期(4軒)はそれぞれ7期と9期に加えて分析した。形状の分類は凡例で示した通り、方形、長方形I、長方形IIの三種に分け、各時期別の構成比率を比較することとした(第153図)。以下、時期を追って概略する。

1・2期は方形(A)、長方形I(B)、長方形II(C)の三種があり、Aの比率が60~70%と高い。B・Cは大型住居址や18㎡以下の住居址に多くみられる。3期もこの傾向が窺え、18㎡以下の住居址が多いためB・Cの比率が50%と高くなっている。4~6・7期の構成も3期までの在り方と変わらない。8期はAが70%と多い。11期になるとB・Cの比率が70%を占め、それ以前の構成と逆転する。これは分析資料が9軒と少ないことにも起因するが、12~15期の様相を鑑みるとあながち大きな誤差とも考え難い。すなわち、11期以降、主軸と直交軸の差が大きな長方形IIの割合が増加し、長方形Iと合わせると方形の住居址とは1:1の比率になるのである。なお、長方形の住居址はいずれも主軸方向が長い。12期から15期にかけてその構成に大きな変化はみられない。14・15期には特筆すべき特徴は見出だせないが、12・13期には床面積が15㎡以上の住居址の大半は主軸方向が長い形状になり、逆に10㎡程の住居址は直交軸の方が長い長方形になるといった特徴を有する。

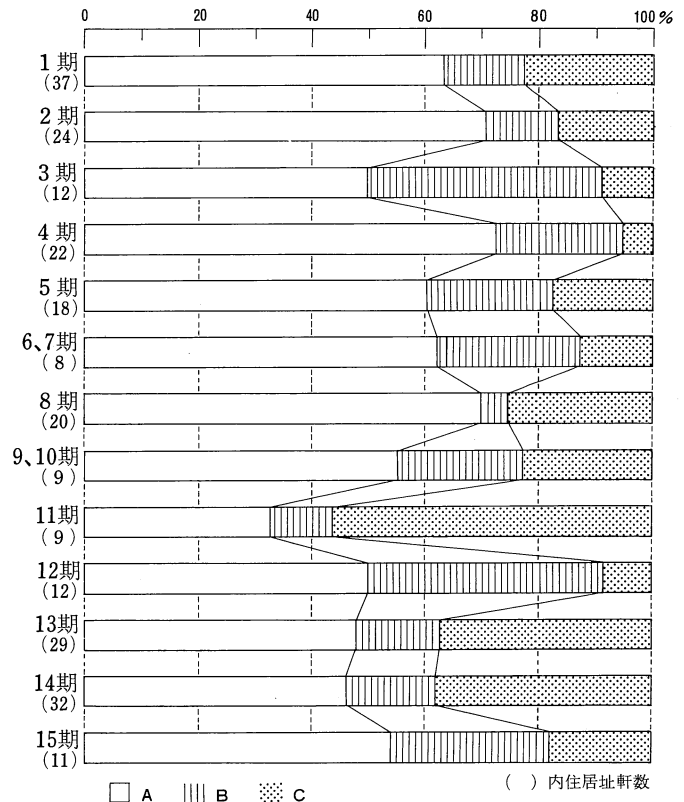
以上のように、形状はその構成の時期別変遷を見る限り、大きな画期は認められない。そのなかで、11期はA:B・Cの比率が逆になる段階として注目してよいだろう。また、時期によっては床面積と形状との間には相関関係の認められる段階もあり、居住空間利用に関する問題として興味深い。

(3) 主軸について

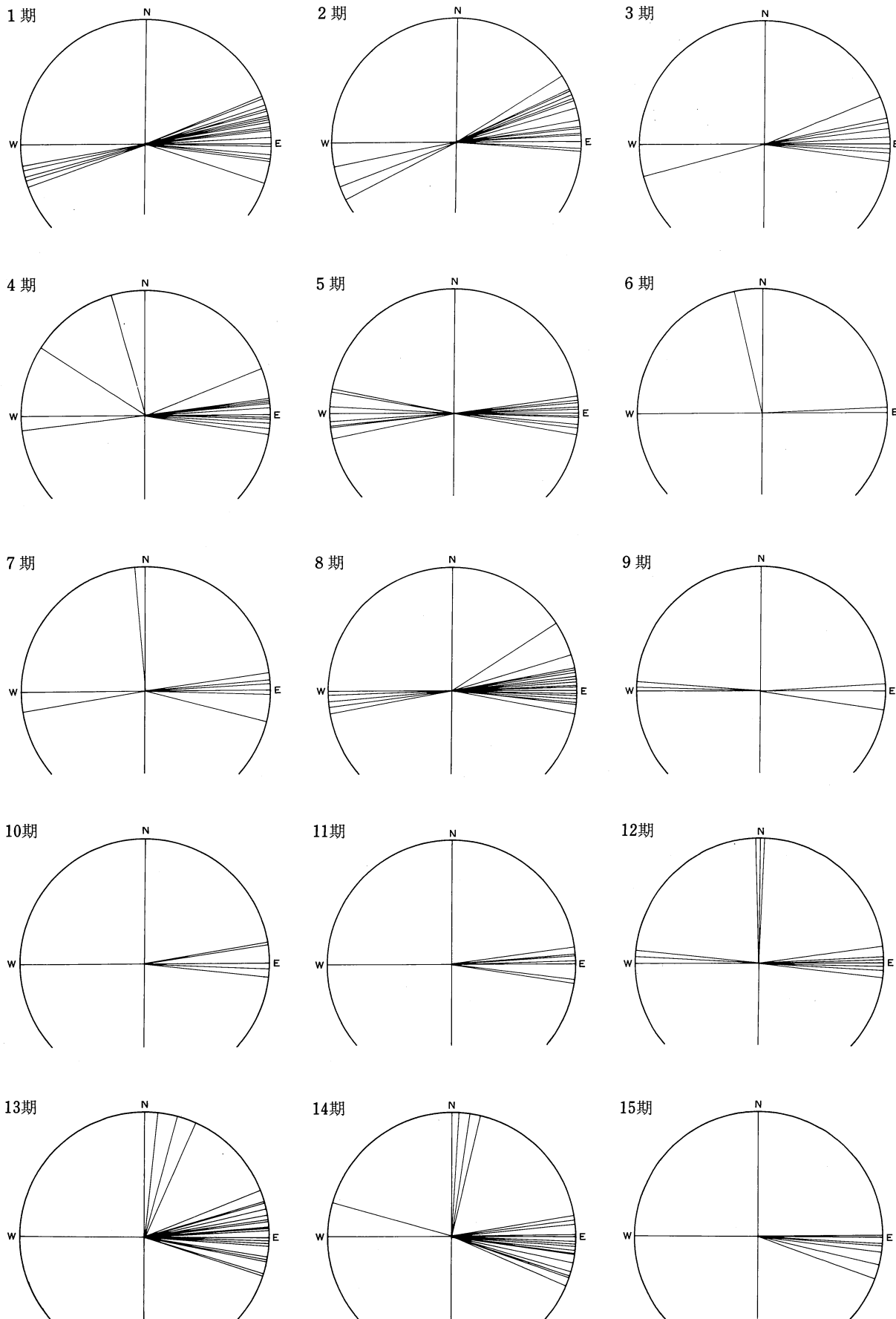
住居址の主軸はカマドを通る中軸線を測定した。カマドを有しない住居址やその痕跡が不鮮明なものについては東西方向を主軸方向として計測し、図化した(第154図)。以下、時期別に概観する。

1期は東カマドが24例、西カマドが6例と東カマドが多い。西カマドはN-90°-WからN-112°-Wまで22度の差がある。東カマドはSB528がN-108°-Eと最も南へ向き、最も北へ触れるSB547とは40度の差があり、ばらつきが大きい。なかでも南部の住居址のばらつきが目立つ。

2期も西カマドが3例あるほかは、東カマドが23例と他を凌駕する。西カマドの3軒はいずれも北部に位置する。東カマドのうち、北部D区の住居址はN-58°-EからN-74°-Eまでの16度の範囲に集中するが、



第153図 竪穴住居址形状時期別構成比率図



第154図 竪穴住居址主軸時期別分布図

南部の住居址は40度の振れ幅でばらつく傾向が窺われる。

3期は2期の状況と近似する。西カマドが2例、東カマド8例がある。北部D区の住居址はN-68°-EからN-78°-Eの範囲内に集中し、1期以降主軸が揃う地区であると言える。南部の住居址の7軒は真東から北・南へそれぞれ10度の範囲内に含まれる。

4期は1～3期までみられなかった北カマド1例がある。ほかには西カマド2例、東カマド20例でやはり東カマドが多い。南部C区に位置する北カマドのSB121はN-16°-Wで、これと隣接するSB135もN-57°-Wに主軸をとり、当該期の住居址のなかでは異質である。この2軒を除くと、南部の住居址は3期と同様に東カマドは北へ7度、西カマドは南へ9度振れた範囲に入り、ほぼ東西方向に主軸をとる住居址が多くなる傾向がみられる。また、北部D区にあるSB629はN-68°-Eとかなり振れるが、この地区にある1期以降の住居址の主軸と一致するものである。

5期は再び東・西カマドに限られる。東カマドは12例、西カマド8例と1～4期と比較すると西カマドの割合が多くなる。なお、西カマドに加えたSB114は当初北カマドであったものを西壁へ移築している。東カマドは真東を中心に18度の間に、また、西カマドは23度の範囲内に集中し、ばらつきはほとんどみられなくなる。

6期は3例の資料しかないため詳細は不明である。

7期は東カマド4、北カマド2、西カマド1例がある。このうち北部E区に位置するSB564は西壁に、554が北壁に、598が東壁にカマドを設置するが、いずれも東西、南北方向からわずかししか振れず、方位を意識した主軸である。南部の住居址はSB165が北カマドになる以外は東カマドで、SB164がN-105°-Eと1軒だけ南方向へ大きく振れるほかは東西方向に主軸をとる住居址が多い。

8期は南部C区にSB142があるほかはいずれも北部E区に位置する。東カマド15例、西カマド5例がある。西カマドの5軒は真西から南へ振れ、N-88°～100°-Wの12度の範囲に入る。東カマドはSB142がN-100°-Eと最も南へ振れ、これと北へ大きく振れるSB507を除いた住居址はN-73°～96°-Eの23度の振れ幅のなかに含まれ、真東を意識した主軸である。

9期は資料がかなり少ないが、西カマド2例、北カマド1例、東カマド2例とばらつく。だが、西カマドのSB589・597は真西を、東カマドのSB582は真東から北へ3度、SB616は南へ8度振れ、SB591が真北を向くのと合わせて、方位に主軸を揃える傾向が認められる。

10期も資料が4例と少ないため、その傾向を窺うことは難しい。北部E区に位置する4軒はすべて東カマドでN-80°～96°-Eの範囲に固まり、8期以降の特徴と共通している。

11期は東カマド10例、西カマド1例、北カマド1例がある。住居軒数は11軒であるが、北部D区に位置するSB537は北・東壁にカマドを有するためそれぞれ1例として数えた。西カマドのSB10は南部A区に位置し、真西を向く。東カマドの主軸は、SB545のN-82°、SB199のN-97°-Eの間に集中し、やはり方位を意識した主軸をとる傾向を認められる。

12期も真先・東・西を意識した主軸である。西カマド2例、北カマド3例、東カマド9例でいずれも南部に位置する。西カマドのSB35・75は真西から6.3度振れる。また、北カマドのSB102・144もほぼ真北方向である。東カマドはN-82°～96°-Eの14度の範囲内に集中する。12期には11期にみられない北カマドが確実に存在するが、いずれも方位に規制される主軸の住居址が目立つ。

13期の様相は前段階と若干異なる。西カマドは存在せず、北カマドが3例あるほか東カマドが23例と圧倒的に多い。北カマドはSB145・201・553の3軒で、SB145はN-24°-E、201はN-6°-Eとばらつく。この傾向は東カマドでも認められ、最も北へ振れるSB122がN-68°-Eであるのに対し、逆に南へ振れるSB3はN-107°-Eでその両者には45度の開きがあることが分かる。但し、これを近接する住居址を単位にみた

場合、一定の振れ幅のなかに集中する傾向がわずかながら認められる。

14期は西カマド1例、北カマド3例、東カマド16例があるが、基本的に13期と大きく変わらない。西カマドは南部A区南端のSB22でN-74°-Wを向く。北カマドの3軒は東へ最大13度振れる。東カマドの振れ幅は33度とばらつくが、このうち真東から南へ向く住居の大半はC区に位置し、N-80~94°-EにはA・B区に位置する住居址が集中する傾向があり、13期と同様、地区によって主軸を揃える特徴がみられる。

15期は東カマド10例がある。11期以降真東を中心に北・南へ振れていた主軸は当該期になると南方向へ振れる住居が増加する。その振れ幅はN-88~110°-Eの12度でばらつきは少ない。

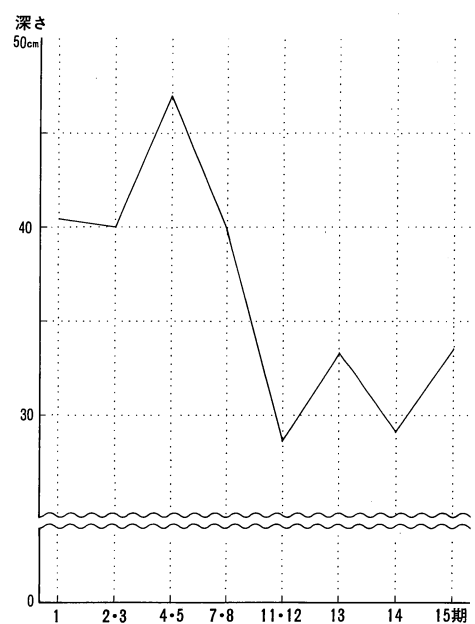
以上、時期別に見てきたが、特に注目される2・3の問題について整理しておく。まず、本遺跡の場合、各時期を通じて住居址の大半が主軸を東へ向けることである。それは、全体の76%にあたり、西カマドの住居が13%とこれに続く。次に、主軸の振れ幅についてである。1~4期までは振れ幅が大きく、ばらつく傾向であるのに対し、5期以降は真北・東・西の方位を意識した主軸に揃えるようになり、長期間それが変わらないことである。13期以降再びばらつきが目立つようになるが、各時期とも地区を詳細にみていくと地点ごとに主軸を揃える特徴が窺われる。なお、比較的ばらつきが目立つ1~4期のうち、北部D区の状況は視覚的にも明らかである。時期も長期間に亘り、一様でないことは容易に推測されるが、集団内の規制に起因するケースも考えられる一方、地形、風向き、集落内の道、住居の入り口など様々な要因が重なり合って決定されたと思われる。

(4) 壁高について

竪穴住居址の深さ、すなわち壁高については従来の集落研究では十分論じられてきていない。それは調査面積が狭小であったり、ひとつの地点が長期間に亘って生活の場とならない例が多いため、資料に限界があることに起因すると思われる。

本項での分析点は壁高が時期を追ってどのように変遷するか、また、それが床面積とはどのような関係にあるか、という二点である。分析の対象とした資料は南部B・C区、座標でN200からN350の範囲内の住居址とした。遺跡全体を対象としなかったのは地区を分けて調査したことと北部E区のように耕作による攪乱の激しい地区もあり、一様に扱えないためである。この点で設定した地区は検出面が同一条件にあり、時期も多時期に亘るため分析に格好である。しかし、時期による資料の多寡は免れないため時期を統合して処理した。また、6・9・10期については資料がなく分析に加えていない。なお、壁高は住居址床面のほぼ中央で計測し、検出面までの数値を採用している。

まず、時期別の変化についてみる。第155図は時期別の平均値を図化したもので、同時に最大値と最小値も掲げた。平均値は各時期±5cmの増減が認められるが、1~8期までのそれは40cmを越え、大きな変化はみられない。また、11期以降の平均値は31±3cmの間に集中する。すなわち、資料の分析に加えられなかった9~10期を画期として住居は約10cm程浅くなる。一方、最大値と最小値をみると4期のSB175が75cmと突出しているが、これを除くと最大値は各時期50~60cmの深さになる住居が多い。最小値は平均値と同様の特徴を有する。1~8期までのうち2・3期のSB166は10cmとかなり浅いが、これは特に浅い住居址で、一般的に



第155図 竪穴住居址壁高時期別変化図

は25cm前後の壁高が多い。11期以降になると最小値は15～20cm前後が目立ち、平均値と同様に10cm程浅くなっている。また、11期以降の住居で注目できることは同一時期に極端に深さの異なる住居址が近接して存在することである。例えば、14期のSB120は壁高が5cmしかないが、近接するSB123は40cmと深い。実際の生活面は測定値よりもかなり高いと推定できるが、このような例がほかにも数例認められ興味深い現象である。これが住居構造の異なるのか、機能差なのかは本遺跡の資料だけでは断定できないが、資料の増加を待って検討されるべき課題と思われる。

次に床面積と壁高の関係について整理する。結果から示すと、この両者には規則的な相関関係はみられない。例えば、1期のSB155は床面積が31.9㎡で深さ55cmを測るが、同じ深さのSB161は12.23㎡の小型の住居址である。また、13期のSB117は床面積が18.27㎡、深さ50cmであるのに対し、ほぼ同規模のSB183は20cmの壁高しかない。このように同一規模でも壁高がまったく異なったり、逆に壁高が同じでも規模が異なる例が各時期頻繁にみられ、図化してもばらつく傾向のみが目立つ。

以上、住居址の壁高についてみてきたが、時期を追うに従い、住居規模が縮小化する傾向は壁高にも反映することが分かった。但し、これは相対的な在り方であり、床面積との間に規則的な関係を有するものではない。このような中で11期以降に存在する極端に浅い住居址、例えばSB119・120などはカマドの痕跡が不鮮明な状況と合わせて住居址の機能や構造を考える上で注目される。

(5) カマドについて

竪穴住居址で重複などによってカマドが攪乱されている例を除き、本遺跡でカマドの確認できなかった住居址はSB211の1軒と中世の住居址の3軒があるのみで、竪穴住居址の大半はカマドを有する。本項ではそのカマドの特徴を抽出するため、カマドの位置、形態変化に重点を置き分析を加える。

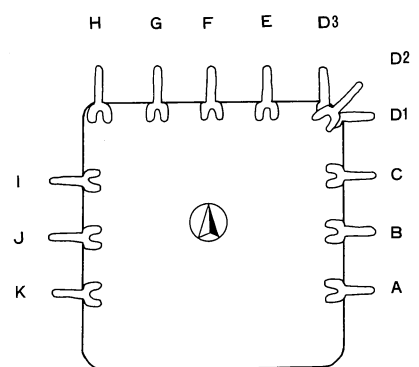
ア カマドの位置

カマドあるいはその痕跡を確認できた238軒を分析の対象とした。本遺跡の場合、カマドを設置する壁は南壁を除いた三方向にみられる。これらの位置を各壁ごとに分類し、時期別の構成を整理したのが第53表である。なお、北東隅にあるカマドは煙道方向が三種類みられることからこのカマドだけD1～3の三類型に分けた。また、この類型で煙道が不明なものはカッコ内に入れて処理している。

住居址の主軸を分析した際、本遺跡の場合東カマドが圧倒的に多いことを指摘した。第53表の数値もこれを端的に物語る。これとは別に壁面のどの位置に設置されるか、という視点から時期別の構成比率を図

位置 時期	東 壁				北 壁				西 壁				
	A	B	C	D ₁	D ₂	D ₃	E	F	G	H	I	J	K
1		24										6	
2		23										3	
3		8		1								2	
4		19	1										2
5	1	11					1					7	1
6		1						1					
7		5					1	2	1			1	
8		15										5	
9		2						1				2	
10		3		1									
11		3	2	4	(1)				1			1	
12		2	2	5	1		2			1		2	
13		3	4	14	5	(2)	1		1	1			
14		2	1	13					1	1	1		
15	1	1	1	7									

第53表 カマド位置時期別一覧表



示したのが第156図である。B・J・Fは東・北・西カマドであるが、いずれも壁の中央に設置される一群(中央カマド)である。同様に、右カマド(A・E・I)、左カマド(C・G・K)、隅カマド(D1~3・H)の四種に大別した。なお、6・7期、9・10期は資料が少ないため各々1時期にまとめた。

これによれば1期から10期までは中央カマドが主体となる。11期は隅カマドと左カマドが60%を占め、カマドが中央から左側へ移行し始める。その傾向は12期以降さらに鮮明になり、13~15期には中央カマドがほんの数例になり、大半が隅カマド、特に、北東隅に設置することが分かる。

それでは1~10期のうち、中央カマドが多いなかでそれ以外にカマドを設置するのは何故だろう。3期の隅カマド(D1)はSB64である。SB64は床面積が9㎡と当該期で最小の規模である。4期には左カマド3例、5期には右カマド2例、左カマド1例がある。左カマドはSB135・189・200の3軒で、SB189は当初左カマドであったものを中央へ移築している。SB135は床面積が8㎡に満たない小型住居社で、200も全容は知り得ないが、やはり10㎡以下の住居になると推測される。5期の3軒はSB113・114・575である。SB113は主軸方向が短い、隅丸長方形2の住居社である。

また、114も同形で最終的に西壁中央にカマドを移築する。6・7期の左カマドはSB165、右カマドはSB640で、両者とも床面積が10㎡前後の当該期では小型の住居社である。

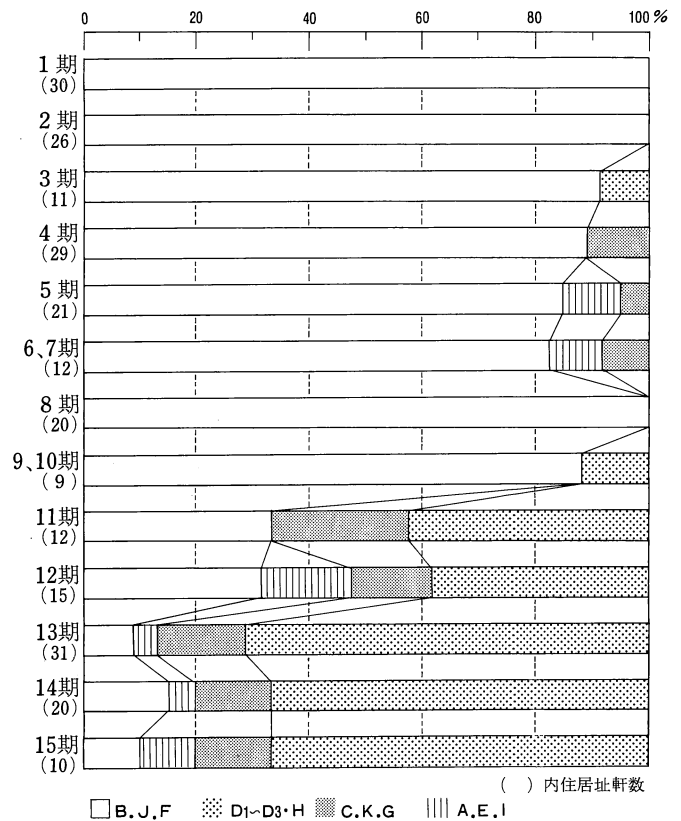
これらの住居社に共通する特徴はSB64のように小型の住居社であること、またはSB113のような長方形プランであることである。つまり、カマドを中央に配置しないことで居住空間をより広く使用したいとする必要から生じたと推定できる。したがって、10期までは一部の例外はあるが、壁の中央にカマドを設置するものが主流であり、左カマドや隅カマドは一般的に普及しない。

11期以降の状況についても詳細にみる。11期には左カマド3例、隅カマド5例がある。隅カマドの大半は全体の割合でみると東壁中央から移動する例が多い。13期以降、西カマドは14期のSB2の1軒があるだけで東・北壁、特に北東隅付近に集中する。隅カマドのうち、煙道が住居社の主軸から斜め45度振れて延びるD2類は13期に定着するが、全体的に占める比率はD1類の方が高く、15期に至るまで変化しない。

以上、カマドの位置について検討してきたが、本遺跡の場合に限って言うと、古墳時代の終末期から平安時代中頃までは特別な理由が無い限りカマドは壁面中央に設置することを厳格に守り、11期を境に北東隅付近へカマドを付設するようになるのである。

イ カマドの形態変化について

カマドの形態の変遷をみる上で、まず、焚口部の構造に着目し分類をする。分類はカマドを構築する際の壁への掘り込みの有無とその形状によってA~E類の5類に分け、壁を掘り込まない形態については袖の構築材と構築方法によって、また、壁を掘り込む函形カマドは掘り込む形状とその割合によって細分する



第156図 カマド位置時期別構成比率図

こととした。以下、分類を示すが、ここで行う分類は本遺跡のカマドの諸形態を整理するためのものであり、松本平全体を扱ったものではない。総論ではさらに詳細に検討されるが、本稿の分類とは一致しないことを断っておく。

A類……壁を掘り込まずに構築する形態である。袖の構築方法によって1～3種(A1～A3)に分類される。A1は地山を一部掘り残すものも含むが、袖を粘土だけで構築する形態である。A2は花崗岩などの大きな礫を配石状に並べて構築するカマドである。A3は人頭大程の硬砂岩や花崗岩などの礫を使用し、袖全体に礫を積み上げるように袖を構築する形態である。

B類……壁を方形に掘り込む形態である。掘り込む大きさによって2種(B1・B2)に分れる。B1は壁を深く掘り込むカマドで、掘り込む長ささと壁の比率が1：2以上のものである。B2は浅く掘り込むもので比率が1：2以下になる形態である。

C類……壁を丸形に掘り込む形態である。掘り込む大きさによって2種(C1・C2)に分れる。B類と同様に、掘り込む比率が1：2を基準にC1・C2に分かれる。

D類……壁を不整形に掘り込む形態である。類例が少ないため細分はしない。

この分類に従って時期別の変遷を概観する(第157・158・159図)。

1期にはA2・B2・B1・D類があり、A1類が全体の85%を占める。SB155はA1類では遺存状態が良好なカマドで、煙道はトンネル状に残存する。袖は一部地山を掘り残すが、この類の一部にみられる特徴である。A2類のSB176は袖に礫を用いる唯一の例で、礫を袖の手前に1個ずつ配し、袖の補強に土師器甕の破片を併用している。B1・D類は1例ずつがあるのみで当該期には普及しない形態である。

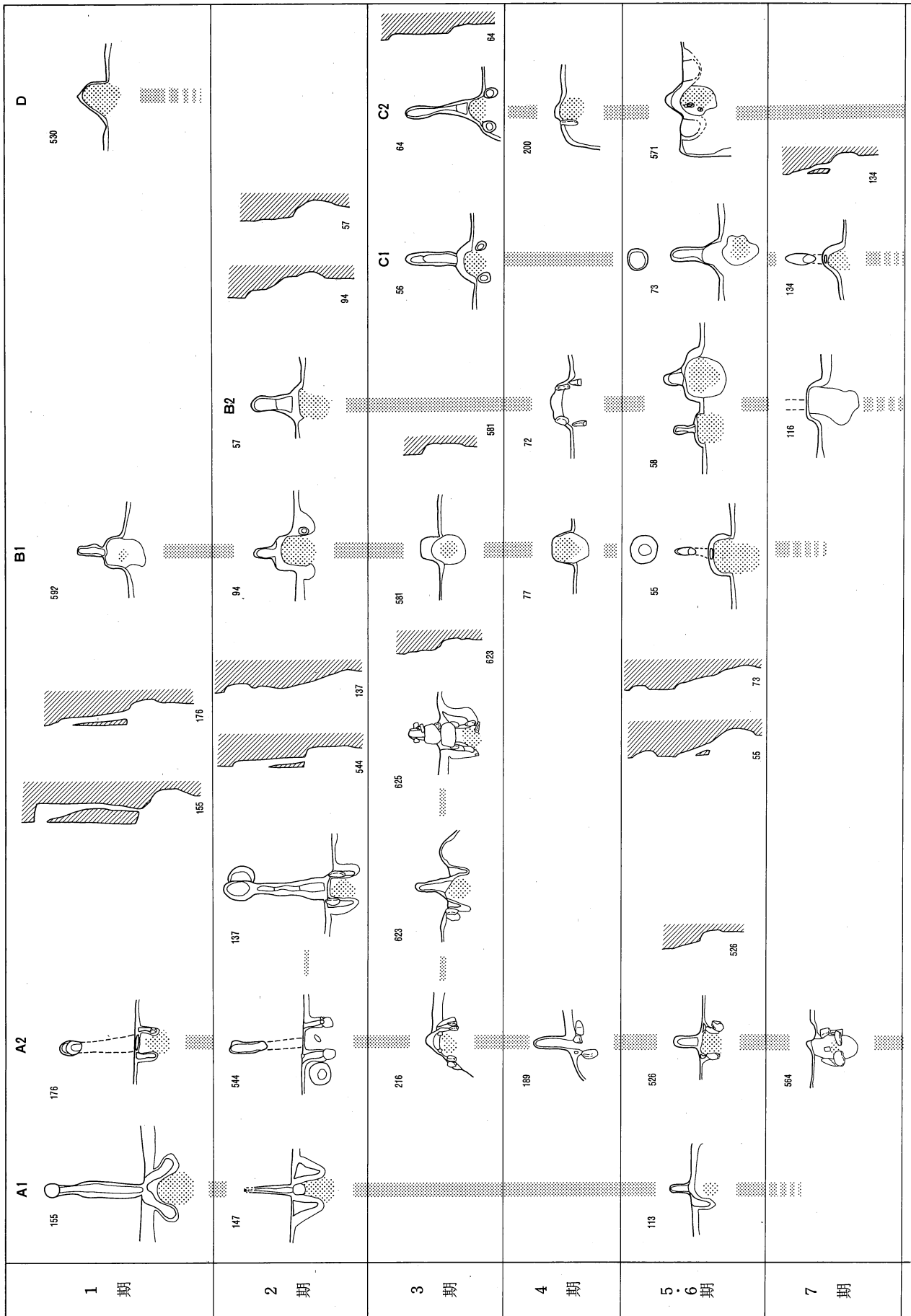
2期はA3・C2類を除いた形態がある。このうちA1類は8例で全体の50%を占める。A2類は図示したSB544・137の2例で、SB544は礫を袖の手前に、SB137は袖の奥に1個ずつ配置する。B1・B2類が5例、C1類が2例、D類が1例で壁を掘り込むカマドが多くなる。だが、袖の遺存状態が悪いものの中には壁を掘り込まない例が8例あることから、当該期もA1類が主体となると判断できる。

3期は分析対象が7例と少ないが、A1・A2・B1・C1・C2類の5種がみられる。A2類はSB216・633・625の3例で当該期には比較的多い形態であるが、礫の配置状態は3例とも異なる。SB216は袖手前に2個ずつ礫を配置し、その奥にも小形の礫を左右に1個ずつ配する。SB623は袖の奥に礫を2個ずつ組む。また、SB625は大きな花崗岩を用いて堅牢なカマドを構築する。煙道の一部にも礫を補強に使用するなど本遺跡には類例のないカマドである。一応A2類の範疇に入れたが、この系統のなかで変化したものとは考えられない。このような類例は古墳時代の鬼高期の大町市借馬遺跡(大町市教委1981)などにある。C・D類は図示したSB581・56・64の3例だけである。

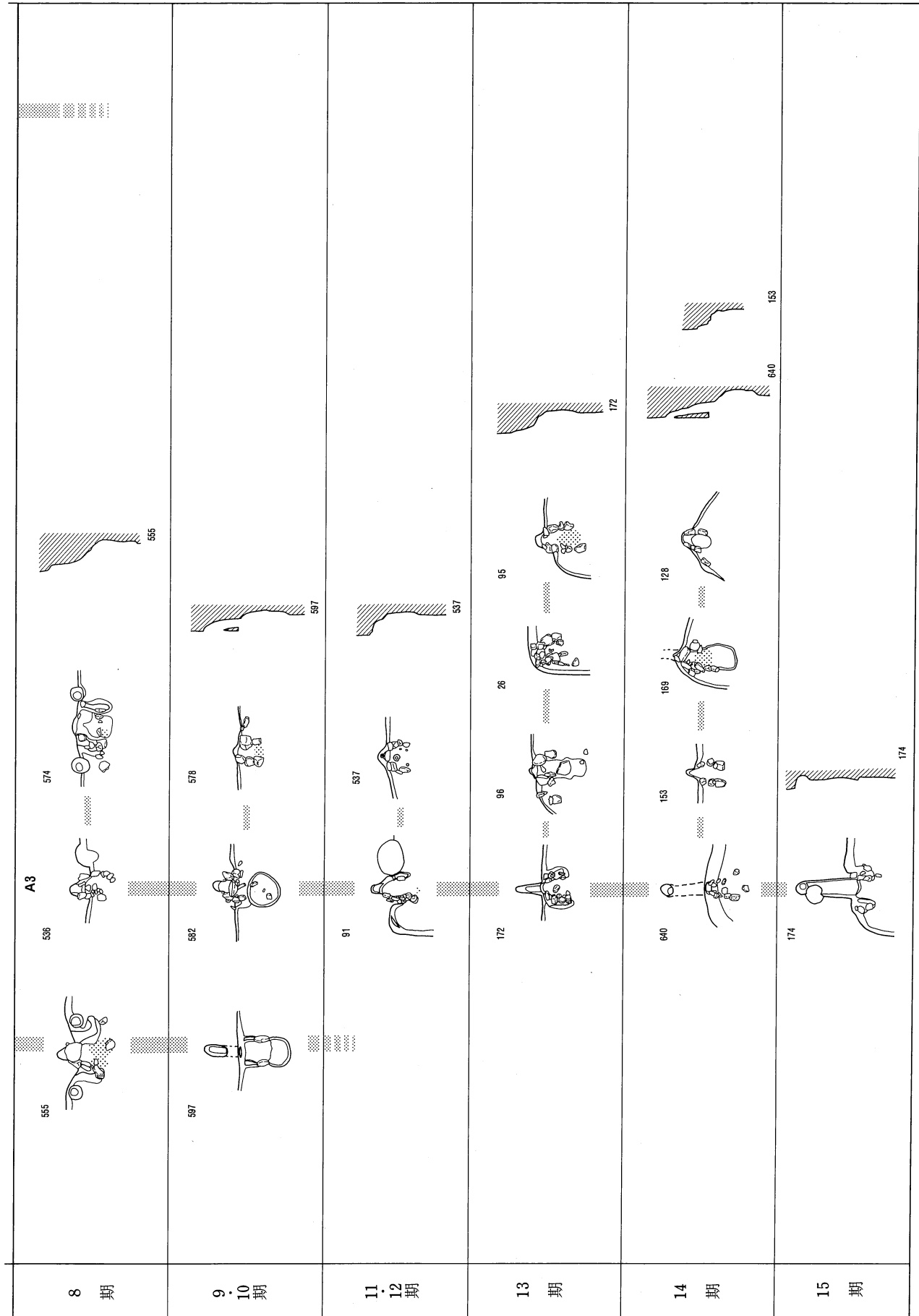
4期はB1・B2・C2類が多くなり、A1類は減少する傾向が認められる。B2類のSB79は壁を掘り込んだカマドのなかでは袖に使用された礫が原位置を保って遺存していた数少ない例で、B・C類は一般的には礫を芯材として用いたことが知れる。

5・6期はA3・D類を除いた形態がみられる。A1類はSB113の1例があるのみで6期以降はみられない。これに代わるのがB・C類で、両者の構成比率はほぼ同じである。SB55は煙道先の煙出しまで確認できた資料で煙出しは深く、大きな落ち込みになる。焚口の奥壁は床面から垂直に立ち上がり、緩く傾斜する。これと同様に、煙道を確認できたC1類のSB73の煙道はSB55と共通の特徴を有することから、函形カマドの煙道の形態を知る上で貴重な資料である。

7期の資料は6例と少ない。A2・B2・C1・C2類があり、6期と同様壁を掘り込まないカマドが全体の70%以上で、その在り方に大きな変化は認められない。A2類のSB564のカマドは袖に架設された礫がそのままの状態で落ち、支脚も遺存している。



第157図 カマド形態時期別変遷図(1)



第158図 カマド形態時期別変遷図(2)

8期にはA2・A3・C1・C2類がある。構成をみるとC類が60%を占める。だが、袖の構造の分らなかったカマドのうち壁を掘り込まない例が10軒あることから、当該期はA類が主体となり、C2類が前期までの傾向を引き継ぐ形態であると推定される。

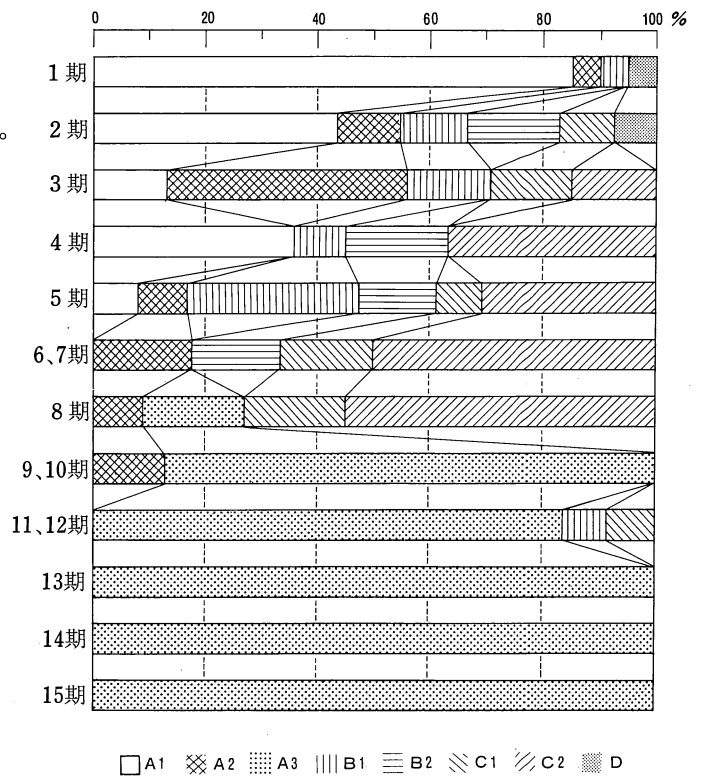
9期の資料は4例と少ないため、10期と合わせて分析している。内訳はA2類が1例、A3類が7例で、A3類が主体となることが明瞭である。A3類のカマド袖芯材に使用される礫は人頭大の硬砂岩、安山岩、花崗岩などを組むように多数積み上げて構築する。

11・12期以降の在り方はB1・C2類が1例ずつあるほかはすべてA3類である。A3類のなかにはSB28・95のように壁をわずかに掘り込む形状もみられるが、基本的な構造はA3類の系統のなかに位置づけられよう。11・12期のSB537と13期のSB26は遺存状態の良いカマドで袖と袖との間に架設された礫や支脚石も確認され、芯材の構築方法を知ることのできる資料である。煙道は14期のSB1の資料が良好である。火床から比較的低い煙道口へ緩い傾斜で立ち上がり、そのまま煙出しへ延びる。また、15期のSB174の煙道先はわずかに掘り込まれる。A3類の煙道の形態はSB1の例が一般的なものと推定されるが類例が少なく確証に欠く。

以上、各時期別に概観してきたが、各類型別にその消長を中心に整理し、まとめたい。

A1類は1・2期に主体となる形態で3期以降徐々に減少し、5期に至って消滅する。一方、これに代わるのがC・D類である。壁を掘り込む形態の由来については明瞭でないが、すでに1期には壁を不整形に掘り込むE類がみられることから、これらのなかからB1類のような形態が生成し、一般的に普及すると推定できる。2期にはすでにB1・B2・C2類が并存し、C1類を含めた構成比率をみると2～4期には各類型ともほぼ同じ比率であるが、5・6期になるとB2・C2類が徐々に増加する傾向が認められる。さらに7・8期はC2類がほかを凌駕する。つまり、本遺跡の函形カマドはB1→B1・B2・C1→B1・B2・C1・C2→B2・C1・C2→C1・C2→C2への変遷が認められる。但し、これらも形態変化の画期となる時期の限定は本遺跡だけの資料では不十分である。8～9期にかけてA3類が出現する。A2類と9期に一部が并存するが10期以降のカマドの形態は例外なくA3類になる。このようにA3類がほかの形態を一掃する形で出現する背景にはどんな理由があるのだろうか。カマドの芯材の一部分に礫を用いる方法は1期以降すでにみられる技術であるが、袖全体の芯材に礫を多く使用するのはより堅牢なカマドを希求したからに他ならない。ちょうど9期は煮炊具にも大きな変化のみられる時期で、土師器の甕に代って羽釜が出現する段階である。すなわち、羽釜の出現はカマドの構造変化を必然的に引き起こし、より頑丈なカマドであるA3類を誕生させたと考えられる。そのA3類も中世の竪穴住居址まで継続することなく15期をもって終焉を迎え、住居構造の一部として古墳時代以降みることができた備え付けのカマドもこれをもって終りを遂げる。

次に、カマドの煙道長・煙道口について二・三

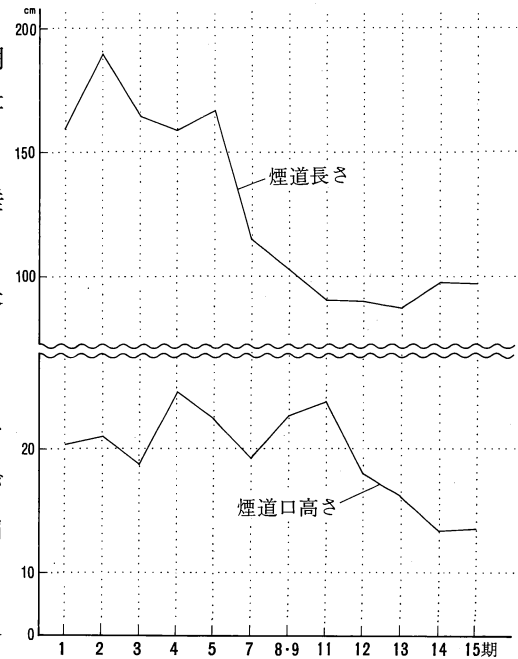


第159図 カマド形態時期別構成比率図

の特徴を整理しておく。

第160図は煙道長と煙道口の床面からの高さの平均値を時期別に図示したものである。煙道の長さは煙出しまで完全に遺存するものを分析の対象とした。そのため9期は2例しかなく、8期と合わせて平均値を求めた。また、煙道口は火床からの垂直距離を計測した。

煙道長は1～5期までは2期の1.90mを最長に1.60m程の長い煙道を有する。資料のない6期を境に7期以降は煙道は短くなり、平均値は1.15mになる。11期にかけて短小化の傾向はさらに強まり、11～15期は95±5cmの幅のなかに含まれ、ほとんど変化をみせない。このように、煙道は函形カマドのB・C群が主体となる段階に短縮化が始まり、A3類の出現と時をほぼ同じにして90cm前後の煙道になるのである。煙道長は住居構造、特に周堤や屋根構造との関連性が高い。函形カマドの場合、火床部を住居址の外側へ作り出すことでその分、煙道も極端に長いものは不要になったと推定できる。また、A3類が出現する



第160図 煙道長・煙道口高さ時期別変化図

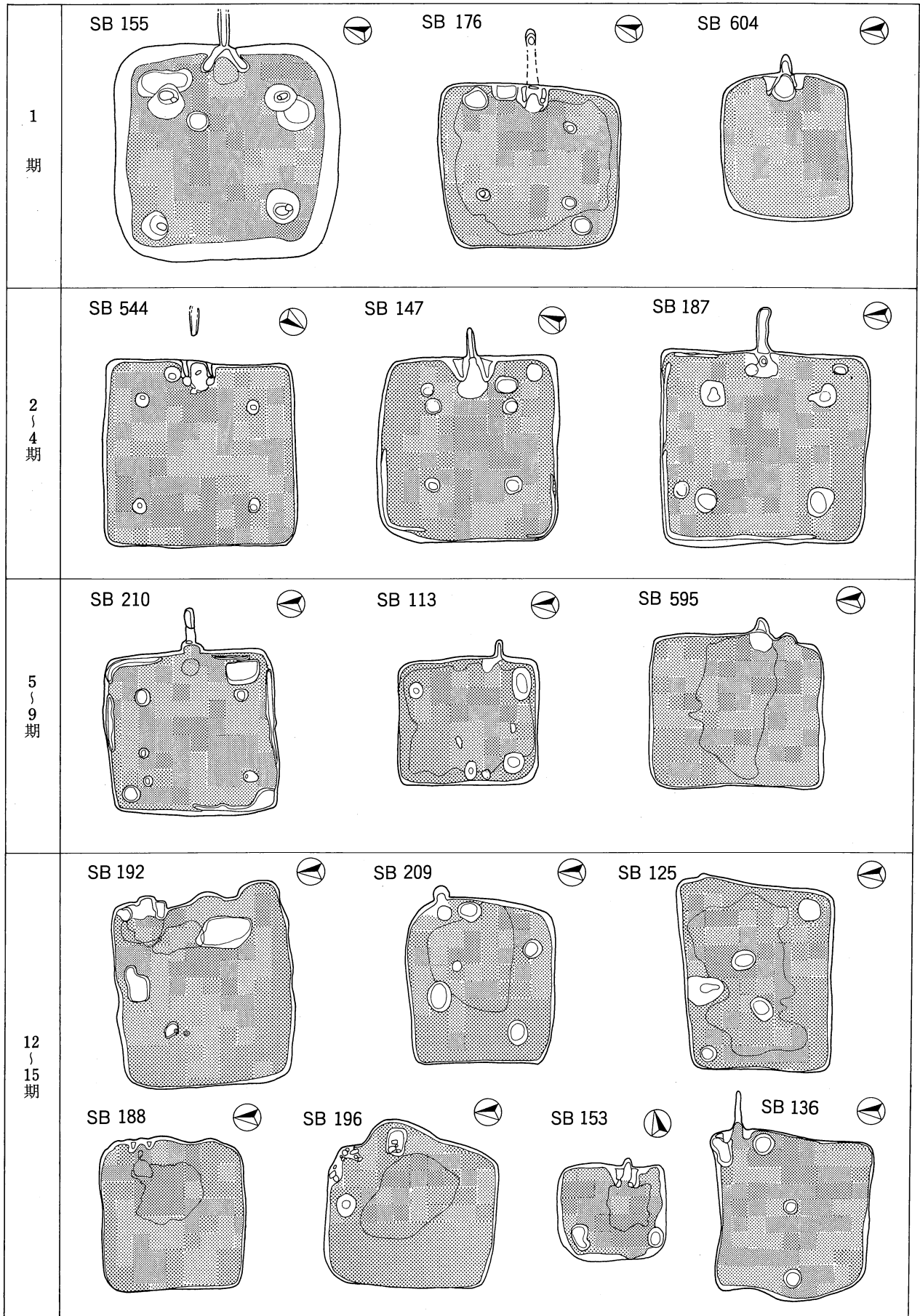
段階の住居址をみると、SB555や598のようにカマド両脇に柱穴を有する例が認められ、屋根を高くして火災を防止する工法が用いられる例がみられる。この時期、大半の竪穴住居址は無柱穴である場合が多い段階であるが、おそらくSB555にみられる技術をもって伏屋根が燃えないような工夫がなされていたと推測される。しかし、住居構造と直接結びつく資料が皆無であるため、この点については火災住居など資料の増加を待って改めて検討されるべき課題と考える。

煙道口の高さは各時期かなりばらつく傾向があるが、1～11期までは23±3cmの範囲内で変化するが、12期以降低下し始め、15期には13.75cmになる。煙道口が低下する背景にはカマドの形態変化がまず考えられるが、煮炊具の形式変化とも関連する可能性がある。いずれにせよ羽釜の出現はカマドの袖構造の変化ばかりか、火床から掛口までの距離をも短縮させたことは明瞭である。これに加えて、住居の壁高が低下する画期が煙道口の変化とほぼ共通することから、あながち無関係とも思われないが、この点については確証に欠く。

(6) 居住空間の利用について——特に、硬度計測定値を中心に——

硬度計を用いて住居構造に分析を加えた研究として八王子市石川天野遺跡での実践が知られている。(小池他1981)。この研究では床面の硬度を5段階に区分し、出入口を推定している。これとは別に、笹森健一氏や柿沼幹夫氏による『土間』、『居間』といった概念を取り入れた意欲的な分析がなされている。笹森氏は鬼高I期から国分期にかけての住居形態の変化について、鬼高II期以降の竪穴住居址の床面積が縮小化する現象に注目し、これを竪穴外周を含めた範囲内と捉えて幾つかのパターンを模式的に示した。(笹森1978)。この指摘を支持する柿沼氏は住居内を『土間』と『居間』に分け、真間・国分期の住居は「『土間』のみが竪穴化され、『居間』部分は平地化した」と述べ、笹森氏と同様の見解を示した(柿沼1979)。

両氏の研究に依拠しながら住居の出入口を想定し、集落の分析を試みたのが高橋一夫氏である(高橋1983)。氏は各住居の出入口を推定し、そこから集落内の道を想定し、住居小跡や住居跡群について考察を加えた。この分析は個々の住居の分析からその特性を引き出し、集落論へ止揚した研究として従来みられなかった視点から分析しており、示唆に富んだ論考と言える。



第161図 竖穴住居址硬度計測定模式図

本項のねらいはこれら一連の研究を受けて、硬度計測定値による床面の硬軟を捉えることにより居住空間や出入口について検討しようとするものである。

硬度は別の住居址の覆土中に床面を構築する住居址や地山の状態が異なる箇所に床面のある住居址を除き、住居址内を50cmメッシュに区切って測定した。なお、資料の活用は個々の住居址内だけで比較し、住居址間相互の比較は測定する季節、天気、時間帯や地山の状況が異なるため行わないこととした。なお、測定には土壌硬度計（山中式スプリング、強度8.0kg）を使用した。このような条件で得られた数値を各住居内4段階に区分し、模式的に図化したのが第161図である。網目の濃淡は硬度の高低を示している。なお、資料に限りがあるため時期は1期（古墳時代）、2～4期（奈良時代）、5～9期（平安時代）、12～15期（平安時代）に便宜的に区分した。

以下、時期を追って検討を加える。

1期にはSB155・176・604の3軒の資料が得られた。SB155は東カマドの大型住居址でカマドの左右に施設を有する。硬度は東壁際の施設の周辺、柱で囲まれた区域や南西方向にかけてが硬い。SB176は四本柱の住居址で東カマドの左側に2つの施設がある。硬度はカマドや施設の手前から南壁中央付近にかけてが硬い傾向を示している。SB604は隅丸長方形プランで無柱穴である。硬度はカマド手前から南西方向にかけて、特に、南壁中央にかけてが硬い。

2～4期にはSB544・147・187の3軒の資料がある。うち、SB544・147は2期に、SB187は4期に帰属する。SB544は西カマドの隅丸方形プランで4本柱の住居址である。硬度はカマド手前とその左側、東壁中央から南東付近にかけてが硬い。SB147は規格性の高い、隅丸方形の住居址である。四本柱は住居の対角線が交差する中心点と、その中心点と隅とを結んだ中間に配置される。出入口は周溝が途切れる西壁中央と推定したが、測定値もそれを裏付けており、主軸線に沿って高い数値が得られた。但し、南壁中央にも硬い箇所があり、即断はできない。SB187は東カマドの隅丸方形で、カマド左側から北・西壁にかけて周溝を巡らす。硬度はカマド手前と柱で囲まれた範囲が硬い。

5～9期の資料には5期のSB210・113、9期のSB595の3軒がある。SB210は主軸を東西方向にとる隅丸方形プランで柱穴をもち、カマド右側に施設を有し、周溝を巡らす。硬度は四本柱に囲まれた区域と南西方向にかけてが硬い。SB113は南北方向に長い隅丸長方形で、カマドは東壁南東隅寄りに位置する。硬度は南側半分が比較的高い数値を示している。SB595は東カマドの隅丸長方形で、SB113と同様にカマド手前を中心に南側半分が硬い。

10・11期の資料は得られなかった。

12期以降の資料には12期のSB192・209、13期のSB125・188・196、14期のSB153、15期のSB136の7軒の資料が得られた。SB192は北東隅にカマドを配置し、東壁は凹凸がある。硬度はカマド手前を中心にその右側の施設の周辺に沿ってが硬い。SB209もカマドを北東隅に設置する。主軸を東西方向にとる隅丸長方形の住居址でカマド右側に施設を付属する。硬度は東側半分が硬い状況を呈する。SB125は主軸を東西方向にとる。当該期では大型の住居址である。北壁中央に大きなピットをもち、硬度は壁際が全体的に軟弱であるのに対し、西壁際は列状に硬い箇所があるが、相対的にカマド手前を中心に東側半分が硬い。SB188は東壁に凹凸のある隅丸方形の住居址で北東壁にカマドを設置する。硬度はその右側手前を中心に硬い。SB196は東壁が大きく張り出す住居址でカマドは北東隅に位置する。カマド手前を中心とした東側半分が硬い傾向を示した。SB153は14期では最小規模の住居址で床面積が10㎡に満たない。カマドは北壁に設置する。測定値に明瞭な差がみられない唯一の例で、住居全体が高い数値を示している。SB136は隅丸方形の住居址で北東隅のカマド両脇に施設が付属する。硬度はカマド手前とその右側にかけてが非常に硬く、相対的に東側半分は硬い傾向が認められる。

以上、住居址ごとに検討を加えたが、これを整理すると次の特徴がある。

①1～9期の住居址で、プランが方形を呈する住居址の大半はカマドを通る主軸線に沿った部分、並びにカマドから南壁中央にかけてが一般に硬い。また、SB544のように南側半分が硬い傾向を示す住居址もみられる。プランが長方形になる住居址の場合はSB604の例で分かるように南側半分が硬く、SB113やSB575のように主軸方向が短い住居址はカマド手前を中心とした南側が硬い。

②12期以降の住居址の大半が東側半分が相対的に硬い。

さて、これらの特徴に基づき住居構造を想定すると、①の方形の住居址のうち、主軸線に沿った範囲が硬くなる、例えばSB155・187のような住居址はカマドの対辺となる東・西側が出入り口となり、柱穴と北・南壁との空間を扉間または寝間の空間として利用したと推定される。また、SB544のような住居址は南壁に出入り口を設置し、北側半分为居間としたと思われる。①の長方形になる住居址はいずれも南壁に出入り口を設け、住居址の南側半分为土間となっていた可能性が強い。特に、SB113や595のようにカマドを中央に設置しない形態はこれらの帰属する時期には少ない。この点についてはカマドの分析で指摘した際、狭い住居内をより広く利用しようとするためと考えたが、硬度計の測定値もこれを裏付けている。

②のようにカマドを北東隅に設置する住居址の場合、東側半分为土間に、西側半分为居間または寝間といった空間として利用したと推定されるが、出入り口については東壁や南壁の隅寄りなどが考えられる。特に、東壁が直線的にならず、大きく張り出す住居址が12期以降みられることは東壁に出入り口を有していた可能性を示唆するものと考えられよう。

このように、カマドが北東隅に寄るのを契機として住居構造にも変化をもたらすことが分かるが、逆に言えば、居住空間の変更をするためにカマドの位置が移動したとも考えられる。しかし、カマドの位置が北東隅に移動する背景については本遺跡の分析結果だけでは不十分で、その可能性を指摘するに止まり、今後の課題として残る。

ところで、12期以降の様相は文頭で掲げた柿沼氏の推察とは一致しない。少なくとも、本遺跡では竪穴住居址の外周に柱穴は確認されず、本遺跡以外でも柿沼氏の指摘するような居間を竪穴の外にもつ遺構は管見にして知らない。硬度の測定値は明らかに竪穴住居内での空間の使い分けを示しており、今のところ筆者は、古代の竪穴住居址は徐々に縮小化するものの、一般的な居住空間として利用されていたと考えている。但し、柿沼氏の指摘は竪穴住居址の変遷過程を考える上で十分予想される展開であり、松本平周辺でもそのような形態の遺構は中世I期に至って初めてみる事ができる。

2 掘立柱建物址の分析

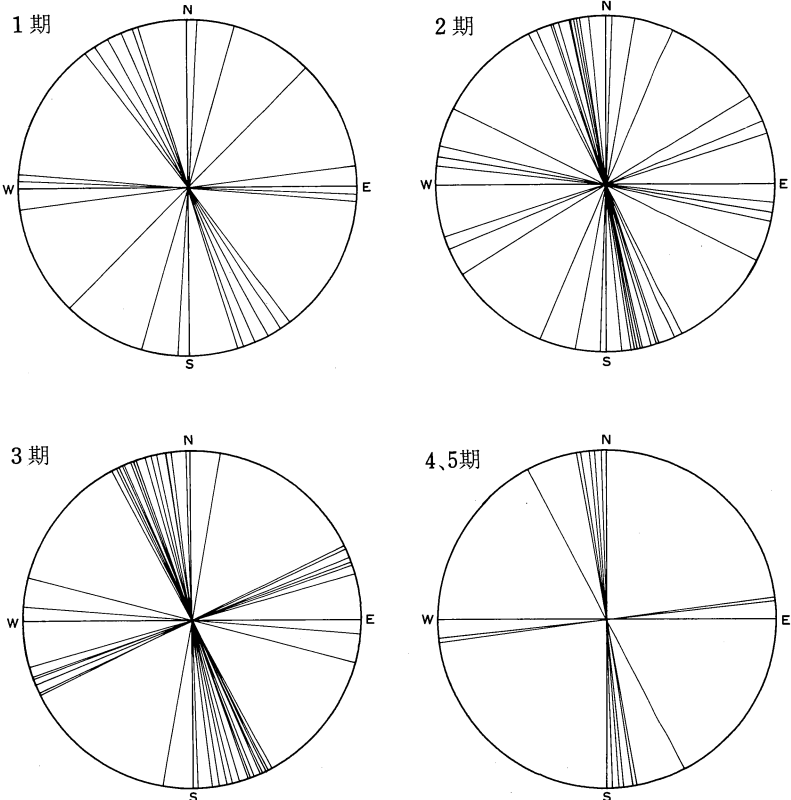
本遺跡で確認した掘立柱建物址は竪穴住居址の3分の1に相当する104棟である。建物址の帰属時期は1期から5期にかけてが大半で、それ以降中世に至るまで継続して展開する状況はみられなかった。

第54表は地区別の建物址の構成を示したもので、各地区の構成は多少のばらつきがあるが、全体的に2間×2間や3間×2間の建物址が多い。このうち、全体の半数が分布する北部D区の在り方は注目できる。この地区には3間×3間以上の建物址が10棟を数え、他地区と比較すると際立った構成である。これだけの棟数が一箇所に集中する様相は隣接する遺跡でもみられず、本遺跡の性格を考える上でも重要な遺構である。

	A区	B区	C区	D区	E区	合計
1×1		2		1	1	4
2×1		1		5		6
2×2	2	7	6	13	2	30
3×2	6	2	5	12	3	28
3×3	1	3		4		8
3×4		1				1
4×3		1		5		6
5×3				1		1
不明	4		2	14		20
合計	13	17	13	55	6	104

第54表 掘立柱建物址地区別一覧表

本項のねらいはこれら建物址の主軸や規模、柱間寸法などの分析を加え、本遺跡の特徴を抽出するとともに、その機能についても考えようとするものである。なお、資料操作の際、時期を限定できなかった遺構、例えば、2～3期に帰属すると判断した建物はその下限である3期に入れて分析している。



第162図 掘立柱建物址主軸時期別分布図

(1) 主軸について

掘立柱建物址の主軸分布を示したのが第162図である。なお、5期以降の建物址は4棟と少ないため、4期に加えて図化している。以下、時期別に説明を加える。

1期には15棟の資料がある。内訳は東西棟4棟、南北棟11棟と南北棟が多い。N-45°-Eの位置にあるST524は東西棟と南北棟の境界にあるが、一応南北棟に含めた。東西棟は真東・西からわずかに振れる。南北棟はN-15～37°-Wの振れ幅に6棟が集中するが、ほかは東へ振れるものがみられ、全体的にばらつく傾向が認められる。

2期には1～2期とした掘立柱建物址を含めた28棟がある。内訳は東西棟9棟、南北棟17棟でやはり南北棟が多い。東西棟はN-63～83°-WとN-58～73°-Eの2つの範囲に主軸が揃う。前者は南部の、後者は北部に分布する建物址で、地区によって振れ幅が異なることが分かる。南北棟でも同様な特徴がみられる。南北棟はN-23°-EからN-27°-Wの50度の振れ幅があるが、南部にある建物址は最も南へ振れるST36がN-13°-Wで、それ以外は真北を挟んで東側へ振れる。一方、北部の建物址はN-9～27°-Wの範囲に入り、地区によって主軸を揃える特徴が認められる。

3期には2～3期の建物址を含め23棟がある。内訳は東西棟8棟、南北棟15棟である。東西棟は東西の軸線から北へ振れる6棟と南へ振れる2棟があるが、北へ振れる建物址はいずれも北部のものである。南北棟はN-6～27°-Wの範囲内に大半が入る。これは東西棟の北へ振れる一群と東西、南北棟の違いこそあれ、基本的にほぼ同じ振れである。東へ振れるST23はN-10°-Eで南北棟のうち、北部に位置する建物址はN-8～4°-Wの間にいずれも含まれ、振れ幅にばらつきのみられる南部の一群とは様相を異にしている。

4期には3～4期、4～5期とした建物址を含めた16棟がある。内訳は東西棟5棟、南北棟11棟がある。東西棟は真東に主軸をとる3棟を含め、東西方向を意識した主軸が多い。南北棟はST28がN-27°-Wと西側へ大きく振れるのを除いて、N-0～15°-Wの15度の範囲に集中し、比較的ばらつきは少ない。東西棟、南北棟とも方位を意識した主軸に揃える傾向が認められる。なお、当該期の建物址の大半は南部に位置する。

以上、時期別に概観してきたが、特徴を整理すると、

- ①各時期とも南北棟が多い。
- ②時期が下るにつれ主軸のばらつきは少なくなり、主軸を方位に揃えるようになる。
- ③主軸がばらつく1～2期のなかでも北部に位置する掘立柱建物址はN-20±10°-W、東西棟でいう

と、N-70±10°-Eの範囲内に集中し、北部では比較的早い段階から主軸を揃える傾向が認められる。

の3点に集約される。特に、③は南部と北部の統制力の差を端的に物語る結果として重要である。

この特徴を竪穴住居址でみた分析と比較すると、北部D区の竪穴住居址の主軸は掘立柱建物址のそれと一致しており、これ以外の地区も同様に、竪穴住居址と掘立柱建物址の主軸は基本的に揃えて構築したと考えられるのである。

(2) 規模について

ここでは掘立柱建物址の各形態と床面積との関係など規模全般について分析を加える。

第163図は各建物址の桁・梁方向の総長と床面積との関係を形態別に図化したものである。また、第55表には形態別の床面積の平均値、桁・梁方向の総長の最大値と最小値を掲げた。以下、形態別に説明を加える。

1間×1間の建物址は4棟で、建物址総数の3%と本遺跡では少ない形態である。このうち、ST55が最大規模で、床面積は8.85㎡を測るが、いずれも平均値の周辺にドットは集中する。

2間×1間の建物址は6棟ある。ST541は床面積が13.74㎡と最大規模であるが、この形態の大半は10㎡以下で、平均床面積は1間×1間のそれよりわずかに大きい。

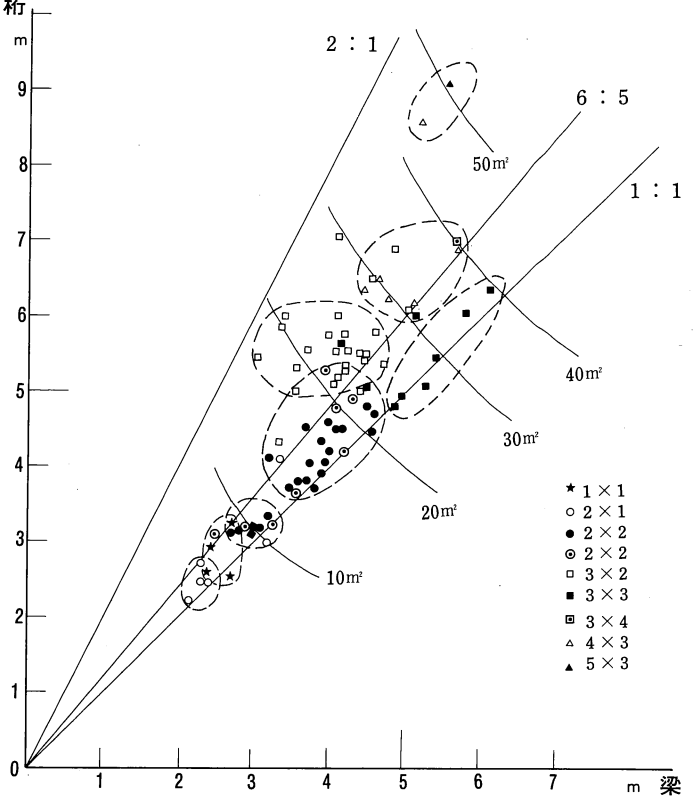
2間×2間の建物址は全体の29%に相当する30棟を数え、本遺跡で最も多くみられる形態である。床面積は最小のST577が7.26㎡、最大規模のST52が22.73㎡でかなりの幅が認められる。平均値は15.12㎡であるが、10㎡前後と13~23㎡の2群に分布は集中する。

3間×2間の建物址は28棟で、本遺跡では2間×2間のそれと並んで多い形態の建物址である。床面積は20㎡以下になる例もみられるが、大半が20~30㎡の間に分布する。しかも桁・梁方向の総長比が6:5の軸線周辺にドットは集中している。

3間×3間の建物址は8棟を数える。このうち、ST11・20は南面・東面に庇をもつ。この形態の形状は方形を呈する例が一般的であるが、ST567は長方形で3間×2間に近いプランである。平均床面積は28.98㎡であるが、最小のST567が23.35㎡、最大がST549の38.67㎡で、その分布はばらつく。

3間×4間の建物址はST19の1棟だけである。床面積は39.48㎡で大型の建物である。

4間×3間の建物址は全体総数の5.8%にあたる6棟がある。このうち、ST42・566は西面に、ST538は南面にそれぞれ庇を有する。ST538は床面積が44.32㎡でこのなかでは最大規模の建物址である。平均床面



第163図 掘立柱建物址規模別分布図

形態	棟数	平均床面積 (㎡)	桁行総長(m)		梁行総長(m)	
			最大	最小	最大	最小
1×1	4	6.87	3.24	2.55	2.73	2.06
2×1	6	7.71	4.10	2.42	3.35	2.15
2×2	30	15.12	5.28	3.08	4.62	2.53
3×2	28	23.23	7.05	4.31	5.04	3.12
3×3	8	28.98	6.34	4.78	6.10	4.14
3×4	1	39.48	7.00	—	5.64	—
4×3	6	33.85	8.54	6.18	5.68	4.46
5×3	1	50.30	9.08	—	5.54	—

第55表 掘立柱建物址形態別一覧表

積は33.85㎡だが、分布は固まらず、ばらつく傾向がみられる。

5間×3間は西面に庇を有するST560の1棟だけで、床面積は50.3㎡、本遺跡最大の建物址である。

続いて、形状についてみてみよう。形状は方形と長方形の二種に分けたが、桁・梁方向の総長比率が6：5になる軸線を境に、6：5を越える建物を長方形、下回る建物を方形とした。第163図によれば、1間×1間・2間×1間・2間×2間・3間×3間の建物址は方形を、また、3間×2間・3間×4間・4間×3間・5間×3間の建物址は長方形をそれぞれ基本形にすることが分かる。方形の建物址の場合、桁と梁の比率が1：1になる例は少なく、10：9前後が多い。一方、長方形になる建物址は比率が10：7以下になる例も3間×2間の建物址に数例みられるが、大半が5：4または4：3前後の比率が多く、極端に桁方向の長い建物址は少ない。

第163図のなかの破線はドットの集中範囲を示したが、これをみると形態の枠を越えて規模が一致する状況に気が付く。この点をさらに詳細に検討するため第164・165図を参考にみてみたい。

第164・65図は各形態と床面積との関係に絞って、形態不明の建物址を除いた本遺跡すべての建物址を模式的に図化したものである。図の横軸にとった床面積別に各形態の建物址をみると、柱間数に関係なく形状や面積が近似する建物址が多いことを可視的に示している。例えば、1間×1間の建物址はいずれも床面積が5～10㎡の範囲に含まれるが、2間×1間のST558・559・572・573・577・45の6棟、2間×2間のST51・524・27・562の4棟は10㎡以下の建物址という点で共通し、形状も変わらない。つまり、これらは柱間数を除くとほぼ同じ形態の建物址とみることができよう。同様に、3間×3間のST567・50・20・11・46なども3間×2間の25㎡前後の建物址と共通する。さらに、3間×3間のST549と4間×3間のST42や3間×3間のST548・549などもほぼ近似した形態と言える。このように柱間数による形態とは別に、小型の建物址だけでなく、2間×2間と3間×2間との間に、また、3間×2間と3間×3間、4間×3間の間に、さらに、3間×3間と3間×4間、4間×3間との間でも柱間数を越えて形状や床面積が近似する特徴が認められる。これは特に、建物址の機能を推定する上で重要な視点となろう。

次に、柱間の寸法についてみてみよう。

第166図は1間×1間と資料の少ない5間×3間の建物址を除いた各形態の桁・梁方向の柱間寸法の分布を図化したものである。掘立柱建物址の柱間の寸法はひとつの建物址のなかでも幅があるために桁・梁方向の総長を柱間数で除算した数値を採用することとした。

2間×1間は単発的に梁の長さが大きい2例があるが、概ね桁方向が1.20～1.47mの間に分布し、梁方向はその2倍に相当する233±2cmの範囲に集中する。

2間×2間は建物址によってかなりばらつく傾向がある。桁方向は158±5、188±5、207±5、222±2、242±6cmの5つのブロックに分かれる。一方、梁方向も140±2、181±3、200±5、228±2cmの4つの集中がみられる。建物址の形状は方形になる例が多いが、柱間の寸法も桁方向の158±5cmと梁方向の140±2cmが対応するように、近い数値相互が対応する。この形態については先に床面積から2つの群に分かれることを指摘したが、第166図の分布状況もこれを物語る。

3間×2間は桁方向が168±3、181±4、195±5cmにの3つの範囲に分布する柱間が多い。一方、梁方向は207±5、224±4、240±10cmに入る。2間×2間の建物址と同様に、桁方向の短い寸法と梁方向の短い寸法が対応する。

3間×3間は形状が方形の建物址が大半であるため桁・梁方向の寸法はほぼ等しい。桁は183±3、200cmに集中する。梁は167±2、203cmの範囲に分布する。

4間×3間と3間×4間の建物址は柱間の寸法は比較的短く、桁は165±3cm、梁は148±6cmに入る。

以上、各形態別にみてきたが、その特徴は3点に集約される。

	1 × 1	2 × 1	2 × 2	2 × 2 (総柱)	3 × 2
5 m ²					
10 m ²					
15 m ²					
20 m ²					
23 m ²					

第164図 掘立柱建物址形態別構成図(1)

	3 × 2	3 × 3	3 × 4	4 × 3	5 × 3
25m ²					
30m ²					
35m ²					
40m ²					
55m ²					

第165図 掘立柱建物址形態別構成図(2)

- ① 1間×1間の建物址を除いて、柱間の寸法は2.40m、尺に換算すると和銅の大尺(2.42m)を越える寸法はほとんどみられない。それを越える場合には柱間数を増やす。
- ② 建物址の規模が大きくなるにつれ、柱間の寸法を短くする。
- ③ 消極的ではあるが、桁方向と梁方向の寸法が対応し、各建物址に一定の規格のあった可能性が考えられる。

柱間寸法は当時の基準尺度とどのような関係にあるのか、もっとも興味深い問題であるが、残念ながらそれに対する解答は得られなかった。また、時期別な変化についても規則性は認められない。

(3) 掘り方について

ここでは掘り方、特にその形状について検討する。掘り方の形状は方形と長方形の二種に分けたが、遺跡全体では円形57軒、方形38軒、円形と方形とが混在するもの9軒で、円形の掘り方が目につく。

これを時期別にみると1期は円形の掘り方が15軒中13軒と方形を凌駕する。2期以降は顕著な特徴は見出せない。また、形態別にみると1間×1間、2間×1間の建物址に円形になる例が多い傾向が認められた他は特筆すべき特徴はない。

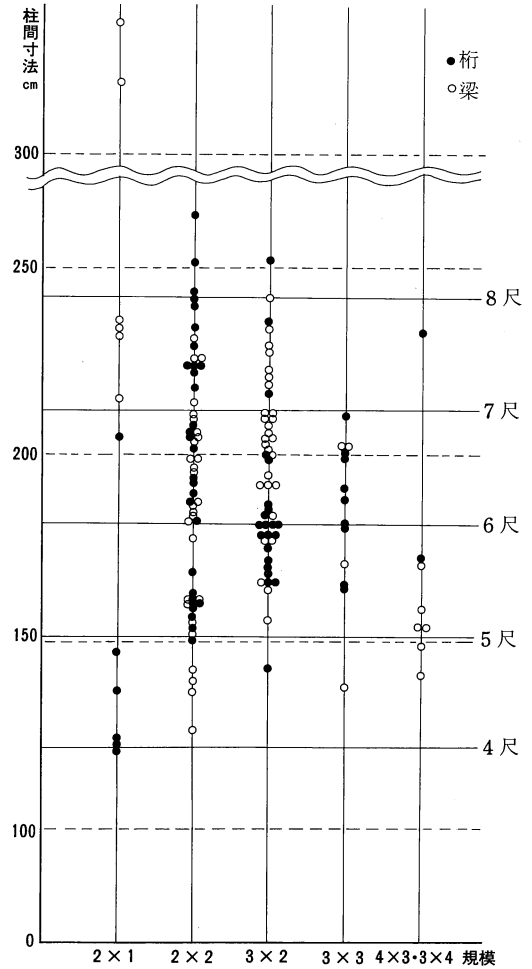
ところが、地区別の構成を比較すると興味深い。南部A区では円形1に対し方形12軒、B区では円形15に対し方形2軒、C区では円形10に対し方形3軒、D区では円形29に対し方形18軒、E区では円形2に対し方形3軒で、地区によって偏在性が認められる。特に、円形の掘り方を選択する地区が多いなかで方形が圧倒的に多い南部A区の在り方は注目に値する。ここで大胆な推測が許されるならば、このような違いは掘立柱建物址の構築者の違い、すなわち習慣や技術の違いを示唆するものと推定され、集落の構成をみる上でひとつの重要な視点となりうる可能性がある。

(4) 掘立柱建物址の機能について

掘立柱建物址の機能については千葉県山田水呑遺跡での分析が著名である。山田水呑遺跡では倉庫、住居、作業所、納屋といった種類をあげ、10㎡以下の建物址を倉庫、15㎡以上は作業所、その中間の面積の納屋といった分類基準を示した(石田広美1979)。

本遺跡の場合、このような機能に分類するのは難しいが、高床構造になると推測できる2間×2間の総柱建物址を手掛かりに若干の予察を加える(第164・165図)。

本稿では掘立柱建物址を住居とそれ以外の例えばクラなどに大別して考えたい。本遺跡の総柱の建物址はいずれも2間×2間の形態だけにみられ、まずクラを想定してよいだろう。この形態の床面積は7.79~20.74㎡までの幅があるが、これを目安に総柱以外の建物址をみると、一辺4.5m以下の方形の建物址は概ねこれと同種の機能を有すると考えられる。すなわち、1間×1間、2間×1間、2間×2間の建物址のうち20㎡に満たない大半は住居以外の機能を想定できるのである。なお、3間×2間の建物址のな



第166図 掘立柱建物址形態別柱間寸法分布図

かに、20㎡以下の建物址がみられるが、この形態の形状が長方形を基本形とすることを考慮すると住居と判断するのが妥当であろう。また、方形の建物址が13㎡を境に2つの群に大別されることは示唆的である。機能の違いを物語るものかは明瞭でないが、13㎡以下のそれは山田水呑遺跡で提示した作業所や綱屋といった機能が十分考えられる。しかし、残念ながら現段階ではその機能を限定できる根拠は構造面からでは導き出せない。

以上、掘立柱建物址の機能について考えてきたが、本遺跡の場合に限ってみると、2間×2間の総柱建物址はクラを、3間×2間を除いた20㎡以下の建物址の大半はクラなど住居以外の機能を想定してよいだろう。なお、この20㎡の面積は、竪穴住居址に数多くみられる床面積であり、2間×2間の建物址のなかには住居として使用されたものもかなり含まれると考えられ、床面積や形態だけで一概に機能を限定できないことを追記しておく。

第2節 遺物の分析

本節では金属製品、石製品、文字関係資料などの出土状況などについて簡単に整理し、若干の検討を加える。これらの遺物に関する詳細な総括的記述は総論に譲り、ここではあくまでも本遺跡の特徴を抽出することを目的として取り上げた。

1 金属製品の出土状況について

ここでは金属製品のなかでも特に、鉄製品の出土状況を中心に検討を加える。

本遺跡出土の鉄製品・鉄滓の総点数は490点を数える。第56表は竪穴住居址出土の各器種の時期別の出土点数を示したものである。これによれば、遺構数の少ない6期を除いた各時期から鉄製品が出土しており、時期が新しくなるにつれ点数が増加する傾向が認められる。

器種別の傾向をみると刀子、鎌、板、棒状の不明品が各時期を通じて出土し、点数も比較的多い。各器種とも13期以降に増加する傾向があるが、紡錘車や鉄鍬などはその最たる例である。時期の判別できた住居址から出土した紡錘車は総数17点のうち11点が13期以降に集中する。同様に、鉄鍬も半数に当たる13点がこの時期の遺構から出土している。これ以外の器種は点数が少ないためその傾向性を本遺跡だけの資料で指摘するのは困難である。

各時期別の出土状況をさらに詳細にみるために、鉄製品の竪穴住居址1軒当たりの平均出土点数をみてる(第167図)。これをみると、1期から7期にかけては1軒平均0.4～0.6個の鉄製品があるのに対し、8期に若干の増加傾向が認められ、9期以降では12期が0.7個と少ないのを除くと、1.0～1.6個で先に指摘したように時期が新しくなると鉄製品の量が増加することが明らかである。この数値だけをみると、15期の平均値は1期の3～4倍に相当する。なお、鉄滓も同様の傾向を示している。

この結果は鉄製品の普及率を反映する数値と考えられ、本遺跡の場合に限って言うと、8～9期を画期として普及率が高くなると判断していいだろう。

ところで、この平均値だけをみると9期以降は1軒の住居址から1点以上の鉄製品が出土していることになるが、実際はどのようなのだろうか。第168図は時期別に何軒の竪穴住居址から鉄製品が出土しているか、その構成比率を図化したものである。9・10期に属する竪穴住居址が各々8、4軒と少ないため高い比率を示しているが、1期から8期までは鉄製品は30～40%の竪穴住居址から出土している。ところが、9期以降は50～70%と高い数値を示している。すなわち、1軒当たりの平均出土点数と同様に、やはり8～9期を境にして各竪穴住居址から出土する鉄製品はかなり高い頻度をもって出土していることが分かる。

それでは1軒の住居址には一体どれだけの鉄製品が所有されていたのだろうか。各竪穴住居址から出土した鉄製品の帰属が明らかにできない現状で、これに対する解答は的確に出し得ないが、火災住居と認定したSB2など、2軒の住居址を例に予察を加える。

SB2は突発的な原因による火災住居址と判断した住居址である。この住居址からは刀子6点、鎌2点、芋引鉄・紡錘車・棒状不明品各1点の計11点があり、このほか鉄滓も5点(295g)が出土している。鉄製品は食器と同様に、カマド反対側の東側に散在し、層位も床面付近から出土する例が多い。食器の大半は完形品で、鉄製品を含めたこれらの遺物はこの住居址に帰属した可能性が高いものと認識される。

また、SB1はSB2と同じ14期に帰属し、刀子・鎌各2点、鉄鍬・板状・管状不明品各1点の計7点が出土した。この住居址からは大量の食器が床面から出土したが、その大半はカマド焚口前に一括廃棄されたものである。鉄製品もこれらの食器と混在して出土しており、SB1に帰属する可能性が高い遺物と推定される。

この2軒から出土した鉄製品の内訳は農具としての鎌と、刀子・紡錘車などの工具に大別され、10点程の鉄製品を所有していたことが推察される。この事例から14期の住居址の大半はこれと同様の所有形態で

器 種	古 代															中 世			近 世	不 明	合 計		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	不明	1	2				不明	
鋤・鍬	1														1						1	3	
鎌	2	1	1	1			1	1	1		1	1	2	8	2				1			23	
刀 子	5	8	3		5		6	7	5	4	7	4	9	19	7				3	1		93	
斧				1				1														2	
鑿													1									1	
鈍													1	1								2	
釘	1	1	1						1				2	5	1			1		7	6	26	
鋏													1						2			3	
容 器														1								1	
燧 鉄																			1		1	2	
鍬	2	2	1	1	1			2		1	1		4	4	2			1				22	
金 具	2	1			1							1	4	2								11	
芋 引 鉄							1							1								2	
紡 錘 車	1	1					1	1	1			1	3	6	2						4	21	
棒 状	方 形	6	2	2	2	3		2	2	3	2	1	2	8	4	6	1		1		1	2	50
	円 形		1			1			3		1			1	1	1	1					3	13
	長 方	1	1	2	1	3		2	4				1	1			1				1	6	24
	不 明							1	1	2				1		1					1		7
板 状	鍛 造	1	1		2	2			1	1	1			3		1	2				1	16	
	鑄 造												1		1						1	3	
	そ の 他			1										1	1		1				2	6	
環 状				1				1						1								3	
管 状		1													1							2	
塊 状	1	1	1						1		1											5	
鉄 片										1			3								2	6	
その他・不明				2							2			2	1							7	
合 計	23	21	12	11	16	0	14	24	15	10	13	11	45	57	21	6		2	8	17	23	354	
鉄 滓	2	5		14	6		5	20	5	4	7	3	32	24	8			3	4			142	

第56表 鉄製品・鉄滓時期別出土数一覧表

あったと考えられる。この2軒以外に遺存状態が良好な遺構がみられないため、14期以外の所有形態については十分な検討はできないが、4点以上の鉄製品や鉄銚を出土した住居址を時期別に取り上げて参考とすると、3期のSB37(4点)、5期のSB71(4点)、8期のSB574(4点)、10期のSB583(4点)、11期のSB537(4点)、13期のSB143(7点)・168(9点)、14期のSB1(7点)・2(11点)・153(4点)・220(4点)、15期のSB27(5点)があり、10期以降、特に13期から15期にかけての住居址から多量に出土する例が目立つ。

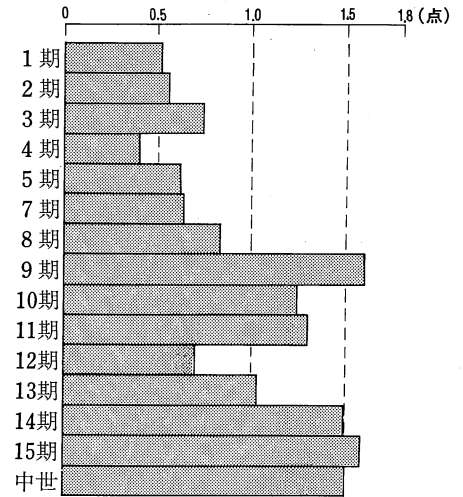
鉄製農具の在り方は古代から中世にかけての生産に係わる課題として注目されるが、先に掲げた第56表の器種別構成と照らし合わせて、資料的制約を覚悟の上でその所有形態についてみる。農具には耕作具の鍬・鋤と穂穫具としての鎌の二者がある。前者は1期と15期に各1点ずつ出土しただけで皆無に等しい。これに対し、鎌は各時期を通じてほぼみることができる。鎌の場合、1期から9期までは3~10%に当たる住居址から出土しているが、11期に至ると10~20%の住居址から出土し、増加傾向が認められる。さらに、14期にはSB1・2の事例からも分かるように、各竪穴を単位として所有していた可能性が高い。しかし、出土点数を考慮すると鎌の所有主体が各時期とも各竪穴であったとは考えられない。各竪穴が鎌を所有できるようになる画期を限定するのは難しいが、鎌などの鉄製品の出土率が增加する10期前後をその時期に当てたい。一方、鍬・鋤については火災住居のSB2でもみられず、出土点数が極めて少量である点からその所有主体は各竪穴を越えた枠、例えばムラといった単位での所有形態が想定されないだろうか。

農具以外では刀子の出土が目立つ。出土点数から推測すると、実際の総数はかなりの量があり、1期以降かなり普及していたと思われ、刀子だけは各竪穴を単位に所有していたと解釈したい。

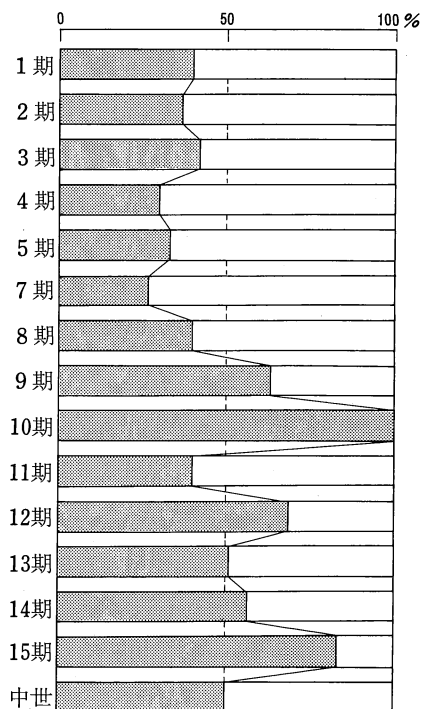
以上、鉄製品の出土状況とその所有形態について検討を加えてきたが、鉄製品と直接関連する砥石の出土状況についても合わせて言及しておく。

砥石は、遺構数の少ない6・7・12期を除いた各時期を通じて出土している(第169図)。

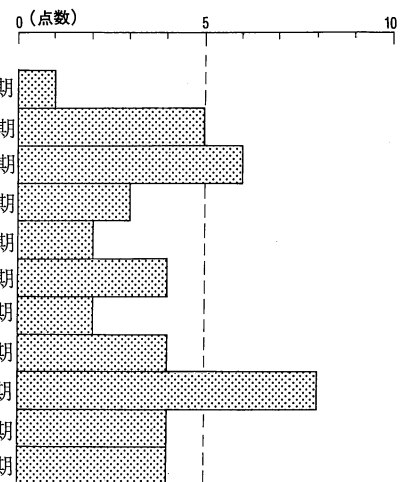
1・5・10期は各2点と少ないが、2~3期・8期・11~15期にかけての出土が目立ち、特に、13期は8点と最も多い。これを住居址別にみると、各住居址とも1、2点が出土する例が大半を占めるなか、SB37(3期)、SB199(11期)ではそれぞれ3点の砥石が出土した。出土点数は時期によって住居軒数が異なるため、一様に比較することはできない。そこで、砥石を出土した住居軒数と総住居軒数を時期別に比較すると、3期は33%に当たる住居から出土しているのを除き、1期から8期までは10%前後と比較的出土率が低い。と



第167図 鉄製品時期別平均出土点数



第168図 鉄製品出土住居址時期別構成比率図



第169図 砥石時期別出土数変遷図

ころが、10期は住居軒数が4軒と少ないためか半数に当たる住居址から出土し、一時的な増加傾向を示すが、11期以降は20%前後の数値を示すものが多い。

この結果は鉄製品でみた傾向と一致するもので、鉄製品が急激に増加する8～9期頃を画期として砥石の数量も増加すると判断できよう。

2 石製品について

本遺跡出土の石製品には石臼、管玉、石錘などがある。管玉はSB530から出土した1例があるほか、一般にはみられない遺物である。また、石臼も中世の土坑のSK390・392などから破砕して出土するものが大半である。ここで取り上げる石錘は従来の集落研究のなかでは十分な検討を加えられずに至っている。

石錘の認定はその出土状況による部分が多く、礫そのものから機能を限定するのはかなり難しい。本遺跡の場合、竪穴住居址の壁際や隅の一角にまとまって出土する礫や、土坑から一括して出土した自然礫を石錘と認定している。石錘が出土した遺構は竪穴住居址8軒、土坑3基がある(第170図)。竪穴住居址は1期のSB129・160・176、2期のSB620、5期のSB71、12期のSB192、15期のSB27・54があり、ほぼ各時期を通じて出土すると判断できよう。

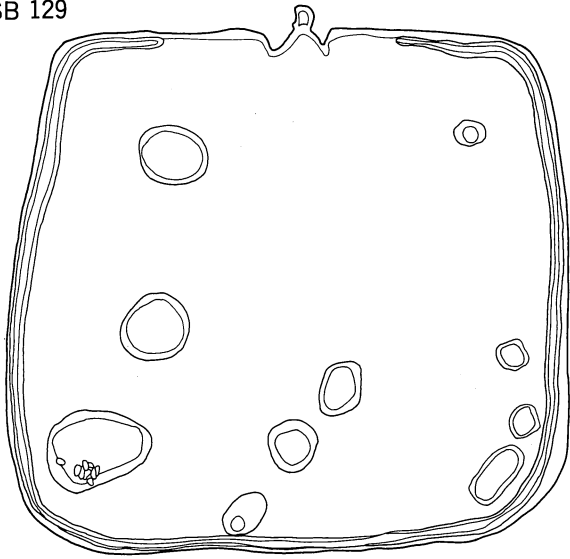
SB129は北西隅のピットから一括で出土した。同一時期のSB160や176でもカマドと反対側の隅に集中する。2期のSB620には45点と多量の石錘があるが、北西と南東隅の2か所に分かれて散在し、本来はどちらか一方に固めてあったと思われる。5期のSB71からは30点がカマド対辺中央の施設周辺に散在している。12期のSB192には8点の石錘があるが、南壁中央付近の2か所に分かれる。さらに、15期のSB54は南東隅に近い西壁際に、SB27では南東の施設周辺から5点がそれぞれ出土した。SB620・71・192は礫が散在する状況から原位置を保っていないと思われる。

土坑から出土した石錘は古代のSK72と中世のSK17・599の3例がある。うち、図示したSK599からは7点の出土をみたが、この周辺には中世2期の掘立柱建物址が確認されており、これらの建物址に帰属した遺物である可能性が考えられる。また、SK17からは17点が、SK72からは4点の石錘が出土した。SK17はかなり深い遺構で投棄された遺物であろう。また、SK72は小型の土坑で性格の限定はかなり難しい。土坑出土の石錘はいずれも一括廃棄されたものとみてよいだろう。

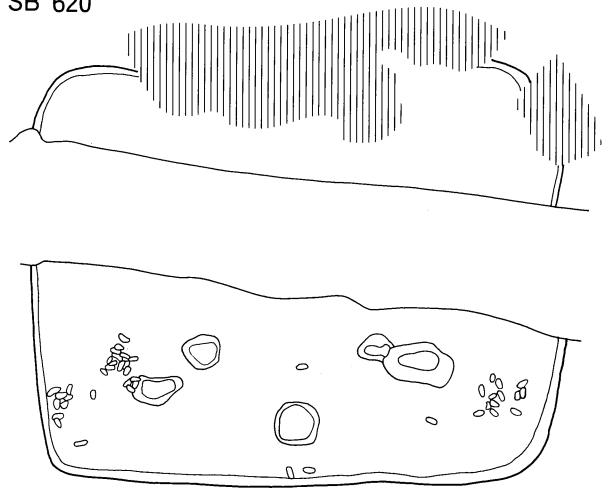
石錘の出土状態をみると、貯蔵穴や住居の隅の一角や壁際の1か所に集中して出土する例が多く、これは廃棄時に礫だけそのまま遺棄した状況を示すと同時に、蕨を編んだ場所またはそれらの道具一式を保管した場所として認識される。すなわち、前節で検討した居住空間の利用とも関連するものと判断できないだろうか。そこで硬度計測定値の分析を加えたSB176をみると、出入り口として推定した南壁中央付近が「土間」の空間として利用したと考えられ、石錘もこの出入り口の邪魔にならない南西隅に保管していたと思われる。おそらく、原位置を保っていたと思われるSB160やSB620も同様の構造であった可能性が高い。SB129については微妙である。と言うのは、SB71を含めて石錘は貯蔵穴から出土しており、地下に保管されるためである。SB192は硬度計の測定値から東側半分が「土間」になり、出入り口が東壁と推定した住居址である。石錘は2か所に分かれるが、本来は一方に固めて保管していたと考えられ、先の指摘をほぼ裏付けるものであろう。

このように、石錘の出土地点は貯蔵穴から出土する例を除くと、硬度計測定値の分析結果とほぼ一致するもので、石錘との関係を整理すると次のようになる。すなわち、9期以前の住居址の場合、カマドの主軸線に沿った範囲並びに南側半分を「土間」とする住居址が多いと推察したが、石錘も「土間」の一角に保管するためSB160・176のようにカマドの反対側の壁際や隅に保管する。また、12期以降の住居址で長方

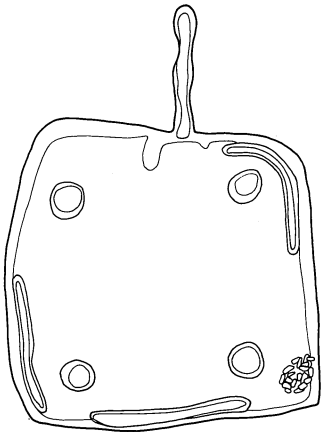
SB 129



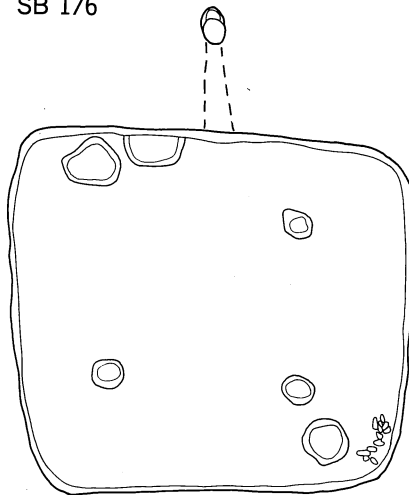
SB 620



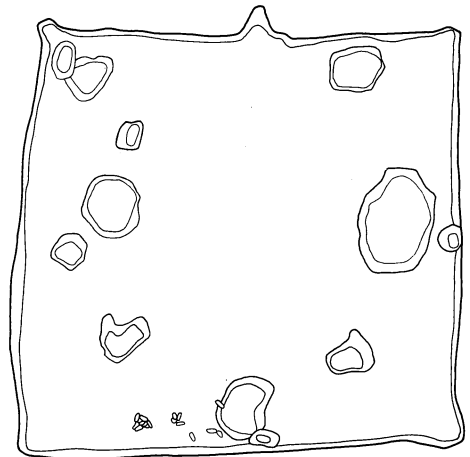
SB 160



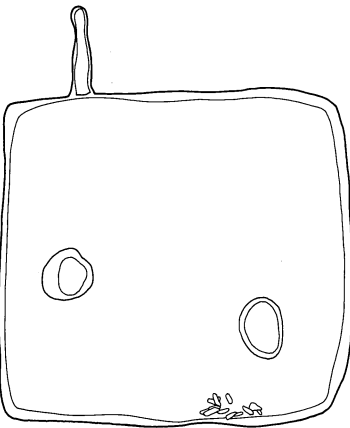
SB 176



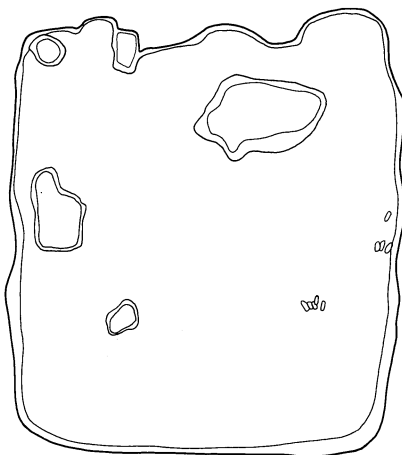
SB 71



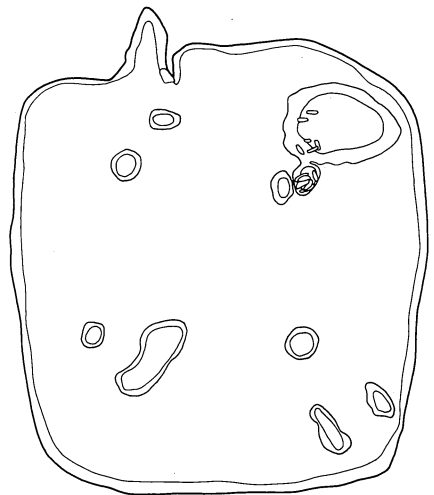
SB 54



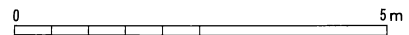
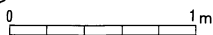
SB 192



SB 27



SK 599



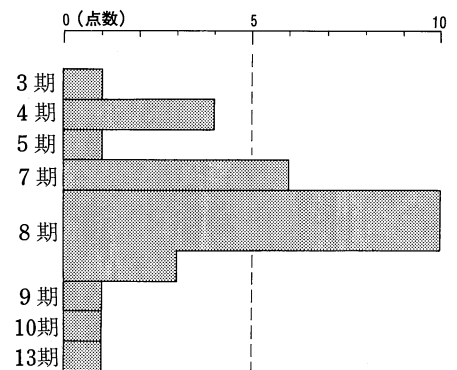
第170図 石錘出土遺構集成図

形に近い住居は東側を「土間」の空間と想定したが、SB192や27のように石錘も「土間」の一角である壁際や貯蔵穴に保管したと思われる。

少ない資料をもとに考察を加えたため、立証性に欠ける分析になった。従来、石錘は散発的に出土する例が大半で、遺跡単位の報告書で取り上げられる例は少ない。しかし、遺物の出土状態について意欲的な分析を加えている桐生直彦氏は「遺棄」された遺物として石錘を取り上げている(桐生1987)ほか、柿沼幹夫氏は『下田・諏訪』のなかで石錘の特徴や出土状況について分析を加え、「今後は土器や石器と同じように記録し、取り上げ、報告されることが必要であろう。」(柿沼1979)と述べ、石錘の認定根拠を含めた総括的記述を試みるなど、徐々にではあるが注目されつつある。筆者もこの指摘に促され、今後の方向性を模索する意味から住居空間との関連性から検討した。石錘は遺棄された遺物のなかでは収納場所が推定できる家財道具のひとつであり、その認識に立って民俗事例を含めた総括的な分析が今後必要となろう。

3 文字関係資料について

本遺跡の文字関係資料は墨書土器、陶硯、転用硯があるが、本項では刻書土器を除いたこれらの遺物について、集落内での在り方を中心に整理し、若干の検討を加える。なお、第3節で集落の具体的な様相について分析するなかで墨書土器などについても触れるため、重複する部分もあるが、概観する意図から本項を設定した。



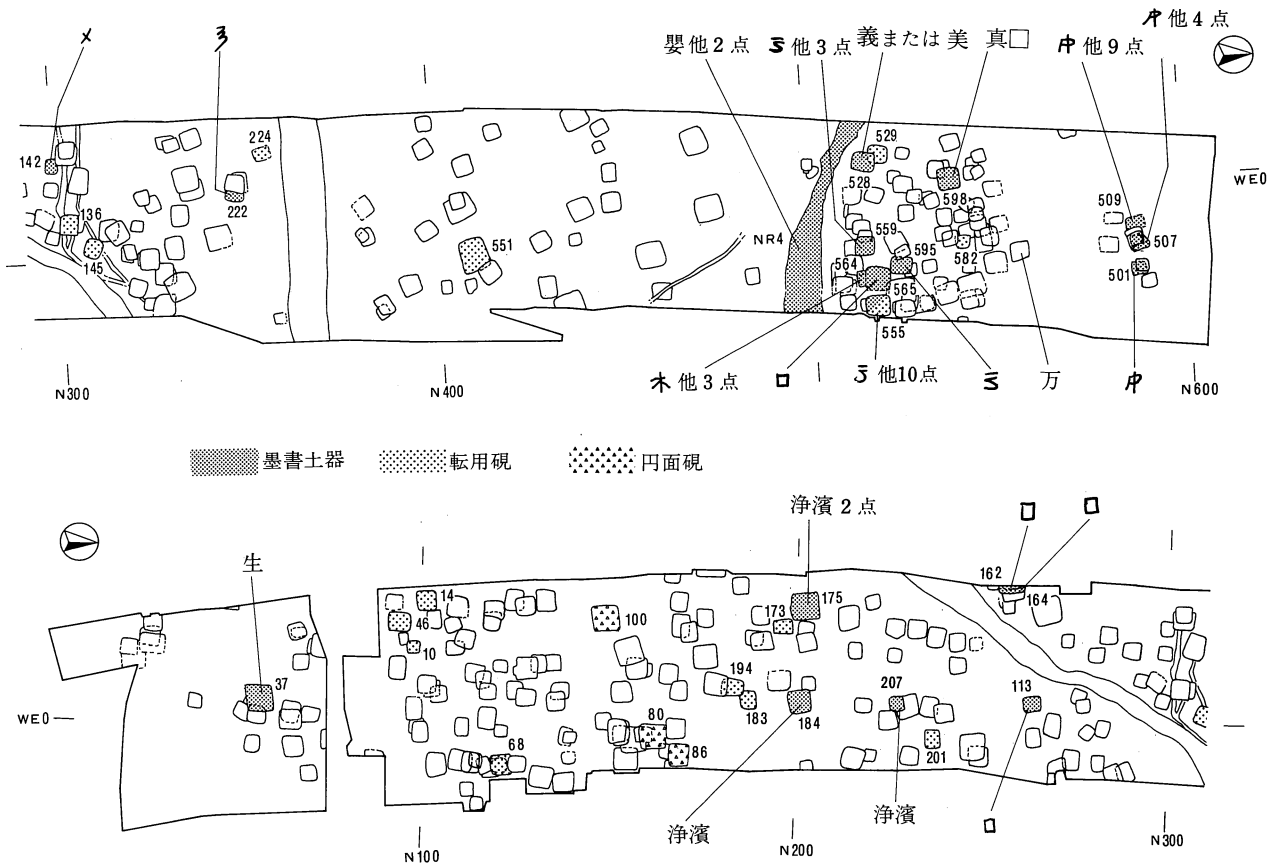
第171図 墨書土器出土数時期別変遷図

(1) 墨書土器

墨書土器総数53点のうち、時期の限定できる竪穴住居址や溝址から出土した48点を対象にみる。まず、時期別の構成からみる(第171図)。本遺跡における墨書土器の初現は3期のSB37から出土した須恵器の蓋である。墨書土器は不鮮明ながら『生?』と読み取れる小さな文字である。4期には4点の墨書土器があり、いずれも人名と想定される『浄濱』と墨書される。5期にはSB113出土の1点があるだけで、3期から5期にかけての墨書土器の出土頻度は極めて低く、1軒当たりの保有する割合(保有率)は3~13%に過ぎない。

7・8期は墨書土器がもっとも盛行する段階である。7期には6点の出土をみたが、人名と思われる『真菌』のほか、『方』といった字句がある。保有率は50%を越え、8期にかけて急激に増加する傾向がある。8期には33点の墨書土器があり、保有率は100%を越え、数値だけをみれば各竪穴住居址で墨書土器が所有できる量である。この時期に多出する字句には『フ』と『ノ』の二者があり、両者とも判読不明の記号とも受け取れる文字を記す。9期以降は墨書土器は激減し、9・10・13期に各1点ずつ出土しただけで散発的にしかみられない。

このようにみると、本遺跡の墨書土器は3期から5期にかけて一時的に登場し、7・8期を迎えると同時に飛躍的に増加する。その後は再び減少の一途を辿り、徐々に廃れていくのである。この動向は松本平で調査された周辺遺跡の動向と共通するのみならず、東国の集落遺跡における在り方とも一致するものである。このようななかで敢えて本遺跡の特徴として指摘するならば、墨書土器の初現段階が比較的早いことである。松本平で最も古い墨書土器の資料としては東筑摩郡山形村殿村古墳の石室から出土した須恵器杯があり、体部には『錦服部』と記されている。この杯は美濃須衛窯産で8世紀第一四半期の年代があげられているが(青沼1987)、本遺跡のSB37の資料はこれに若干後出するもので、松本平で墨書土器が登場した



第172図 文字関係資料分布図(1:2000)

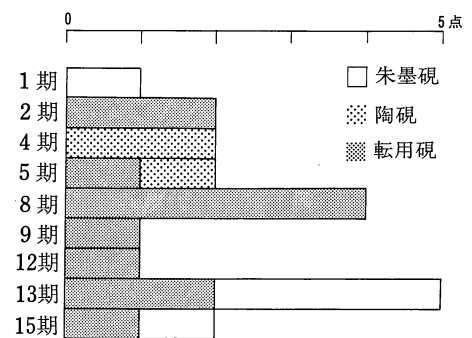
のと時をほぼ同じにして本遺跡でも墨書土器が出現したことになる。

続いて墨書土器の分布状況についてみる(第172図)。

分布は集落の動きとの関連性が高いため、2～5期は南部を中心とし、7・8期は北部E区を主に、南部の一部でも散見される。このうち、4期の『浄濱』を出土したSB175・184・207は近接して位置しており、それらの間は有機的な関係で結ばれた一群として捉えることができる。また、8期の分布をみると、SB555では『5』など10点の墨書土器があるほか、SB509では9点の出土をみた。墨書土器は特定の住居址から大量に出土し、同一文字の分布もその住居址を中心として広がるといった特徴は注目できる。これ以外の時期については出土点数が極めて少ないためその傾向性を把握するのは難しいが、墨書土器は各時期希にみられる程度で、4期や8期のように同じ字句が集中して分布するような状況は一切みられない。なお、4・8期の状況については次節で詳細に言及する。

(2) 硯

硯として認定した資料には円面硯5点と広義に捉えた転用硯21点がある。このうち住居址から出土した20点を対象にみる。第173図は円面硯と転用硯の時期別個体数を図化したものである。朱の付着した土器については朱墨硯になる可能性があると思われるため広義の転用硯に含めているが、図中では分けて示し、ここでは確実に硯と認定できる円面硯と墨用転用硯を扱う。なお、13期の総数は朱墨硯を含めて5点になるが、SB145出土の資料は内面を墨用に、外面には朱が付着することからそれぞれ1点と数えて図化している。し



第173図 転用硯出土数時期別変遷図

たがって、本来の総数は4点である。

この図によれば、2期から15期に至る各時期を通じて硯が出土し、集落が継続していた間は識字層が存在していたと判断できよう。2期にはすでに2点の転用硯があるが、SB68の資料は須恵器甕胴部破片を転用した大型の硯である。転用硯は墨書土器が盛行する8期にはその出土量も増加する傾向が認められ、4軒に1個の割合で出土している。これ以外は平均して少なく、円面硯はいずれも4・5期の所産である。また、図には加えられなかったが、NR4から須恵器の甕胴部破片を転用した硯が出土している。遺物の様相から2または3期の資料と判断できる。転用硯の初現は少なくとも2期に求められることが知れるが、墨書土器の初現よりも逸早く転用硯が出現する状況は注目できる。

続いて、分布についてみる。円面硯はSB80・86・100の比較的大型の竪穴住居址から出土し、それらは近接して分布している。転用硯の出土量が突出する8期には、SB555から3点、529から1点が出土しており、墨書土器と同様に、大型住居址を中心に出土する状況を呈する。

(3) 墨書土器をめぐる

墨書土器と硯の時期別推移・分布を中心にその特徴を述べてきたが、墨書土器の性格やその背景について若干の検討を加える。

まず、4期に4点が出土した『浄濱』について考えてみる。『浄濱』は3軒の住居址から出土し、その分布状況から3軒の間には何等かの紐帯関係が結ばれていたと推定される。『浄濱』は人名と判断でき、一群の主である「浄濱」の名を記した墨書土器を各構成員が所有していたことになる。『浄濱』の筆跡に関しては既述した通り、筆跡が一致せず、それぞれ別な書き手に拠るものと考えた。なかには模写したような字句も認められ、書き手すべてが文字に精通していたとは思われない。つまり、「浄濱」を取り巻く成員それぞれが墨書し、それを所持することで集団内の結束が図られたと考えられよう。

次に、墨書土器が突出した出土量を誇る8期の状況についてみてみる。8期の出土分布は大きく2群に大別され、『ㄩ』と『ノ』の2文字に代表される。このような在り方は住居群が二つに分かれることを示唆する。この二文字についてはどのような字句を意図して記されたかは明らかでない。『ㄩ』を鏡像に写したように記された字句の『ㄣ』は「之」や「乙」に近似するが、明確でない。むしろ、7期に2点が出土した『方』の形状が崩れて『ㄩ』となった可能性も十分ある。いずれにせよ、『ノ』も含めて文字というよりは記号として記さたと解釈して差し支えないだろう。二文字の筆跡は異なり、何人かの書き手が想定される。これは『浄濱』と同様、文字を記す行為が重要なものであり、さらに記号化された字句を選択する背景には呪術的な力を借りることで集団内の結束の強化を図るものと思われる。さらに、1軒の住居址に墨書土器が集中して分布する状況は墨書土器が1か所で集中管理された可能性を示唆し、字句の宗教的色彩を合わせて考慮すると、墨書土器は祭祀と関連した場で使用されたとも推定できよう。

以上、4期と8期の墨書土器の在り方を中心にみたが、4期と8期では使用方法や使用される場が異なっていると思われる。それは文字を土器に書く意味が異なることに起因すると考えられる。鬼頭清明氏は墨書土器が集落のなかでどのような形で出現するかという点について家族名と吉祥句の二種があると指摘し、家族名を記すのは、論証は出来ないとしながらも「血縁的な紐帯を伴う家父長制的世帯共同体」のようなグループが「何々の家と呼ばれる事を意識して自分の氏の名を書いていることは間違い無い」と述べ、また、吉祥句を記す場合については「血縁的な『家』と呼ばれるような家が、きちんと自立していなければ、」その紐帯は極めてマジカルな吉祥句によって表したと述べた(鬼頭1986)。鬼頭氏の言う「家」の概念については今後も検討を必要とするが、本遺跡の『浄濱』は二つの場合の前者に該当するもので、4期の集落を考える上で実に示唆に富んだ指摘である。

また、8期の墨書土器は呪語とも考えられる単字句を記すが、字句の選択については首長層の判断に拠る部分が多いことは当然予想される。字句は村落の象徴あるいは標識としての役割をもち、呪術的性格を帯びる字句を使用することによって、首長層の立場をより鮮烈に各成員に印象付けたものと思われる。では、墨書土器の所有形態はどのようであったのだろうか。保有率の数値からみれば、竪穴住居址を十分満たすが、その分布状況をみると、各成員に帰属する器であったと考えるよりは、むしろ村落全体で集中管理する銘々器として所有されていた可能性が高い。これは4期の状況とは性格を異にするもので、墨書土器の性格が一様でないことが分かる。集落が継続する間、墨書土器が恒常的にみられないのも、時期によって墨書土器の必要性が異なるためであり、8期の場合は村落全体に関わる有機的な関係を維持するための道具としての役割を担うものと考えられよう。

第3節 遺構配置をめぐる二、三の問題について

本節では古代15期に編年された遺構についてその在り方を考察し、集落の実態に迫ろうとするものである。また、中世の遺構についても現景観と比較し、現景観の成立を探る。

1 古代の住居小群の抽出とその検討

近年の集落研究の方法に、視覚的に捉えることのできる住居群のまとまり、特に、その最小の単位(本稿では『住居小群』と呼ぶことにする。)を抽出する方法がある。本稿も基本的にこれに習うものであるが、調査面積が限定されることや、ひとつの地点で長期間に亘る集落の変遷が追えないことから、各時期の住居小群が単発的には抽出できても、その変遷を追うのは極めて難しい。そこで、一時期を単位として住居小群を抽出し、時期を越えた小群や同一時期内の小群を比較しながら検討を加えることとした。

設定した時期と地点は1期の南部C区から北部E区、2～3期の南部C・北部D区、4期の南部A・B区、7～9期の北部区、11期の南部A～C区の5つである。

(1) 1期の住居小群

1期は本遺跡で開発が開始された段階である。当該期は南部C区から北部E区を対象に分析する(第174図)。C区にはSB155を中心とする一群(C群)、D区の一群(D群)、E区の一群(E群)に分けて説明を加える。

C群は土器様相と遺構の重複関係から新・古の二段階に分かれる。古段階にはSB156・157・158・ST34があり、新段階にはSB155・159・160・161・224・ST32がある。住居軒数をみると新段階に急激に増加するようにも思われるが、SB160・161のように同一段階でも重複があることから、小群を構成する住居軒数はさらに少なくなる。古段階は大型住居のSB156と小型のSB157、その南側にクラと推定されるST34の竪穴住居址2、掘立柱建物址1で構成される。なお、SB157はその場で158へ建て替えられる。新段階には北側にSB224が155から離れて分布する。SB155と159は遺物が接合しており、同一時期の遺構であることはほぼ疑いないが、カマドの方向は逆になる。構成は竪穴住居址が1軒増加するが、掘立柱建物址1棟を付属させ、大型住居址が中心となる分布状況に変化はみられない。竪穴住居址を「L」字形に配置し、そのなかに掘立柱建物址を配置する。南側にあるSD27は古段階から存続する、微地形に沿って北東方向へ曲る溝である。流水の痕跡があり、住居小群を区画していたと考えられる。

D群は古段階のSB521・522・524・546・547・ST521・523・545・546・571と新段階のSB523・541・550・ST522・574・560がある。古段階の遺構配置は掘立柱建物址を取り囲む「コ」字形に見えるが、SB546・547

が北側のSB521の一群とは別な小群になる可能性が高く、
 竪穴住居址を「L」字形に配し、その中に掘立柱建物址
 をもつ配置と判断できる。北側の大型住居址が分布する
 一群に注目してみよう。ST523はSB522に付属するよう
 な位置にあり、ほかの掘立柱建物址と間隔を置く。その
 掘立柱建物址は小群で所有する建物と推定され、ST546
 はクラに、545はクラまたは作業場のような機能が推定さ
 れる。SB546を中心とする一群もST571を付属させてい
 た蓋然性が高く、おそらく、SB521らと同様の構成をと
 っていたと判断できよう。新段階になると住居軒数は減少
 するが、調査範囲外への移動が考えられ、SB547が550へ
 移動する状況や掘立柱建物址の建て替えの状況を鑑みる
 と基本的な構成に変化はないと思われる。

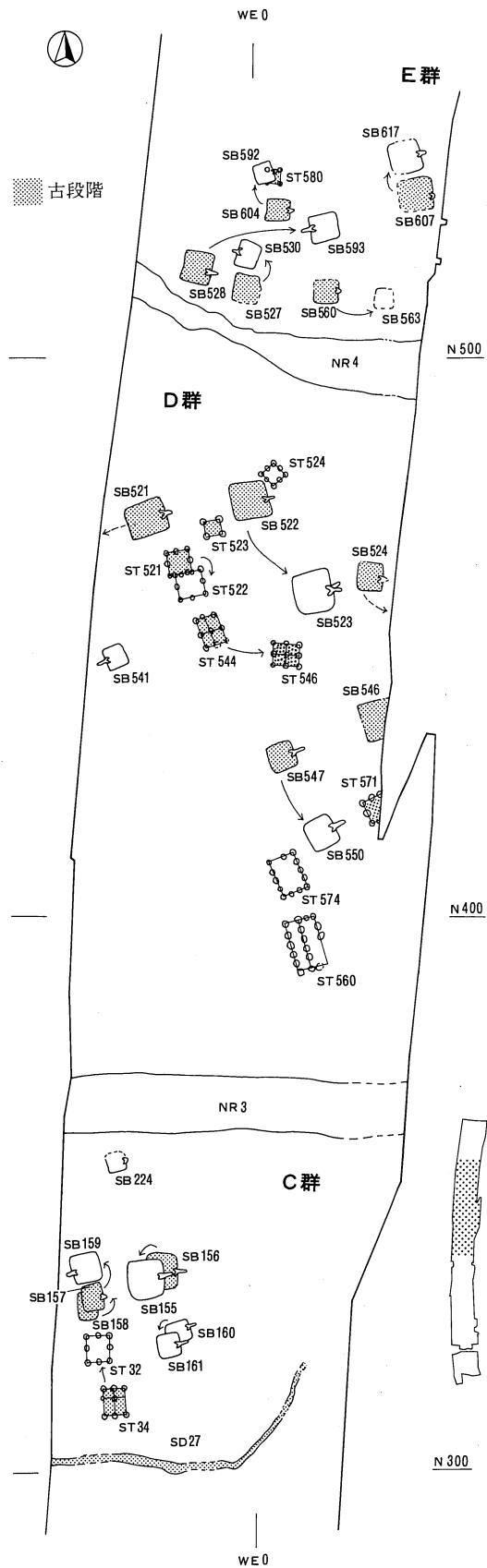
E群は土器様相と主軸から古段階のSB527・528・560・
 604・607・ST580と、新段階のSB530・563・592・593・
 617の5軒ずつに分かれる。このうち、SB607・617は主軸
 がほかの竪穴住居址と異なり、一定の空白域を有するこ
 とから別の小群を構成する可能性が高い。また、SB560・
 563も西側に位置する住居址に含めて良いか若干の疑問
 点も残るが、一応これに含め、4軒によって住居小群が
 構成されていたと考えたい。新段階には掘立柱建物址が
 みられないが、SB527周辺には柱痕跡をもつ柱穴が分布
 しており、掘立柱建物址が付属していた可能性は十分考
 えられる。

1期の住居小群は竪穴住居址2～4軒がひとつの単位
 となり、クラなどの機能が想定される掘立柱建物址1棟
 を付属する構成をとる。一方、D群のように掘立柱建物
 址を数棟付属させる住居小群もあるが、これは本遺跡で
 もこの地点にだけみられる特徴であり、おそらくC・D
 群に比べてD群が優位にあることを端的に物語る。

遺構の配置は広場を取り囲むような「L」字形を基本
 形とし、そこには掘立柱建物址を配する。また、C群で
 みられるように、溝を引いて一定の占有地を区画してお
 り、開発の初段階にはすでに園宅地の占有が既成化して
 いる。

次に、住居小群相互の比較をしてみよう。

主軸にまず注目する。D群の主軸が揃うことは視覚的
 に捉えることができる。その主軸はN-75±5°-Wの振れ
 幅10度内に集中するのに対し、C群はN-70～90°-Eの振れ幅に、また、E群は30度の振れ幅のなかに均等
 にばらつく。E群の場合は南側に走るNR4に主軸を揃えているためでC・D群のそれとは主軸の決定方法



第174図 1期遺構群分布図(1:1200)

が異なる。主軸の振れ幅の違いは各群にある規制の強弱を可視的に示すもので、D群が特に、規制の強い地区であることが分かる。同時に、その規制がE群に及ばないことは各群の自主性がそこに存在することを示唆し、住居小群が多面に亘る経営の単位であった可能性を暗示させる。

住居址の規模はどうだろう(第175図)。各群の住居軒数はC群から8軒、8軒、10軒とほとんど変わらないが、D群には床面積が40㎡前後の大型住居が4軒あることが目につく。C群最大のSB155は31.9㎡、同じくE群のSB617が27.75㎡でD群の在り方と異なる。住居規模にみる構成の違いは何に起因するのだろうか。

この点を考えるために遺物の出土状況を見てみる。第176図は各小群から出土した土器の個体数とその構成比を円化したものである。これによれば各群の構成比の違いは認められないが、総個体数が大きく異なることに気が付く。D群の出土量はC群の2倍、E群の3倍に相当する。もちろん、D群には住居小群が2つ存在し、大型の掘立柱建物址もあるためとも考えられるが、住居軒数に変化がないことを考慮すると、個体数の差は構成員の多寡を反映したものとは推定できないだろうか。D群に大型住居が多いこともそのようにみると頷ける。動産所有の目安となる鉄製品の出土状況も興味深い。C群からは板・棒状の不明品2点が出土している。E群からは鉄鏃、刀子、板状の不明品の4点がある。D群からは刀子、鎌、紡錘車、鋤頭、板状不明品など7点、それに鉄滓130gがあり、SB522からは金環も出土している。これをみる限り、豊富な鉄製品を所有するD群はほかから卓越した地域であることが分かる。

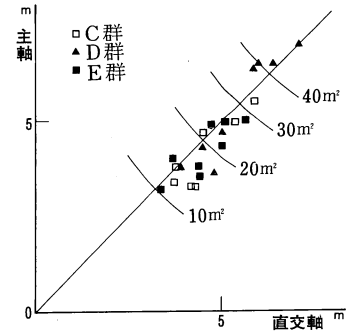
このように各小群によって構成員の多寡があり、D群にはほかに比べて構成員が多いことが分かった。同時に、D群の各竖穴住居址にはそれらの構成員を抱擁する人物が存在していたことも極めて重要である。また、D群の優位性は遺構の構成から窺われるばかりか、鉄製品の出土状況でも裏付けられるのである。

(2) 2・3期の住居小群

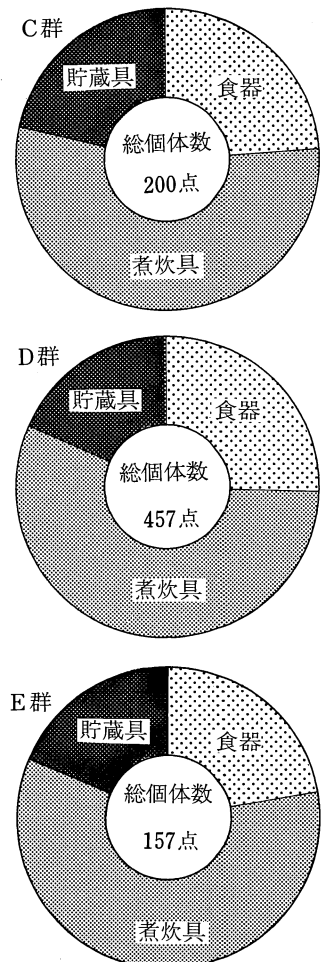
2・3期は南部C区(C群)から北部D区(D群)までの状況を1期に続いてみる。(第177図)。

C群にはSB147・214・216・ST35・39・SK522・548がある。1期のSB155・161がそのまま継続し、SB214・147へと移動し、ST39を付属させる。SK522は大型の土坑で上屋を備えた構造と思われる。3期になるとSB214は216へ建て替えられ、ST39は35へ移動する。ST36もこの段階の遺構と推定されるが、2期に遡る可能性もある。3期は竖穴住居址1軒、掘立柱建物址1棟で構成される。なお、4期になるとこの地区に遺構は分布せず、1期にSB156を中心に占地した住居小群は3期以降この地区から姿をみせなくなる。

D群は竖穴住居址と掘立柱建物址とが併存し、密集する。2期には竖穴住居址14軒、掘立柱建物址11棟がある。土器様相と重複関係から新古の二段階に区分される。古段階にはSB543・544・548・549・627・628・629・633・634・637があり、このうち、北側のSB543・544は西カマド、南側のSB548・549・627・637は東カマドであることから住居小群は2つに分かれよう。また、SB628・629・633・634・636もひとつの住居小



第175図 1期竖穴住居址群別分布図



第176図 1期出土土器群別構成比率図

群を形成するかのように思われるが、SB636は629へ、628は633へその場で建て替えが行われ、しかもSB636と629とは位置が近すぎるので634・629・636の間での建て替えが行われた可能性が高い。さらに、SB628が西カマドであることはSB634に先行する可能性を示唆し、同一時期には1ないし2軒の住居址が併存することになる。このような状況を鑑みるとこれらの住居址とその北側に位置する一群に含める方が適切かとも考えられるが、その根拠は弱い。SB627・637は形状・規模が近似することから両者の間での建て替えが考えられるが、その先後関係は明確でない。なお、1期に存在した大型住居のSB546に相当する住居址はみられず、調査範囲外への移動が想定される。SB543・544と548・549の空閑地にはクラと思われるST534・535が存在し、535から534への建て替えがなされる。この段階には掘立柱建物址を住居として利用する状況はみられない。

この段階の構成は竪穴住居址2～3軒とクラと思われる掘立柱建物址1棟を付属する形態で、1期のそれとほとんど変わらない。

2期の新段階には北側にSB540・542、中央にSB626・551の2軒ずつが住居小群を形成する。SB626・551は本遺跡の大型住居址のなかでも特に大きな住居址で、その2軒がひとつの小群を構成する状況は注目できる。南側にはST573・577・561・562のクラなどの機能を推定される建物址を付属させる。また、北側にはSA502を設け、SB542らと一線を画し、占有地を明確化している。3間×3間のST549はSB551に付属する住居址であろう。

北側のSB542・540も南側にST527・536・539・541を付属させ、「L」字形の配置になる。ST541は2間×2間の建物址でST536へその場での建て替えが行われる。したがって、この小群は竪穴住居址2軒、掘立柱建物址3棟によって構成される。このうち、ST527・539はクラと考えて良いだろう。ST551は2つの住居小群の中間に位置しており、どちらに帰属するのが微妙である。東側に隣接するSB626との関連性が高いと思われるが、ST551と530の間での建て替えを想定できることから断定はできない。

この段階は住居と思われる掘立柱建物址が竪穴住居址と同様の機能を備え、竪穴住居址2軒と掘立柱建物址2～3棟でひとつの単位を構成している。

3期になると様相は一変し、竪穴住居址と掘立柱建物址の軒数が逆転し、掘立柱建物址を中心とした遺構配置になる。このような構成をみせる地区は本遺跡ではこの段階のこの地区だけで、隣接する周辺遺跡でも認められない。

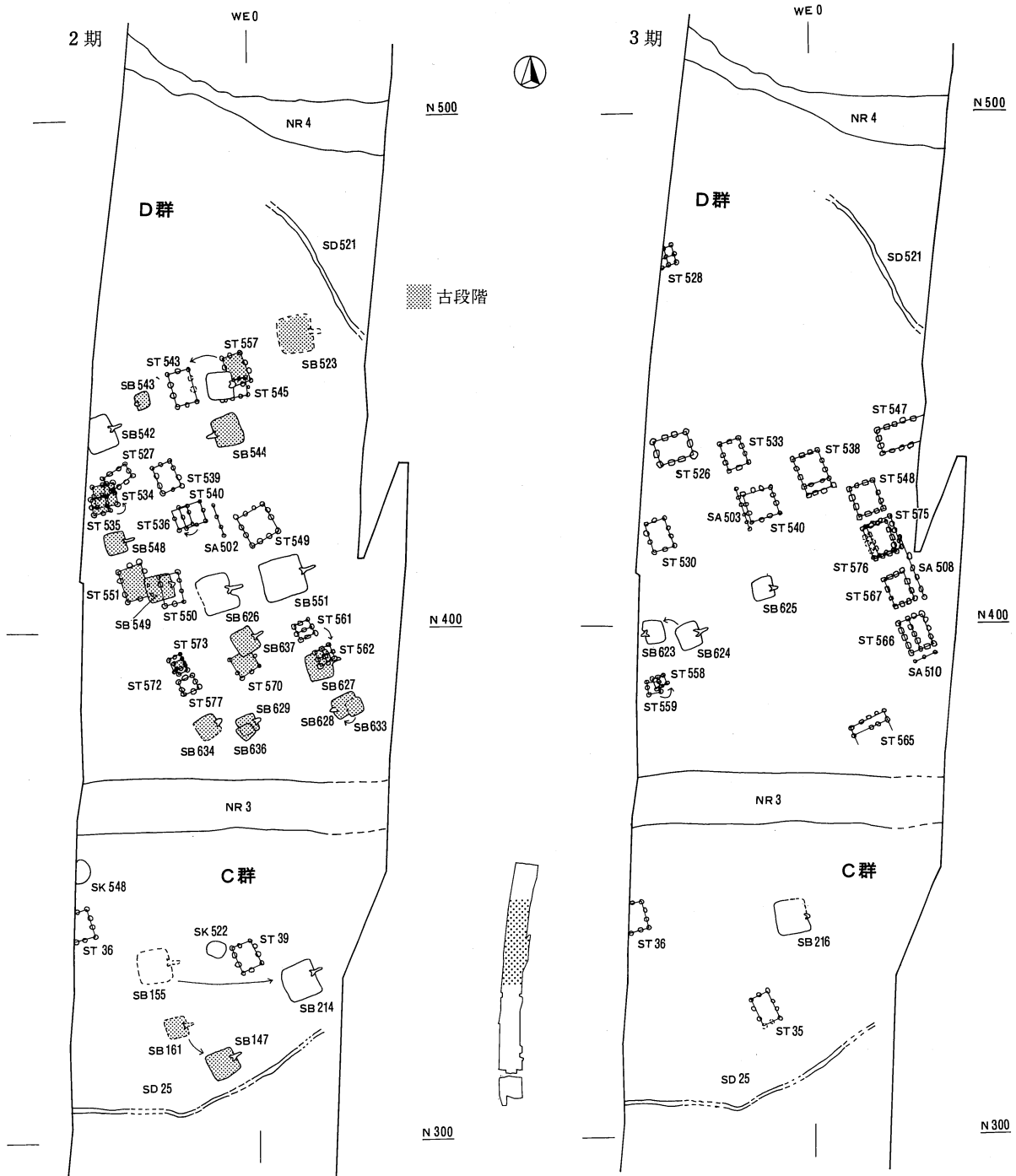
竪穴住居址からみてみよう。SB623は1軒だけ西カマドであることから624との間での建て替えが想定でき、624の遺物の出土量が623のそれより多いことから623への建て替えの公算が高い。また、SB624と625は同じ東カマドを有しており、同時期性が強い。SB625は掘立柱建物址の囲まれた空閑地の中央に位置し、一辺3.70m程の住居址であるが、カマドは花崗岩を袖から煙道にかけて使用する堅牢なもので本遺跡でも類例のないカマドを有している。

掘立柱建物址は北側に2期から継続して残る建物址が位置する。ST526は2期のST527の、ST533はST529の、ST530はST550がそれぞれ建て替えられた一群で南側にむいた「口」形に配置をとる。SA503・ST540は2期のSA502・549の建て替えである。SA503はST533の西側と軸線を揃えており、ST526・533と一線を画している。東側に一列に配置されたST548・575・576・567・566は同一段階に存在した遺構であろう。ST575とST576との間で建て替えが行われるが、その時点で東側にSA508が設置される。これら4棟は3間×3間のものが2棟、4間×3間の規模のものが2棟で構成され、ST566の南側にはSA510が存在し、統制のとれた配置である。南側にあるST565の全体像は不明だが、確認した箇所が北面底と判断するとST566やST538の底部が空閑地を向く規制が認められることから当該期の遺構と判断できる。ST558・559はSB623・624と近接する状況からこの時期に加えたが、根拠は弱い。ST599は重複関係からST558への建

て替えが推定されるが、その規模から納屋などの機能を有した施設であろう。ST538の南列はST548の北列とST540の南列とを結んだ軸線にほぼ揃う。南側に庇をもつ数少ない形態であるが、周囲の遺構配置や広場を意識した結果であろう。ST547は東側の調査範囲外へさらに続く。正確な規模は分からないが、かなり大型の東西棟になる。主軸と遺構配置から当該期の蓋然性は高い。

これら建物址の主軸はST559を除き、N-18~23°-Eのなかに含まれ、窮めて規制の強い地区であることが分かる。建物址の配置はST526を中心とした北側の一群が南側を向けた「□」形の配置をとると同時に、この地区全体の建物址は西側を向き、竪穴住居址を取り囲む「□」形をとり、官衙にみられる遺構配置に近い。なお、4期にはこの地区から遺構は姿をみせなくなる。

掘立柱建物址の性格を推定するために遺物の出土状況に注目してみよう。掘立柱建物址の遺物は生活面



第177図 2・3期遺構群分布図(1:1200)

を調査できなかったため確実に帰属する遺物は確認できず、その性格を知るうえで致命的な障害となっている。また、2～3期の竪穴住居址のなかには掘立柱建物址の遺物の廃棄場所となった遺構も認められない。このような中でSB625と遺構外から出土した2点の『美濃国』刻印の須恵器蓋は注目される。『美濃国』刻印土器は岐阜県岐阜市の老洞古窯跡で生産された遺物で、県内でも飯田市恒川遺跡に類例がみられるだけである。

D群の時期別の土器の出土個体数と構成比を図示したのが第178図である。構成は食器と煮炊具に占める割合が高く、貯蔵具の比率は少ない。特に、2期新段階の食器の比率がかなり高い。個体数をみると2期新段階は338点と住居軒数の割にかなり多い。当然、この段階には掘立柱建物址も住居となっているのでそこからの遺物を取り込んでいることが想定されるが、同時に、3期の遺構からも取り込む可能性も十分考えられよう。3期には個体数がかなり少ない。掘立柱建物址の棟数に比して、その数が少ないのは掘立柱建物址の遺物を確認していないという点と係わると思われ、3期全体の個体数を示すものではないことを断っておく。但し、2期新段階と3期では竪穴住居址と掘立柱建物址相互のもつ機能が異なると推測される。理由は3期のSB625のカマドの状態は一般の住居とは異質で、掘立柱建物址の「釜屋あるいは厨屋」としての機能を備えていると想定できるからである。そのため3期全体の土器出土個体数も少ないのであり、2期新段階には竪穴住居址がそのような機能を有していないことも同時に示唆できるのかもしれない。

鉄製品の状況は2～3期にかけて明瞭な違いは認められない。2期古段階には刀子、紡錘車など3点、新段階には刀子、鎌など8点と鉄滓がある。3期になると刀子1点のほか棒状の製品など3点が出土している。出土点数だけみると2期の新段階に多いが、これは土器の個体数と共通する特徴である。

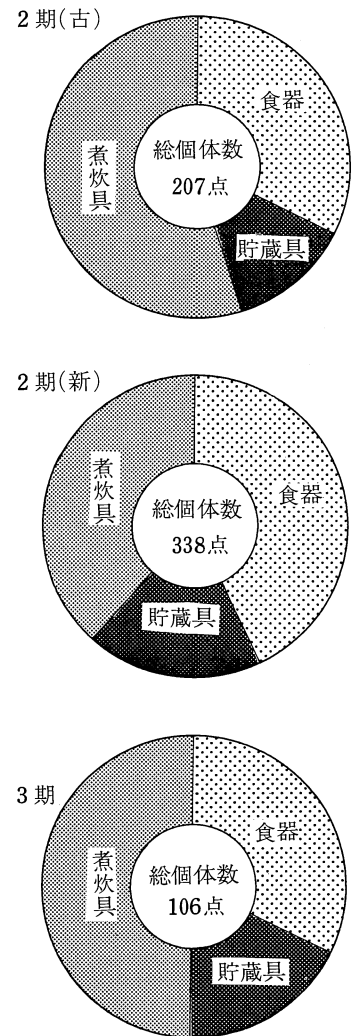
以上、2～3期にかけての住居の在り方をみてきた。C区では1期以降の住居小群がそのまま継続しながら、その勢力が衰退する過程を垣間見ることができた。一方、1期に周囲とは優位性を誇って登場したD区の住居小群はさらに成長を遂げ、2期新段階になると住居小群を単位としながらも、掘立柱建物址を住居として利用するなど、竪穴住居址と掘立柱建物址の構成が1期とは異なることが分かった。さらに、3期のD区は住居小群といった概念では捉えることのできない、掘立柱建物址を中心とする構成に変貌し、周囲とは隔絶した地区になり一応の到達点を迎える。このD区の在り方は一般的な集落の相貌とはかけ離れたもので、特殊な地域と言えるだろう。

(3) 4・5期の住居小群

当該期の対象とするのは南部A区北側からC区南側にかけてである。この地区は1期以降、遺構が継続的に展開するが、各住居址の変遷を追うのは窮めて難しい。しかし、4・5期にかけては大きく移動することがないため、住居小群の抽出は容易である。以下、時期別に説明を加える。

4期は北からSB121・135・ST26、SB175・184・207・ST41・42・55・48、SB100・187、SB80・72・74・77、ST19、SB12・48・49、SB24・25・65の6つの住居人群が視覚的に捉えられる(第179図)。

SB121の小群はカマド方向を当該期には少ない北西に向け、クラを推測させるST26を有する。竪穴住居址2軒と掘立柱建物址1棟による構成である。



第178図 2・3期出土土器群別構成比率図

SB175を中心とする一群は注目できる住居小群で、3軒の竪穴住居址と掘立柱建物址4棟のよる構成である。各竪穴住居址からは当該期には数少ない、『浄濱』と墨書された土器1点ずつが出土し、文字を媒介とする紐帯関係を維持していた集団である。住居の配置は広場を囲む「L」字形で、その空閑地には掘立柱建物址3棟が整然と配置される。SB175の北側になると主軸を揃えるST42がある。ST42は西面に庇をもつ大型の建物址で、おそらくこの小群の長である「浄濱」の住居と推定される。この小群の占有地は一辺50m近い面積を有しており、先のSB121の小群とは構成とともに大きな隔りが認められる。

SB100・187は2軒の構成と判断したが、両者はともに大型住居で、しかもかなり離れて位置していることから1軒ずつがひとつの単位となる可能性も十分考えられる。

SB80を中心とする一群は竪穴住居址3軒と掘立柱建物址1棟によって構成される。SB74は土器様相からSB80よりは後出的な住居址で、その規模からSB80の建て替えであろう。SB72はこの小群に加えてよいかは微妙であるが、5期の様相からこの一群に含めた。ST19はSB80の西壁と主軸を揃える3間×4間の大型の掘立柱建物址で、本遺跡でこの建物址だけにみられる形態である。SB80を含めてこの住居小群の中心人物の住居と推定され、規模はST42と近似しており、「浄濱」に相当する長の存在が想定できる。

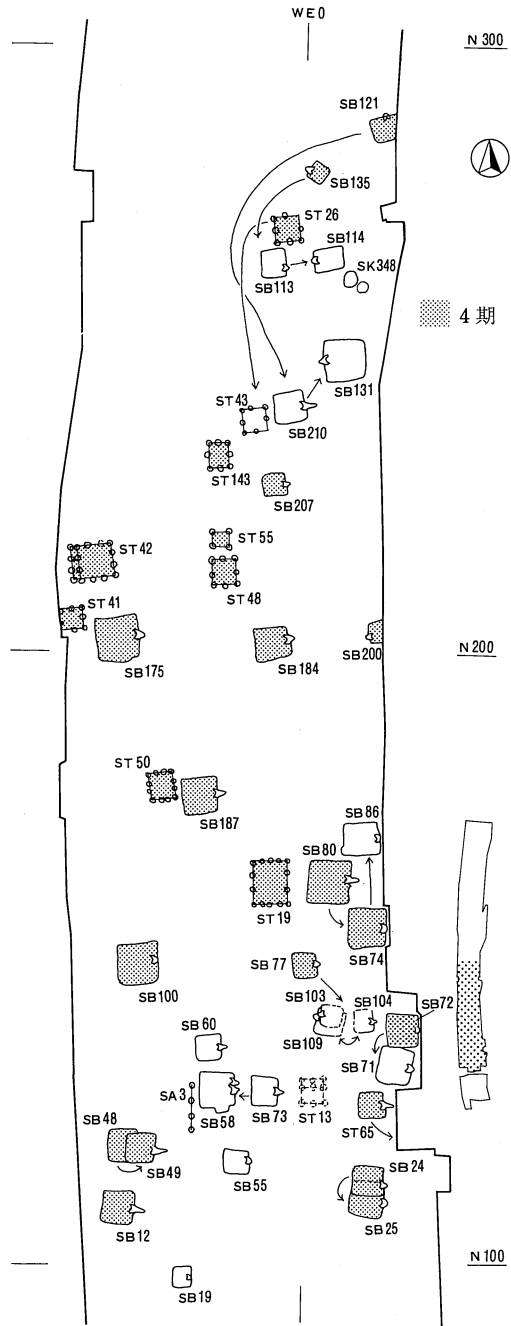
SB12を中心とする一群は竪穴住居址2軒による構成である。SB48と49とは重複し、その場での建て替えが行われる。

SB24の小群も2棟がひとつの単位となる。SB25はSB24の建て替えである。

SB12・24には住居小群全体で所有する掘立柱建物址はみられないが、SB121の小群にはクラが付属することから、その構成に建物址を加えていたことは十分予想される。

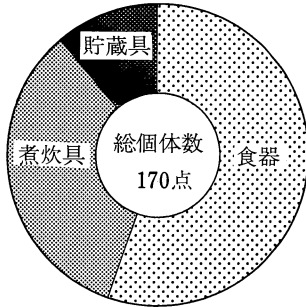
各住居小群の構成を今一度整理すると、大きく2つの形態がある。ひとつはSB175やSB80にみられる小群で大・中・小の竪穴住居址と数棟の掘立柱建物址を付属させる形態。もうひとつはSB135やSB12にみられる一群で中・小あるいは大・中の竪穴住居址2棟と掘立柱建物址1棟で構成するものである。前者の場合、掘立柱建物址のなかには小群の中心となる人物の住居と推定される大型の建物址がみられ、クラも数棟ある。これに対し、後者は掘立柱建物址を住居として利用することはなく、クラなどに使用する。

遺物の構成に違いはあるだろうか。SB175、SB135、SB12を中心とする各小群について比較してみよう。3つの小群から出土した土器の個体数とその構成比を示したのが第180図である。当該期には遺構を越えた遺物の接合関係はみられず、特定の住居址が遺物のごみ捨て場となる例も認められないことから、各住居小群を単位とした遺物はその大半がその小群で消費されたと推測される。第180図によれば、SB175の小群の総個体数がかなり多いことが分かる。特に、食器の占める比率が高くなっており、逆に、貯蔵具の

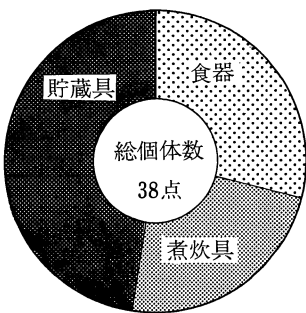


第179図 4・5期遺構群分布図(1:1200)

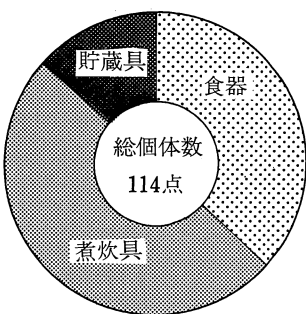
SB175など



SB135など

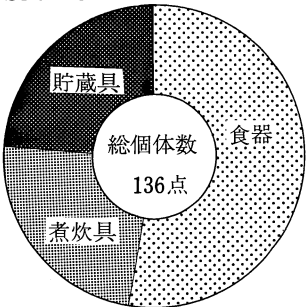


SB12など

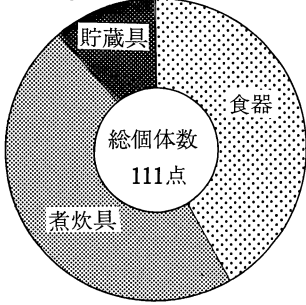


第180図 4期出土土器群別比率図

SB113など



SB58など



第181図 5期出土土器群別構成比率図

割合が少ない。このような傾向は図示しなかったが、SB80の小群でもみられる特徴である。食器の量については2つの小群の構成員数が多いことを示唆し、貯蔵具が少ないのは数棟ある掘立柱建物址で管理したことを考慮せねばならない。SB135の小群の出土量は38点と窮めて少ない。また、SB12の小群では煮炊具の比率が高いが、2期以降に一般的にみられる比率である。

次に、鉄製品をみてみよう。SB175の小群には棒状の不明品1点と鉄滓約1.7kgが、SB12の小群には鉄滓200gが出土し、SB135の小群からは出土していない。ちなみに、SB80の小群からは鉄斧などの鉄製品8点のほか鉄滓も出土している。これをみると、やはり鉄製品の所有でも2つの住居小群が優位にあることが分かる。

このほかの遺物では円面硯がSB80・100から出土しているのが注目される。2つの遺物とも細片であるが、当該期には一部の階層に限り文字が普及していたことを示唆するもので、墨書土器の『浄濱』のように文字を媒介とした紐帯維持がみられるのも窮めて興味深い現象である。

続いて、5期についてみる。

5期には北からSB113・114・131・210・ST54、SB86・71・103・104・109、SB55・58・60・73の3つの住居小群が認められる。

SB113の一群は、4期のSB121がそのまま継続して展開する住居小群で、間に1回の建て替え期を挟み、2段階に区分される。4軒の住居址はカマドの方向からSB113・210と114・131とがそれぞれ同一段階に存在する住居址と判断され、前者から後者への移動がSB114の廃棄の状況から考えられる。住居小群は竪穴住居址2軒と掘立柱建物址1棟による構成と判断できる。SB114の段階には掘立柱建物址が付属しないが、調査範囲外に存在したか、あるいはSB114の南東にあるSK348がこれに代わると推測される。この土坑は上屋を備えた簡易的な納屋のような構造と考えられ、掘立柱建物址の機能を十分果たせると思われる。

SB86の一群は4期のSB80の一群がそのまま継続したものである。このうちSB103・104・109は南西のSB58らと近接しているが、主軸の振れ幅が異なることから別なグループと考えられる。SB86は103らと空閑地をもって立地するが、これはSB74を建て替える際、それまで住居を構えた場所を避けたためと推測される。SB103・104・109は同時には存在し得ない住居址で1軒の住居がその場で建て替えられたものだろう。また、SB71はSB72からの建て替えであることは規模からみて間違いのない。すなわち、4期から5期にかけてはSB74からSB86への移動を除いて、住居址は一定の空間を保って南側へ移動するのである。

SB58周辺には4軒が分布するが、その位置から2軒ずつの2段階に区分される。SB60、73とSB55・58とがそれぞれ併存し、SB55の廃棄状況からSB60・73が先行する。この一群は4期のSB25あるいは12の住居小群のどちらかが移動したと思われるが限定するのは難しい。この小群には西側にSA3があり、西側の空白域とは区画を明瞭にしている。SB58にはカマドが2つ並んで

設置され、南壁には方形状の張り出し部を有する。カマドが2つある住居址は本遺跡ではSB80に類例があるほかは数少ない形態である。この一群には掘立柱建物址が存在しないが、SB73の東側には時期を確定できなかったST13が隣接し、これが伴う可能性も残る。

ここで各群の構成を今一度整理すると、竪穴住居址2～3軒と掘立柱建物址1棟による構成とみることができる。なお、4期で優勢を誇ったSB175は西側へ移動するのか当該期には存在しない。

遺物についてみてみよう。SB113と58の2つの小群を比較してみる(第181図)。

2つの住居小群出土の土器の総個体数はほとんど変わらないが、煮炊具の比率が異なる。これはSB58にカマドが2つ存在することと関連するとも考えられるが、推定の域を出るものでない。両者の間には大きな差は認められないと判断する方が妥当かもしれない。鉄製品の出土状況も明瞭な違いは認められない。SB113の一群からは刀子などの製品が4点と微量の鉄滓が、SB58の一群からは刀子などの製品が6点が出土している。

このように、2つの住居小群には明瞭な差は見出せず、優劣の差は認められない。

5期の住居小群の在り方は4期に存在した優位な一群はみられないが、竪穴住居址数軒とクラなどの機能を有する掘立柱建物址1棟が併存する構成が一般的な在り方としてみることができよう。

ところで、南部地区には6期以降、掘立柱建物址が単発的に登場することはあっても継続的に展開する様相は認められない。SB114のカマド焚口には須恵器甕が正位に据えられ、また、SB55ではカマド石や須恵器の甕が投棄されており、2つの住居址は住み慣れた場を去る人々の最後の姿を物語るものであろう。同時に、廃棄に関する儀礼が各住居小群を単位として行われた可能性を示唆するもので興味深い資料である。

(4) 7～9期の住居小群

5期には確実に捉えることができた住居小群は、6期以降住居数が激減することから明瞭に確認できなくなる。但し、北部D区では5期以降も居住域を継続し、占地を変えないため7期以降も住居小群を抽出することができる。以下、時期別に説明を加える(第182図)。

7期には西側のSB569・598と東側のSB554・564・608・640の2つの住居小群がある。西側の一群には当該期では大型のSB598が中心となる。この住居址からは人名と思われる『真菌』と墨書された土器が出土しており、この小群の長とも推測される。東側の一群には特に大型の住居址はみられないが、SB564からは『ホ』と記した墨書土器など3点が出土しており、SB598に匹敵する人物がいることを想定させる。東側の一群は5期以前にみられた住居小群とは様相を異にしており、住居址相互がかなり近接して分布する。

掘立柱建物址は存在せず、これ以降もみられないことから住居小群の構成は基本的に竪穴住居址を主体としていたと思われるが、この分布状況だけではその構成について言及するのは難しい。

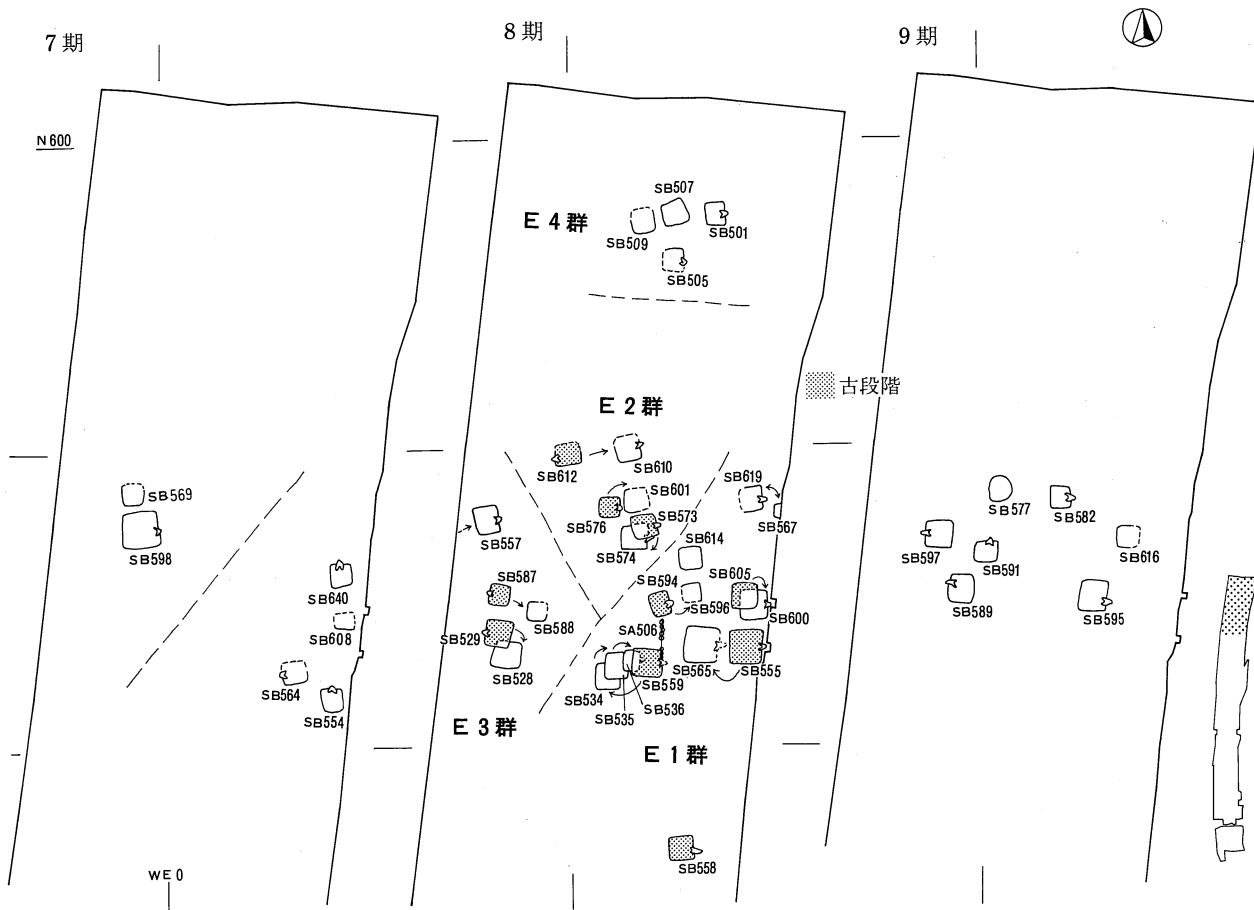
8期になると住居址の集中化はさらに進む。

N550以北には掘川に接する地点まで遺構はみられないが、これは採土による攪乱のためであり、本来は空閑なく住居が密集していた可能性が強い。当該期は住居址の重複や土器様相から間に1回の建て替え期をもつ新・古の2段階に分けることができる。

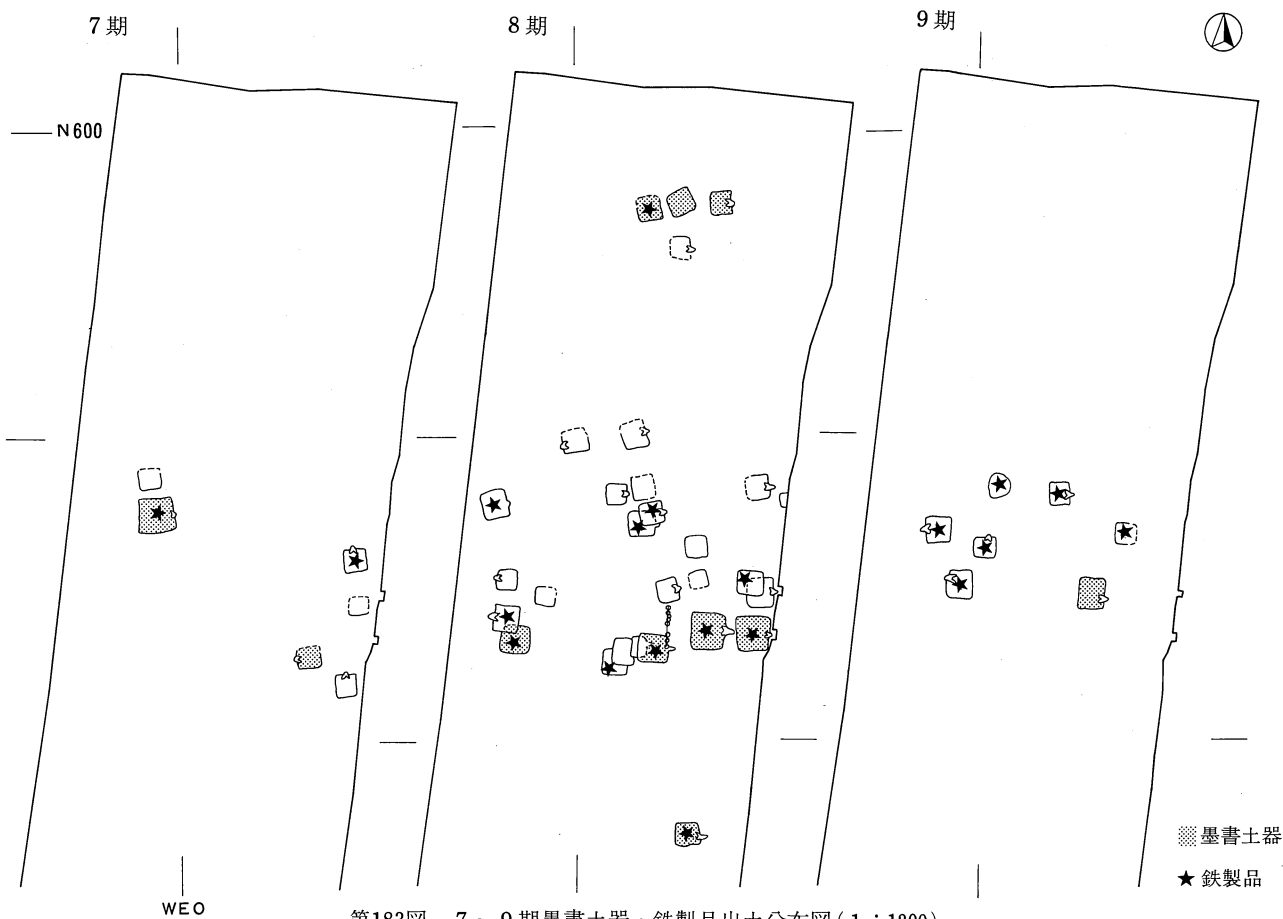
古段階の竪穴住居址はその分布から3つの群に分かれる(E1、E2、E3、群)。

E1群は7期のSB564の一群がそのまま占地する群で5軒で構成される。『フ』または『乙』の墨書土器がSB555・558・559から出土しており、文字を媒介とした紐帯関係をみることができる。この文字の分布は大型住居のSB555の周辺だけに限定され、E2・E3群までは広がらない(第183図)。

E2・E3群では3軒程の竪穴住居址がひとつの群をなす。各群の住居址はかなり近接しているばかりか、



第182図 7～9期遺構群分布図(1:1200)



第183図 7～9期墨書土器・鉄製品出土分布図(1:1200)

各群相互も近接しあい、7期以前の住居小群が一定の空白域を有している状況と異なり、むしろE1・E2・E3群がひとつの単位となる構造をもっていたとも想定されるのである。

新段階には18軒の住居址があり、あらたに掘川付近にも4軒が分布する。古段階の各群がその場で建て替えを行い、視覚的にE1～E4群の4つの群に区分される。

E1群は古段階の住居址が西側へ移動するSB565と534、東側へ移動するSB596・606があり、わずかに距離を開けてSB619と567が分布する。SB534はその場で東方向へ3回の建て替えを繰り返し、徐々に規模を小さくさせる。SB565は礎石をもつ住居址で、規模が大きいことからこの群の中心的人物の住居と推定される。また、565の西側にはSA506が設けられ、E1群の有力者の占有地をより明確にしている。

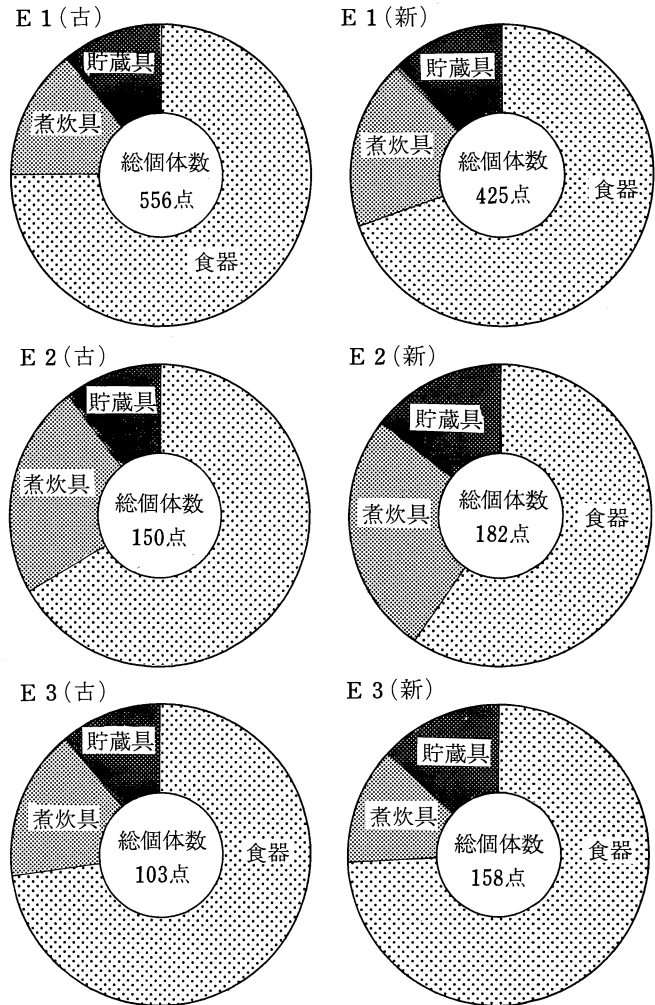
E2・E3群は概ね東側への移動をするが、各住居址の位置関係は保たれたままで、その構成も古段階と変わらず、住居規模にも大きな変化は認められない。

ここで各群にみられる規制についてみる。先に指摘したが、各群が古段階から新段階へ移行する際、各住居址はそれまで住居が存在した位置とすぐ隣接して建て替えており、住居の位置関係も変えない特徴がみられる。これは群を越えた規制の一端を物語るもので重要である。

主軸についてみると、E1群がN-90～96°-Eに集中し、SB596を除いて東カマドになる。E2群はSB573・574がE1群に近い主軸を有するが、このほかの住居址はE1群よりわずかに北へ振れ、SB612を除いて東カマドになる。E3群は古段階が西カマドで、新段階になると東へ主軸を向ける。その振れ幅はばらつく傾向がある。このようにカマドの向きは各群ではほぼ規制されており、主軸もそのなかで揃える傾向を認めてよい。おそらく各群の間に存在する空地には道が想定され、その道の方向に住居址の主軸を揃えた可能性が高い。

出土遺物のみてみよう。第184図は各群を単位とした遺物個体数とその構成比を円化したものである。これによれば、各群の構成比に顕著な差は認められないが、E1群の個体数が981点と突出して多いことに気が付く。食器だけでも700点を越えており、とてもE1群だけで消費したとは考えられない量である。E1群のなかには遺物の廃棄場所となった住居址はみられないことから、祭祀に纏わる遺物を所有していた可能性も十分考えられる。また、緑釉陶器が2点出土している。緑釉陶器はSB528と559からの出土であり、E1群に2点が分布する。

鉄製品についてはどうだろう。E2群からは刀子などの製品3点と鉄滓約100gが、E2群には鉄製品8点が出土しているのに対し、E1群からは紡錘車、刀子などの鉄製品9点と鉄滓700gが出土し、その分布は



第184図 8期出土土器群別構成比率図

SB555・565の周辺に集中する。(第183図)。

このような状況から、当該期の住居群の在り方をみると、視覚的には3～5軒の竪穴住居址がひとつの住居小群を構成するかのようにはみられるが、5期までの住居小群とは質の異なる単位となっており、集団全体から、あるいは優位な人物から受ける統制のもとに小群が形成されていたと思われる。すなわち、住居址の占地場所が限定され、住居の並びも変わらない状況は明らかに集団内の統制力の強さを反映している。また、遺物の出土状況も大型住居址を中心に集中しており、この結果を裏付けるものである。

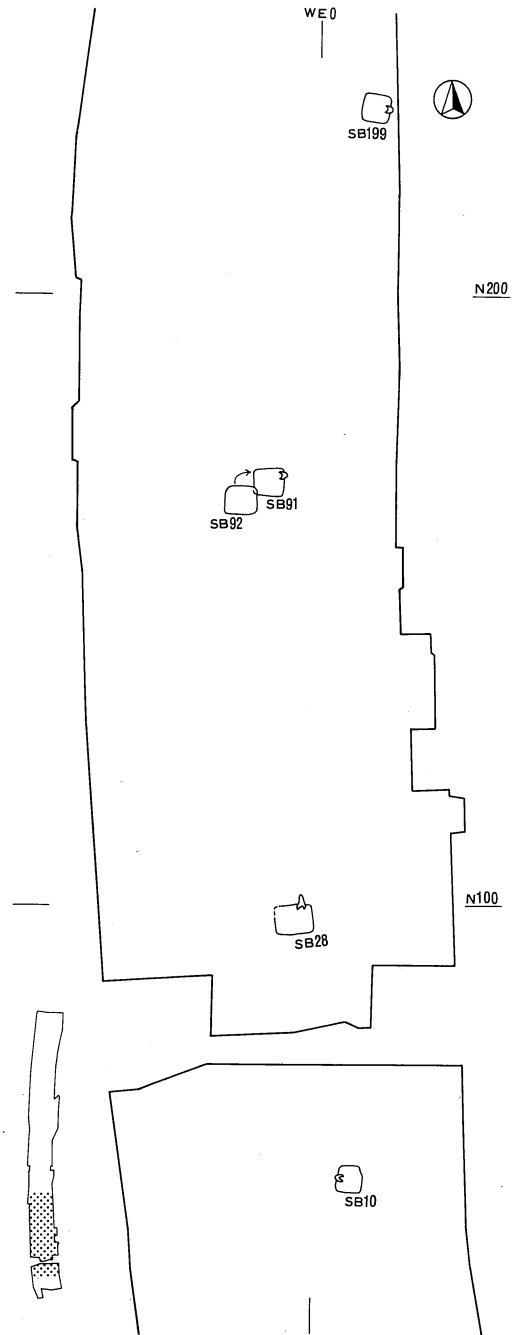
ところで、E4群についてはほとんど触れずにきたが、若干の検討を加えておく。この一群からは『J』や『ノ』と記された墨書土器が出土し、明らかに南側に分布するE1～E3群とは異なる集団が存在していることを示唆している。住居址が密集して占地する状況は南側の集団でみた特徴と共通するもので、当該期の一般的な在り方と言えるが、資料がわずかなためこれ以上の言及は避ける。

最後に、9期についてみる。

8期に隆盛を誇った地区も7軒の住居址が分布するだけで、集落の規模は縮小する。当該期は住居址の重複関係が見られないことからその変遷を追うのは難しい。しかし、西側に位置するSB577・589・597が西カマド、東側のSB582・595・616が東カマドであり、SB591のみ北壁にカマドを付設する。このような状況からカマド方向によって2つの群に分けることが可能であるが、それが時間差を示すことも十分想定される。したがって、小群の構成は明らかでないが、住居址は近接して位置しており8期の在り方とほぼ共通すると考えられる。ところで、住居軒数が減少することから、8期にみたE1～4群がそのまま継続して占地したとは考えられず、また、住居規模や鉄製品の出土状況に格差が認められないため、E2またはE3群のどちらかが継続して占地したとも推定される。遺物の出土個体数やその構成をみると、ちょうどE2・E3群の双方と大差なく、この予測を裏付けるかもしれない。

以上、北部E区を対象に7～9期かけての住居小群に検討を加えてきた。特に、8期の在り方は注目でき、5期までにみた住居小群の構成とは明らかに性格を異にする。大型住居を取り囲むように配置された住居址が数棟でひとつの単位を形成し、それが経営の単位となると同時に、集団内全体の統制の下にあったものと推定されるのである。この様相は本遺跡の場合、8期に至って顕在化してくるが、遺構の分布が稀薄な6・7期にすでにそのような変化が起きた可能性も十分あり、一概に8期が住居小群の変化の画期になるとは断定できない。

(5) 11期の住居小群



第185図 11期遺構群分布図(1:1200)

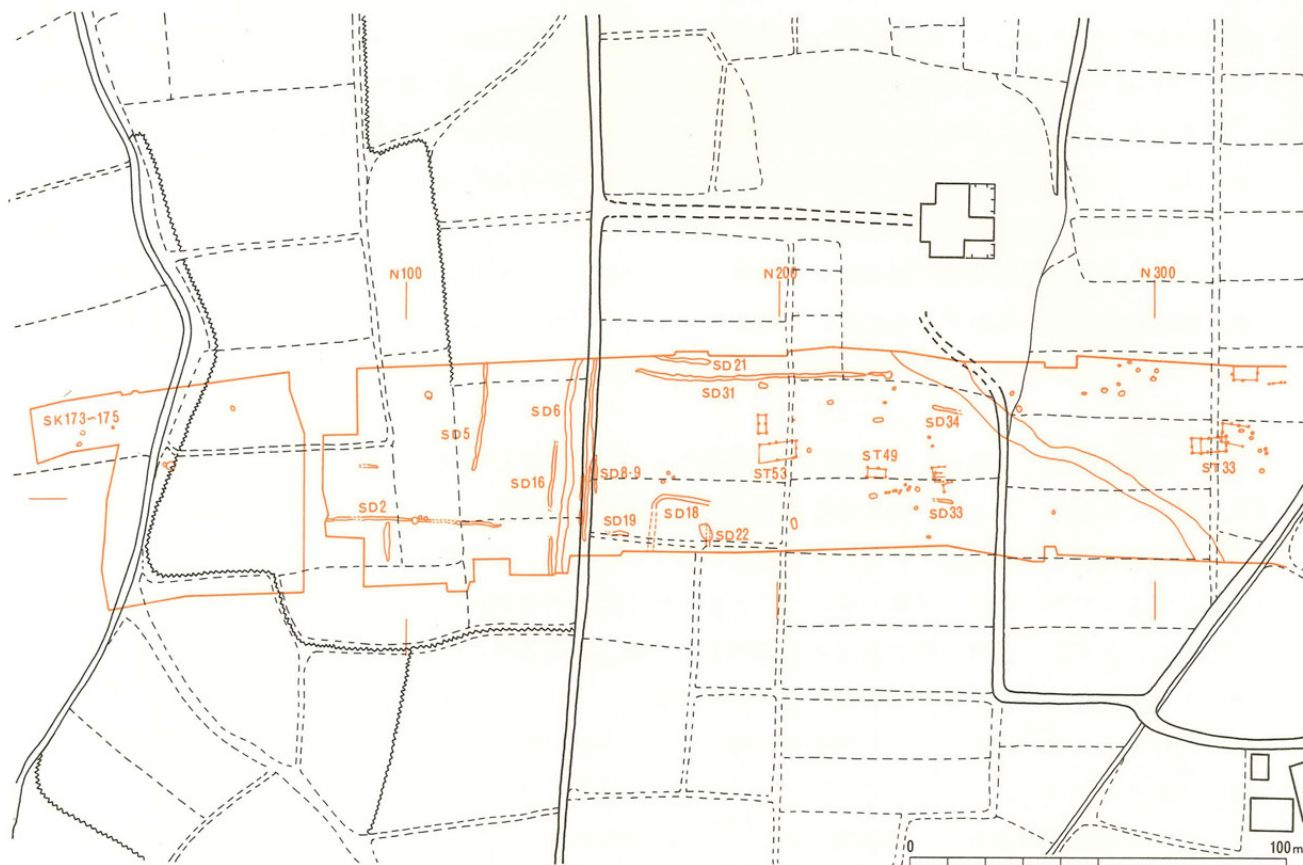
11期は南部から北部D区にかけて新たな開発が開始される段階であり、6期以降散発的にしか登場しなかった住居址が一定の距離を保って出現する。南部A・B区を対象にその在り方についてみる。(第185図)。当該期のこの地区には北からSB199、91・92、28、10の4軒が35～40mの距離を置いて分布する。SB91と92は重複するので基本的には1軒ずつが一定の間隔を置いて占地する状況とみてよいだろう。すなわち、これは1軒の竪穴住居址がすでに経営の単位・所有の主体となっていたことを示唆するもので、この段階にはかつて存在した住居小群とは異質な構成をとっていることが分かる。住居址の規模、遺物の個体数や構成に明瞭な差は認められず、各住居は平均的である。この在り方は一時的に住居軒数が増加する段階はあるが、15期に至る間基本的な構造に変化は認められない。

以上、時期と地区とを限定し、住居小群の構成やその比較を中心に検討を加えてきた。1期は本遺跡の開発が開始した段階であるが、竪穴住居址2～3軒と掘立柱建物址1～2棟によって構成される住居小群がひとつの単位となり占地していた。なかには周囲に溝を設け、占有地を区画をしていた。また、それらが3期に至るまで同一場所に占地し続けることは住居小群の占有地がすでに開発当初に既成化していた事実を物語る。さらに、住居小群相互はその構成員数や掘立柱建物址の所有形態などに格差がみられ、特に底付の大型掘立柱建物址を有するD区には大型住居址が中心となって構成する住居小群が存在し、開発の草分けの有力な人物が居住していた可能性が高い。これが顕在化するのが3期に展開する掘立柱建物址群の集中であろう。

ところで、本遺跡の場合、1期以降、少なくとも8期以前までは住居小群にみられる規制は各住居小群内を単位としており、それが集落全体を抱摂するものでないことは、各小群の遺構の主軸のばらつきに端的に示されている。すなわち、住居小群によっては掘立柱建物址や住居址の主軸を一定の方向にきちんと揃え、強い規制の認められる例があるが、その小群の規制力は周囲の小群には波及しない。また、住居小群によっては4期のSB175を中心とする一群にみられたように、その小群の長である人物の名前と思われる文字を記した墨書土器を共有し、小群の紐帯を強化、維持するといった共通認識を各成員が保持していたと思われる。

住居小群の構成は基本的に1期から8期以前までは変化がみられない。竪穴住居址は一般的な居住空間として利用され、クラなどの機能を有したと思われる掘立柱建物址を付属させている。もちろん、掘立柱建物址を住居として利用する例はあるが、それは優位な住居小群にだけみられる特徴であり、しかもその小群でも中心となる人物周辺の住まいとして利用された感がある。というのは、中型の竪穴住居址2軒で構成される住居小群には住居と推定できる掘立柱建物址がほとんど存在せず、2間×2間の掘立柱建物址が伴う例が多いが、大型住居址を中心とし、数軒の竪穴住居址で構成される住居小群には3間×2間以上の、床面積に換算すれば20㎡を越える掘立柱建物址が大型住居に近接して構築される類例が多いためである。北部D区の特異な掘立柱建物址群を除くと、4期の住居小群で取り上げたST42や19はその典型的な例で、この2つの大型掘立柱建物址はそこに居を構えた人物の財力を反映すると同時に、その存在を周囲の住居小群に誇示する機能をもつと思われる。すなわち、一般的な集落のなかにあっては掘立柱建物址は一部の階層に限って、3間×2間以上の掘立柱建物址を住居としており、そのなかでも3間×3間以上の規模の掘立柱建物址をもつ住居小群には集落のなかでも富を蓄えた階層が存在した可能性が高い。1期以降、住居小群内部における階層分化が強まる過程において、きわめて限定された階層のみが住居として採用するのである。

ところで、本遺跡では6期以降に掘立柱建物址を確実に捉えられない。しかしながら、掘立柱建物址が住居小群のなかにもまったく加えられないかという点には疑問点が残る。1期以降の住居小群にみられたよ



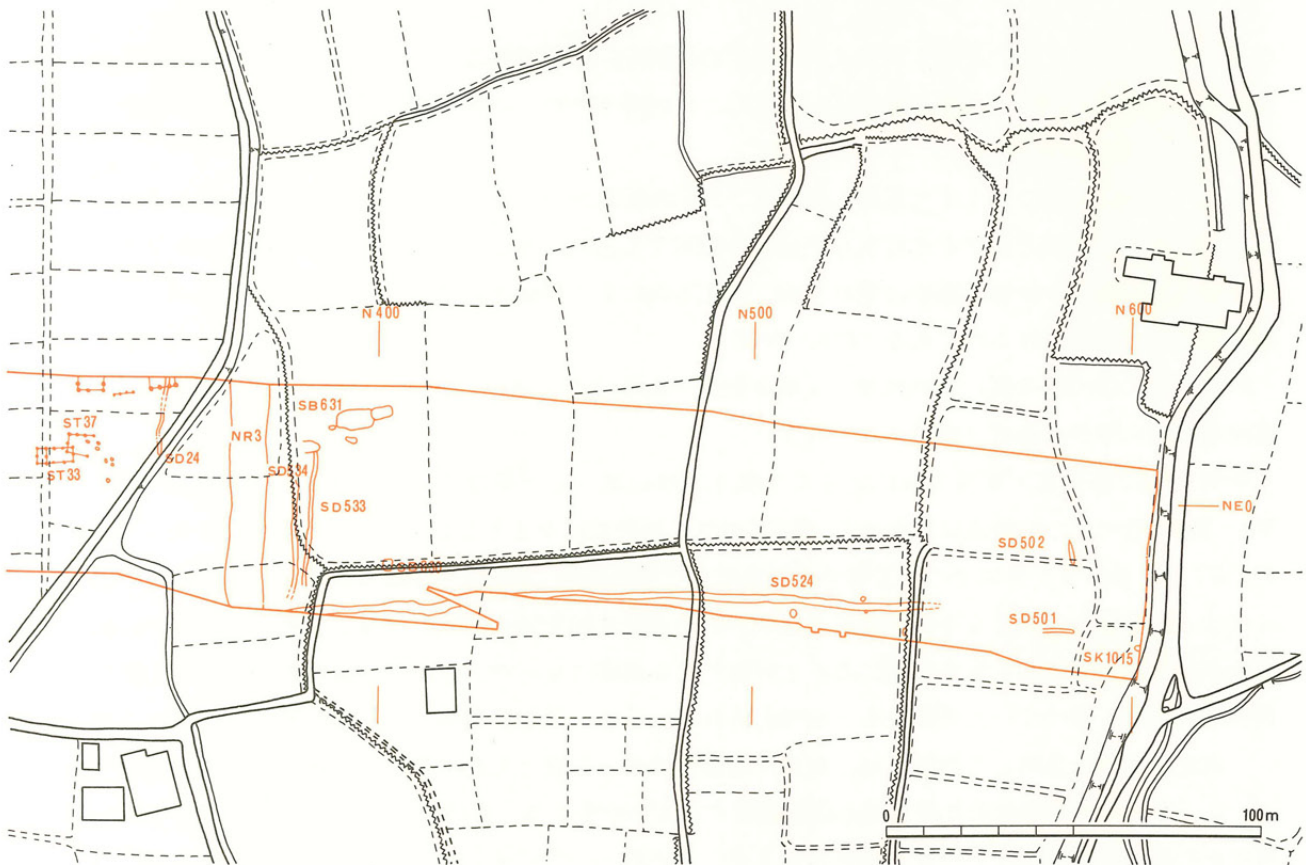
第186図 中世遺構分布と現景観(1)(1:2000)

うに各小群には収穫物を保管する場として掘立柱建物址を利用しており、5期に至るまでその状況は基本的に変化しない。したがって、掘立柱建物址が捉えられていない時期にも当然そのような場が必要であったことは言うまでもない。竪穴住居址がそれに代わる機能を有したことも十分考えられるが、掘立柱建物址の存在を否定はできない。この点については傍証資料の増加を待って改めて検討されるべき課題であろう。

8期の住居小群の構成はそれまでの構成とは異質であることはすでに指摘した。小群は竪穴住居址だけで構成されており、その配置は強い規制を受け、それらの住居小群を包摂する規制が別に存在することを示唆し、さらに、それらに対してイニシアティブをとった有力層の存在を物語るのである。本遺跡の場合、SB555や565がそれに相当する人物の住居址と推定され、ひときわ大きな規模を有していた。しかも、柵を設けて周囲との空間を分けることによって、周囲に対してその力をより鮮明に示威するものである。そればかりか、当該期に増加する墨書土器の分布はそれと同様の役割を果たしたと考えられる。SB555を中心とする周辺から出土した『ㄋ』または『ㄎ』と記された文字は、おそらくこの集団の記号として、保有する成員の忠誠と紐帯をより強固なものにする意図が存在したと思われる。また、判読不明のこれらの文字は単なる記号として用いられており、宗教的な呪いを推定させることから祭祀に纏わる遺物であった可能性が高い。墨書土器の分布が大型住居を中心として拡散しないことは特定の場に保管した可能性をも示唆するものと思われる。

11期になるとその構造もまったく姿を消し、1軒の竪穴住居址が一定の空闲地をもって分布し、伝統的にみられた複数の住居址がひとつの単位となって小群を構成する状況は認められず、個々の竪穴住居址がすでに独立したひとつの単位として成立している。

住居小群の構成を中心に説明を加えたが、その配置についても整理しておこう。



第187図 中世遺構分布と現景観(2)

1期の住居小群の配置は竪穴住居址や掘立柱建物址の構成数によって若干の違いは認められるが、竪穴住居址を「L」字形に配し、それに囲まれた空白域、すなわち広場に掘立柱建物址を配置する。この形態は4期にもみられ、伝統的、基本的な配置形態であることは容易に判断できる。掘立柱建物址の配置場所が広場の中心にあることは、その所有主体が住居小群にあることを示している。掘立柱建物址の所有主体が特定の有力階層に限られる場合もあるが、その場合は4期のST41のように掘立柱建物址は、有力者の住居に近接して建てる例がほとんどである。このような遺構配置は住居小群が変容する8期にはすでに消滅しており、大型住居を取り囲んだ配置となっている。なお、住居小群を越えた、例えばムラが保管したと思われる建物址は確認できていない。

住居小群の占地面积はどうか、小群相互の間隔を目安に検討してみる。

1期のSB155を中心とする一群は区画が方形と仮定すると、一辺約50m、約2500㎡を占地している。4期のSB175の一群は一辺42m、占地面积は約1800㎡に近い。5期のSB113の一群では一辺35m、面積は1300㎡程の範囲を占地している。このような事例から本遺跡の住居小群の占有面積は時期や小群の格差によって多少の差異はあろうが、概ね1000～2000㎡を占地していたと判断してよいだろう。

2 中世遺構の分布と現景観

本遺跡の中世遺構は中世1期の竪穴住居址4軒、溝址2本、中世2期は掘立柱建物址11棟、柵址1棟、溝址21本、火葬墓4基と土坑135基がある。本項ではこれらの遺構が現景観とどのような係わりをもつかという点に絞って検討を加える。

調査前に設定した課題のひとつに条里的景観の問題がある。島立条里的遺構の成立時期、すなわち条里制施行の時期については多くの研究者の取り上げる、松本平西部の重要問題として今日に至っている。現

条里景観の南限は北側に隣接する北栗遺跡の調査範囲分の県道高綱線までとされており、直接本遺跡の調査課題とは関連しないが、条里制施行の存否などの問題を含め、中世遺構の分布と現景観との係わりのかで検討することにした。

古代の遺構は15期に至るまで連綿と継続し、遺構の配置状況に条里制施行と関連する状況は認められないが、隣接する北栗遺跡などでは現条里景観と関連する溝址、水田址、建物址などの遺構が確認されている。本遺跡の場合も中世2期には東西方向、南北方向に走る溝址が確認され、それらが現景観と深い関係のあることが推定されるのである(第186・187図)。

中世1期にはNR3北側に竪穴住居址4軒が散見されるほか、南部に区画を意図した溝址があるだけで、直接現景観に繋がる遺構は確認されていない。

中世2期には南北・東西方向に走る溝や掘立柱建物址などが確認された。掘立柱建物址はN200、N300~350付近の2つの地点に集中する。ST53付近には柱穴になると思われるピットが確認されており、北側のST33と合わせて何回かの建て替えを繰り返しながら占地し続けたと思われ、出土した内耳鍋の破片からほぼ15世紀に帰属するものと推定される。この掘立柱建物址の周辺には集石を有する土坑が分布し、人骨が出土したSK486を除き確実に墓址と判断できる遺構はないが、なかには墓址と推定できる例もあり、屋敷地内に墓を設けていた可能性も十分考えられる。なお、掘立柱建物址は一部を除き、溝址と重複しない。溝址は方位を意識して設置され、かなり規格性のある配置とも受け取れる。第186・187図に示されるように、これらは現在の用水路や道とほぼ重複することが分かる。N150付近の東西方向に走るSD6などは何度かの浚渫や改修による位置の変更はあるが、溝と溝との間に道があったと想定され、現在も残る、南栗の集落と神社とを結ぶ道とほぼ重なる。その北側にあるSD31と21も同様に、南北に走る道があった可能性が高い。N350付近にはNR3、SD533、534がある。NR3は本遺跡が形成し始める以前から流れていたと考えられる自然流路で、中世に至る間に規模が縮小化し、徐々に小規模な用水であるSD533やSD534に姿を変えていったと思われる。現在流れるかど川は新村の水田の排水路である栗林堰と和田を通り抜けた排水路とが合流した用水で本遺跡の調査地区西側手前で二方向に分岐している。明治9年の地図にもこの用水路は掲載されており、古代の開発以前から流れていた流路(NR3)は中世になって小規模な用水路として使用されるようになり、それが現在まで連綿と続いたことが分かる。二方向に分岐する用水のうち、北側に流れる用水は途中で直角に向きを変え、堀川方向へ北上している。その用水路とほぼ位置を重ねるのがSD524である。SD524は出土した内耳鍋から少なくとも15世紀までは遡ることができる。この溝址は途中で採土による攪乱のため失うが、その延長上にあるSD501と位置的に方向が同じであることから本来は1本の溝で堀川へ注ぎ込んでいた可能性が高い。現在も流れる用水路はかつて堀川へ流れており、これもSD533らと同様に中世から現在まで残る溝址として判断できる。堀川は現在かど川と同じ栗林堰を水源とするが、堀川の流れる方向は旧和田村と新村との村境となっていた芝沢堰の方向と重なることから、かつて東西方向に走る自然流が存在したと思われる。そして、島立の条里的地割が施行された際、島立条里の氾濫からの保護と新村条里の排水路として開発された栗林堰の排水口として利用されて以来、今日に至ったと推定してよからう。

このように、本遺跡で確認した中世の遺構のうち、15世紀に遡る中世2期の溝址は現在の景観とほぼ一致することが分かった。中世の溝址は古代から流れていた自然流路や谷地形を利用して設けているが、それが島立や新村条里の開発を契機として行われたことは容易に推定できよう。ところで、島立条里の用水路の開発と本遺跡で確認した中世の溝址が少なからず係わりがあることが分かったが、調査の課題とした条里的地割との関係はどのようなだろう。

栗林神社に通じる現道と重なるSD6やそれと直交するSD31に注目してみる。

SD6と栗林神社の北側に残る現道までの距離は約120m、また、SD31と神社西側の現道との距離もほぼ120mで、神社は方形の区画をされた範囲に入り、それはちょうど1町よりわずかに大きな区画と判断される。この区画を基準に1町の一辺(109m)の距離を北側へ計測すると、SD533、N490付近の現道、堀川が坪界に当たり、ちょうど堀川まで3つの坪区画を想定することができる。ここで大胆な推測が許されるならば、島立に条里的地割が採用され、水路開発が行われるのとはほぼ時を同じくして、本遺跡周辺も用水路(溝址)の開発がなされ、水系をより有効に利用した条里的地割がなされたとは考えられないだろうか。

以上、中世の遺構と現景観との比較をしてきた。現景観は少なくとも15世紀までは遡ることが分かり、条里的な地割が南栗周辺でも採用された可能性のあることを指摘した。だが、後者については、推測の域を出るものではなく、南栗神社の成立年代と合わせて今後の研究に拠るところが多い。

第4節 集落の変遷

前節までの検討を受けて、本節では古代15期、中世2期に区分された編年に沿って集落の変遷をみる。以下、時期別に説明を加える。

1期 (第188・189図)

本遺跡の開発が開始された段階である。流路沿いや微高地に数軒の竪穴住居址が固まって分布し、それらが、一定の間隔を置いて占地する。当該期には竪穴住居址35軒、掘立柱建物址15棟がある。

遺構間に重複関係がみられる状況から新・古の二段階に区分される。NR3南側には溝によって占有地を分けた2つの住居小群がある。SB129は当該期では、SB546と並ぶ大型竪穴住居址である。北側に数棟の掘立柱建物址を有し、かなり優位な小群であったと推測される。その北側にあるSB155を中心とした一群は溝によって区画された中に竪穴住居址を「L」字形に配置し、掘立柱建物址を有する。

NR3と4の間には大型住居址が目立つ。この地点には前節で詳述したように、大型住居址と掘立柱建物址が整然と配置され、統制のとられた地区である。南側に位置する大型掘立柱建物址のST560は西面に庇を付属した本遺跡最大の建物址である。集落初期段階にこのような建物址が存在する状況は注目される。特に、この地区が周囲の住居群とは遺構配置や遺構の規模などが異質な在り方を示しており、1期には掘立柱建物址を住居として採用する例も一般的でないことから、周辺地域を統率する有力者層が居住していたと推定される。掘立柱建物址は有力者層の富と力の象徴であり、竪穴住居址が集落景観の主体を占める中で特異な相貌を呈していたと考えられる。なお、SB522からは金環が1点出土しており、この地区が卓越していたことが遺物からも裏付けられる。

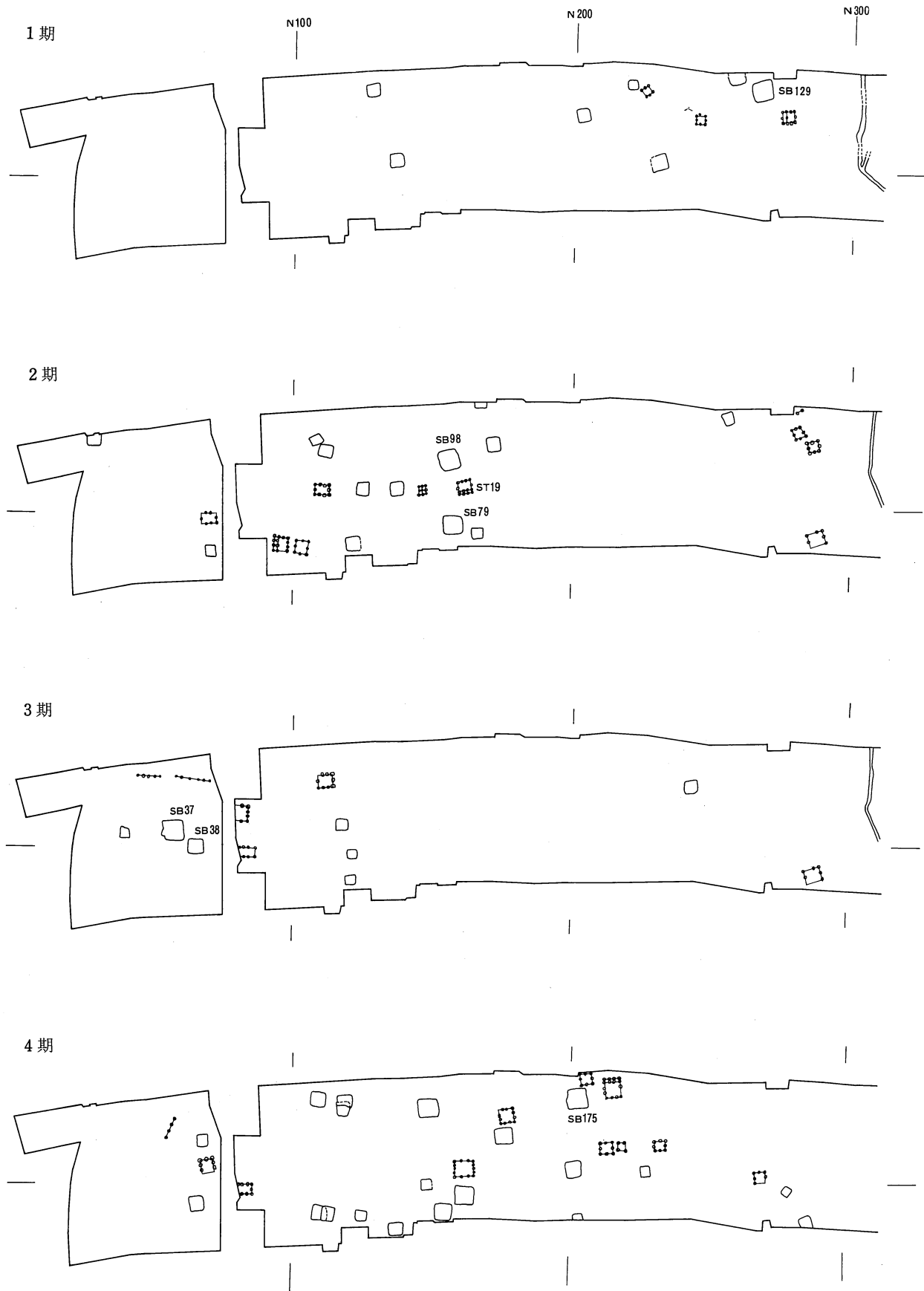
NR4の北側には比較的狭い範囲に中型の竪穴住居址が近接して分布する。NR4の南側とは住民規模や掘立柱建物の保有数など、様相を異にしている。

1期には竪穴住居址と掘立柱建物址によって構成される住居小群を一定の間隔に配置するという、開発者の計画的な思惑が認められる。開発者は開発を始めるに際し、すでに存在した住居小群による構成をそのまま利用し、かつて居住した地域におけるムラの構成をなぞり、新たな開発に着手したと推定される。

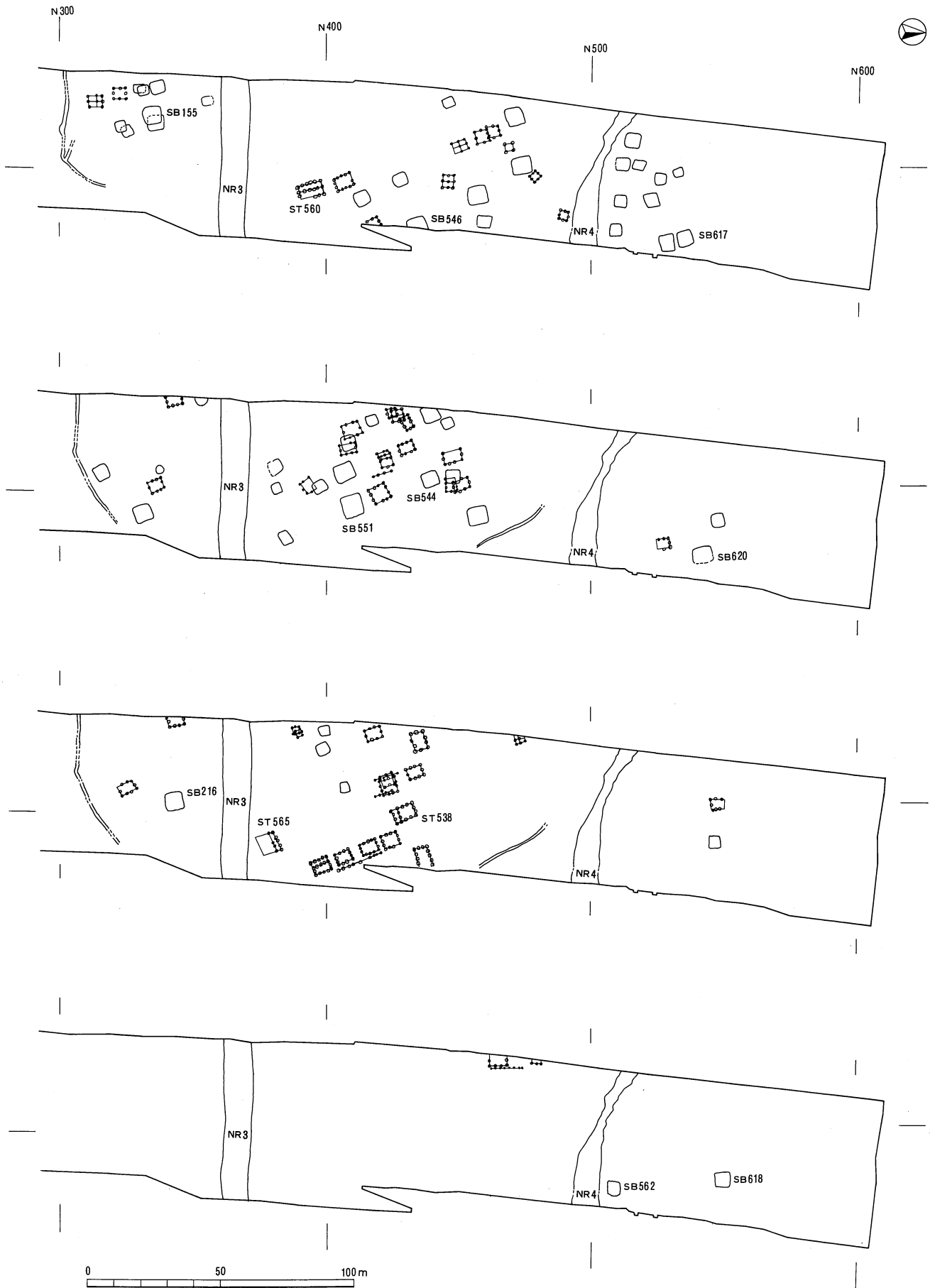
2期 (第188・189図)

竪穴住居址は29軒で1期に比して減少する傾向があるが、その分掘立柱建物址の棟数が増えており、集落の規模に大きな変化は認められない。

1期に流路付近に占地した集落はその流路から離れ、住居小群数単位から形成される遺構群の集中がより鮮明となる。前期には遺構がみられなかった鎖川へ寄った地域にも居住域を広げる。



第188図 集落景観変遷図(1) (1:2000)



第189図 集落景観変遷図(2)

南側にある一群は鎖川によって形成された自然堤防上に沿って住居址が分布していたと推定される。SB79・80はともに大型竪穴住居址であるが、SB98の主軸は周囲の住居址と振幅が異なる。この主軸は比較的1期にみられ、1期から2期へかけて存在した住居址とも考えられる。なお、東側に位置する東面庇付きのST19はこの住居址に伴う建物址であろう。SB79の西側には金環の出土したSK200が確認されている。人骨は出土していないが、床面に朱の集中が認められた状況と遺物の在り方から墓址と判断した。遺構の配置からこの時期に帰属した可能性が最も強いが、古代の墓址は13期に至るまで確認されておらず、墓制を考える上で重要な資料と言える。おそらく、SB79を中心とする住居小群の有力な成員を葬ったと推定される。

N300からNR3にかけて遺構の集中がある。1期の住居がすでに既成化した占地のなかで建て替えを繰り返す。溝で区画された中にある住居小群は竪穴住居址2軒により形成されるが、その構成は1期と変わらない。N300南側の掘立柱建物址は西側に広がると推測される小群に付属するものと思われる。

NR3と4の間にある一群は前節でその変遷についてみたが、新・古の二段階に区分され、新段階には大型の掘立柱建物址が存在する。1期の分布と比較すると、全体的に南側へ移動する。1期のST560に相当する住居は古段階には明瞭に促えられないが、新段階には本遺跡最大の超大型竪穴住居址のSB551があり、ST560に相当する有力層の住居と判断してよいだろう。SB544からは金環が出土している。この地域の卓越した状況は変わらず、むしろ徐々に成長する様相が窺われる。

NR4の北側の一群は全体的に北方向へ移動する。1期に比して住居軒数は減少するが、掘立柱建物址が建て替えを行う状況がみられ、N550以北に居住域があった可能性は強い。長方形のSB620は1期のSB17の建て替えと思われる。

2期は住居小群のいくつかが集中し、居住域が大きく分かれる傾向が明瞭になる。鎖川方向への開発とともに居住域が拡大し、自然堤防最頂部から後背地が開始するぎりぎりの範囲までを居住域として利用するようになる。居住の占地場所は1期のそれと基本的に変化しないが、数単位の住居小群が揃って同一方向へ移動する状況は、各小群がある程度自立した単位として存在しながらも、それを包摂する別の共同体規制あるいは統制が存在したことを物語る。

3期 (第188・189図)

竪穴住居址が12軒と2期の半数になるが、2期に占地した場所での建て替えがほとんどで集落の構成や移動など大きな動きはみられない。但し、1期以降卓越した支配者層が居住した中央付近では竪穴住居址が激減し、掘立柱建物址が配置される。

南側の鎖川に最も寄った地点には大型竪穴住居址のSB37が存在する。2期のSB33が移動した住居址と予想されるが、東側にあるSB38との間で建て替えが行われる。大型竪穴住居址と小型の竪穴住居址とによる住居小群を形成しており、西側には柵址を設けて占有地を明確に区画している。その範囲は北側の掘立柱建物址を加えると、一辺45～50m程の広い面積を占有することになり、かなり有力な人物と推定できる。なお、SB37からは『生』?と記された墨書土器が出土しており、その人物は識字層であった可能性も十分考えられる。

N300付近にあるSB216は1期の開発と同時に占地した一群が継続してきたものであるが、1軒だけで存在しており、勢力の衰退が感じられる。なお、これ以降住居址は占地せず、当該期をもってこの小群は終焉を迎える。

NR3と4に挟まれた地点では2期から3期へかけて変革を迎える。2期にすでに構築された建物址がその場で建て替えを行い、さして時を違えず東側に新たに軒を揃えた南北棟4棟が加わる。また、南側にはST565が、北側にはST538が広場に庇を向けて構築される。掘立柱建物址は「□」字形を意識した配置と

なり、国衙や郡衙にみられる遺構配置と類似し、「官衙的配置」とみられることも可能である。いずれにせよ、1期以来卓越して居住してきた有力者層はそのまま掘立柱建物址に居住しながらこの地区を占有するが、「官衙的配置」を採用した遺構の構成は同時にその階層が律令制における農民支配の一翼を担っていたことをも示唆するものであろう。

NR4の北側には竪穴住居址1軒と掘立柱建物址1棟と前期と比して集落の規模はさらに縮小するようにもみられるが、4期以降も住居群がそのまま占地しており、1期以来基本的な集落の構成に変移はなかったものと推測される。

3期は2期みられた鎖川付近への開発が終了し、そこに居住したなかから新たな有力者が誕生している。柵に囲まれ広範な居住地は周囲とは異質な景観であり、職字層であることも考慮すると南側に固まる集落の中心的な人物であったとも思われる。また、開発が開始されて以来、卓越した地区として存在した北部南側では掘立柱建物址が強い規制の下に配置され、ムラを統率する場となったことがより鮮明になったと言えよう。

4期 (第188・189図)

南部の集落はさらに拡大し、そのなかにはかなり有力な階層が誕生し、住居小群相互での格差が明瞭になる。一方、北部南側では3期に隆盛を誇った掘立柱建物址群が姿を消し、支配者層がこの地から他所へ移動する。当該期には竪穴住居址25軒、掘立柱建物址12棟がある。

南部の集落は前期に比して北側へ広く展開する。大型竪穴住居址に中型の竪穴住居址、掘立柱建物址数棟が付属する。前節でみたSB175を中心とする一群は3棟の掘立柱建物址を小群で所有し、墨書土器を媒介とする紐帯が認められる。この小群以外では円面硯も出土しており、ムラの中に識字層が存在したと考えられるとともに、何人かの有力者の存在も物語る。

北部南側にはSB635が1軒離れて分布する。小型の住居址で、しかも遺物は少なく長期間に渡って存在したとは考えられない。一時的な住居であったとも推定され、この周辺を居住域としていないと判断して差し支えあるまい。掘立柱建物址群が消えた地点には、これ以降11期に至るまで遺構は認められない。西側調査範囲外にかかる2棟の掘立柱建物址は主軸を南北にとり、1～3期にはみられない主軸であることから当該期に含めた。東側には柵址を伴い、2棟の建物址が同時に存在していたと思われる。また、遺構が西側にさらに展開すると推定され、3期に分布した掘立柱建物址が西側へ移動した可能性も残る。

NR4北側にはSB562・618の2軒が分布する。住居址が散在する状況は2期以降から継続してみられる特徴で、おそらく、竪穴住居址1～2軒が単位となる住居小群を形成していたと推定できよう。なお、SB618は大型住居址で、1期に占地したSB607あるいは617、2期のSB620と規模や形状が一致しており、1期以来この地を居住域にしていた集団と判断できる。

4期は南部で集落の規模が拡大し、北部とは一定の空闲地を設けて、明らかに別なムラを形成していたと思われる。すなわち、2期に鎖川方向へ開発を進めた集団はそのまま別な単位として新たなムラを作り、当該期に至ると推定される。掘立柱建物址の在り方をみると動産所有が実現できた住居小群とそれが実現できない小群とがあり、格差のある幾つかの小群が混在しながら有機的な関係を維持していた姿が浮かぶ。一方、北部では有力な支配者層が移動し、堀川に寄った地区にだけ1期以来残る集団が点在する。

5期 (第190・191図)

居住域に変化はみられず、集落は継続的に展開する。当該期には竪穴住居址24軒、掘立柱建物址2棟を確認した。竪穴住居址の軒数は4期とほとんど変わらないが、掘立柱建物址は減少する傾向が認められる。だが、4期に存在したような有力な住居小群はみられず、掘立柱建物址も当該期に少なくなるのか断定はできない。

南部には鎖川付近に1軒の住居址があるだけでN100・250付近に住居址の集中がみられる。4期の住居小群がさして場所を違えず占地する。遺構の重複は少ないが、その配置から間に1回の建て替え期を挟む。前節でも指摘したが、4期に存在したSB175を中心とする一群は認められず、他所への移動が考えられる。また、当該期を境に、散発的に住居址が占地することはあっても11期を迎えるまで集落は分布しない。SB55はカマド石や須恵器の大甕が投棄され、さらにSB114のカマドには須恵器の甕を焚口に立てるように廃棄していた。これは住居の廃絶に対する祭祀が行われた状況を物語ると同時に、集落全体が時を同じくしてこの地を去ったことを示唆するものであろう。

北部にはNR4北側を中心に8軒の住居址が分布する。SB526はNR4を越えて分布しており、この段階にNR4が存在しているのか明確でない。主軸方向は東・西カマドとがあり、間に1回の建て替え期を挟むと推測されるが、その先後関係については不明である。SB600は一辺7.0mの大型住居址であるが、前期のSB618の建て替えが予想される。遺構の分布状況からSB526を除き、大きく2つの住居小群に分かれ、住居址2軒でひとつの小群を形成していたと考えられる。

5期を画期として南部から集落が姿を消す。但し、6期以降も数軒の住居址が単発的ではあるが占地する状況がみられ、一部の小群が残った可能性もあろう。N500付近に散在する住居址は4期から数が増加したようにも思われるが、北側に占地していた一群が南側へ一時的に移動したと判断される。

6期 (第190・191図)

当該期に確認した竪穴住居址は3軒あるだけで集落の規模は縮小する。

南部ではN250付近にSB167の1軒がある。次期の遺構分布の状況を考慮すると、SB167を含む住居小群が西側に展開していたと判断できる。5期まで南部に居住していた集落の一部なのかは明確ではない。

北部にはN650付近にSB591・621がある。5期に存在した2つの小群は当該期には認められない。しかし、次期には再び2つの小群が存在しており、5期から集落そのものの構成に変化はなかったと思われる。

7期 (第190・191図)

住居小群は6期の居住域にそのまま居住し、集落は継続的に展開する。当該期には11軒の竪穴住居址がある。

N250付近には5軒の竪穴住居址がある。6期には1軒の住居址しか認められなかったが、西側から東側へ移動してきた一群であろう。SB164は東壁が6.25mの規模を有し、その全体像は知り得ないが、かなり大型の住居址であったことが推定される。この住居小群の中心的な存在であろう。SB116とSB134は覆土が近似しており、同時期に存在したと思われる。SB162とSB164の重複関係から間に1回の建て替え期を挟み、遺構の配置から2つの住居小群の存在が予想される。SB162・SB164からは判読不明の2点の墨書土器が出土している。文字による集団の紐帯維持が行われていたと推測される。

北部には6軒の住居址が2つの小群を形成して分布する。前節で詳細に検討を加えたが、2つの小群は数軒の竪穴住居址によって構成されるが、各住居址間は近接して配置される。SB564・598からは墨書土器が出土した。このうちSB598は一辺5.60mの北部では最大の住居址である。『真菌』と記された墨書土器はこの竪穴住居址に居住した中心的な人物の名前であろう。

当該期は6期の集落規模や居住域に大きな変化はみられないが、墨書土器の出現は注目できる。本遺跡では4期にはすでに住居小群内の紐帯強化に墨書土器を使用する例はあるが、それはごく一部の集団にみられた特徴であり、当該期を迎えるまで墨書土器の出土例はかなり少ない。しかし、この期の墨書土器の分布は特定の小群に限られず、集落全体に分布しており、文字がいろいろな階層に普及することを示唆するものであろう。なお、文字を利用した集団内の紐帯強化が明確に具体化するのには次期を待たねばならない。

8期 (第190・191図)

集落は継続的に展開する。当該期には竪穴住居址30軒がある。

南部では7期にN250付近に占地した住居小群は他所へ移動し、SB142の1軒が分布する。6期以降、住居小群はその居住地を転々と変更するが、当該期はその中心をN300付近の調査範囲外におき、SB142はその東端に位置していたと考えたい。というのは、N200から300の東西から北東方向にかけて走る谷地形を避け、その北側に展開する微高地に占地したと推測されるからである。なお、SB142からは『メ』と記された墨書土器1点が出土している。

北部の住居の在り方は興味深い。北部には各時期を通じて113軒の住居址が密集するが、前期までみられなかった堀川に接する地区に新たに4軒が分布する。居住域が堀川まで拡大するのは堀川が安定していた状況を物語る。N500から550付近にかけての様相については先に詳細に検討したのでここでは省略する。

当該期は、6期以降成立した居住域を基本的に踏襲するが、北部では前期から一気に住居軒数が増加する。これは集落の規模が拡大したと考えるよりも、一定の範囲内に住居が集中する結果とみるほうが良いだろう。すなわち、集落内に存在する有力者を中心に、ムラの再編成が行われたと推定されるのである。大型住居を取り巻く遺構配置や住居の建て替え場所が限定される状況は、集落全体の規制力がかなり強固なものであったことを示唆するからである。このような意味で当該期は1期以降継続してみられた、住居小群を単位とするような集落の構成とは別に、新たな共同体規制が誕生し、ムラの構造が変革している状況が明確化する段階としてひとつの画期となる。文字がその共同体規制維持のための道具として利用されたことは当該期に墨書土器の出土点数が増加することからも明らかである。堀川に接する一群とSB555周辺から出土した文字が異なるのは帰属した集落の違いを示し、北部には2つの大きな集団が占地した可能性が高い。

9期 (第190・191図)

南部では住居址はみられなくなり、北部でも住居軒数は減少するが、8期の集落が継続して居住する。当該期には8軒の住居址を確認した。

北部の8期から9期にかけての在り方はすでに前節で検討を加えたので、ここでは概略に止める。構成は基本的に8期のそれを引き継ぐが、特に、規模の大きな住居址はみられず、平均的な規模の住居址が散在する傾向がみられる。また、8期に集落を統率した、指導的立場にあったSB555や565に相当する住居址は明確に捉えられず、他所へ移動した可能性が高い。

10期 (第190・191図)

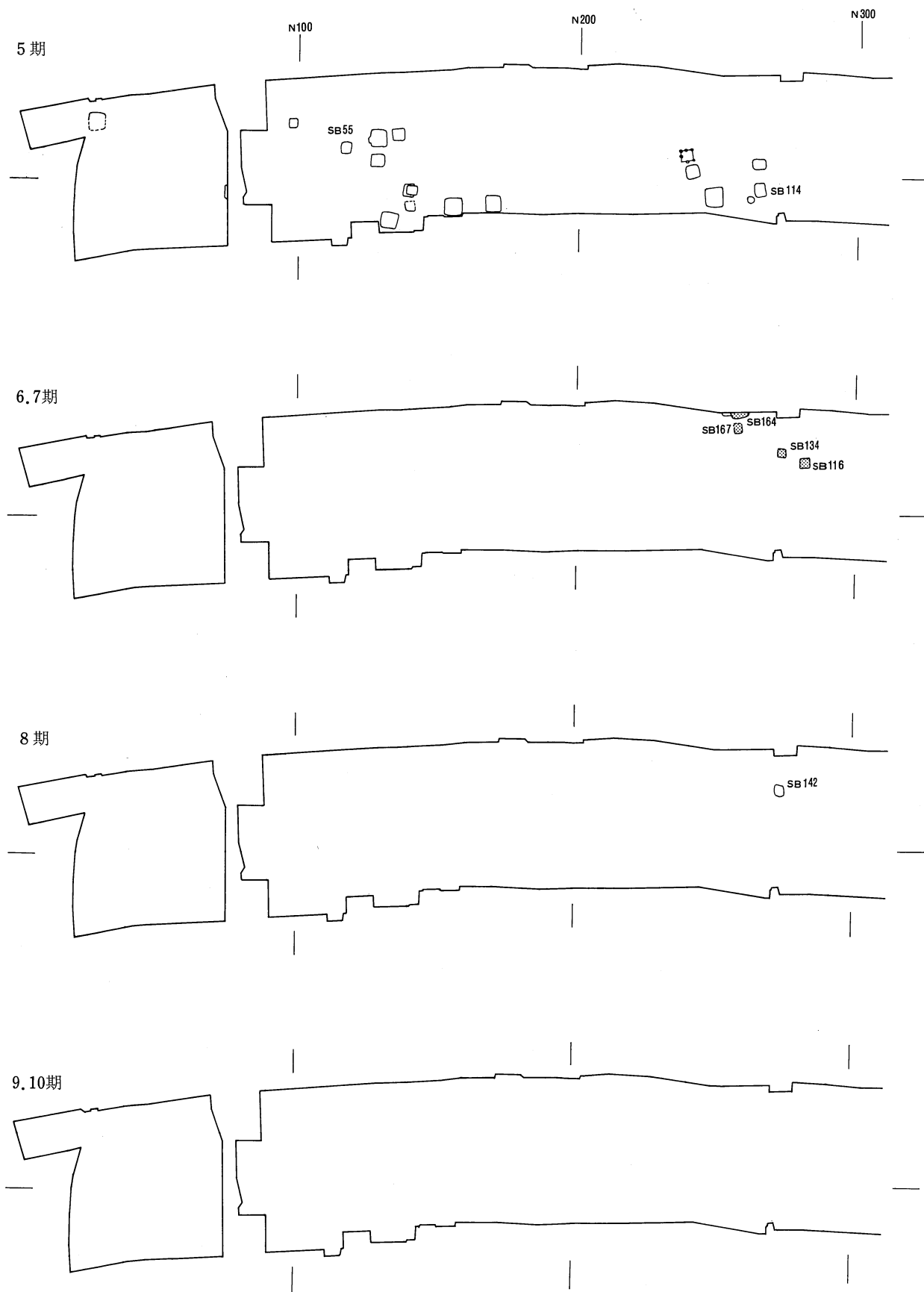
8期から9期にかけて認められた集落の縮小化が一層進む段階である。当該期には竪穴住居址4軒があり、間に1回の建て替え期を挟む。

4軒は北部N550付近に占地し、8期から継続して残る一群であるが、9期からどのように変遷するのか明確でない。SB578と579は近接しており、両者の間での建て替えが予想されるが、その先後関係は不明である。SB583は4軒のなかでも比較的規模の大きな住居址で、『万』?と記された墨書土器1点のほか、邢窯産の白磁碗1点が出土し、この小群の中心的立場であった住居址と推定してよからう。

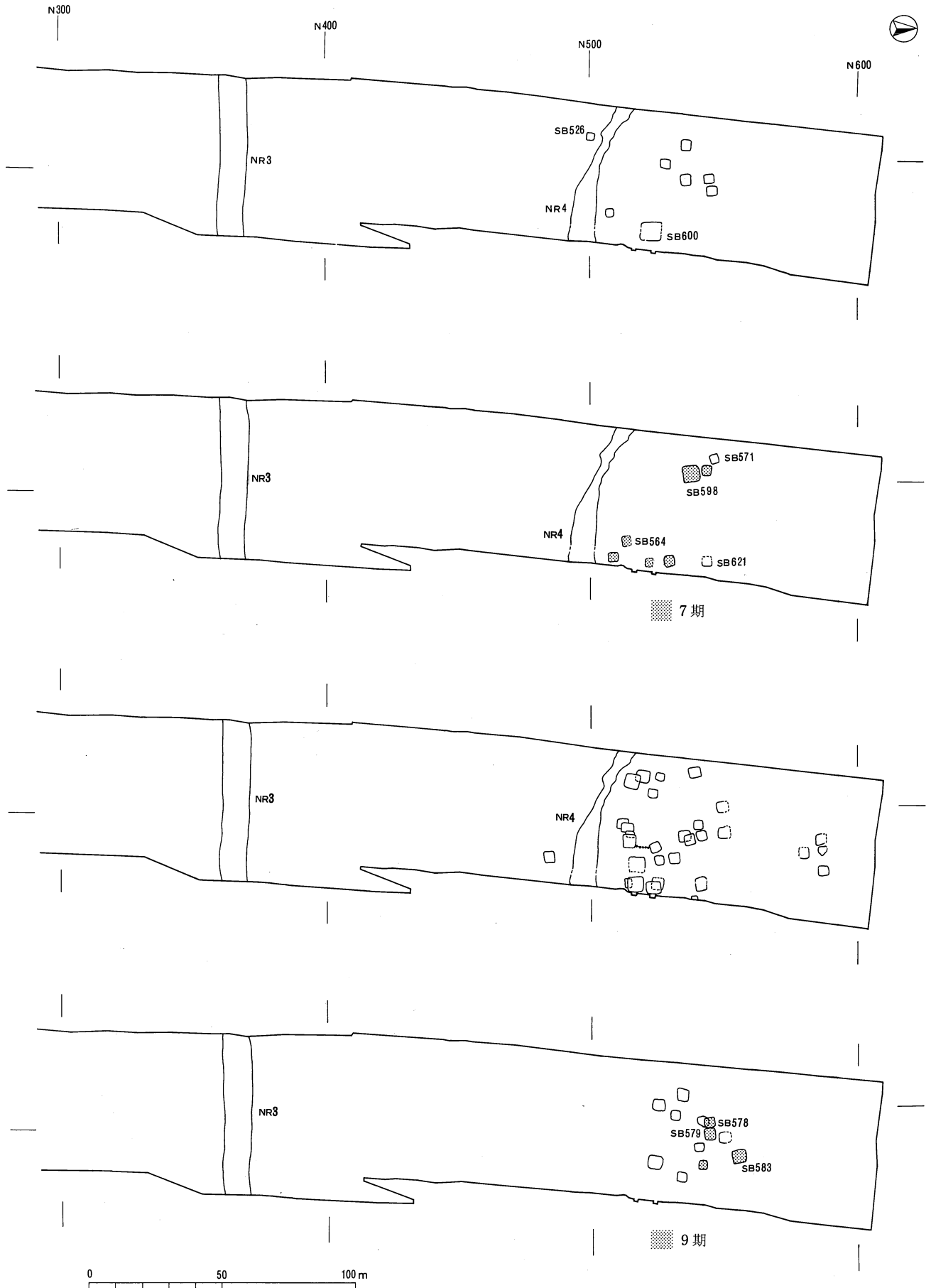
当該期の集落の在り方をこの4軒で語るのは甚だ困難である。しかし、10期をもってこの地から集落が途絶える状況を考えると、基本的には8期にみた集落の構成を継続しながら、その一部が当該期まで占地し続けたとみてよいだろう。

11期 (第192・193図)

南部に再び住居址が分布し、新たな開発が開始される段階であり、ひとつの画期としてよい。当該期には10軒の竪穴住居址がある。



第190図 集落景観変遷図(3) (1:2000)



第191図 集落景観変遷図(4)

住居址は南端のSB10から北へ向かって、直線距離で40～60m程の一定の空閑地をもって散在しており、計画的に配置されたようにも捉えることができる。居住域の北限はN450付近に位置するSB537で、この地点から堀川に至る間は次期を含めて居住域とならないことから、SB537までをひとつのムラの北限と判断できよう。

南部のSB91・92はわずかに重複しており、SB92からSB91への建て替えがなされるが、SB91からは銅鏡と銅碗が破片でそれぞれ出土したほか、不明品を含む鉄製品4点が出土しており注目できる。また、SB92からは転用硯1点が出土しており、文字に通じた人物が想定できる。

これらの住居址以外でも当該期は鉄製品の出土例が目立つ。SB10からは鉄鏃1点、SB28・119から鉄滓が出土しており、鉄器の所有率が高い。

前節でも指摘したが、当該期の竪穴住居址の配置は1軒の住居址がひとつの単位として存在していることを示唆し、鉄器の在り方もこれを裏付けるものであろう。

12期 (第192・193図)

11期に占地した住居がそのまま継続して展開する。なお、N450付近に存在した2軒の住居址は当該期にはみられず、住居域は南部に限られる。当該期には竪穴住居址15軒があり、その軒数は前期と大差ない。

SB8・11の2軒は入れ子状に重複するが、SB11から8へその場で建て替えられたものである。このほかSB173・185は規模や形状が近似する住居址で、やはり両者間での建て替えが予想される。つまり、間に1回の建て替え期をもつと推定できよう。

SB209と130は11期のSB199の建て替えと考えられ、SB209・130の間でも建て替えが行われたと推定される。また、SB173からは転用硯と緑釉陶器の破片が1点ずつ出土している。住居址の規模は小さいが、特殊な遺物を出土しており注目できる。

当該期の住居址は、11期の開発が始まる段階には存在せずに新たに加わった住居址も認められるが、その多くは前期に占地した住居址が周辺で建て替えたものと判断でき、個々の住居址がひとつの単位として存在していたと思われる。

13期 (第192・193図)

住居軒数が35軒と飛躍的に増加する。また、12期まで居住域として利用されなかった北部堀川寄りにも住居址が分布する。住居址が重複する例はみられないが、その位置関係から間に1回ないし2回の建て替え期をもつと推定できる。しかし、12期からの変遷や当該期のなかでの先後関係については明確でない。

南部の遺構配置では住居址間が近接するものが顕著に見られる。例えば、N100付近のSB14・18・46・47・やその東側のSB23・26・31・67、N150付近のSB96・97などで、おそらくそれらで建て替えがなされたと推定できる。また、住居址が集中する箇所間は一定の空閑地を設けており、11期に開発が開始された段階の基本的な在り方と共通するもので、各住居址はある程度の領域を占有していたことが窺われる。

北部に占地した集落の在り方も南部のそれと共通し、散在的な分布である。

出土した遺物のうち、緑釉陶器、陶磁器などは平均的な規模の住居址が分布するなかで有力層を抽出できる資料として注目できる。SB117・143からは越州窯系青磁碗がそれぞれ1点ずつ出土しており、特に、後者は完形品であることからこの周辺を占地した人物はかなりの有力層と思われる。緑釉陶器はSB14・553から出土し、SB553からは6片と当該期では多量の出土数である。

当該期の特徴として墓址の存在がある。古代の墓址が集落の中に散布するのはこの時期を迎えるまで認められず、しかも被葬者が特定の人物に限定されており注目できる。南からSK176・193・349・1069の4基があり、14期のSK514を含めると、住居址が集中する箇所に1基が存在する状況を呈する。すなわち、これは各園宅地内に1基の墓を設けているかのように見受けられる。

これらの墓址は主軸がほぼ南北方向を向く長楕円形プランを呈し、頭位を北に向け、副葬品を入れた埋葬方法など、形態差を見出すことは難しい。唯一異なる点は副葬品の差である。SK176からは完形品の土師器、灰釉陶器など8点にも上る食器のほか、瑞花双鳥八稜鏡を埋納しており、また、SK1069でも漆製品をはじめ13点の食器が埋葬されていた。多量の遺物を副葬するのはこの2例だけで、これ以外の墓址では数点の食器を埋納する例が多い。これは被葬者の階層差を端的に反映するものと推定できるばかりか、墓址の位置によってその周辺にある竪穴住居址の優劣性も示唆するものである。被葬者の限定は難しいが、SK1069の場合、その付近にはSB553しか存在しないことや、その住居址からは緑釉陶器が出土している状況から、被葬者はこの住居址に居住し、中心的立場にあった人物を想定してよいだろう。南部にある墓址の被葬者は明確でないが、大胆な推測をするならば、この時期に限って墓址が分布する状況から、11期に始まった開発に直接携わった人物を埋葬したとも考えられよう。

さらに、SK349から出土した歯型の鑑定によれば、被葬者は成人の女性の可能性が高いとの結果を得ている。このことは当時の社会構成、特に、婚姻形態の在り方とも係わる内容として貴重な資料である。

当該期に形成される墓址は居住域のなかに惣然と出現し、14期に類例が1例あるほかはこれ以降みることとはできない。当該期に限って、あるいは特定の人物に限って埋葬した背景には何があるのだろうか。これに対する明確な解答を提示するのは極めて難しいが、調査した範囲は明らかに居住域として利用され、本来は墓址を設ける場所とは考えられない点や、13期以降の遺構と墓址とが重複する例はなく、それはあたかも墓址を守るようにも見受けられる点などを考慮すると、墓址を形成することにより、園宅地所有の確立を示威したとは考えられないだろうか。つまり、各園宅地の境界のメルクマールとしての機能を備えていたとも推測されるのである。

14期 (第192・193図)

集落は前期からそのまま継続して展開する。当該期には13期とほぼ同数の37軒の竪穴住居址がある。住居址は南部を中心にN450、600付近に1軒ずつが分布する。園宅地は前期に比してより鮮明にみることができる。

住居址の位置や重複関係などから、1回～3回ほどの建て替え期が考えられる。N200～250に位置する4軒の住居址は同一段階に2軒の住居が存在したと考えられるほか、N300付近北側の2つの遺構の集中箇所でも2軒ずつが併存した可能性があるが、基本的には1軒の住居が園宅地のなかで建て替えを繰り返しながら占地したと判断できよう。

N300付近には墓址のSK514がある。当該期には墓址は1基だけであるが、13期にある墓址と形態は共通する。2つの遺構集中の中間に位置しており、園宅地の境界となろう。

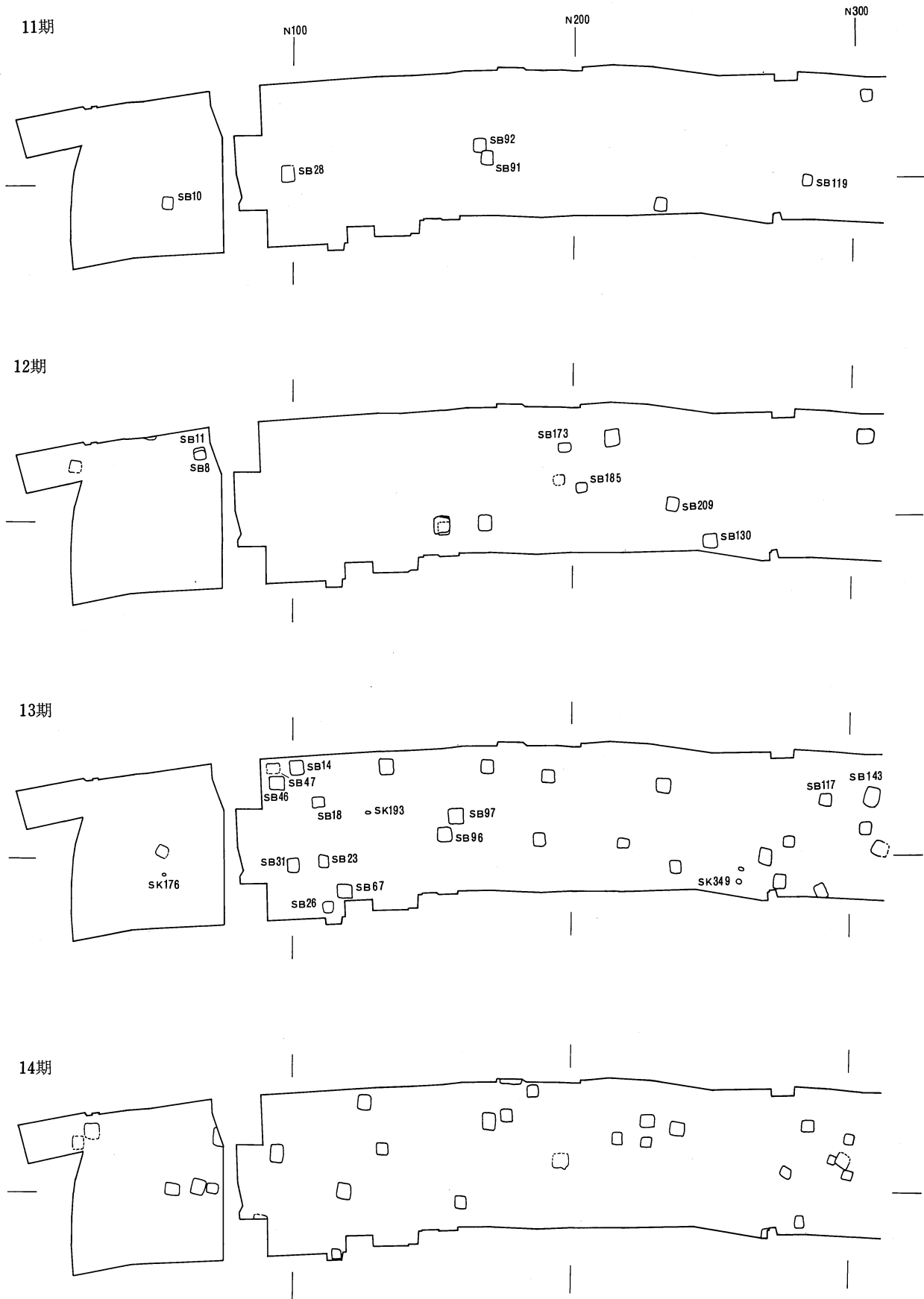
北部に占地するSB640は南部にひろがる集団から外れて位置し、興味深い。この住居址からは当該期には出土例の少ない白磁碗1点のほか、刀子、棒状の不明品など5点を数える多量の鉄製品を出土し、かなり有力な人物の住居と推定される。しかし、次期へは継続せず、一時的に占地した可能性が高い。

15期 (第194・195図)

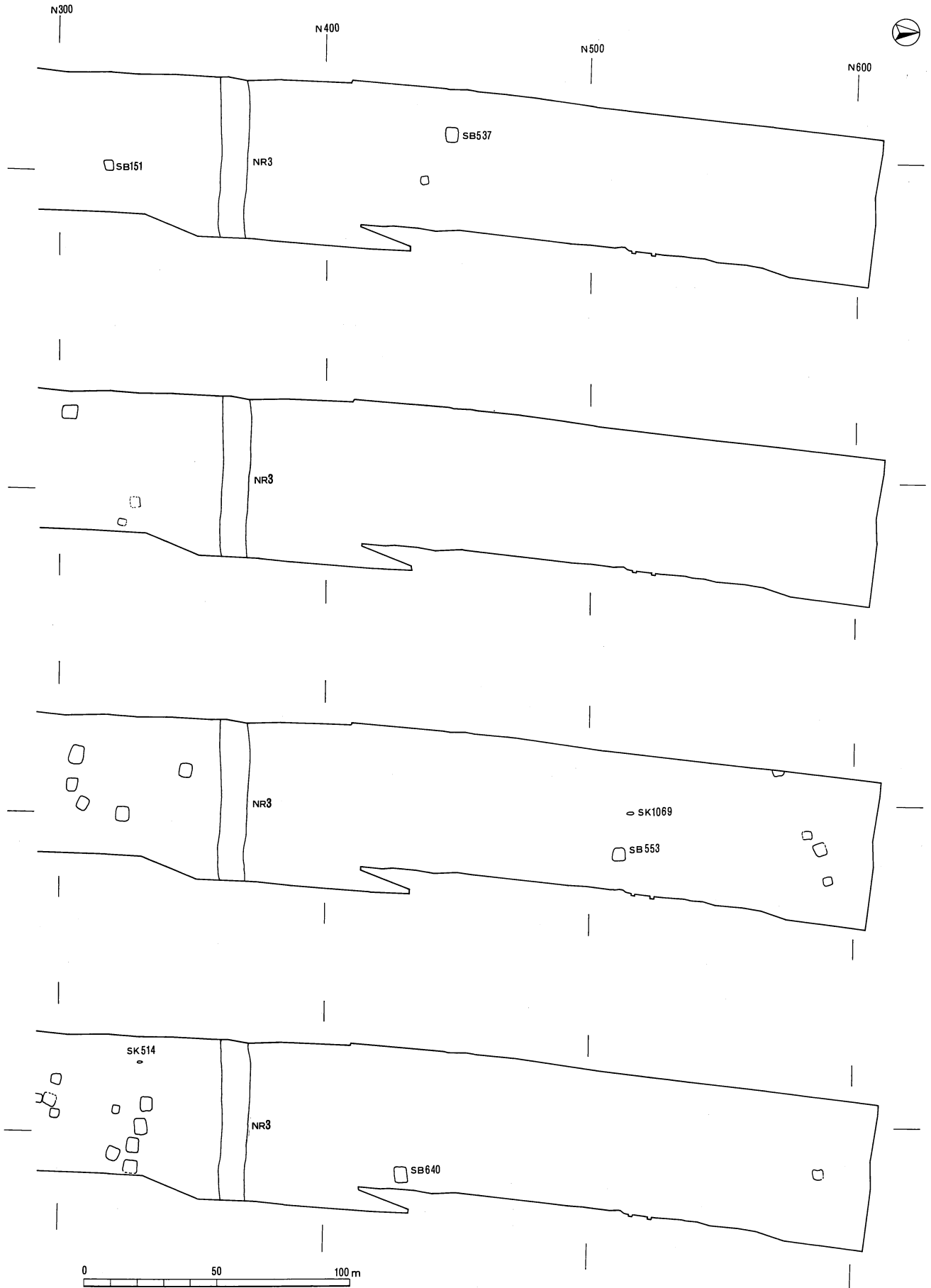
11期に新たに始まった開発も当該期をもって一旦終焉を迎える。当該期には竪穴住居址12軒があり、居住域は南部に限定される。14期から集落の規模は縮小する。

住居址間には重複が認められることから、間に1回～2回の建て替え期を挟む。住居の規模は平均的なものが多く、特に、突出したものはみられない。遺物でも、SB54・179から白磁破片が、SB136・170からは緑釉陶器破片がそれぞれ出土しているが、ほとんど細片であり、特に、注目できる資料は少ない。

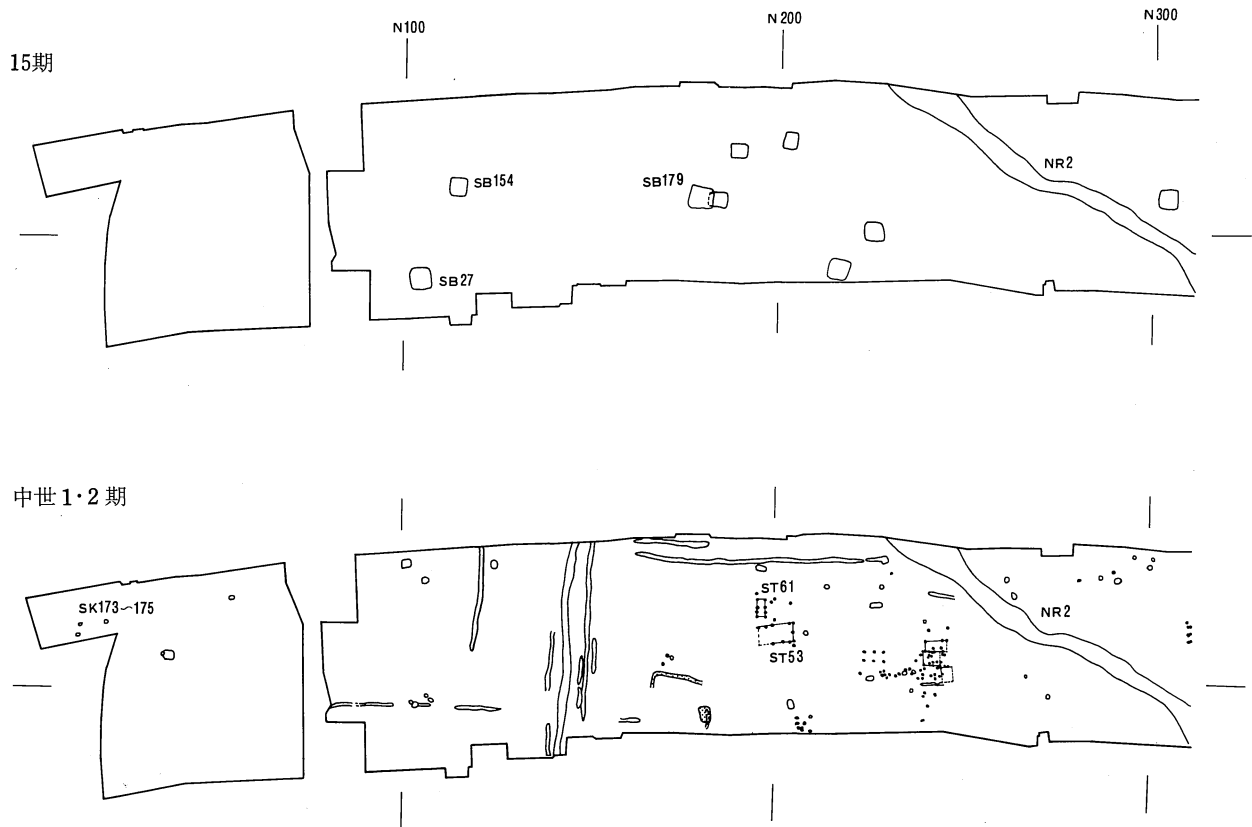
当該期は14期から継続するものの集落の規模は縮小化するように捉えられ、前期まで明確であった園宅地も不鮮明になる。しかし、これは個々の住居が広い地域へ展開をみせ始める段階とみることも可能で、



第192図 集落景観変遷図(5) (1:2000)



第193図 集落景観変遷図(6)



第194図 集落景観変遷図(7) (1:2000)

各住居の自立化がより一層進んだ様相とも考えられる。すなわち、11期以降にみられた、各竪穴住居址がひとつの単位として存在しながらも住居址が近接してムラを形成していた構造とは別に、散村的景観を生む新たなムラの姿へと変貌する一過程として位置付けられるのではないだろうか。

中世1期 (第194・195図)

15期の南部に占地した竪穴住居址が他所へ移動し、遺構の分布は希薄になる。当該期には竪穴住居址4軒と溝址がある。

南部の溝址は区画を意図したような配置になり、北西隅を開いた、一辺30m程の区画になる。この区画に含まれる遺構は確認できていないが、隣接する北栗遺跡(松本市内その8)でも区画されたなかに掘立柱建物址が構築される事例が確認されており、本遺跡でも掘立柱建物址が存在した可能性は高い。

北部の竪穴住居址はSB631・632との間で重複関係が認められるので、SB639を含めて間に2回の建て替え期をもつと推測される。竪穴住居址はNR3と近接して構築されており、当該期にはNR3は小河川に姿を変えていたと思われる。住居址は主軸を南北方向にとる大型住居址で、備え付けのカマドは認められない。遺物は少量しか出土せず、生活の痕跡は不鮮明であるが、このような形態の遺構は周辺遺跡でも確認されている状況から当該期の一般的な居住形態とみて差し支えないだろう。

中世2期 (第194・195図)

当該期は方位に主軸を揃えた掘立柱建物址と溝止によって構成され、現景観を形成する段階と言える。

溝止の在り方については前節(2)で指摘したように、現存する用水路や道との関連性が認められ、現景観の成立時期は中世2期に求められる。一方、掘立柱建物址についてみると、建物址は一定の空地を設けて点在する傾向がみられ、溝によって規制された区画のなかに占地にしていたと思われる。



第195図 集落景観変遷図(8)

建物址の大半は南北方向からわずかに西側に主軸が振れ、東西棟として捉えられた例は1例だけである。大型の掘立柱建物址間に重複関係が認められるため、間に1回の建て替え期を挟む。構成は明確に捉えられないが、N100付近の分布を参考にみる。ST53は桁行5間以上の南北棟で、その西側に隣接するST61は2間×1間の東西棟になる。両者は位置関係から同時期に存在した可能性が高く、大型と小型の掘立柱建物址がひとつの単位として園宅地を形成していたと推定できる。おそらく、ほかの掘立柱建物址も同様の構成であったと推察され、建物址の分布状況から、N100、150、300付近ではそれぞれ別の園宅地を形成していたと考えられる。なお、N300付近にあるST33らは西側の調査用地外にかかる一群と柵址によって分けられる状況を見ると2つの群に分かれよう。また、その両者間には道が存在したことも想定できるかもしれない。

掘立柱建物址の周辺には土坑が群をなして分布する。規模の大小、集石の有無など、土坑によって形態差は認められるが、これらはいずれも園宅地に形成されたものと判断していいだろう。土坑の性格を確定し得た例は少ないが、このなかには大型の集石土坑もあり、人骨は出土していないが、墓になるものもある。

当該期で墓址と認定できたものに火葬墓4基と土葬墓1基がある。火葬墓は鎖川に最も寄った地点にSK173~175の3基、また堀川に接する地点にSK1015の1基があり、川に近接して分布する特徴がある。つまり、川周辺を火葬場・墓の場所、墓域として利用していた状況が窺われるのである。土葬墓はSK486の1基がある。この墓址はST33の東側に位置し、人骨の遺存状態が最も良好であったものである。副葬品が出土しなかったため時期の限定はできなかったが、覆土の特徴から中・近世の遺構と判断した。しかし、近接する掘立柱建物址の覆土と色調が若干異なり、主軸も異質である状況を考えると、建物址群よりも後出

的な遺構とみた方がよいだろう。

中世2期は溝址の成立とともに居住域が形成される新たな開発がなされた段階としてひとつの画期となる。掘立柱建物址数棟がひとつの単位となる園宅地は溝や柵によって区画され、それぞれが独立した単位として存在する。その園宅地の面積を限定するのは困難であるが、溝址や土坑の分布を手掛かりに推察すると、本遺跡の場合、500～700㎡の範囲を占有していたと思われる。また、園宅地とは別に川周辺に墓域が形成される。希に園宅地内に墓が存在した可能性も考えられるが、その確証は得られなかった。

近世

近世、並びにそれ以降として認定した遺構には水田址がある。水田址の認定は土層観察に拠る部分が多く、面的に確認できた範囲はわずかである。水田址の位置は中世2期には掘立柱建物址が分布した位置と重なり、近世以降に居住域から生産域へと展開した状況が窺われる。だが、調査した範囲がすべて生産域として利用されたのかは明確でなく、近世以降の状況については不明な点が多い。

以上、古代から近世に至る集落の変遷について時期別にみてきたが、若干の整理をしておく。

最初の開発が開始される1期、すなわち7世紀後半の集落は竪穴住居址2～3軒と掘立柱建物址1棟で構成される住居小群が流路の周辺や微高地上に占地する。それはさして時を違えず、短期間のうちに面的な広がりを見せる。住居小群が最初から存在する集落構成や占有地がすでに既成化している状況は他所から村落全体が移動してきたものとも推定できる。住居小群は1ないし2軒が近接して立地し、それらが一定の空間域を設けて分布する。また、大型掘立柱建物址の存在は在地指導者層の居宅として周囲とは隔絶された空間を形成している。集落の構成は2期以降変化をみせず展開するが、鎖川に近接する地域まで居住域として拓かれ、南部では集落が徐々に拡大していく状況が窺われる。周辺地域の指導的な立場にあったと思われる北部南側では3期に至ると掘立柱建物址を中心とした「官衙的な」遺構配置が見られ、この新しい集落に律令支配の一端をみることができると推定できる。このような掘立柱建物址の分布状況は隣接する遺跡ではみられない、本遺跡だけの特徴である。この地点からは『美濃國』刻印のある須恵器蓋が2点出土している点などからも、やはり、奈良井川以西の開発に携わった人々のなかでも特に中心的な人物が居住していた地点と想定してもよいかもしれない。この頃南部では集落の拡大がより鮮明となり、掘立柱建物址群の姿が見られなくなる4期には北部の一群とは別なムラを形成する状況が顕著となる。当該期の住居小群の構成や配置に大きな変化は認められないが、開発時にはみられなかった特徴がある。一つには各小群が隣接して占地するのが特徴であり、もう一つは住居小群間の格差が歴然としてくることである。すなわち、優位な住居小群では竪穴住居址3軒程にクラと思われる掘立柱建物址を2ないし3棟付属させ、大型竪穴住居址の隣には大型の掘立柱建物址を近接して構築するのに対し、一般的な住居小群では竪穴住居址2軒と掘立柱建物址1棟で構成するのを基本としている。また、優位な小群では、小群の成員の紐帯強化の道具として文字(墨書土器)を利用しており、識字層である中心的人物は「官」と何らかの関わりを有していたとも考えられる。また、各住居小群がより強固な個別経営の単位として存在したことも窺われる。3期から5期に至る南部の様相では、2期に展開をみせはじめる開発のなかから有力な階層が生まれ、徐々にその指導力を高めていく過程を垣間見ることができる。その集落も6期を迎えると同時に他所へ移動し、6、7期の遺構分布は散在的で、集落の在り方を明確に捉えられない。

1期以降変わらない集落構成が大きな変化をみせるのが7～8期にかけてである。

それまで住居小群を単位として構成された集落は解体し、新たな集落構成が形成される。これは住居址配置に端的に示され、大型竪穴住居址の周囲に中型竪穴住居址が取り囲むように配置される。大型竪穴住居址は柵によって区画されたなかに占地し、その周囲の住居址は列状に並び、建て替える際も住居間は

一定の間隔を保って移動する。これは1軒の住居址が統制する枠のなかに2～3軒で固まる住居小群数単位が取り込まれた状況とみていいだろう。すなわち、富裕農民の下に一般の群の成員が従属する形態が成立し、新たな共同体秩序が誕生した様相をそこにみるができる。この共同体内の紐帯強化と維持に重要な役割を果たしたのが祭祀であったことは容易に推定されるが、その一翼を担うものとして墨書土器が存在し、機能していたと思われる。

9・10期については不明な点が多い。8期に存在した富裕農民はすでに姿を消し、新たな耕地を求めて他所へ移動してしまうものもあろうが、8期からそのまま継続して占地する集団も確実に認められる。

11期は新たな開発が行われる段階で、南部に再度村落が形成される。開発の中心となった集団が従来この周辺に存在していたのか、あるいは他所から移動してきた集団なのかは明確でない。11期の遺構分布の大きな特徴として、竪穴住居址1軒が一定の空闲地をもって分布し、個々の住居址がひとつの単位として自立していることがある。これは8期にみた富裕農民が確立した個別経営とは別に、一般的な農民の間でもそれぞれが単位となる個別経営が成立する状況を示唆するものである。それと同時に、村落の在り方も8期とは異なり、ここに別な共同体が誕生したと推定できる。すなわち、8期に存在した、富裕農民がイニシアティブをとるような共同体は姿を消し、それに従属していた各成員が成長するなかで、各成員間は補助的な機能を有するだけの村落結合を生んだとみることができる。

12期以降も11期に成立した集団がそのまま占地し続け、15期まで展開をみせる。13・14期には一時的に集落の規模が拡大し、ときには2～3軒の竪穴住居址が群をなして存在することもあるが、基本的には個々の竪穴住居址を単位とするような在り方といえる。13・14期にみられる墓址の在り方は興味深い。墓址は各園宅地を単位として存在し、園宅地内に複数の墓址を有するものも認められない。つまり、園宅地はあくまでも居住空間の場として使用され、各竪穴住居址の成員を葬るための墓域としては利用していない。ごく限られた被葬者としては11期の開発と関連した各竪穴住居址の長的な人物を想定したが、いずれにせよ園宅地内に墓を設けることは各竪穴住居址が園宅地の所有権を保持していたことを物語るものとして重要である。また、墓址から出土した副葬品の質・量に著しい差が認められ、八稜鏡を出土したSK176などはかなり優位な人物であったと思われる。つまり、平均的な住居址が分布するなかで、所有した富に格差が存在することも示唆する。このような遺構の配置状況を、例えば明確な指導者を置かず、個々の竪穴住居址が個別経営の単位として自立していた状況とみるべきなのか、あるいは塩尻市吉田川西遺跡で指導されたような、有力な指導者（領主）に従属する集団（家人）に相当するものとみるべきなのか（原他1989）、残念ながら本遺跡の状況からでは断定できない。しかし、11期以降の集落は8期前後でみた集落とは質を異にした村落であることは、墨書土器などの遺物の在り方や遺構配置からも明確である。

15期から中世1期までは目立った開発は行われない。15期には集落が拡散する傾向が認められ、中世1期になると南部には大きな集落は分布せず、溝に区画されたなかに居住域が存在した可能性があるものの、居住域として積極的に利用されない。その代わりに、北部の自然流路際に居住域を形成する。備え付けのカマドをもつ竪穴住居址は中世まで残らず、大型の長楕円形の竪穴住居址が普及し、住居構造の変化がみられるのもこの時期の特徴である。

中世2期は南部で再度開発が行われる。自然流路や微地形を利用した用水路の開発が行われ、現景観が成立する。掘立柱建物址1ないし2棟によって一つの園宅地を形成し、その園宅地が2つほど近接して立地する。集落の在り方は11期のそれと大きな差異は認められず、個々の住居が経営の単位となっていたと思われる。掘立柱建物址に居住した階層が一般的な農民とみてよいかは疑問点が残る。というのは、松本市教育委員会によって行われた昭和58年度の調査の際、西側の調査区でこれらの遺構とほぼ同時期と思われる竪穴住居址が確認されているためである。その住居址は一辺4.0m程の不整形を呈し、柱穴や出入口口

などの施設も確認されている。この2つの住居形態が同一時期に併存する状況は、居住した集団の階層差を示すとも推測されるのである。

近世以降の状況についての詳細は不明である。しかし、居住域として利用した痕跡がほとんど認められないことを考慮すると、生産域へと徐々に変化していった可能性が高い。

第5章 結語

これまで南栗遺跡の調査結果と遺構や遺物をめぐる成果と課題について述べてきた。最後に、遺跡の性格などを考えるために、時代別に概観し、結語としたい。

1 縄文時代・弥生時代

本遺跡で最初に生活の痕跡が刻まれるのは縄文時代中・後期の土器を出土した火床址である。定住的な集落の居营地としてでなく、一時的な逗留の場として利用されたと判断した。遺構の分布が北部の堀川に近接した地点に限定され、さらに、隣接する北栗遺跡でも同様な遺構が確認できた状況から推察すると、自然流路を中心とした範囲に火床址があることが分かる。本遺跡の周辺に定住的な集落が営まれていた可能性は高く、平安時代の竪穴住居址の床面から出土した石棒は、このような背景を裏付ける資料となろう。今後の調査例が増加するなかで当該期の集落が発見される機会も当然予想されるのである。

また、弥生時代の遺構は確認していないが、古代の遺構に混在して出土した遺物の存在は弥生時代後期の集落の存在を示唆するものであろう。

2 古代

本遺跡の開発は、7世紀後半、自然流路付近を中心として開始され、さして時を違えずに遺跡全体に展開する。居住域の選定や占地場所の決定については計画的な規制の下に配置された状況が明らかになった。また、開発の当初から大型の掘立柱建物址が建つ地区の相貌は、周辺地域には認められず、有力な集団が占地していた様相が確認された。

8世紀代に入る頃になると、開発は鎖川によって形成された自然堤防に向けて進行し、同時に居住域も広範囲に及ぶ。竪穴住居址と掘立柱建物址で構成される遺構群(住居小群)が、一定の間隔を保って占地している。時代が降るにつれ徐々に有力な集団が頭角を現し、遺構群の格差が歴然となり、これらの遺構群の幾つかが有機的な結合をし、それらが当該期の集落、あるいはムラといった実態に迫るものであることが分かった。

このような中で、該期の本遺跡で特筆されるべきことは、掘立柱建物址を中心として遺構群が形成される地区があることである。この一般的な集落構成と異なる状況は、律令体制の支配構造が新たに開発された地域にも深く浸透したことを示唆するばかりか、本遺跡が周辺地域のなかでも特に拠点的な集落として存在した社会構成の一端を物語るものとして注目される。

8世紀後半から9世紀前半にかけて、集落は基本的に維持・継続がなされるが、その変遷にはかなり不安定な要素も認められ、遺構群の占地場所は堀川周辺を除いて移動を繰り返す。

開発が開始されて以来、継続しながら展開した集落が変貌するのは9世紀後半である。すでに、これ以前から有力集団の存在は認められたが、これらの中から特に富を備えた集団が集落構造を変革させながら、個別経営の確立を図る、新たな共同体規制の成立が具現化するのである。本遺跡の場合、堀川付近で展開する集落構成はその変貌を時期ごとに追える格好の資料として提示できた。

有力集団を中心とする集落も10世紀を迎える頃には他所へ移動し、新たな開発が開始され、7世紀に開始して展開し続けた集落が一旦断絶し、11世紀にかけては南部を中心として開発が再開される。この段階

こそ中世的な村落の誕生と考えられ、1・2軒の竪穴住居址が一定の空闲地をもって占地する状況が明らかとなった。この在り方は11世紀後半まで変容せず、ひとつの画期とみることもできよう。このような集落の実態を探る上で、居住域に確認した墓址の存在は重要である。該期の社会構成を考える重要な視点になるばかりか、従来の集落研究では決して十分明確ではなかった該期の墓制とも絡む資料を提示できたと思う。

ところで、本遺跡では古代の生産に関わる遺構は確認できなかった。竪穴住居址などの遺構が集中しない地点(空白域)が時期によっては認められ、このような地区が生産域に利用されたと予想される。しかし、今後周辺地域を含めた、古代の土地利用の問題のなかで再度議論されるべき課題であろう。

3 中・近世

本遺跡の中世遺構は12・15世紀の2つの時期のものが確認された。古代から中世にかけての繋がりは今一つ不明瞭で、12世紀代の状況については十分な検討を加えられず、資料を提示するに止まった。この時期、周辺遺跡では集落の変遷を捉えており、その在り方から本遺跡の遺構を見直すことで、該期の景観も浮かんでこよう。一方、15世紀代については現景観との比較するなかで、現景観の成立がこの段階にあることが分かった。隣接する北栗遺跡の調査結果では現島立条里的景観が、中世の遺構配置から14世紀から15世紀にかけて成立すると類推しており、本遺跡の景観もほぼそれと同じ頃にできたと考えられる。本遺跡で提示した結果は島立条里的遺構とは直接関連しないが、中世の水路開発をめぐる多くの課題を解決するための一資料になり得たと判断する。

近世の遺構は水田址のみである。しかも、わずかな部分しか確認していないため、不明な点を残した。

以上、本遺跡の調査結果を総合しながら、成果と課題を中心に整理した。

本遺跡は、全長600mのなかに竪穴住居址が約332軒、掘立柱建物址が117棟と、松本平周辺遺跡では最も遺構が密に分布していた。調査は道路工事と平行しながら進められたため、調査地区はかなり細かく区切られ、さらに、時間的制約も重なり、決して十分な調査が完遂できたとはいえない。そのような中で、最善の努力を尽くした結果が、今回の成果に繋がったと考える。

本報告の刊行をもって南栗遺跡の調査は終了する。本報告は資料提示に重点を置きながら、できる限りの検討を加えたつもりである。時間の制約や力量不足から事実誤認や不備な点も多く、甚だ心許無いものとなった。忌憚のないご叱正を仰ぎたい。なお、周辺遺跡を含めた総括的な集落論は「総論」で記述されるが、それとは別に、本報告が「南栗の歴史」研究の一助になれば望外の喜びである。

最後になったが、本遺跡の発掘調査に際し、道路建設関係者、松本市教育委員会、研究者、酷暑、厳寒のなか直接調査を補助して下さった作業員の皆さんには心から感謝の念を忘れ得ない。また、報告にあたり多方面にわたるご指導・ご助言を頂き、分析・鑑定などでは多くの方々のお手を煩わせた。不明点の解明に尽力された先生方にあつくお礼申し上げたい。

参考文献一覧

- 青沼博之 1987 『殿村遺跡』 県営ほ場整備事業東筑摩郡山形村竹田地区埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
- 石田広美 1977 「掘立柱建物址の分析」『山田水呑遺跡』 日本道路公団
- 小穴 喜一 1987 『土と水から歴史を探る』
- 大町市教育委員会 1981 『借馬遺跡Ⅲ』 長野県大町市埋蔵文化財調査報告書第6集
- 各務原市教育委員会 1984 『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
- 柿沼幹夫 1979 『下田・諏訪』 上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 埼玉県教育委員会
- 籠瀬良明 1975 『自然提防』 古今書院
- 鬼頭清明 1986 「東国官衙の成立と民衆」『文化財を守るために』 28 文化財保存全国協議会
- 岐阜市教育委員会 1981 『老洞古窯跡群発掘調査報告書』
- 桐生直彦 1987 「遺物出土状態の分析に関する覚書」『貝塚』 38
- 小池裕子 1981 『八王子市・石川天野遺跡 4 C-64住居址床面の硬度測定について』『東京・石川天野遺跡第3次調査』 駒沢大学
考古学研究室
- 斎藤 孝正 1988 「中世猿投窯の研究 -編年に関する一考察-」『名古屋大学文学部研究論集』 C I 史学 34
- 斎藤 孝正 1981 「猿投・尾北・美濃窯における灰釉陶器の変遷」『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』
多治見市教育委員会
- 笹森健一 1978 「平安時代の諸問題」『川崎遺跡(第3次)・長官遺跡』 上福岡市教育委員会
- 高橋一夫 1983 「集落分析の一視点-入口と集落の道-」『埼玉考古』 21
- 滝澤主税編 1985 『明治初期長野縣町村繪地圖大鑑 中信篇』 郷土出版社
- 田口 昭二 1983 「美濃窯における白瓷と山茶椀」『美濃陶磁歴史館報』 II
- 田口 昭二 1982 「美濃の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』 211
1983 「美濃における白瓷と山茶椀」『美濃陶磁歴史館報』 II
- 長野県教育委員会 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 吉田川西遺跡』
- 原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食膳具」『信濃』 III-39-4
- 藤澤 良祐 1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』 第8号
1984 「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報』 III
1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』 V
- 藤原宏志・杉山真二 1985 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析法による水田址の
探査-」『考古学と自然科学』 I
- 藤原宏志 1987 「プラント・オパール分析の現状と課題」『土壌学と考古学』
- 松本市・塩尻市・東筑摩郡郷土資料編纂会 1957 『松本市・塩尻市・東筑摩郡誌』 第1・2巻
- 松本市教育委員会 1984 『松本市文化財調査報告書32 松本市島立南栗遺跡』
1985 『松本市文化財調査報告書35松本市南栗・北栗遺跡・高綱中学校遺跡、条里的遺構』
1986 『松本市文化財調査報告書38松本市島立南栗遺跡』
- 松本盆地団研グループ 1977 「松本盆地の第四紀地質」『地質学論集』 14
- 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産再末期の緒様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』 III
- 宮本長二郎 1986 「住居」『日本考古学4 集落と祭祀』
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について -型式分類と編年を中心として-」
『九州歴史資料館研究論集』 4
- 若尾 正成 1987 「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶』 美濃古窯研究会会報

発掘調査及び執筆等の分担一覧（五十音順）

1 発掘調査担当及び発掘調査記録の整理とまとめ

昭和60年度	調査部長	第1部長	樋口昇一	第2部長	丸山徹一郎	第3部長	春原正毅		
	調査研究員	石上周蔵	市村勝巳	伊藤友久	上田典男	岡沢秀紀	小口徹	河西克造	
		小菅敏男	小平和夫	小林上	近藤尚義	斎藤正善	中村千尋	野村一寿	
		馬場長光	平林彰	松田青樹	三上徹也	百瀬長秀	綿田弘実	和田文人	
	調査員	百瀬陽三							
昭和61年度	調査部長	第1・3部長	樋口昇一	第2部長	丸山徹一郎				
	調査研究員	青沼博之	青柳英利	市村勝巳	白田武正	小口徹	春日文彦	金原正	
		黒岩竜也	小林俊一	小林上	近藤尚義	中村千尋	野村一寿	馬場長光	
		平林彰	二木明	三上徹也	百瀬長秀				
	調査員	百瀬陽三							
昭和62年度	調査部長	宮沢恒之							
	調査研究員	青沼博之	石上周蔵	市村勝巳	上田典男	大竹憲昭	小口徹	小平和夫	
		小林俊一	小林上	野村一寿	望月映	百瀬新治			
昭和63年度	調査部長	宮沢恒之							
	調査研究員	青沼博之	石上周蔵	市村勝巳	上田典男	大竹憲昭	岡沢秀紀	小平和夫	
		野村一寿	望月映	百瀬新治					
平成元年度	調査課長	青沼博之							
	調査研究員	石上周蔵	小平和夫	野村一寿	望月映				

2 執筆担当者

市村勝巳	第1章	第1・2・3・4節
	第2章	第1・2・3節
	第3章	第2節2・7
	第4章	
	第5章	
小口徹	第1章	第5節
	第2章	第4節
小平和夫	第3章	第2節1・3・4・5
野村一寿	第3章	第1節、第2節6、第3節1、第4節

3 その他

遺物実測	市村勝巳	大竹憲昭	小平和夫	小林俊一	野村一寿	望月映
遺物写真撮影・現像・焼付	岡沢秀紀	西山克己				
金属製品保存処理	大竹憲昭	小林上				
編集	市村勝巳	(青沼博之 宮沢恒之)				

付表1 古代・中世竪穴住居址一覧表

No	位置	平面形	主軸方向	規模				カマド							諸施設			時期	図版No.			
				規模の類型	主軸×直交軸 m	床面積 m ²	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への掘込		煙道			煙道口の 高さ m	その他			柱穴	柱間 間隔 m	その他
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き							
1	南部A区	隅長II	N98°E	中2	3.95×4.70	18.57	0.50	604.30	東壁北隅寄り	石組	-	-	N85°E	0.75	15°	0.25		-	-	P 4	14	15
2	"	"	N74°W	大1	5.65×4.60	26.00	0.50	604.35	西壁北隅寄り	-	-	-	N68°W	0.80	10°	0.10		-	-	焼失住居	14	17
3	"	-	N107°E	-	3.10×?	-	0.60	604.35	東壁北隅寄り?	-	-	-	N107°E	0.25	不明	0.08		-	-	P 1	13	15
4	"	隅方	N98°E	中2	4.20×4.45	18.70	0.40	604.35	北東隅	粘?	-	-	N75°E	0.20	55°	0.10		-	-	西壁テラス P 2	14	17
5	"	-	N82°E	-	4.80×?	-	0.70	604.50	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-		5	17
6	"	-	N90°E	-	5.60×?	-	0.35	604.40	南壁中央?	-	-	-	N90°E	-	水平	0.10	掘込みは丸か	-	-	P 5	14	16
7	"	隅方	N84°E	小	3.70×3.65	13.51	0.40	604.35	東壁中央	-	丸	3/4	N84°E	1.60	5°	0.25	函なのかはっきりしない	4	1.87 1.84~2.0	西壁テラス 周溝	2	17
8	"	隅長II	N82°E	小	2.50×3.55	8.88	0.40	604.60	東壁中央~北隅	-	-	-	N76°E	1.20	10°	0.15		-	-		12	16
9	"	隅方	N98°E	小	3.35×3.25	10.89	0.40	604.60	東壁中央やや南寄り	-	-	-	N98°E?	0.30	5°	0.25		-	-		3	14
10	"	"	N90°W	中1	3.70×3.65	13.51	0.40	604.65	西壁中央	-	-	-	-	-	-	-		4	1.88, 2.05 2.45~2.72		11	15
11	"	隅長I	N90°E	中2	4.45×3.80	16.91	0.40	604.60	東壁中央	-	方	1/3	-	-	-	-		-	-	P 5	12	16
12	"	隅方	N94°E	中2	5.20×5.20	27.04	0.30	604.15	東壁中央やや南寄り	-	-	-	N94°E	1.70	水平	0.25	煙道先に遺物	-	-	P 1	4	22
13	"	隅長II	N81°E	中1	4.45×3.70	16.47	0.30	604.45	東壁北東隅	-	-	-	N80°E	1.20	5°	0.20		-	-		14	19
14	"	隅方	N87°E	大1	4.65×4.75	22.09	0.30	604.30	"	-	-	-	-	-	-	-		-	-	P 1	13	19
15	"	隅長II	N83°E	小	4.25×3.55	15.09	0.45	604.15	東壁中央	-	丸	1/2	N83°E	-	-	-		-	-	P 1	2	22
16	"	隅長I	N100°E	中1	4.45×4.30	19.14	0.40	604.05	"	-	-	-	-	-	-	-		3	2.23 3.08		2	22
18	"	隅長II	N83°E	中1	3.55×4.45	15.80	0.45	604.20	"	-	-	-	N83°E	0.55	15°	0.20		-	-	P 1	13	21
19	"	隅方	N91°E	中1	2.95×3.10	9.15	0.10	604.55	東壁中央?	-	-	-	-	-	-	-		-	-		5	19
20	"	隅長	N90°E	中2	4.45×4.70	20.92	0.65	604.10	東壁?	-	-	-	-	-	-	-		-	-	P 3 西入口?	不明	19
21	"	?	?	-	?×?	-	0.45	604.30	不明	-	-	-	-	-	-	-		-	-		不明	19
22	"	?	N90°E	-	4.35×?	-	0.55	604.20	東壁中央	粘土?	丸	わずか	-	-	-	-	カマド掘り方のみ	-	-		不明	20
23	"	隅長II	N93°E	中1	4.15×3.30	13.70	0.50	603.90	東壁北東隅	石組	-	-	N70°E	1.3	15°	0.05		-	-		13	21
24	"	"	N96°E	中2	5.15×4.60	23.70	0.50	603.85	東壁中央~南寄り	-	-	-	N96°E	0.55	水平	0.10		4	2.72 2.50		4	23
25	"	隅方	N99°E	中2	5.15×5.60	28.84	0.35	603.90	東壁中央	石組?	方	1/2	N96°E	0.6	5°	0.25		4+10	2.75~2.81 2.50~2.95		4	23
26	"	"	N85°E	中1	3.40×3.45	11.73	0.40	603.90	北東隅	石組	-	-	-	-	-	-		-	-	テラス	13	23

No.	位置	平面 形状	主軸 方向	規 模				カ マ ド										諸施設			時期	図 版 No.
				規模 の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築 形	壁への堀込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他	柱穴	柱間 間隔 m	その他		
											大きさ	主軸	長さ m	傾き								
27	南部 A区	隅方	N93°E	大1	5.40×5.20	28.08	0.35	604.10	東壁中央 ～やや 北寄り	-	-	-	N95°E	0.80	10°	0.05		-	-		15	20
28	"	隅長II	N86°E	大1	5.50×4.50	24.75	0.40	604.20	北東隅 北壁北東 隅寄り	-	-	-	N86°E N1°E	(0.40) 0.90	水平 5°	0.15 0.30	カマド作り (作り替え北→東)	-	-		11	20
30	"	隅方	N90°E	中1	3.45×3.65	12.59	0.45	604.45	不明									-	-	P 2	?	20
31	"	隅長II	N86°E	中2	4.75×3.90	18.53	0.35	604.15	北東隅	石組 ?	-	-	N63°E	0.95	20°	0.15		-	-	P 6	13	20
32	"	隅方	N92°E	小	3.25×3.25	10.56	0.60	604.20	東壁中央	粘土	-	-	-					-	-	P 3 周溝?	4	16
33	"	"	N84°E	中2	4.85×4.95	24.00	0.55	604.30	"	"?	-	-	N84°E	0.50	15°	0.40		4	2.25~2.48 2.55		4	17
34	"	隅方II	N80°E	大1	4.35×5.10	22.19	0.35	604.65	東壁北東 隅寄り	石組	-	-	-					-	-	P 3	14	13
35	"	隅方	N84°W	中2	3.90×4.15	16.19	0.40	604.60	西壁中央	"	-	-	-					-	-		12	13
36	"	?	N90°E	-	?×4.85	-	0.50	604.55	東壁中央	-	-	-	-					4	?	2.23	2	13
37	"	隅長II	N80°E	超	7.80×6.35	53.33	0.35	604.20	東壁中央	-	-	-	-					4 + 5	4.32 3.66~3.72	P 1	3	15
38	"	隅方	N90°E	中1	4.95×4.70	23.27	0.65	604.10	"	-	-	-	N90°E	(2.0)	5°	0.20	煙道先切られる	4	2.92~3.0 3.15~3.18	貼床, 周溝 P 7	3	17
39	"	?	?	-	?×?	-	0.20	604.90	?	-	-	-	-					-	-	貼床, P 2	14	13
40	"	?	N97°E	-	?×6.0	-	0.30	604.45	?	-	-	-	-					-	-	P 7	5	13
42	"	隅長I	N103°E	小	3.70×3.30	12.21	0.40	603.80	東壁中央	-	-	-	-					-	-	P 4	不明	23
43	"	隅方	N89°E	中1	3.45×3.60	12.42	0.10	604.00	北東	石組 ?	-	-	-					-	-	P 2	14	23
44	"	隅長II	N94°E	大1	5.90×4.25	25.08	0.20	604.45	東壁北東 隅寄り	"	-	-	N87°E	1.45	水平	0.10	煙道先ビット	-	-	P 4	14	18
46	"	"	N92°E	大1	5.30×4.50	23.85	0.05	604.60	"	"	-	-	-					-	-		13	19
47	"	?	N90°E	-	?×4.90	-	0.35	604.75	北東隅 か?	-	-	-	-					-	-		13	19
48	"	隅方	N92°E	中2	5.0×5.3	26.50	0.30	604.10	東壁中央	-	-	-	-					4	?	2.43	4	22
49	"	"	N94°E	中1	4.45×4.60	20.47	0.30	604.10	"	-	丸	1/2	N92°E	1.55	5°	0.20	煙道先ビット	4	2.65~2.70 2.55~2.70	P 1	4	22
50	"	隅長II	N90°E	大1	4.95×4.25	21.04	0.15	604.20	東壁 北東隅	-	-	-	N63°E	0.30	10°	0.10		-	-	P 3	14	22
51	"	隅方	N82°E	中1	4.35×4.55	19.79	0.30	604.20	東壁中央	石組 ?	丸	わずか	-					-	-		2	22
52	"	隅長II	N86°E	大1	5.30×4.35	23.06	0.30	604.20	北東隅	石組	-	-	-				北側フラン張り出す 右側に付属ビット	-	-	P 6	13	24
53	"	"	N92°E	中1	2.65×3.45	9.14	0.15	604.20	東壁中央 やや 北寄り	"	-	-	-				左側に付属ビット	-	-		13	21
54	"	隅方	N94°E	中2	4.25×4.50	19.13	0.30	604.20	東壁北東 隅寄り	"	-	-	N93°E	1.20	5°	0.10		-	-	P 2	15	21
55	"	隅長I	N90°E	中1	4.05×3.65	14.78	0.40	603.95	東壁中央	"	方	1/2	N92°E	1.80	15°	0.20	煙道先ビット	4	1.12~1.35 1.78	P 5	5	21

No.	位置	平面形	主軸方向	規模					カマド										諸施設			時期	図版No.
				規模の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への廻込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他	柱穴	柱間 間隔 m	その他			
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き								
56	南部A区	隅長I	N94°E	小	3.75×4.40	16.50	0.45	604.00	東壁中央	石組	丸	1/2	N94°E	1.10	10°	0.3		-	-	P 4	3	21	
57	"	隅方	N90°E	中1	4.50×4.35	19.58	0.35	603.85	"	粘土?	"	わずか	N87°E	1.00	10°	0.20	カマド天井落下	-	-	P 4	2	24	
58	"	"	"	大1	5.15×5.35	29.45	0.40	603.80	"	-	方	1/3	N90°E	0.45	15°	0.45	(南)	4	2.65~2.85	南側張り出し	5	24	
59	"	隅長I	"	中1	4.15×3.60	14.94	0.20	604.00	東壁北東隅	-	-	-	N85°E	0.50	水平	0.10	(北)	-	-	P 4	14	24	
60	"	隅方	N88°E	中1	3.70×3.60	13.32	0.55	603.95	東壁中央	石組	丸	1/3	N80°E	0.80	10°	0.15		-	-	P 7	5	24	
61	"	"	N90°E	中1	4.15×4.35	18.05	0.50	603.80	東壁中央 やや南寄り	"	方	1/3	N90°E	1.70	-2° (水平)	1.70	右側に付属ビット	-	-	P 3	2	25	
62	"	"	N79°E	中1	4.45×4.55	20.25	0.50	603.70	東壁中央	"	-	-	N70°E	0.90	15°	0.20		4	2.48 2.45		1	25	
63	"	隅長I	N92°E	大1	5.05×4.80	24.24	0.50	603.05	東壁北東隅寄り	"	-	-	N60°E	0.60	10°	0.10	右側に大きなビット	-	-	P 6	14	21	
64	"	隅長I	N92°E	小	2.85×3.15	8.98	0.50	603.85	東壁北東隅	"	丸	1/2	N85°E	1.35	5°	0.15		-	-	P 2	3	21	
65	"	隅方	N90°E	中1	3.85×4.10	15.79	0.50	603.65	東壁中央	-	-	-	N93°E	1.60	20°	0.25	煙道先ビット 右側にビット	-	-	P 6	4	23	
66	"	隅長I	N90°W	小	3.10×3.90	12.09	0.20	603.00	西壁中央	-	-	-	N85°E	1.0	5°	0.15		-	-		3	23	
67	"	隅方	N90°E	大1	4.75×5.00	23.75	0.25	603.95	東壁北東隅	-	-	-	N84°E	0.50	5°	0.15		-	-		13	23	
68	"	"	N86°E	中2	4.85×4.90	23.77	0.60	603.65	東壁中央	石組	-	-	N86°E?	0.20	水平?	0.30	右側ビット	4	3.20 3.20~4.20	P 1	2	23	
69	"	隅長I	N74°E	中1	3.85×2.80	10.78	0.30	603.85	"	-	-	-	-	-	-	-		-	-		13	23	
71	"	隅方	N100°E	大1	5.20×5.65	29.38	0.25	603.85	"	-	-	-	N100°E	0.25	30°	0.15		4	2.65~2.85 2.70~3.00	P 7	5	23	
72	"	"	N87°E	中2	4.95×5.10	25.25	0.20	603.90	"	石組	丸	1/2	-	-	-	-		4	2.65~2.72 2.48~2.63	P 3	5	23	
73	"	"	N92°E	中2	4.10×4.55	18.66	0.45	603.85	"	-	丸	2/3	N92°E	1.60	15°	0.25		4	2.30 2.45	P 4	5	25	
74	南部B区	"	N90°E	大1	5.90×6.05	35.70	0.25	603.85	東壁中央	粘土	丸	1/3	-	-	-	-		4	2.95 3.14		4	26	
75	"	"	N87°W	大1	5.30×4.95	26.24	0.40	603.90	西壁中央 やや北寄り	-	丸	わずか	N87°W	0.9	10°	0.15	右側に付属ビット	-	-		12	26	
76	"	?	N90°W	-	?×5.20	-	0.25	603.70	"	-	-	-	N90°W	0.7	水平	0.20		-	-		不明	26	
77	"	隅方	N87°E	中1	3.80×3.80	14.44	0.20	603.85	東壁中央	-	方	2/3	-	-	-	-		-	-		4	26	
78	"	"	N92°W	中2	4.25×4.05	17.21	0.20	603.80	"	石組か	丸	1/2	N87°E	0.45	5°	0.10		-	-		14	28	
79	"	"	N90°E	大2	6.60×6.30	41.58	0.20	603.90	"	粘土か	-	-	-	-	-	-		-	-		2	26	
80	"	"	N91°E	大2	6.30×6.80	42.84	0.20	603.80	"	粘土	-	-	N91°E	1.50	水平	0.15	(北) 煙道北ビット	-	-	P 2	4	28	
82	"	"	N90°E	小	3.60×3.80	13.68	0.30	603.70	"	粘土か	-	-	N87°E	0.35	5°	0.15	煙道先切られる	-	-		2	28	
84	"	"	N92°E	中2	4.75×4.85	21.38	0.45	603.65	東壁中央 北東隅寄り	-	石組	-	-	N90°E N80°E	0.60 0.60	15° 10°	0.10 0.10	カマド作り替え	-	-		12	28

No.	位置	平面形	主軸方向	規模					カマド										諸施設			時期	図版No.		
				規模の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築 形	壁への掘込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他	柱穴	柱間 間隔 m	その他					
											大きさ	主軸	長さ m	傾き											
85	南部B区	隅方	N93°E	小	3.20×3.10	9.92	0.20	603.80	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	28	
86	"	隅長II	N88°E	大1	5.50×4.75	26.29	0.40	603.70	東壁中央	-	丸	わずか	-	-	-	-	-	4	2.88 2.0	P 1		5	28		
87	"	?	-	-	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	検出のみ	不明	28		
88	"	?	-	-	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	不明	-		
89	"	?	-	-	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	不明	-		
90	"	隅方	N93°E	大1	5.50×5.20	28.60	0.30	603.85	東壁中央 西壁北西 隅寄り	石組	-	-	-	-	-	-	-	-	-	カマド作り替え	-	-	P 2	13	26
91	"	隅長II	N90°E	中2	4.90×4.10	20.09	0.25	603.95	東壁 北東隅寄り	石組	丸	わずか	N87°E	0.3	20°	0.35	-	-	-	左側に付属ビット	-	-	P 3	11	28
92	"	"	N94°E	大1	5.20×4.30	22.36	0.40	603.80	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 5	11	28	
93	"	隅長I	N93°E	大1	5.65×4.30	24.30	0.20	604.00	"	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 8	14	29	
94	"	"	N87°E	中1	4.65×4.30	20.00	0.40	603.80	東壁中央	石組	方	1/2	N90°E	0.50	5°	0.20	-	4	3.35 3.46	P 4		2	29		
95	"	隅方	N93°E	大1	4.65×4.55	21.16	0.25	604.15	東壁北東 隅	"	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 9	13	29	
97	"	"	N87°E	大1	5.15×5.50	28.36	0.40	603.90	東壁北東 隅寄り	粘土	丸	わずか	N85°E	0.45	20°	0.15	-	-	-	-	-	P 6	13	27	
98	"	"	N71°E	大2	6.70×6.70	44.89	0.55	603.85	東壁中央	-	丸	"	-	-	-	-	-	-	-	-	P 3, P 6 床作り替え	2	27		
99	"	-	N87°E	-	?×3.50	-	0.30	603.90	東壁 北東隅	石組	-	-	N82°E	1.40	15°	0.20	-	-	-	-	-	不明	28		
100	"	隅方	N85°E	大2	6.40×6.40	40.96	0.35	603.95	東壁中央	粘土	-	-	-	-	-	-	-	4	3.15 3.05~3.10	P 7		4	27		
101	"	-	N102°E	-	?×4.60	-	0.35	603.35	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 1	14	18		
102	"	隅長I	N2°W	中2	3.90×4.30	16.77	0.35	603.75	北壁中央 から北東 隅寄り	粘土 か	-	-	N2°W	0.2	5°	0.25	-	-	-	-	-	P 3	12	26	
103	"	隅方	N79°W	中1	3.05×3.25	9.91	0.35	603.60	西壁中央	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	カマド右側にビット	-	-	5	25	
104	南部A区	-	N88°E	-	?×3.45	-	0.30	603.95	東壁中央 やや南 寄り	石組	-	-	N90°E	1.6	20°	0.15	-	-	-	煙道先ビット	-	-	P 1	5	25
109	"	-	N79°W	-	4.60×?	-	0.20	603.95	西壁中 央?	"	方	2/3	-	-	-	-	-	-	-	左側にビット	-	-	5	25	
110	"	-	N90°E	-	?×4.40	-	0.60	603.80	東壁北東 隅寄り	"	-	-	N92°E	0.9	5°	0.30	-	-	-	-	-	東壁テラス 状	12	14	
111	"	-	-	-	-	-	0.40	604.65	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	セクション のみで確認	不明	-		
112	"	-	-	-	-	-	0.50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	不明	-		
113	南部C区	隅長I	N87°E	中1	3.50×4.00	14.00	0.50	603.00	東壁 南東寄り	粘土	-	-	N87°E	0.9	水平	0.30	-	-	-	-	-	P 5	5	39	
114	"	隅長II	N94°E	中2	4.45×3.50	15.58	0.50	603.85	北壁やや 北東寄り 西壁中央	石組	丸	わずか 丸	-	-	-	-	-	-	-	カマド作り替え	-	-	P 1	5	39
115	"	隅長I	N92°E	中1	4.10×3.80	15.58	0.20	603.40	東壁 北東隅	-	-	-	N79°E	0.4	-	-	-	-	-	右側ビット	-	-	14	42	

No.	位置	平面形	主軸方向	規 模				カ マ ド							諸施設			時期	図版No.			
				規模の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への廻込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他			柱穴	柱間 間隔 m	その他
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き							
116	南部C区	隅長I	N87°E	中1	3.15×3.50	11.03	0.45	603.20	東壁中央	粘土?	方	1/4	N86°E	0.9	10°	0.20	〃	-	-	床作り替え	7	42
117	〃	隅方	N99°E	中2	4.35×4.20	18.27	0.50	603.05	東壁北東隅寄り	-	丸	わずか	-	-	-	-	左側にビット	-	-		13	42
118	〃	-	N105°E	-	?×3.60	-	0.45	603.10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		?	-	
119	〃	隅長I	N97°E	中1	3.65×3.20	11.68	0.15	603.10	東壁北東隅	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P1	11	40	
120	〃	〃II	N84°E	中1	3.85×3.05	11.74	0.05	603.10	〃	-	-	-	-	-	-	右側にビット	-	-		14	40	
121	〃	-	N16°W	-	3.90×?	-	0.45	602.70	北壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	中央に貼床P1	4	40	
122	〃	隅長II	N68°E	中2	4.85×3.80	18.43	0.30	602.85	東壁北東隅寄り	石組	-	-	N63°E	0.40	30°	0.10	-	-	西壁テラスP6	13	40	
123	〃	隅方	N108°E	中1	3.60×3.65	13.14	0.40	603.30	東壁?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P2	14	40	
124	〃	〃	N86°E	中1	3.30×3.45	11.39	0.20	603.15	東壁北東隅寄り	石組	丸	1/2	-	-	-	-	-	-		13	40	
125	〃	隅長I	N101°E	大1	5.60×4.05	22.68	0.25	603.00	東壁北東隅寄り	〃	-	-	-	-	-	-	-	-	P5	13	39	
126	〃	隅長II	N90°E	中2	4.75×3.90	18.53	0.20	603.00	〃	石組?	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	P4	13	40	
127	〃	隅長I	N106°E	大1	4.20×4.80	20.16	0.30	603.20	東壁北東隅か	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P2	14	43	
128	〃	隅長II	N102°E	中1	3.30×2.70	8.91	0.25	603.25	北東隅	石組	丸	1/2	-	-	-	-	-	-	P3	14	42	
129	〃	隅方	N75°E	大2	6.60×7.70	50.82	0.40	603.20	東壁中央	粘土	-	-	N75°E	0.30	20°	0.15	-	-	周溝P10	1	41	
130	南部B区	〃	N91°E	中2	4.80×4.75	22.80	0.25	603.15	東壁北東隅	-	丸	わずか	-	-	-	-	-	-		12	37	
131	〃	〃	N97°W	大2	6.00×6.15	36.90	0.30	603.30	西壁中央	粘土	-	-	N94°W	0.65	水平	0.40	-	-	P2	5	37	
132	〃	-	N95°E	-	?×?	-	0.50	603.30	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		14	39	
133	〃	-	N72°E	-	?×4.25	-	0.45	602.85	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P1	?	39	
134	南部C区	隅長I	N92°E	中1	3.25×2.85	92.63	0.35	603.05	東壁中央やや南寄り	粘土	方	1/1	N100°E	0.90	15°	0.15	-	-	P2	7	41	
135	〃	隅方	N57°W	小	2.85×2.80	7.98	0.40	603.70	西壁南西隅寄り	-	-	-	N57°W	0.35	15°	0.35	-	-	P2	4	40	
136	〃	〃	N94°E	中2	4.35×4.40	19.14	0.50	603.60	東壁北東隅寄り	粘土?	丸	わずか	N86°E	0.85	5°	0.15	右側にビット	-	-	床下2	15	44
137	南部A区	-	N93°E	-	?×3.95	-	0.40	603.75	東壁中央	石組	-	-	N93°E	2.15	10°	0.20	-	-		2	29	
138	〃	-	N3°E	-	?×6.40	-	0.60	603.80	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		14	29	
141	南部C区	-	N100°E	-	4.20×?	-	0.40	603.10	東壁北東隅寄り	石組	-	-	N96°E	0.25	5°	0.20	左側にビット	-	-		13	44
142	〃	隅長I	N100°E	中1	3.35×3.00	10.05	0.30	603.70	東壁中央	粘土?	丸	1/3	N93°E	0.60	5°	0.25	-	-	P2	8	43	
143	〃	隅長II	N108°E	大1	6.35×4.40	27.94	0.35	603.10	北東隅	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P4	13	43	

No.	位置	平面 形状	主軸 方向	規 模				カ マ ド							諸施設			時期	図版 No.			
				規模 の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築 形	壁への掘込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他			柱穴	柱間 間隔 m	その他
											大きさ	主軸	長さ m	傾き								
144	南部 C区	隅方	N2°E	大1	5.15×5.20	26.78	0.25	603.00	北壁中央 やや 北隅寄り	石組	-	-	N8°E	0.30	30°	0.15		-	-	P 3	12	43
145	"	隅長I	N24°E	中2	4.15×4.60	19.09	0.50	602.85	北壁北東 隅寄り 北東隅	石組	-	-	N47°E N66°E	0.25 0.10	80°? -	0.15 0.15		-	-	P 8 南東隅テラス状	13	44
146	"	隅長II	N93°E	大1	5.15×4.05	20.85	0.30	603.05	東壁 北東隅	-	-	-	N91°E	0.95	20°	0	右側にピット	-	-	P 6	15	46
147	"	隅方	N58°E	中2	5.25×5.05	26.51	0.50	603.80	東壁中央	石組	-	-	N58°E	1.00	10°	0.15		4	2.32 2.32	P 4	2	46
148	"	"	N8°E	中1	3.45×3.35	11.56	0.20	603.20	北壁中央	"	丸	わずか	-	-	-	-		-	-	P 1	14	43
149	"	"	N109°E	中1	3.20×3.45	11.04	0.10	603.45	北東隅?	-	-	-	-	-	-	-		-	-		14	44
150	"	隅方	N88°E	中1	3.95×3.75	14.81	0.25	603.10	東壁 中央	-	丸	2/3	-	-	-	-		-	-		11	43
151	"	隅長II	N85°E	中1	4.00×3.20	12.80	0.25	603.05	東壁 北東隅	石組	丸	わずか	N52°E	1.00	5°	0.20		-	-		11	46
152	"	"	N95°E	中1	4.10×3.35	13.74	0.25	603.05	北東隅?	-	-	-	-	-	-	-		-	-		?	46
153	"	隅長I	N13°E	小	2.65×3.05	8.08	0.50	602.85	北壁中央 やや 北隅寄り	石組	-	-	N14°E	0.20	5°	0.25		-	-	P 2	14	46
154	"	-	N103°E	-	?×3.80	-	0.30	602.65	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-		?	46
155	"	隅方	N82°E	大1	5.50×5.80	31.90	0.55	602.70	東壁中央	粘土	-	-	N82°E	2.20	水平	0.25		4	3.75 3.10~3.75	P 3	1	47
156	"	隅長I	N91°E	中2	4.95×5.30	26.24	0.55	602.95	"	"	-	-	N91°E	1.75	10°	0.35		4	3.05~3.10 3.35~3.40		1	47
157	"	隅長II	N83°E	小	3.30×4.20	13.86	0.35	603.05	東壁中央 やや 南寄り	"	丸	わずか	N81°E	0.85	5°?	-		4?	2.15~2.35 2.85~3.65		1	47
158	"	隅長II	N87°E	小	3.25×4.25	13.81	0.25	603.05	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-		1	47
159	"	隅方	N105°W	中1	4.70×4.45	20.92	0.30	603.05	西壁中央	粘土	-	-	N102°W	1.20	10°	0.15		-	-	P 5	1	47
160	"	"	N75°E	小	3.75×3.80	14.25	0.45	602.80	東壁中央	"	-	-	N75°E	1.75	10°	0.15		4	2.45 2.40	周溝	1	45
161	"	"	N72°E	小	3.35×3.65	12.23	0.55	602.70	"	-	-	-	N66°E	1.75	10°	0.20		-	-		1	47
162	"	-	N85°E	-	?×3.40	-	0.55	603.40	" やや北 寄り	-	-	-	N78°E	0.55	水平	0.20		-	-		7	38
163	"	-	N77°E	-	?×6.05	-	0.50	603.40	東壁中央	粘土	-	-	N77°E	0.75	5°	0.15		4	? 3.61	P 1	1	38
164	"	-	N105°E	-	?×6.25	-	0.55	603.25	"	"	丸	わずか	N105°E	1.85	5°	0.15		-	-	P 4	7	38
165	"	隅方	N5°W	-	3.00×推定 (2.95)	8.85	0.25	603.30	北壁 西隅寄り	-	丸	1/3	N2°W	-	-	-		-	-		7	38
166	"	-	N80~95°E	-	?×?	-	0.10	603.35	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	P 1	2	38
167	"	-	N90°E	-	?×2.75	-	0.55	603.35	東壁中央	-	-	-	-	-	-	-		-	-		6	38
168	"	隅方	N99°E	大1	4.95×4.75	23.51	0.55	602.70	東壁 北東隅	-	丸	わずか	N68°E	0.15	70°	0		-	-		13	46
169	"	"	N94°E	大1	5.25×5.00	26.25	0.30	603.00	"	石組	-	-	N94°E	0.10	-	-	煙道先切られる	-	-	P 1	14	46

No.	位置	平面 形状	主軸 方向	規 模				カ マ ド							諸施設			時 期	図 版 No.			
				規模 の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への堀込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他			柱穴	柱間 間隔 m	その他
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き							
170	南部 C区	隅方	N103°E	中2	4.45×4.75	21.14	0.50	602.75	東壁 北東隅	石組	-	-	N88°E	0.55	10°	0.15		-	-	P 4	15	49
171	南部 B区	"	N93°W	中1	3.65×3.65	13.32	0.20	603.70	北西隅	" ?	-	-	-	-	-	-		-	-	南壁テラス	14	31
172	"	"	N92°E	中2	4.20×4.25	17.85	0.50	603.60	東壁北東 隅寄り	石組	-	-	N78°E	0.55	10°	0.15		-	-	P 2	13	31
173	"	隅長 I	N91°E	小	2.95×4.20	12.39	0.30		"	"	-	-	N85°E	0.50	40°	0		-	-	P 2	12	33
174	"	"	N94°E	中1	4.35×3.85	16.75	0.40	603.45	"	"	-	-	N94°E	1.35	水平	0.05		-	-	P 1	15	33
175	"	隅方	N83°E	大2	6.85×6.70	46.80	0.60	603.20	東壁中央	粘土	-	-	N83°E	0.50	10°	0.20	煙道先切られる	4+13	3.50~3.74 3.86~4.00	南側張り出し	4	33
176	-	隅長 I	N79°E	中1	4.60×5.15	23.69	0.35	603.50	"	石組 ?	-	-	N75°E	1.65	10°	0.10		4	2.22 2.45		1	31
177	"	"	N89°E	-	(4.00)×(4.55)	(18.20)	0	603.80	東壁 北東隅?	-	-	-	-	-	-	-		-	-		15	31
178	"	"	N110°E	中1	4.00×3.55	14.20	0.20	603.60	?	-	-	-	-	-	-	-		-	-	P 2	15	30
179	"	隅方	N110°E	大1	5.60×5.55	31.08	0.25	603.75	東壁北東 隅寄り	石組	-	-	N86°E	0.85	10°	0.20		-	-		15	30
180	"	"	N78°E	中1	4.60×4.55	20.93	0.50	603.30	東壁中央 やや 南寄り	粘土	-	-	N80°E	1.45	5°	0.25		4	2.13 1.94~1.98	P 2	1	33
181	"	隅長 II	N90°E	中1	4.25×3.05	12.96	0.30	603.50	北東隅?	石組 ?	丸	わずか	-	-	-	-		-	-		14	35
182	"	-	-	-	? × ?	-	-	603.20	?	-	-	-	-	1.05	水平	0.20		-	-	カマド煙道 のみ	?	30
183	"	隅長 I	N84°E	中2	4.25×3.85	16.36	0.20	603.65	東壁北東 隅寄り	石組	-	-	N82°E	1.50	水平	0.30		-	-		13	30
184	"	隅長 I	N90°E	大1	5.85×5.25	30.71	0.45	603.25	東壁中央 やや北寄 り	-	-	-	N85°E	0.75	10°	0.20		4	3.23 2.92~3.35		4	32
185	"	隅方	N90°E	小	3.05×3.25	99.12	0.30	603.50	北東隅	-	-	-	N24°E	0.55	10°	0.05		-	-		12	32
186	"	"	N96°E	中1	3.50×3.50	12.25	0.20	603.45	東壁北東 隅寄り	石組	-	-	-	-	-	-		-	-		14	35
187	"	隅長 I	N83°E	中2	5.20×5.95	30.94	0.45	603.60	東壁中央	-	-	-	N83°E	1.35	10°	0.30		4	3.23 3.24~3.35	P 2	4	29
188	"	隅方	N89°E	中2	4.45×4.10	18.25	0.10	603.80	東壁中央 やや 北寄り	石組	-	-	-	-	-	-		-	-		14	29
189	"	隅長 I	N92°E	大1	4.50×4.95	22.28	0.30	603.90	東壁北東 隅寄り 東壁中央	石組	-	-	N90°E N89°E	0.60 0.60	水平 10°	0.30 0.20	カマド作り替え	-	-	P 1	14	32
191	"	-	-	-	? × ?	-	0.30	603.45	北壁 南西隅	石組 ?	-	-	N2°E	0.30	5°	0.25		-	-		12	32
192	"	隅長 I	N87°E	大1	5.65×4.95	27.97	0.30	603.65	東壁 北東隅	-	-	-	-	-	-	-		-	-	P 4	12	35
193	"	隅長 II	N90°E	中1	2.35×3.85	9.05	0.35	603.25	東壁 北寄り	石組 ?	-	-	N82°E	-	-	-		-	-		13	34
194	"	隅方	"	大1	4.95×4.65	23.02	0.30	603.35	東壁 北東隅?	-	-	-	-	-	-	-		-	-		15	36
195	"	-	N90°E	-	4.15 × ?	-	0.20	603.65	東壁南東 隅寄り	-	-	-	N90°E	1.05	5°	0.20		-	-		15	30
196	"	隅方	N90°E	大1	4.75×4.85	23.04	0.20	603.40	北東隅	石組	-	-	-	-	-	-		-	-	東側張り出 す。P 1	14	35

No.	位置	平面形	主軸方向	規模					カマド							諸施設			時期	図版No.		
				規模の類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への堀込		煙道			煙道口の 高さ m	その他	柱穴			柱間 間隔 m	その他
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き							
197	南部B区	隅方	N91°E	大1	4.80×4.60	22.08	0.25	603.35	北東隅	石組	-	-	N58°E	0.50	30°	0.15	-	-	P 1	13	38	
198	"	"	N98°E	大1	4.60×4.50	20.70	0.50	603.15	東壁北東隅	"	-	-	N85°E	0.40	30°	0.15	-	-		14	38	
199	"	"	N98°E	中2	4.35×4.35	18.92	0.40	603.05	東壁中央	"	丸	1/2	-	-	-	0.10	-	-		11	36	
200	"	-	N97°W	-	?×3.10	-	0.25	603.25	西壁南西隅	"	"	わずか	-	-	-	-	-	-		4	32	
201	"	隅長II	N6°E	中1	3.40×4.15	14.11	0.15	603.20	北壁北東隅	"	-	-	N0°	0.90	10°	0.10	-	-	P 5	13	36	
202	"	隅長I	N78°E	中1	4.70×4.15	19.51	0.10	603.60	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 2	3	38	
204	"	-	(N77°E)	-	?×?	-	0.05	603.55	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	大部分攪乱	2 1 3	38	
205	"	隅長II	N100°W	小	3.05×3.65	11.13	0.45	603.45	西壁中央南寄り	-	-	-	N100°W	0.30	5°	0.15	-	-		1	35	
206	"	隅方	N100°E	大1	5.20×5.10	26.52	0.20	603.35	東壁北東隅寄り	-	-	-	N74°E	0.30	-	-	-	-		15	34	
207	"	隅長I	N90°E	中1	3.30×3.75	12.38	0.75	603.05	東壁中央	-	丸	1/2	-	-	-	-	-	-	P 2	4	36	
208	"	隅方	N107°W	大1	5.80×5.70	33.06	0.40	603.20	西壁中央	-	-	-	N105°W	1.45	5°	0.15	4	3.12 3.12	P 1 床下 P 2	1	36	
209	"	隅長I	N96°E	中2	4.70×4.20	19.74	0.30	603.45	東壁北東隅寄り	石組	丸	わずか	N88°E	0.30	25°	0	-	-		12	36	
210	"	"	N84°E	中2	4.25×4.70	19.98	0.65	603.85	東壁中央	粘土	丸?	1/2	N84°E	1.70	25°	0.25	煙道先にピット	4	2.38~2.42 2.90		5	37
211	"	隅方	N90°E	中1	3.80×3.60	13.68	0.35	603.25	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		?	37	
213	南部C区	隅長II	N97°E	大1	5.50×4.50	24.75	0.30	603.00	東壁北東隅	-	-	-	N82°E	0.40	水平	0.25	-	-	P 3	14	46	
214	"	隅方	N70°E	大1	6.00×6.15	36.90	0.45	602.10	東壁中央やや北寄り	-	-	-	N68°E	1.45	5°	0.25	4	3.22~3.46 3.76		2	48	
215	"	隅長II	N84°E	大1	5.75×4.70	27.03	0.35	602.90	東壁中央やや北寄り	-	丸	わずか	-	-	-	-	-	-		14	48	
216	"	隅方	N83°E	大1	6.10×5.95	36.30	0.55	602.60	東壁中央	石組	-	-	-	-	-	-	4	3.18 3.12		3	48	
218	"	隅長II	N88°E	大1	5.10×4.35	22.19	0.30	602.85	東壁北東隅	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 3	15	49	
219	"	-	N88°E	-	?×?	-	0.35	602.95	北東隅	石組	-	-	N59°E	0.35	水平	0.20	-	-		12	46	
220	"	隅長I	N93°E	大1	4.65×4.15	19.30	0.45	602.90	東壁北東隅	"	-	-	N90°E	0.95	15°	0.15	-	-	P 3	14	48	
221	"	隅方	N113°E	中2	4.35×4.05	17.62	0.45	602.80	北東隅	"	-	-	N77°E	0.10	30°	0.15	-	-		14	46	
222	"	-	N99°E	-	?×4.85	-	0.50	602.75	東壁北東隅	-	-	-	N94°E	0.60	10°	0.25	-	-		13	49	
223	"	-	N98°E	-	2.80×?	-	0.35	603.10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		12	46	
224	"	-	-	-	3.20×?	-	0.40	-	東壁中央	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 7	1	49	
501	北部E区	隅方	N86°E	中1	3.35×3.55	11.89	0.10	601.60	"	-	丸	1/2	-	-	-	-	-	-		8	73	

No.	位置	平面形	主軸方向	規模					カマド							諸施設			時期	図版No.								
				規模の種類	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への掘込		煙道			煙道口の 高さ m	その他	柱穴			柱間 間隔 m	その他						
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き													
502	北部E区	隅長I	N85°E	小	3.05×2.80	8.54	0.20	601.60	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	?	73			
503	"	"	N80°E	中1	3.35×3.60	12.06	0.15	601.65	東壁 北東隅	石組	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 4	13	73		
504	"	隅長II	-	中1	4.35×3.00	13.05	0	601.70	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	73		
505	"	-	-	-	?×?	-	0.10	601.60	東壁中央	-	丸	2/3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	73		
506	"	-	N94°E	-	2.65×?	-	0.20	601.55	"	-	丸	1/1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	73		
507	"	隅長II	N57°E	中2	4.90×4.15	20.34	0.25	601.45	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	73		
508	"	-	-	-	?×?	-	0.05	601.70	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	73		
509	"	-	N81°E	-	3.75×?	-	0.20	601.20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	73		
521	北部D区	隅長I	N75°E	大1	6.50×5.90	-	0.45	602.20	東壁中央	粘土	丸	わずか	N75°E	1.20	5°	0.25	-	-	-	-	-	-	4	3.35~4.12 3.87	1	64		
522	"	隅方	N79°E	大1	6.50×6.30	40.95	0.20	602.15	"	粘土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2.88~3.08 3.26~3.48	1	63		
523	"	隅長I	N78°E	大1	6.42×6.75	43.34	0.35	601.05	"	-	-	-	N87°E N75°E	1.85 1.60	10° 10°	0.20 0.15	カマド作り替え	-	-	-	-	-	4	4.04 3.62	P 1 周溝	1 2	61	
524	"	隅長II	N95°E	中1	3.55×4.75	16.86	0.35	601.95	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 2	1	61		
525	"	隅方	N85°E	小	2.75×2.65	7.29	0.10	601.55	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	?	65		
526	"	隅長I	N80°W	小	2.95×2.65	7.82	0.35	601.50	西壁中央	石組?	-	-	N80°W	0.65	15°	0.20	-	-	-	-	-	-	4	2.11~2.34 2.02~2.06	5	65		
527	北部E区	-	N97°E	-	4.42×?	-	0.25	601.05	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 1	1	67		
528	"	隅方	N108°E	中1	5.05×5.10	25.76	0.50	601.75	東壁中央	粘土	-	-	N108°E	1.35	15°	0.20	-	-	-	-	-	-	4	2.38~2.42 2.55~2.62	テラス	1 8	67	
529	"	"	N84°W	中2	4.25×4.50	19.13	0.25	601.95	西壁中央	石組?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	67		
530	"	隅長II	N110°W	小	3.45×4.40	15.18	0.40	601.85	"	-	丸	1/1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 4	1	67	
534	"	隅方	N91°E	中1	3.65×3.65	13.32	0.35	602.00	東壁?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 1	8	67	
535	"	隅長II	N93°E	中1	3.10×3.90	12.09	0.30	601.95	"?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	67		
536	"	"	N96°E	小	2.55×3.20	7.65	0.15	600.95	東壁中央 から 北隅寄り	石組	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	67	
537	北部D区	"	N85°E	中2	3.95×5.05	19.95	0.40	602.35	北壁北西隅寄 東壁北隅寄り	-	方 石組	1/2 わずか	N12°W -	0.75 -	15° -	0.20 -	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 2	11	60
539	"	-	N1°E	-	?×?	-	-	-	北壁?	-	-	-	N1°E	0.55	20°	0.15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	?	60	
540	"	隅方	N87°E	中2	5.00×4.95	24.75	0.40	602.35	東壁中央	粘土?	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2.98~3.28 2.55	P 4	2	60	
541	"	"	N112°E	小	3.75×3.85	14.44	0.30	602.40	西壁中央	粘土	-	-	N113°	2.40	水平	0.25	煙出しピット	-	-	-	-	-	4	2.64~2.72 3.05~3.14	P 2	1	60	
542	"	隅長II	N66°E	大1	5.95×6.65	39.57	0.40	602.20	東壁中央	-	-	-	N66°E	1.85	5°	0.25	-	-	-	-	-	-	4	3.32	2	58		

No.	位置	平面形	主軸方向	規 模				カ マ ド							諸施設			時期	図版No.					
				規模の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 m ²	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への現込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他			柱穴	柱間 間隔 m	その他		
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き									
543	北部D区	隅方	N109°W	小	2.50×2.75	6.88	0.35	602.55	西壁中央 やや 南寄り	-	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	2	60		
544	"	"	N110°W	中2	5.45×5.55	30.25	0.50	602.15	西壁中央	石組	-	-	N110°W	0.85	5°	0.20	-	4	2.96~3.18 3.30~3.33	-	2	58		
545	"	"	N82°E	小	3.15×2.95	9.29	0.35	602.25	東壁中央 やや 北寄り	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	東側張り出し	11	59		
546	"	-	N74°E	-	?×7.10	-	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	? ?	-	1	59		
547	"	隅方	N68°E	中1	4.25×4.45	18.91	0.35	602.10	東壁中央	粘土	-	-	N68°E	1.85	15°	0.15	-	4	2.28~2.33 2.33~2.42	-	1	57		
548	"	"	N75°E	小	3.55×3.65	12.96	0.45	602.25	"	-	方	3/4	N75°E	1.40	15°	0.15	-	-	-	周溝	2	56		
549	"	"	N75°E	中2	5.15×4.95	25.49	0.15	602.70	"	-	丸	1/2	-	-	-	0.20	-	4	2.62~2.76 2.41~2.50	-	2	53		
550	"	"	N69°E	中2	4.70×5.05	23.74	0.65	602.00	"	粘土	丸	1/2	N69°E	1.75	10°	0.20	-	4	2.35~2.42 2.34~2.65	-	1	54		
551	"	隅長II	N75°E	超	8.30×6.95	57.69	0.45	602.00	"	石組	-	-	N72°E	2.35	5°	0.25	-	4	4.14 3.50	-	2	54		
553	北部E区	隅方	N15°E	中2	4.35×4.60	20.01	0.65	601.75	北壁 北西隅	石組 ?	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	P 2	13	66	
554	"	"	N0°	中1	3.60×3.45	12.42	0.40	601.55	北壁中央	" ?	-	-	N2°E	0.50	10°	0.20	-	-	-	-	7	66		
555	"	"	N92°E	大1	5.05×5.50	27.78	0.40	601.60	東壁中央	石組	-	-	N92°E	0.65	10°	0.45	-	4 + 12	2.78~2.97 3.15~3.32	-	8	66		
556	"	-	N82°E	-	?×3.95	-	0.20	601.90	東壁 北東隅	石組	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 1	13	72	
557	"	隅長II	N79°E	中2	3.58×4.30	15.39	0.25	602.30	東壁中央 やや 南寄り	"	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	P 2	8	69	
558	"	隅方	N85°E	中1	3.85×3.75	14.44	0.35	601.95	東壁中央 やや 南寄り	-	丸	2/3	N90°E	0.65	20°	0.15	-	-	-	-	P 2	8	64	
559	"	"	N93°E	中2	4.60×4.35	20.01	0.50	601.60	東壁中央 やや 北寄り	-	-	-	N93°E	0.35	30°	0.15	-	-	-	-	P 1	8	66	
560	"	隅長II	N98°E	中1	4.25×5.00	21.25	0.20	601.85	東壁中央	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 3	1	66	
561	"	隅方	N95°E	小	2.65×2.75	7.29	0.30	601.75	"	石組 ?	丸	1/3	N95°E	0.60	10°	0.15	-	-	-	-	-	5	66	
562	"	-	N83°E	-	?×4.65	-	0.20	601.80	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	66		
563	"	-	N80°E	-	?×?	-	0.20	601.35	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	周溝?	1	66	
564	"	-	N100°W	-	3.90×?	-	0.35	601.65	西壁中央	石組	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 1	7	66
565	"	-	N95°E	-	?×5.95	-	0.30	601.75	東壁	石組 か	-	-	N92°E	0.45	15°	-	-	-	-	-	-	礎石あり	8	66
566	"	-	-	-	?×?	-	0.25	601.65	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	床の一部の み調査	?	66	
567	"	-	N90°E	-	?×2.40	-	0.30	601.65	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	71	
568	"	隅方	N96°E	小	2.85×2.95	8.41	0.20	601.65	東壁中央	石組	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	70	
569	"	隅長II	N90°E	中1	3.75×3.25	12.19	0.20	601.85	北壁?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	72	

No.	位置	平面形	主軸方向	規模				カマド							諸施設			時期	図版No.			
				規模の種類	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への廻込		煙道			煙道口の 高さ m	その他			柱穴	柱間 間隔 m	その他
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き							
570	北部E区	-	N80°E	-	?×3.25	-	0.25	601.90	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 1	? 72		
571	"	隅方	N13°W	小	3.05×3.00	9.15	0.20	601.90	北壁中央 やや 北寄り	粘土	丸	1/3	-	-	-	-	-	-	-	-	6 72	
572	"	"	N62°E	小	2.95×3.15	9.29	0.20	601.85	東壁中央 やや 北寄り	"	丸	1/1	-	-	-	-	-	-	-	-	? 72	
573	"	"	N80°E	中1	3.40×3.60	12.24	0.20	601.80	東壁中央 北壁中央	石組	-	-	N82°E	0.40	15°	0.20	-	-	-	-	8 70	
574	"	"	N90°E	中2	3.85×4.20	16.17	0.25	601.90	東壁中央	石組	丸	わずか	-	-	-	-	-	+2?	-	カマド両脇 に補助柱穴	8 68	
575	"	"	N96°W	中2	4.05×3.90	15.80	0.30	601.95	西壁南西 隅寄り	-	方	2/3	N91°W	0.25	15°	0.20	-	-	-	P 2	5 69	
576	"	"	N92°E	中1	3.15×3.25	10.24	0.30	601.75	東壁中央	石組	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	8 70	
577	"	-	?	-	径4.00	-	0.20	601.95	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 3	9 70	
578	"	隅方	N80°E	中1	3.60×3.75	13.50	0.20	601.85	東壁中央	石組	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	P 3	10 70
579	"	"	N92°E	中1	4.05×4.00	16.20	0.30	601.75	東壁中央	-	丸?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10 70	
580	"	-	N85°E	-	?×3.55	-	0.25	601.70	"	-	-	-	N85°E	0.65	20°	0.15	-	-	-	-	5 70	
581	"	隅方	N87°E	中1	4.65×4.55	21.16	0.30	601.65	"	-	方	4/5	-	-	-	-	-	4	? 1.96	P 2	3 70	
582	"	隅長II	N87°E	中1	3.05×3.70	11.29	0.20	601.85	"	石組	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	9 70	
583	"	隅方	N81°E	大1	5.00×5.05	25.25	0.45	601.25	東壁 北東隅	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	テラス	10 71	
586	"	隅長II	N82°E	大1	5.50×4.60	25.30	0.35	602.15	"	石組	-	-	N79°E	0.95	25°	0.05	-	-	-	P 2	7 68	
587	"	隅方	N88°W	小	2.85×3.05	8.69	0.10	602.20	西壁中央	-	丸	2/3	-	-	-	-	-	-	-	-	8 67	
588	"	"	N84°W	中1	2.75×2.65	7.29	0.30	602.60	西壁中央 やや 北寄り	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8 67	
589	"	隅長II	N86°W	中1	3.65×4.35	15.88	0.40	601.90	西壁中央 やや 北寄り	石組	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9 67
590	"	"	N80°W	中1	3.20×3.75	12.00	0.30	601.90	西壁中央	-	方	1/2	N83°E	0.30	20°	0.15	-	-	-	-	5 69	
591	"	隅方	N0°	中1	3.45×3.70	12.77	0.20	602.05	北壁中央 やや 東寄り	石組	丸	わずか	-	-	-	-	-	-	-	-	9 69	
592	"	"	N75°E	小	3.20×3.25	10.40	0.20	601.95	東壁中央	-	方	1/1	N75°E	0.60	5°	0	-	-	-	-	1 69	
593	"	"	N90°W	中2	4.85×4.65	22.55	0.30	601.75	西壁中央	-	-	-	N90°W	1.50	5°	0.25	-	4	2.55~2.90 2.62	-	1 68	
594	"	隅長II	N73°E	中1	3.00×3.55	10.65	0.40	601.70	東壁中央 やや 南寄り	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8 68	
595	"	隅長I	N90°E	中2	4.35×4.95	21.53	0.30	601.75	"	-	丸	わずか	N90°E	0.35	水平	0.20	-	-	-	-	9 68	
596	"	隅方	N80°E	小	2.40×2.20	5.28	0.15	601.90	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8 68	
597	"	隅長I	N88°W	中1	4.30×3.95	16.99	0.30	602.00	西壁中央	石組	-	-	N84°W	0.70	5°	0.10	-	-	-	-	9 69	

No.	位置	平面形	主軸方向	規模				カマド								諸施設			時期	図版No.		
				規模の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への埋込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他	柱穴			柱間 間隔 m	その他
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き							
598	北部E区	隅方	N82°E	大1	5.45×5.60	30.52	0.60	601.65	東壁中央 やや 南寄り	粘土	-	-	N82°E	1.40	25°	0.25	煙道先にビット	4	3.00~3.47 2.55~2.74		7	69
599	"	-	N96°W	-	?×?	-	0.30	601.95	西壁	-	丸	1/1	-	-	-	-	-	-	P1		5	69
600	"	隅方	N87°W	大2	7.00×6.50	45.50	0.30	601.65	西壁中央	粘土	-	-	N87°W	0.30	10°	0.20		4	3.40 2.96~3.06		5	68
601	"	-	N78°W	-	3.75×?	-	0.10	601.85	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		8	70
602	"	隅方	N102°W	中1	3.35×3.55	11.89	0.40	601.50	西壁中央	-	方	2/3	-	-	-	-		4	2.54~2.68 2.83~2.82		5	70
604	"	隅長I	N90°E	小	4.05×3.65	14.78	0.30	602.05	東壁中央	粘土	-	-	N90°E	1.05	水平	0.20		-	-		1	67
605	"	-	N97°W	-	?×3.75	-	0.20	601.75	西壁中央	-	-	-	-	-	-	-		-	-	周溝	8	68
606	"	隅長I	N90°E	中2	4.05×4.60	18.63	0.45	601.50	東壁中央	石組?	丸	1/2	N82°E	0.60	30°	0.35		-	-	テラス P1	8	68
607	"	-	N87°E	-	?×?	-	0.20	601.75	東壁中央	-	丸	1/3	-	-	-	-		-	-	周溝 P2	1	68
608	"	-	N85°E	-	2.95×?	-	0.50	601.45	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-		7	68
609	"	隅方	N100°W	中1	4.75×4.65	22.09	0.20	601.50	西壁中央	-	-	-	-	-	-	-		4	2.38~2.46 2.16~2.24	周溝 P8	2	70
610	"	-	N81°E	-	4.10×?	-	0.25	601.50	東壁中央	石組?	-	-	-	-	-	-		-	-	P2	8	70
611	"	-	?	-	3.45×?	-	0.20	601.55	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-		9	70
612	"	-	N100°W	-	3.95×?	-	0.20	601.85	西壁中 央?	粘土?	丸	1/3	-	-	-	-		-	-		8	70
613	"	-	?	-	?×?	-	0.10	601.70	西壁	-	-	-	-	-	-	-		-	-	カマドのみ	8	70
614	"	隅長I	N79°E	中1	3.90×3.45	13.46	0.30	601.85	東壁中央	石組	-	-	-	-	-	-		-	-		8	68
615	"	-	N87°E	-	3.65×?	-	0.25	601.60	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	P2	8	66
616	"	-	N98°E	-	?×3.45	-	0.25	601.80	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	P2	9	71
617	"	隅長I	N84°E	中2	5.00×5.55	27.75	0.30	601.65	東壁中央	粘土	-	-	N75°E	0.85	5°	0.15		4	2.69~2.73 2.47~2.86	P2	1	71
618	"	"	N85°E	中2	5.20×5.80	30.16	0.35	601.70	"	-	-	-	-	-	-	-		4	2.50~2.53 2.75	P5	4	71
619	"	(隅方)	N83°E	中2	(4.20)×4.05	(17.01)	0.40	601.55	"	-	-	-	N95°E	0.40	20°	0.20		-	-		8	71
620	"	-	N80°E	-	?×6.75	-	0.30	601.50	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	P4	2	71
621	"	-	N88°E	-	?×?	-	0.10	601.55	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	P2	2	71
623	北部D区	隅長I	N105°W	小	3.75×4.20	15.75	0.30	602.50	西壁中央	石組?	-	-	N108°W	0.75	水平	0.10		-	-	P1	3	53
624	"	隅方	N68°E	中1	4.45×4.65	20.69	0.45	602.40	東壁中央	粘土	-	-	N68°E	1.95	5°	0.20		4	2.23~2.40 2.58~2.62		3	53
625	"	"	N78°E	小	3.65×(3.95)	(14.42)	0.40	602.40	"	石組	-	-	N78°E	0.75	10°	0.15		-	-		3	54

No.	位置	平面 形状	主軸 方向	規 模				カ マ ド										諸施設			時期	図 版 No.
				規模 の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 m ²	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への掘込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他	柱穴	柱間 間隔 m	その他		
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き							
626	北部 D区	隅長 I	N 65° E	大 2	6.45×7.20	46.44	0.35	602.45	東壁中央	粘土	-	-	N 75° E	2.25	5°	0.25		4	3.54~3.74 3.88~4.08	周溝	2	54
627	"	"	N 74° E	中 2	4.75×5.45	25.89	0.65	602.00	"	"	-	-	N 69° E	0.95	10°	0.20		4	2.48~2.62 2.48~2.63		2	52
628	"	隅長 II	N 117° W	中 1	4.80×3.95	18.96	0.30	602.40	西壁中央	-	丸	わずか	-	-	-	-		4	3.46~3.58 2.78~2.84		2	50
629	"	隅方	N 68° E	小	3.75×3.75	14.06	0.25	602.35	東壁中央	-	丸	1/2	-	-	-	-		-	-		2	50
630	"	隅長 II	N 89° E	-	3.30×2.50	8.25	0.10	602.55	なし	-	-	-	-	-	-	-		-	-		中世 I	52
631	"	隅長 II	N 1° W	-	8.75×4.80	42.00	0.40	-	なし									あり			中世 I	51
632	"	隅長 II	N 8° W	-	5.10×2.80	14.28	0.10	-	なし									-	-		中世 I	53
633	"	隅方	N 117° W	小	3.00×2.90	8.70	0.40	602.30	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	P 1	2	50
634	"	-	N 68° E	-	4.45×?	-	0.50	602.40	東壁中央	粘土	-	-	N 68° E	0.75	10°	0.20		4 ?	-	P 2	2	51
635	"	-	N 79° E	-	2.48×?	-	0.05	602.45	"	-	丸	3/4	-	-	-	-		-	-		?	48
636	"	-	N 40° E	小	3.00×2.65	7.95	0.60	601.95	なし	-	-	-	-	-	-	-		-	-		2	50
637	"	隅方	N 58° E	中 1	4.20×4.60	19.32	0.50	602.15	東壁中央	粘土	-	-	N 58° E	1.80	10°	0.30		4	2.58~2.42 2.38~2.58		2	52
639	"	-	N 5° W	-	?×3.00	-	0.50	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-		中世 I	51
640	"	(隅方)	-	中 1	(4.00)×(3.80)	-	0.25	601.77	北壁 北東隅	-	-	-	-	-	-	-		-	-		14	57

付表2 古代掘立柱建物址一覧表

() = 推定

No	位置	棟方向	規 模				柱間 間隔		柱穴掘り方		備 考 付属施設・遺物など	図版 No
			桁行×梁行 (間×間)	桁 行 (m)	梁 行 (m)	面 積 (m ²)	桁 行 (m)	梁 行 (m)	形	規 模 (m)		
1	南部A区	N2°E	3×2	5.27	3.55	18.71	1.73	1.68~1.73	方	0.58~1.02		21
2	"	N83°E	3×2	5.48	4.42	24.22	1.74~1.88	2.24~2.28	方	0.55~0.89		17
3	"	N6°W	3×2	4.98	3.55	17.68	1.49~1.61	1.82~1.84	方	0.72~0.92		17
5	"	N6°W	3×2	5.36	4.68	25.08	1.56~1.72	2.36	方	0.53~0.98		22
6	"	N1°W	—	—	—	—	2.08	1.24	円	0.57~0.66	規模不明	17
10	"	N10°E	2×2	4.68	4.62	21.62	2.14~2.23	2.22~2.28	方	0.52~0.68		20
11	"	N97°E	3×3	5.06	5.28	26.72	1.66~1.72	1.65~1.82	方	0.52~0.76	南面廂	20
12	"	N0°	—	—	—	—	—	—	方	0.53~0.63	規模不明	22
13	"	N90°E	2×2	3.68	3.84	14.13	1.73~1.96	2.35~2.50	方	0.53~0.86	北面廂	25
14	"	N0°	3×2?	5.28	3.28	17.32	1.68~1.82	—	方	0.55~0.68		18
15	"	N85°W	3×2	5.34	4.20	22.43	1.72~1.78	2.14~2.23	方	0.45~0.68		18
16	"	N0°	3×2	4.31	3.28	14.14	1.34~1.77	1.58~1.73	方	0.42~0.75		18
17	"	N15°E	—	—	—	—	1.72	1.44	方	0.63~0.72	規模不明	16
19	南部B区	N2°W	3×4	7.00	5.64	39.48	2.34~2.50	1.28~1.47	円	0.40~0.51		28
20	"	N10°W	3×3	4.78	4.85	23.18	1.38~1.52	1.78~1.96	円	0.45~0.68	東面廂	28
21	"	N80°E	2×2	3.08	2.53	7.79	1.53~1.58	1.20~1.28	方	0.50~0.68	総柱	26
23	"	N10°E	3×2	6.02	3.88	23.36	1.73~2.16	1.90~2.02	円	0.42~0.82		25
24	南部C区	N33°W	—	—	—	—	1.84	—	円	0.68~0.84	規模・棟方向不明	42
25	"	N8°W	3×2	4.60	3.98	18.31	1.48~1.72	1.56~2.04	方	0.52~1.02	南面廂	41
26	"	N8°W	2×2	4.16	3.98	16.56	1.98~2.06	1.96~2.08	円	0.58~0.62		39
27	"	N19°W	3×2	5.44	4.46	24.46	1.81~1.94	2.20~2.27	円	0.43~0.60		40
28	"	N27°W	2×2	3.74	3.46	12.94	1.78~1.88	1.48~1.95	円	0.42~0.72		42
29	"	N12°W	2×2	3.84	3.72	14.28	1.78~1.88	1.72~1.84	方	0.84~1.14		42
31	"	N70°E	3×1?	4.68	2.98	13.95	1.35~1.60	2.98	円	0.50~0.81		30
32	"	N0°	2×2	4.48	4.13	18.50	1.94~2.53	1.82~2.00	方	0.68~1.00		45
34	"	N0°	2×2	4.87	4.26	20.74	1.92~3.21	1.90~2.12	円	0.58~0.98	総柱	45
35	"	N27°W	3×2	5.98	4.12	24.64	1.89~2.04	2.04~2.08	円	0.58~0.71		46
36	"	N13°W	3×2	5.53	3.68	20.35	1.85~1.93	1.84~1.96	円	0.54~0.84		49
39	"	N23°W	3×2	5.18	4.08	21.13	1.37~1.78	2.04~2.22	円	0.82~0.98		48
41	"	N6°W	2×2	3.87	3.87	14.98	1.88~2.00	1.88	円	0.55		33
42	南部B区	N82°E	4×3	6.92	5.68	39.31	1.66~2.04	1.84~1.88	円	0.58~0.72	西面廂	35
43	"	N4°W	2×2	4.13	3.24	13.38	1.93~2.12	1.54~1.66	円	0.51~0.82		36
44	"	N4°W	3×2	5.34	4.21	22.48	1.78~1.80	2.05~2.12	円	0.48~0.61		31
45	"	N37°W	2×1	2.94	3.18	9.35	1.46~1.51	3.18	円	0.54~0.73		35
46	"	N5°W	3×3	5.44	5.42	29.48	2.22~3.92	2.30~2.70	円	0.64~1.22		32
47	"	N3°E	2×2	3.78	3.64	13.83	1.79~2.11	1.74~1.81	円	0.47~0.67		30
48	"	N6°W	2×2	4.48	4.08	18.28	2.06~2.42	2.00~2.04	方	0.54~0.72		34
50	"	N10°W	3×3	4.97	4.94	24.55	1.38~2.12	1.44~1.98	円	0.42~0.64		29
51	"	N3°E	2×2	3.12	3.04	9.48	1.50~1.63	1.45~1.57	円	0.61~0.74		38
52	"	N1°E	2×2	5.04	4.51	22.73	2.13~2.37	2.08~2.42	円	0.40~0.52		34
54	"	N9°W	2×2	4.04	3.93	15.88	1.76~2.28	1.77~2.18	円	0.28~0.38		36
55	"	N90°E	1×1	3.24	2.73	8.85	3.04~3.21	2.48~2.73	円	0.66~0.92		34
60	"	N7°W	1×1	2.55	2.06	5.25	2.46~2.55	1.88~2.06	円	0.44~0.61		32
521	北部D区	N11°W	2×2	4.36	3.88	16.92	1.84~2.35	1.84~2.06	円	0.58~0.87		62
522	"	N12°W	2×2	4.82	4.51	21.74	2.25~2.55	2.16~2.28	円	0.50~0.76		62
523	"	N12°W	1×1	2.93	2.42	7.09	2.93	2.42	円	0.54~0.78		62
524	"	N45°E	2×2	3.18	3.00	9.54	1.48~1.70	1.42~1.53	円	0.47~0.81		63
525	"	N16°E	2×2	3.23	3.11	10.05	1.47~1.74	1.42~1.68	円	0.67~0.82		64
526	"	N74°E	3×2	6.52	4.56	29.73	2.06~2.26	2.22~2.28	方	0.81~1.32		58
527	"	N58°E	3×2	5.46	3.12	17.04	1.71~1.89	1.66~1.88	方	0.55~0.85		58
528	"	N25°W	2×2	3.65	3.55	12.96	1.78	1.68~1.86	円	0.50~0.67	総柱	64
579	北部D区	N2°E	3×2?	6.55	2.20?	14.41~	2.08~2.28	2.20	方	0.55~0.94		62
530	"	N18°W	3×2	5.76	4.24	24.42	1.83~1.98	1.96~2.20	方円	0.36~0.83		56

No.	位置	棟方向	規 模				柱間 間隔		柱穴掘り方		備 考 付属施設・遺物など	図版 No.
			桁行×梁行 (間×間)	桁 行 (m)	梁 行 (m)	面 積 (m ²)	桁 行 (m)	梁 行 (m)	形	規 模 (m)		
531	"	N14°W	2?×2?	3.74	3.14	11.74	1.57~2.18	1.54~1.56	円	0.45~0.94		69
533	"	N22°W	3×2	5.55	4.17	23.14	1.75~2.00	2.00~2.17	方円	0.57~0.72		58
534	"	N12°W	2×2	4.22	4.20	17.72	1.96~2.28	1.96~2.03	円	0.68~0.91	総柱	56
535	"	N78°E	2×2	3.36	3.21	10.79	1.54~1.67	1.58~1.62	円方	0.53~0.71		56
536	"	N19°W	2×2	4.46	4.58	20.43	2.08~2.28	2.08~2.48	円	0.47~0.56	棟方向不明	56
537	"	N87°W	1×1?	—	—	—	3.13	2.65	円	0.33~0.46		60
538	"	N22°W	4×3	8.54	5.19	44.32	1.98~2.22	1.68~1.80	方	0.68~0.95	南面廂	57
539	"	N23°W	3×2	5.58	4.22	23.55	1.72~2.08	1.96~2.24	円	0.66~0.82		58
540	"	N15°W	3×3	6.03	5.78	34.85	1.63~2.11	1.74~2.08	円	0.47~0.68		56
541	"	N24°W	2×1	4.10	3.35	13.74	2.00~2.65	3.35	円	0.36~0.52		56
543	"	N15°W	3×2	7.05	4.08	28.76	2.26	1.94~2.14	方	0.36~1.05		60
544	"	N19°W	2×2	5.28	3.96	20.91	2.48~2.76	1.78~2.06	円	0.34~0.38		60
545	"	N83°E	3×2	5.08	4.04	20.52	1.55~1.96	1.88~2.08	円	0.48~0.82		59
546	"	N85°W	2×2	4.81	4.07	19.58	2.14~2.45	2.00~2.05	円	0.48~0.76	総柱	59
547	"	N75°E	4×3?	7.62~	4.68	35.66~	1.85~1.88	1.42~1.68	方	0.76~1.02		59
548	"	N18°W	3×3	6.02	5.16	31.06	1.68~2.54	1.64~1.84	方	0.80~1.02		57
549	"	N27°W	3×3	6.34	6.10	38.67	1.38~3.16	1.92~2.04	円	0.58~0.94		57
550	"	N11°W	3×2	5.48	4.06	22.25	1.72~2.00	1.86~2.00	方	0.52~0.91		53
551	"	N19°W	3×2	6.82	4.84	33.01	2.04~2.92	2.06~2.62	円方	0.46~0.78		53
552	北部E区	N13°W	3×2	6.11	5.04	30.79	1.88~2.25	2.36	方	0.71~0.86		69
553	"	N13°W	3×2	5.78	4.58	26.47	2.12	1.80	方	0.48~0.54		70
554	"	N13°W	2×2	4.08	3.54	14.44	2.16	1.76	方	0.42~0.46		70
555	"	N90°E	3×2	5.84	3.33	19.45	1.83~2.12	1.97~2.04	円	0.22~0.45		67
556	"	N13°W	2×2	4.48	3.68	16.49	1.73~2.42	1.82~1.84	円方	0.84~1.32		68
557	北部D区	N23°W	3×2	5.74	4.00	22.96	2.27~3.48	1.88~2.12	円	0.64~0.88		61
558	"	N70°E	2×1	2.42	2.15	5.20	1.04~1.38	2.15	方円	0.47~0.79		51
559	"	N8°W	2×1	2.45	2.32	5.68	0.96~1.47	2.32	方円	0.46~0.95		51
560	"	N16°W	5×3	9.08	5.54	50.30	1.46~2.44	1.56~1.70	方	0.92~1.26	西面廂	52
561	"	N28°W	2×2	3.24	3.24	10.50	1.60~1.62	1.60~1.62	方	0.72~0.84		52
562	"	N23°W	2×2	3.20	2.84	9.09	1.56~1.64	1.34~1.50	方	0.84~0.86		52
563	"	N28°W	1×1?	2.12~	—	—	2.12	—	円	0.58~0.78		51
564	"	N12°W	3×?	4.98	—	—	1.54~1.84	—	円	0.68~0.76		55
565	"	N64°E	4×2	7.54	—	—	1.50~2.42	1.68~1.90	方円	0.44~0.88		50
566	"	N24°W	4×3	6.16	5.12	31.54	1.46~1.72	1.44~1.54	方	0.66~0.86	西面廂	52
567	"	N22°W	3×3	5.64	4.14	23.35	1.56~2.30	1.20~1.66	方	0.64~0.94		55
570	"	N68°E	2×1~	4.44	1.90~	—	2.00~2.44	1.26~1.90	円	0.51~0.56		52
571	"	N25°W	2×2か	4.22~?	3.48~?	14.69~	2.08~2.12	1.58~1.90	方	0.48~0.67		55
572	"	N25°W	2×1	2.48	2.36	5.85	1.12~1.32	2.36	円	0.54~0.63		51
573	"	N65°E	2×1	2.74	2.34	6.41	1.20~1.36	2.34	円	0.56~0.66		51
574	"	N24°W	4×3	6.48	4.64	30.07	1.50~1.84	1.42~1.68	円	0.76~0.84		54
575	"	N24°W	4×3	6.18	4.77	29.48	1.20~1.88	1.54~1.62	円	0.70~0.96		55
576	"	N20°W	4×3	6.36	4.46	28.37	1.40~1.68	1.31~1.54	方円	0.66~0.94		55
577	"	N68°E	2×2	3.20	2.72	7.26	1.65	1.26~1.48	方	0.55~0.96		51
578	"	N18°W	3?×2	5.36	2.48	13.29	1.56~2.12	1.02~1.46	方	0.56~0.94		51
579	"	N73°E	4×2?	6.44	1.00	—	1.51~1.78	1.00	方	0.66~1.02		51
580	北部E区	N0°	1×1	2.62	2.40	6.29	2.62	2.40	円	0.52~0.75		69
581	北部D区	N87°W	2×?	3.36	—	—	1.60~1.76	—	円	0.48	棟方向不明	64
582	"	N72°E	1×?	1.20~	—	—	1.20	—	円	0.72	"	64
583	"	N8°E	2?×?	3.54?	—	—	1.60~1.94	—	方	0.34~0.54		64
584	"	N9°W	3×2?	5.00	4.38	21.90	1.26~2.06	4.34	円	0.38~0.74		60
585	"	N73°E	3×2	5.48	4.46	24.44	2.14~2.16	1.40~2.26	円	0.32~0.71	南面廂	60

付表3 中世掘立柱建物址一覧表

() = 推定

No.	位置	類型	棟方向	規模			柱間 間隔		柱穴掘り方		備考 付属施設・遺物など	図版 No.	
				梁間×桁行 (間×間)	梁方向×桁方向 (m)	面積 (m)	桁行 (m)	梁行 (m)	形	規模 (m)			
30	南	IIA3	N6°W	1×2	2.72	3.28	8.92	2.66~2.72	1.49~1.74	円	0.25~0.36		30
33	"	IIC3	N11°W	2×4	4.12	9.14	37.66	1.88~2.08	2.12~2.28	方	0.18~0.22	内耳土器	45
37	"	II	N8°E	2×3~?	5.12	7.12?~	—	2.40~2.58	1.78~2.64	方	0.16~0.32		45
38	"	II	N3°E	2×3~?	3.74	6.48~?	—	1.74	2.42	方	0.15~0.34		45
49	"	IIA3	N3°E	1×2	2.40	4.88	11.71	2.40	2.48~2.56	方	0.18~0.22		36
56	"	II	N11°W	?×3~?	?	7.08~?	—	—	2.24~2.51	方	0.22~0.28		49
57	"	II	N10°W	1~×1~	1.98~	2.24~	—	1.98	2.24	円	0.32~0.39		37
58	"	II	N0°	1?×2~	3.51	4.11~	—	3.51	1.96~2.08	方	0.17~0.23		37
59	"	IIB3	N10°W	1×3~	2.68	5.64	15.12	2.68	1.21~2.43	方	0.18~0.24		37
53	"	IIC3	N8°W	2×4.5	4.74	9.64	45.69	2.34~2.40	1.88~2.27	方	0.22~0.33	内耳土器	32
61	"	IIA3	N85°E	1×2	2.23	4.89	10.90	2.02~2.23	2.38~2.51	方	0.17~0.27		31

濃 構 番 號	食 器										煮 飲 具										貯 藏 具				個 體 總 數		
	土 黑 器 器 A					須 器 器					陶 灰 器 器					陶 灰 器 器					須 器 器		陶 灰 器 器			土 黑 器 器 B	
	杯 D E F	杯 C A	碗 A B	鉢 A B	鉢 A B C D	杯 A B C D	杯 A B D	鉢 A B C	高 杯	他	杯 A	碗 血	碗 血	碗 血 他	碗 血 他	須 器 器	須 器 器	小 瓶	廣 口 瓶 他 類	廣 口 瓶 他 類	廣 口 瓶 他 類	廣 口 瓶 他 類	長 頸 壺 短 頸 壺	長 頸 壺 短 頸 壺			
SB133																										6	
SB134	1					5	1																			28	
SB135						2	1																			7	
SB136		12	4	3	4	3																				50	
SB137																										4	
SB138		9	3	9	1																					58	
SB141		1																								8	
SB142		2	1		1																					40	
SB143	(1)	22	2		6																					79	
SB144		20	3	2	5																					88	
SB145		11	2	1	1																					43	
SB146		11	1	1	3	1																				40	
SB147	1																									20	
SB148		2	3	1	3	2																				34	
SB149		3	1																							19	
SB150		14	1	1	2																					52	
SB151		2	1	1																						18	
SB152		4	1																							14	
SB153		7			4																					21	
SB154																										1	
SB155	11																									81	
SB156	3																									13	
SB157	1																									21	
SB158	1																									9	
SB159	2																									31	
SB160	2																									18	
SB161																										13	
SB162																										38	
SB163	7																									78	
SB164	2	1																								56	
SB165																										23	
SB166																										10	
SB167																										5	
SB168		15	1	2	3	1																				43	
SB169		17	2	9	1																					49	
SB170		8	2	1	2	1																				29	
SB171		12	6	4	2																					34	
SB172		5	1	4	5																					45	
SB173		18			1																					48	
SB174		13	2	1	1																					31	

付表5 文字関係資料一覧表(墨書土器・刻書土器)

整理番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%) 口縁底	備考
1	SB 37	32	須恵器	蓋			内	□	覆		生カ
2	SB 113	6	〃	杯BIV	底		外	□	〃	5 30	
3	SB 142	7	黒色土器A	杯A II	体	逆位	〃	メ	床	22 一	
4	SB 162		須恵器	杯A	〃	正位	〃	□	覆	15 一	島・高カ
5	SB 164		黒色土器A	杯A II	〃	不明	〃	□	〃	一 30	
6	SB 175	16	須恵器	杯BIV	底		〃	浄濱	ピット	70 100	
7	〃	17	〃	〃	〃		〃	浄濱	床	20 100	
8	SB 184	1	土師器	杯C	〃		〃	浄濱	〃	70 100	
9	SB 207		須恵器	杯BIV	〃		〃	浄濱	覆	一 100	
10	SB 222	9	灰釉陶器	椀	〃		〃	ㄣ	床	80 100	解釈不能
11	SB 501		黒色土器A	椀	〃		〃	ㄣ	カマド	一 100	
12	SB 507	2	〃	杯A II	体	逆位	〃	ㄣ	床	72 100	
13	〃	3	〃	〃	〃	〃	〃	ㄣ	床	80 100	
14	〃		〃	杯A	〃	〃	〃	□	〃	10 一	
15	〃	10	〃	椀	底		〃	□	ピット	一 100	
16	SB 509	1	〃	杯A II	体	逆位	〃	ㄣ	覆	41 100	
17	〃	2	〃	〃	底		〃	□	床	70 100	
18	〃		〃	杯A	体	不明	〃	□	覆	10 一	
19	〃		〃	〃	〃	〃	〃	□	〃	一 一	
20	〃		〃	〃	〃	〃	〃	□	〃	一 一	
21	〃	16	〃	〃	〃	〃	〃	□	床	10 一	
22	〃	17	〃	椀	底		〃	□	〃	6 一	ㄣまたは月カ
23	〃		〃	〃	〃		〃	□	覆	一 10	
24	〃	21	須恵器	杯A	体	右横	〃	ㄣ	床	100 100	
25	SB 528		黒色土器A	杯A II	〃	〃	〃	□	覆	10 30	義カ
26	SB 555	3	土師器	〃	〃	〃	〃	ㄣ	ピット	35 100	
27	〃	56	〃	〃	〃	左横	〃	ㄣ	〃	30 一	
28	〃	7	黒色土器A	〃	〃	正位	〃	ㄣ	床	85 100	
29	〃	20	〃	椀	〃	〃	〃	ㄣ	〃	60 100	
30	〃	25	〃	〃	〃	不明	〃	□	覆	12 15	図示不能
31	SB 555		黒色土器A	杯または椀	体	右横	外	ㄣ	ピット	10 一	
32	〃		〃	〃	〃	〃	〃	ㄣ	覆	8 一	
33	〃		〃	〃	〃	不明	〃	ㄣ	〃	5 一	
34	〃		〃	〃	〃	〃	〃	□	床	6 一	
35	〃		須恵器	杯A	〃	〃	〃	□	覆	一 一	
36	SB 558	3	黒色土器A	杯A II	〃	右横	〃	ㄣ	〃	12 10	
37	SB 559		〃	〃	〃	不明	〃	□	〃	一 12	
38	〃		〃	〃	〃	〃	〃	ㄣ	〃	17 一	
39	〃		〃	杯または椀	〃	〃	〃	□	〃	一 一	
40	〃		軟質須恵器	杯A	〃	〃	〃	□	〃	一 一	ㄣカ
41	SB 564	1	黒色土器A	杯A II	〃	左横	〃	家	カマド	65 100	

整理番号	出土遺構	土器番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%) 口縁底	備考
42	SB 564	5	"	"	"	"	"	オ	覆	12 40	
43	"	10	須恵器	杯A	底		"	オ	カマド	25 60	
44	SB 565		黒色土器A	杯AII	"		"	□	ピット	— 10	
45	SB 583	7	土師器	"	体	正位	"	万	覆	17 —	
46	SB 595	6	"	"	"	右横	"	フ	床	24 85	
47	SB 598	8	黒色土器A	杯AI	"	左横	"	真□	カマド	80 100	菊または園カ
48	NR 4	1	"	杯AII	"	不明	"	嬰	覆	20 30	
49	"	2	"	杯A	"	正位	"	□	"	— 100	2字
50	"	3	"	"	"	不明	"	□	"	— 100	
51	遺構外		須恵器	"	底		"	□		18 35	継カ
52	"		黒色土器A	椀	"		"	□		— 50	県カ
53	"		"	"	体	不明	"	□		— 48	戸カ
54	SB 576		"	杯または椀	"	逆位か	"	拳	覆	— —	刻書

付表6 文字関係資料一覧表(陶硯・転用硯)

図版番号	出土遺構	遺物番号	種類	器種	転用部位	調整痕	層位	遺存状態(%) 口縁底	備考
55	SB 80		陶硯	円面硯			覆	わずか	
56	SB 86		"	"			"	"	
57	SB 100		"	"			"	"	透かし有
58	遺構外		"	"				"	
59	"		"	"				— 3	
60	SB 10	9	灰釉陶器	皿B	底部内	なし	覆	30 40	朱付着
61	SB 14	8	"	椀	底部外	"	"	12 60	
62	SB 46	13	"	皿B	底部内	"	床	48 35	朱付着鮮明
63	SB 68		須恵器	甕	体部内	あり	"	— —	
64	SB 145	14	灰釉陶器	椀	底部外	なし	"	— 100	
65	"	15	"	皿B	底部内外	"	カマド	45 60	朱と墨付着
66	SB 146	7	"	椀	底部内	"	ピット	— 60	朱付着
67	SB 173	13	"	皿B	"	"	床	45 100	
68	SB 183	9	"	"	底部内外	"	"	75 100	
69	SB 194		"	椀	底部内	あり	覆	— 90	
70	SB 201		"	皿B	底部外	なし	ピット	— 40	朱付着
71	SB 224		須恵器	蓋	内	"	覆	100 100	朱付着
72	SB 529	13	灰釉陶器	椀	底部内	"	"	20 90	
73	SB 551	4	須恵器	蓋	内	"	カマド		
74	SB 555	41	灰釉陶器	椀	底部外	あり	床	— 100	
75	"		"	"	"	"	覆	— 100	
76	"		"	"	"	"	"	— 35	
77	SB 582	6	"	"	底部内	"	床	— 100	
78	SK 744		"	"	底部外	"		— 100	
79	遺構外		"	皿B	底部内	なし		25 60	朱付着
80	NR 4		須恵器	甕	体部内	あり		— —	

付表7 鉄製品・鉄滓遺構別出土数一覧表

*鉄滓は重量(g)、他は個体数で表わす

遺構	時期	鎌	刀子	釘	鍬	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考	図番号
								方形	円形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明			
SB1	古代14	2	3		1									1		環状1	14・16・39・40・82・98	
SB2	14	2	6		1	1	1								295	鉄滓5、苧引鉄1	15・41~43・50・60・67・99	
SB4	14		1				1								105	鉄滓3	44	
SB6	14														230	鉄滓3		
SB7	2															塊状1		
SB8	12														5	鉄滓1		
SB10	11				1													
SB14	13						1									鉄1	68	
SB15	2														360	鉄滓1		
SB20	?							1		2	1				1	345	鉄滓2	103
SB23	13				1							1						
SB26	13				1												80	
SB27	15	1	2				1								5	釘?1、鉄滓1	17・51・52・105	
SB28	11														10	鉄滓1		
SB30	?															1		
SB31	13	1			1?										125	鉄滓2		
SB36	2				1?										5	管状1、鉄滓1	74	
SB37	3		2													1	塊状1	23
SB39	14									1								
SB42	?						1			1								
SB44	14						2	1		1							58・59	
SB49	4														190	鉄滓1		
SB50	14											1						
SB52	13		1															
SB55	5		1			1		2									101	
SB63	14		1		1			1							10	鉄滓1	81	
SB66	3	1			1													
SB68	2														445	鉄滓1		
SB71	5		1							1	1	1			85	鉄滓2	24	
SB73	5									1					5	鉄滓1		
SB74	4															不明1	109	
SB75	12		1				1										34	
SB76	?														90	鉄滓1		
SB77	4							1									126	
SB78	14	1	1				1								150	鉄滓1	12・45・61	
SB80	4														280	斧1・鉄滓1	65	
SB84	12														280	鉄滓2		
SB86	5														485	鉄滓5		
SB90	13	1						1						1	820	鉄滓1		
SB91	11	1	2													1	53	
SB92	11		2														32・33	
SB93	14		1														46	
SB94	2										1				65	鉄滓1		

遺構	時期	鎌	刀子	釘	鍬	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考	図番号
								方形	円形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明			
SB97	古代13														175	鉄滓2		
SB98	2												1					
SB100	4									1					18	環状1、鉄滓1	96	
SB101	14			1					1						65	鉄滓1	90	
SB102	12		1															
SB113	5									1					140	鉄滓1		
SB116	7	1	2														7・26	
SB117	13								1						55	鉋1、鉄滓1	70	
SB119	13														280	鉄滓4		
SB120	14	1														不明1	13	
SB121	4	1											1		375	鉄滓4		
SB123	14	1															11	
SB126	13														35	鉄滓1		
SB127	14				1												83	
SB129	1			1														
SB130	12													2				
SB131	5		1										1				108	
SB136	15				1		2								30	鉄滓1	63~65	
SB138	14							1										
SB141	13		1										1		15	鉄滓1		
SB142	8							1										
SB143	13		2	1		1?		2					1		160	鉄片1、鉄滓5	36	
SB144	12					1											94	
SB145	13	1															鑿1	
SB146	15																管状1	
SB147	2		1					1										
SB148	14		2															
SB150	11														35	鉄滓1		
SB151	12	1						1							420	鉄滓2	9	
SB153	14	1	2		1										130	鉄滓3	48・84	
SB155	1							1										
SB163	1	1															5	
SB164	7		1				1										56	
SB165	7														185	鉄滓1		
SB168	13		4			2	1	2							160	鉄滓3	37・38・92・93	
SB170	15														50	鋤鍬先1、鉄滓1	3	
SB171	14		1														47	
SB172	13		1							1					160	鉄滓2		
SB173	12		1					1									35	
SB174	15		1					1				1			50	鉄滓1		
SB175	4				1			1							1230	不明1、鉄滓5	73	
SB176	1				1	1								3			71・95	
SB178	15							1	1						95	鉄滓1		

遺構	時期	鎌	刀子	釘	鍬	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考	図番号
								方形	円形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明			
SB179	15		1												10	鉄滓1		
SB181	14					1									15	鉄滓1	102	
SB183	13						1	1	1									
SB184	4											1			740	鉄滓1		
SB185	12									1								
SB186	14														539	鉄滓2		
SB187	4														100	鉄滓1		
SB192	12		1															
SB194	15	1	1		1					1					10	不明、鉄滓1	86	
SB195	15								2						35	鉄滓1		
SB196	14														270	不明1、鉄滓1		
SB197	13														135	鉄滓1		
SB198	14														30	鉄滓1		
SB199	11															不明1		
SB201	13															鉄片1		
SB205	1					1									200	鉄滓1		
SB210	5															鉄1?		
SB213	14														530	鉄滓3		
SB215	14			1													87	
SB220	14		2	1			1									容器1	62・220	
SB221	14														435	鉄滓2		
SB222	13					1?									40	鉄片1、鉄滓2	100	
SB224	1		1						2		1							
SB501	8														540	鉄滓1		
SB505	8														80	鉄滓1		
SB506	13								1									
SB507	8														95	鉄滓1		
SB509	8														455	鉄滓6		
SB521	1														130	鉄滓1		
SB523	1															塊状1		
SB528	8		2		2											斧1	66・76・77	
SB529	8									1	1							
SB530	1				1												72	
SB534	8	1													140	鉄滓1	8	
SB535	8														15	鉄滓2		
SB537	11		3						1						720	塊状1、不明1、鉄滓5	31	
SB540	2	1	1							1					50	鉄滓1	6	
SB541	1		1															
SB542	2				1?													
SB546	1						1	1									54	
SB547	1															鋤先1	1	
SB550	1	1							1								4	
SB551	2		2														19・22	

遺構	時期	鎌	刀子	釘	鍬	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考	図番号
								方形	円形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明			
SB553	13														60	鉄滓1		
SB554	7														30	鉄滓1		
SB555	8								1						105	鉄滓1		
SB556	13			1											5	鉄滓1		
SB557	8		1															
SB558	8									1								
SB559	8		1														27	
SB560	1											1						
SB561	5								1									
SB565	8							1	1	1		1			310	鉄滓1	106	
SB573	8		2															
SB574	8		1					1		1					60	鉄滓2		
SB577	9			1											5	鉄滓1	89	
SB578	10							1										
SB579	10				1?										75	鉄片、鉄滓1	78	
SB580	5		1		1												25・75	
SB582	9		2					1							150	鉄滓2	29	
SB583	10		3							1					55	鉄滓3	30	
SB586	7		1					1		2	1				65	鍬1、鉄滓1	49・91	
SB589	9						1								10	鉄滓1		
SB591	9	1	1							1?	1						104	
SB592	1		3														18	
SB597	9		1					1							10	塊状1、鉄滓1		
SB598	7		2												110	芦引鉄1、鉄滓3		
SB605	8						1									環状1	57・97	
SB606	8														175	鉄滓1		
SB610	8														10	鉄滓1		
SB611	9		1												5	鉄滓1	28	
SB616	9							1										
SB623	3							1										
SB624	3								1									
SB625	3		1	1														
SB626	2		3			1?											21	
SB634	2			1													88	
SB637	2		1				1										20・55	
SK56	不明									1		2						
SK231	不明								1									
SK348	5		1															
SK1074	1~3								1									
SK1361	10		2						1									
SK535	2									1								
ST538	3									2								
SB631	中世		1		1?		1								5	鑿1、鉄1、鉄滓1	122・124・128	

遺構	時期	鎌	刀子	釘	鍬	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考	図番号
								方形	凹形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明			
SB639	中世		1													鉄1	123・127	
SD7	中世2														5	鉄滓1		
SD31	中世2							1							40	鉄滓1		
SD34	中世2			1														
SD525	中世														425	鉄滓3		
SK17	中世2														5	鉄滓1		
SK1256	中世		1															
SL	近世		1	7				1		1					1	鉄片2	129~133	
遺構外			8	6			4	2	3	6	4	1	1		2	360	燧鉄?1、鋤鍬先1、鉄片1、環状1、塊状1、不明1、鉄鉄滓7	2・125

銅製品・銅滓遺構別出土数一覧表

遺構	時期	出土品・数	図番号	遺構	時期	出土品・数	図番号
SB 37	古代3	環状銅製品1	115	SB178	古代15	銅滓1	
SB 91	古代11	青銅鏡1、銅鏡1	111・116	SB522	古代1	金環1	112
SB 93	古代14	銅鏡1	117	SB544	古代2	銀環1	113
SB138	古代14	銅滓1	121	SK176	古代13	青銅鏡1	110
SB143	古代13	板状銅片1	118	SK200	古代1~2	金環1	114
SB174	古代15	板状銅片1、銅滓1	119・120				

付表 8 石製品一覽表

No.	器種	遺構	時期	石	材	備	考	番号
1	管玉	S B 30	古代	碧玉				28
2	砥石	S B 3	古代13期	砂岩		I類		
3	砥石	S B 12	古代4期	砂岩		I類		
4	砥石	S B 12	古代4期	砂岩		I類		
5	砥石	S B 20	古代5期	凝灰岩		II類		19
6	砥石	S B 23	古代13期	砂岩		I類	角柱状	4
7	砥石	S B 26	古代13期	砂岩		I類		
8	砥石	S B 27	古代15期	凝灰岩		II類		16
9	砥石	S B 27	古代15期	凝灰岩		II類		
10	砥石	S B 37	古代3期	凝灰岩		II類	角柱状	
11	砥石	S B 37	古代3期	凝灰岩		II類	角柱状	14
12	砥石	S B 37	古代3期	凝灰岩		II類	角柱状	8
13	砥石	S B 56	古代3期	砂岩		I類	板状	6
14	砥石	S B 57	古代2期	凝灰岩		II類	角柱状	21
15	砥石	S B 64	古代3期	砂岩		I類		
16	砥石	S B 68	古代2期	砂岩		I類	角柱状	2
17	砥石	S B 69	古代13期	砂岩		I類		
18	砥石	S B 74	古代4期	凝灰岩		II類		
19	砥石	S B 86	古代5期	砂岩		I類		
20	砥石	S B 86	古代5期	砂岩		I類		
21	砥石	S B 90	古代13期	凝灰岩		II類		
22	砥石	S B 91	古代11期	凝灰岩		II類		
23	砥石	S B 114	古代5期	凝灰岩		II類	角柱状	12
24	砥石	S B 126	古代13期	凝灰岩		II類		24
25	砥石	S B 136	古代15期	凝灰岩		II類	角柱状	13
26	砥石	S B 136	古代15期	凝灰岩		II類		25
27	砥石	S B 143	古代13期	凝灰岩		II類		
28	砥石	S B 143	古代13期	砂岩		I類	不整形	9
29	砥石	S B 153	古代14期	流紋岩		II類	角柱状	17
30	砥石	S B 178	古代15期	凝灰岩		II類	角柱状	18
31	砥石	S B 199	古代11期			II類		
32	砥石	S B 199	古代11期	頁岩		II類	角柱状	15
33	砥石	S B 199	古代11期	砂岩		I類		
34	砥石	S B 213	古代14期	砂岩		I類		
35	砥石	S B 214	古代2期	砂岩		I類	方形	3
36	砥石	S B 216	古代3期	砂岩		I類	板状	10
37	砥石	S B 503	古代13期	砂岩		I類		
38	砥石	S B 537	古代11期	粘板岩		II類	角柱状	11
39	砥石	S B 540	古代4期	凝灰岩		II類	角柱状	23
40	砥石	S B 549	古代2期	砂岩		I類	角柱状	7
41	砥石	S B 555	古代8期	凝灰岩		II類	板状	20
42	砥石	S B 560	古代1期	砂岩		I類		

No.	器種	遺構	時期	石材	備考	番号
43	砥石	S B565	古代8期	凝灰岩	II類	26
44	砥石	S B568	古代10期	頁岩	II類?角柱状	22
45	砥石	S B576	古代8期	凝灰岩	II類	
46	砥石	S B579	古代10期	砂岩	I類	5
47	砥石	S B582	古代9期	砂岩	I類	
48	砥石	S B586	古代7期	凝灰岩	II類	
49	砥石	S B606	古代8期	砂岩	I類 角柱状	1
50	石錘	S B 27	古代15期	砂岩・頁岩・チャート	5点	
51	石錘	S B 54	古代15期	花崗岩・砂岩・硬砂岩・頁岩・凝灰岩	15点	
52	石錘	S B 71	古代5期	砂岩・硬砂岩・頁岩	30点	
53	石錘	S B 80	古代4期	砂岩・硬砂岩	3点	
54	石錘	S B160	古代1期	砂岩・硬砂岩・頁岩	24点	
55	石錘	S B176	古代1期	砂岩・硬砂岩	17点	
56	石錘	S B192	古代12期	砂岩・硬砂岩・頁岩・チャート	8点	
57	石錘	S B620	古代2期	砂岩・硬砂岩・頁岩	45点	
58	石錘	S K 72	古代	砂岩・ヒン岩		
59	石棒	S B503	古代13期	砂岩		29
60	丸石	S K 72	古代	砂岩		
61	丸石	S B 80	古代4期	ヒン岩		
62	磨石	S B192	古代12期	砂岩		
63	凹石	S B126	古代13期			27
64	石臼	S K371	中世	安山岩	下臼	34
65	石臼	S K371	中世	安山岩	下臼	35
66	石臼	S K372	中世	安山岩	上臼	36
67	茶臼	S K390	中世	砂岩	上臼	33
68	茶臼	S K392	中世	安山岩	下臼	
69	石錘	S K 17	中世	砂岩・硬砂岩	17点	30・31
70	石錘	S K599	中世	砂岩・頁岩	7点	32
71	凹石	S D 6	中世	ヒン岩		

付表9 土製品一覧表

No.	器種	遺構名	時期	備考 ()は破片の重量	図No.
1	鞆羽口	S B 2	古代14	炉側先端部	
2	鞆羽口	S B 65	古代 4	炉側先端部	12
3	鞆羽口	S B117	古代13	炉側先端部	
4	鞆羽口	S B122	古代13	炉側先端部	
5	鞆羽口	S B138	古代14	炉側先端部	
6	鞆羽口	S B143	古代13	炉側先端部	
7	鞆羽口	S B170	古代15	炉側先端部	
8	鞆羽口	S B176	古代 1	炉側先端部	
9	鞆羽口	S B196	古代14	炉側先端部	
10	鞆羽口	S B209	古代12	炉側先端部付近	
11	鞆羽口	S B530	古代 1	炉側先端部付近	
12	鞆羽口	S B624	古代 3	炉側先端部	13
13	鞆羽口	S B625	古代 3	炉側先端部	
14	鞆羽口	S L 1	近 世	炉側先端部	
15	鞆羽口	NR 2		炉側先端部付近	
16	円面硯	NR 2			
17	円面硯	遺構外			
18	円面硯	S B 80	古代 4		
19	土錘	S B129	古代 1	36 g	16
20	土錘	S B155	古代 1		
21	土錘	S B164	古代 7	12 g	15
22	土錘	S B202	古代 3	38 g	18
23	土錘	S B202	古代 3	46 g	19
24	土錘	S B202	古代 3	62 g	20
25	土錘	S B537	古代11	(8 g)	
26	土錘	S B542	古代 2	41 g	17
27	土錘	S B582	古代 9	5 g	14
28	土錘	S B595	古代 9	須恵器質 154 g	21
29	粘土塊	S K362			
30	紡錘車	S B 68	古代 2	直径4.2cm 器高3.1cm 64 g	11
31	紡錘車	S B129	古代 1	直径5.6cm 器高3.2cm (71 g)	8
32	紡錘車	S B155	古代 1	直径4.2cm 器高2.9cm (16 g)	10
33	紡錘車	S B156	古代 1	直径6.7cm 器高4.7cm 257 g	3
34	紡錘車	S B175	古代 4	直径6.2cm 器高4.0cm (147 g)	6
35	紡錘車	S B176	古代 1	直径6.9cm 器高3.7cm (117 g)	4
36	紡錘車	S B176	古代 1	直径5.5cm 器高3.0cm (106 g)	9
37	紡錘車	S B206	古代15	直径6.9cm 器高4.5cm 243 g	5
38	紡錘車	S B523	古代 2	(13 g)	
39	紡錘車	S B524	古代 1	直径7.3cm 器高3.6cm (166 g)	1
40	紡錘車	S B542	古代 2	直径5.7cm 器高3.2cm (62 g)	7
41	紡錘車	S B627	古代 2	直径7.4cm 器高3.7cm 175 g	2

付表10 中世の土器・陶磁器 出土遺構別一覧表

遺 構	中世出土遺物 (所属時期, 掲載図版番号, () 内は破片数)	備 考
SB 12	常滑系壺(1)	古代の遺構
SB 113	内耳鍋(1)、土師質片口鉢(1) 図版187-28	〃
SB 180	内耳鍋(1)	〃
SB 192	内耳鍋(1)	〃
SB 196	常滑系甕(1)	〃
SB 565	青磁碗 I 類(1)	〃
SB 630	青磁碗 D 類(1)、土師器皿(1) 図版187-25	
SB 631	土師器皿 I A1(5) 図版186-1、古瀬戸折縁深皿(1) 図版186-2、 常滑系甕 III 類(4) 図版186-4、捏鉢 IV 類(8)-3 青磁碗 D 類(2) 図版186-5・6・F 類(5) 図版186-8~10 ・ I 類(1)・ほか(1) 図版186-7、青磁皿(1)	白磁 II 類(1)
SB 639	白磁皿 IV 類(1)	
ST 33	内耳鍋(3)	
ST 53	内耳鍋 II B 類(48) 図版186-11・12	
SD 18	山茶碗 VII-3 図版187-30	
SD 521	内耳鍋(1)	古代の遺構
SD 524	内耳鍋(1)、青磁碗 F 類(1) 図版187-31	
SK 17	内耳鍋 II B または II C 類(5)	
SK 53	内耳鍋(1)	
SK 58	青磁皿 1-2 類? (1) 図版187-34	
SK 307	内耳鍋 II C 類(1)	
SK 308	内耳鍋 II B 類(14) 図版186-13・14	
SK 323	大窯期皿? (1)	
SK 347	内耳鍋 II B 類(97) 図版186-15・16	
SK 390	内耳鍋 II B または II C 類(7)	
SK 392	内耳鍋 II C 類(13)	
SK 482	土師器皿 II B 類(1) 図版187-26	
SK 492	内耳鍋 II B 類(16) 図版186-17	
SK 521	内耳鍋(1)	
SK 552	内耳鍋(1)	
SK 553	内耳鍋(8)、土師器皿 II A 類(1) 図版187-27	
SK 561	内耳鍋(12)	
SK 622	内耳鍋 II B 類(4) 図版187-18	
SK 636	内耳鍋 II C 類(2) 図版187-19・II B または II C 類(5) 図版187-20 II B 類(5) 図版187-21・不明(31)	
SK 653	内耳鍋 II B 類(20) 図版187-22・23・24	
SK 654	内耳鍋 II B 類(28)	
SK 1532	常滑系甕(1)	
SL 1	内耳鍋(1)、青磁碗(2)	近世の遺構

付表11 近世土器・陶磁器 器種構成表

陶器 125	瀬戸・美濃系陶器 103		肥前系陶器 1		磁器 21	瀬戸・美濃系磁器 11		
	碗	天目茶碗 1 2 2	丸碗 46	碗		碗	1	碗
皿	丸皿 5	菊皿 1	常滑系		1	その他		
鉢	燈明受皿 1	播鉢 15	甕類	甕	1	肥前系磁器		6
	捏鉢 3	片口鉢 3	産地不明		20	碗皿	小碗 皿	4 1
壺	壺 2	捏鉢 3	碗	丸碗	1	産地不明	5	
甕	壺 9	捏鉢 3	皿	燈明皿	1	碗 皿		3 2
瓶	甕 2	捏鉢 3	鉢	捏鉢	2	その他		
その他	德利 2	捏鉢 3	鍋	土鍋	2			
	香炉 1	捏鉢 3	壺	壺	1			
	蓋 1	捏鉢 3	瓶	土瓶	2			
	不明 10	捏鉢 3	その他	不明	9			
土器	産地不明	2	鉢	鉢?	1	鍋	ほうろく	1

(助)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 7

中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 7

—松本市内その4—

南 栗 遺 跡

本 文 編

発行 平成 2 年 3 月 31 日 発行

発行者 日本道路公団名古屋建設局

長野県教育委員会

(助)長野県埋蔵文化財センター

印刷 第一法規出版株式会社

